

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和36年1月1日発行（毎月1回1日発行）

裏窓

1月号

- ★ 大奥裸女絵巻
- ★ 絵物語・縄恋罪業記
- ★ 連載告白記・囚われの檻



THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和36年1月1日発行（毎月1回1日発行）

裏窓

定価 150円

IBM 1807

◎ どれを見てもしびれるような傑作です。
 ◎ まだこの他に多数の出版物があります。
 ◎ 内容見本を送れとハガキで申し込んで下さい。

異色官能 サスペンス **地獄の乳房** 飯田豊吉・著
 喜多玲子・装幀

謎の黄色いトランクをめぐる東京暗黒街にくりひろげられる凄惨な死闘と執拗な復讐地獄！息もつかせぬ迫力興味篇！
 ￥. 250
 円. 40

続・隠密 覚書 **忍び夜秘帖** 島本春雄・著
 喜多玲子・装幀

大江戸の夜に咲く逢魔の花！大名屋敷、旗本屋敷、そしてまた分限者の夜の闇を探究する影のような公儀隠密鳴子善四郎！
 ￥. 260
 円. 40

異色時代巷談 **女犯経秘図** 高月大三・著
 喜多玲子・装幀

酒池肉林の好色寺の地下部屋に捕われた女隠密！素っ裸の木馬責めに果して耐え得るか？お小夜嵐、穴蔵菩薩も収録！
 ￥. 250
 円. 40

エロチック サイエンス **甘美な謎** 矢野 徹・著
 笠井 一・装幀

ふくよかな肌の香りは超次元の世界にただよい、はてしなく広がる非情の科学に機械化された細胞は如何に悶えるのか？
 ￥. 250
 円. 40

耽 奇 サスペンス **妖しい花粉** 狩 久・著
 古正英生・装幀

白く重さを秘めてゆれる乳房、慄える太腿……性の真実を求めて蠢めく人々の姿を捉えた異色ミステリイ！！
 ￥. 230
 円. 40

エロチック ミステリイ **あやかしの夜** 岡田鯨彦・著
 笠井 一・装幀

ねっとりとした夜にほの白くとけこんでゆくような羞恥の構図、人間喜劇の断面を特異な筆で描き出した異色作
 ￥. 260
 円. 40

東京都中野区江古田 1 の 2302 (振替口座・東京 10756 久保書店宛) 株式会社 あまとりあ社

◎ 現金書留か小為替、又は振替で御送金下さい
 ◎ スグにお申込みの本をお送り致します。
 ◎ 御希望の書籍名はハッキリお書き下さい。

あなたの心の中にも……………

当人でさえ判らない心の奥底に秘む異常性！尿を飲む男・少年を鞭打つ女・毛髪蒐集狂等々豊富な実例をあげて解くアブ・セックス！！



発売中

アブノルム 高橋 鐵・著

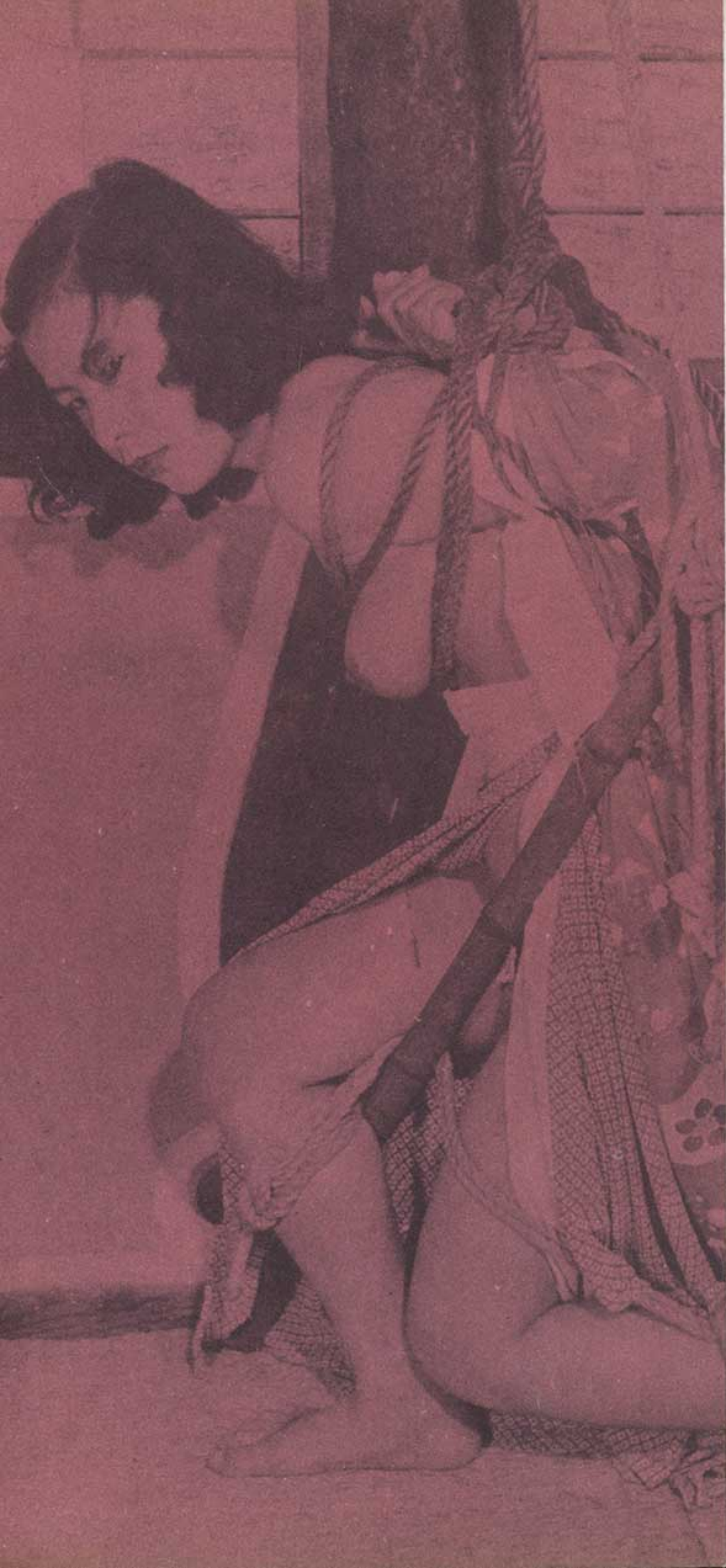
B 6 判・美麗カバー装・253 頁
 定価 270 円・あまとりあ社 刊
 東京都中野区江古田 1-2302
 振替 東京10756 (久保書店宛)

結婚生活の美学★ **べっどるうむえちけっと**

幻灯器で始まる吊し籠の子
 腰際地帯のお戯いは羽簾で
 叩けば開く、額の接吻から
 愛の不意打ちに女体はくねる
 掘炬燵の素晴らしい利用法
 僕のハープ演奏法で一度に燃える
 アレグロのリズムで私は指揮者
 月に濡れて高まる情感
 深夜放送を伴奏の愛撫
 唇は柔肌の官能に点火する
 腕と掌と肘で奥様を KO
 椅子一つで奴隷にも暴君にも
 即席寝具を勤める座蒲団
 たまには奥さまにリードさせ
 奥さまよ酔覚めの水と愛撫の手を
 疲弱な方は量より質
 奥さまよ寝化粧は全身に
 奥さまの独り寝は蔭膳を据えて
 妻よお昼寝をどうぞ
 食卓に強精食をお忘れなく
 妻唱夫随も心得おくこと
 大事な局部清拭のエチケット
 夫の寝化粧マニキュア
 妻のコンディションをお忘れなく
 昼間は賢母でも夜はボクの美しい奥さま
 慎みもいいが野性的になつて欲しい
 明日の仕事に差支えなく細く長く楽しめ



原 比露志・著
 新書美装判 212 頁・価 130 円・送 12 円
 東京都中野区江古田 1 あまとりあ社刊



北方艶色
放浪記

ツンドラの欲情

杜山澄夫

シベリアの曠野に放浪する異民族の中に日本人がたった一人まぎれこんだ！秘境の空の下にくりひろげる赤裸々な情痴物語！

定価 130円
送料 24円

異色
監獄秘話

地獄の野良犬ども

村岡藤里

著者自身の体験による獄内の種種相！彼等は何を求め如何なる心理状態にあるのか？懲罰、脱獄、死——倒錯せる性の悶え！

定価 130円
送料 24円

世界
残酷実話

女囚地獄の十八ヵ月

宇治研介

世界を驚嘆させたナチ婦人収容所の恐るべき惨状と現代アメリカ社会の裏面に巣喰う女奴隷売買団の秘められた記録の全貌！

定価 130円
送料 24円

東京都・中野区・江古田1の2302

(振替口座・東京10756・久保書店宛)

株式会社 あまとりあ社

裏窓・一月号・目次

★表紙……イースト・ウエスト特約★
★目次カット……秋吉巒★
巻頭グラビア 樹と女・吉田久 (15)

さすべんす
すとおりの
人が消える沼の家……文・九十九十郎
画・桧山紀太郎 (9)

地獄絵
始末記
閻魔堂絵師……矢桐重八 (20)
マゾヒスト
随想録 女中になりたい男の話……阿麻哲郎 (30)

絵物語★招かざる危難★……作・依田精二
画・沖涉司 (40)

読者随筆・大菩薩峠について……由茂 滋 (50)
読者随筆・黒髪夜話……黒崎善之 (62)
うらまど
すこーぶ
受難場面の女優たち……芝 利泰 (66)

日常生活
にひそむ
マゾヒズムへの誘惑……黒田史朗 (74)

女剣断腸録
落武者非命……久富浩司 (82)



ビグラ

白

い

壁

……深森映士

(99)

オフセット
絵物語

縄恋罪業記

……文・藤見 昌一
画・堂 郁

(107)

ビグラ

……悦虐フオト特選集

……編集部・編

(115)

東京へど野郎

……南村 蘭

(124)

裏窓残
酷物語

明治時代の女権無視

……河西恒一

(92)

黒髪執着 黒髪ざんげ (少年編)

……志摩不二

(142)

裏窓
タウン

……懲罰房の恐怖◎おしめを当るバスガール◎金髪強盗◎英雄候補生……
◎恋しぐれ千両勝負◎三つの謎◎浅草のサド劇◎女性化するには……

(134)

◎愛読者短評◎

……

(152)

時代
絵物語

男になり損った男

……文・松平 莊司
画・豊田 みのる

(154)

★新映画紹介★

……砂路 寛

(174)

尻を振って走れ

……阿里 俠二

(180)

随筆

女囚と胎教

……鳴滝 三郎

(188)

奇妙な話 悪魔の魚は口まで黒い……長谷川 勇

(164)

ビグラ

裏窓既刊号挿絵名作選

……編集部・編

(203)

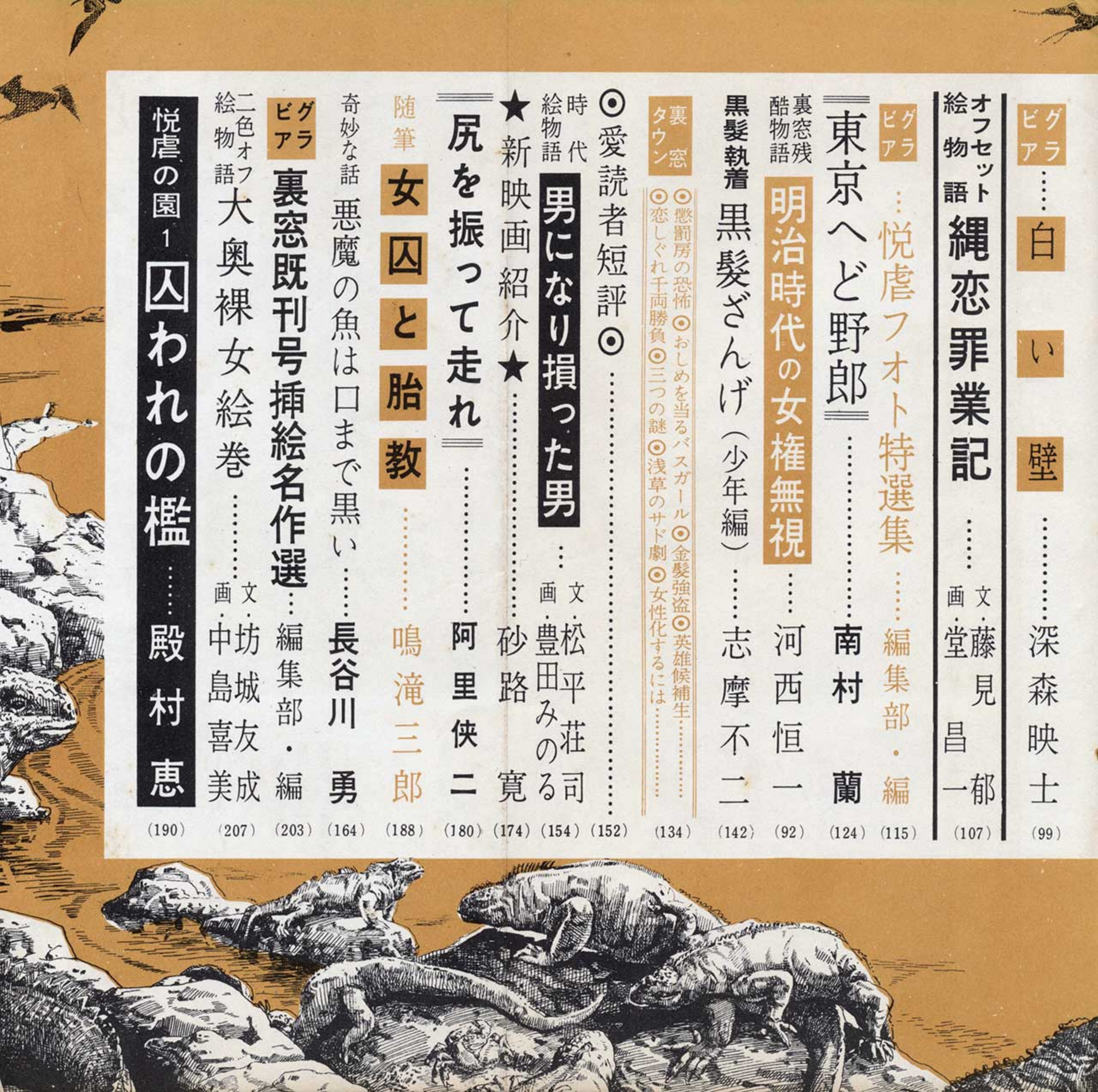
二色オフ
絵物語

……大奥裸女絵巻……文・坊城 友成
画・中島 喜美

(207)

悦虐の園 1 囚われの檻……殿村 恵

(190)



さすぺんす
すとおりの

人が消える沼の家

文・九十九郎
画・桧山紀太郎

① みんな消える

×月×日

俺が日記を書きだしたと知ったら、東京の奴らは、ゲラゲラ笑いこけるだろう。およそ日記などという殊勝なものと縁のない俺だったが、今は矢も楯もたまらない気持で、これを書きはじめた。

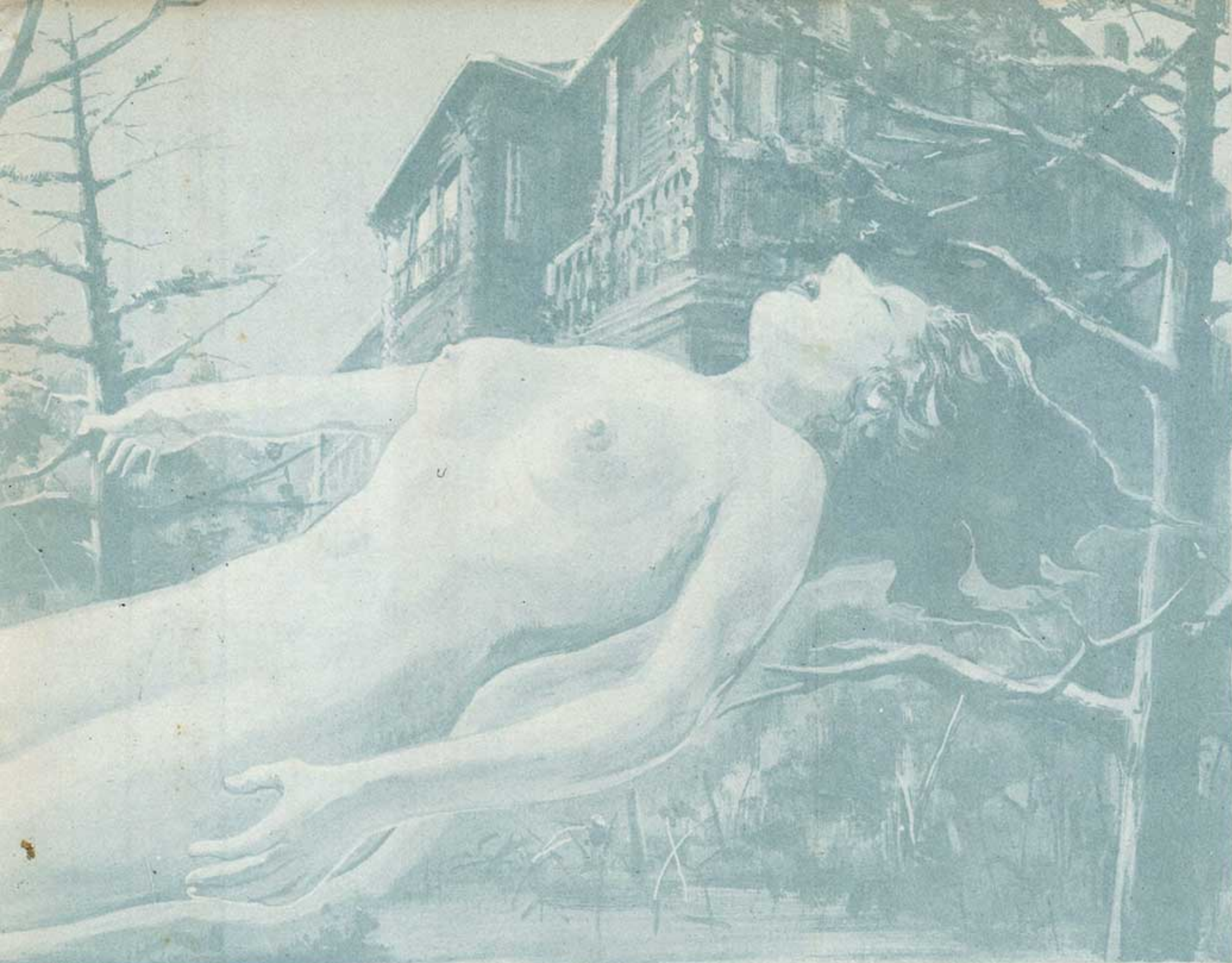
俺はいのちが、いつ沼の中に吸い込まれて消えてしまふかわからないからだ。酒に女と放蕩無残の限りをつくした俺でも、命は惜しい。

二十六の今日まで、何とか地上に爪あとを残そうともがいて来た俺が、今ここでフツと煙のように消えてなくなったのでは、俺の気持がおさまらない。たとえ陽の目を見ずに終っても、俺はこの沼のある家に起ったことを、書き残して置きたいのだ。これが、俺が生れて始めてのそして、たぶん最後のまじめな仕事になるだろう。

昨日は、多枝子が消えた。四日前には清江が姿を消している。ここを訪れて来た三人のうちで、残ったのは男の俺一人。男は消えないのだろうか？

見渡す限りの原始林のまん中に、ポッカリ口をあけた沼——皆は「人喰い沼」と、呼んでいる。

不気味な沼だ。



② 邦彦の別荘

水際にまで、おおいかぶさっている針葉樹のかけを、ドップリと黒い水面に映して、地球創生以来の静けさをとどめているかに見える。鳥さえその上を飛ばず、兎さえ水を飲み、に近寄らないと伝えられて来たこの沼の、層々と積み重なった泥の底に何が秘められているかは、誰も知らない。

ただ、はるか森を出はすれた村の人達は、古くからここを「人喰い沼」と呼びならわしている事だけが、唯一の手がかりなのである。それ以上は何か必要だろう。

この沼のほとりに、神坂邦彦の別荘がある。なぜ自分の祖父が、ここに別荘を建てたのか、孫の彼も知らない。あるいは知っていても、口には知れないと主張する。しかし、旧華族の家柄に起った、何か陰惨な祕事だけは、うすうすながら察することができた。

神坂邦彦の父は、この別邸を朽ちるにまかせて、かえりみなかったにもかかわらず、父の跡をついだ邦彦は、何の目的あつてか、二三月前から、この屋敷の再建に熱をあげ始めた。明治時代の古風を残したまま、再建しようとする彼の意気込みは相当なもので、かなりの富を注ぎ込んだらしいが、勿論彼の財産には、何のヒビも入らなかった。彼を中心とした集りは、俺も含めて、みんな金のあり余ったドラ息子エセ令嬢の集りだったのだ。



③ 密

林

今日から、ちょうど二週間前、何を思ってたか、彼はグループ中の三人だけを選んで、この山荘に招待したのだった。

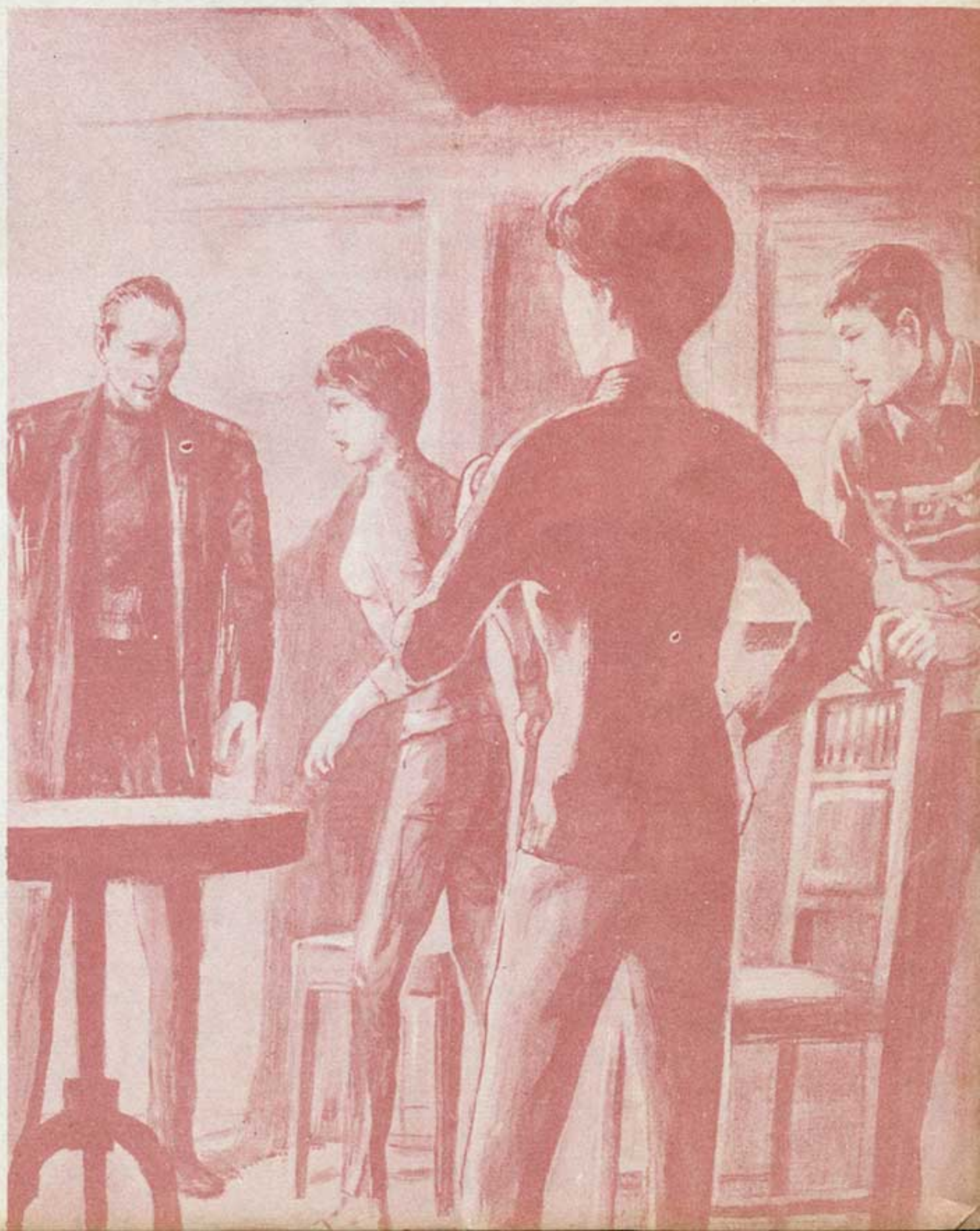
例の村までは、自動車がどうにか入れたが、そこから、自分の足以外には、たよるもののない密林になる。我々は、月に一度だけ生活必需品を運ぶ仕事をしているという村の男に案内されて、この密林の中に足を踏み入れたのだった。

朝の六時から、夕方の四時まで、俺達はこのおそるべき森の中を引きずり廻された。道というものは無い。村男だけが知る目印と、都会人には不可解なカンだけが唯一の頼りなのだ。

別荘の持主さえ、わしの案内がなければ——とその男はさも自慢そうに胸を張ったものだ。

厚く繁りに繁った原始林には、昼も夜もないみたいだった。

ただでさえ、弱々しい北国の秋の陽は、とうてい密林の底にまでとどかない。



④ 悪魔の風貌

打ち傷、すり傷でほうほうのていで、森を抜け出た我々の眼前には、真赤に焼けた空をそのまま写した沼が、赤黒く、底知れぬ不気味さをたたえて広がっていた。

「まるで血の池みたいね」

と、多枝子が、体を俺にすり寄せながらささやいた。そしてその予感、正しかったのだ。

雑草に、なかばうもれて別荘は立っていた。羽目も壁も、



はいめぐるツタやカズラでおおわれ、人間の住む余地はなさそうだった。低い天井に張り渡された黒光りを放った太い梁、すすけた壁、苔むしたタタキ。洋室づくりになっているのが、どうにか気分の助けになったが、その椅子も腰をおろすと、ギーときしった。

神坂邦彦は、メフィストフェレスと形容されるのが、一番ふさわしいだろう。蒼白く突き出た頬骨。とがった鷲鼻。薄っぺらなくせに不健康に赤い唇。鋭角にとがったアゴ等々。もじやもじやした長髪の中に、角がかくされているのではないかと、誰しも疑うような風貌なのだ。

清江は彼の女だ。痩せた彼と対照的に、華やかな美貌が、輝くばかりのグラマーだ。そして多枝子は俺の彼女。小づくりながら、よくしまった肉づきは、俺がこれまで抱いたどの女よりも、俺を夢中にくれる。しかし、二人はもう消えた。つかみ所のない不気味なこの風物にくらべれば、二人の妖女ぶりも赤ん坊のように、今では愛らしく思えて来る。最初の晩さんの時、邦彦の奴は爆弾的な紹介をやったのけた。

「これは俺の妹だ。名前は梨香。これまでは俺達グループの狼共の犠牲にならないようにかくして来たんだ」

⑤ 美しき妖女

邦彦は続けた。

「しかし、ここでなら安心だと思ってね」

俺達は口をポカンと開けて、その夢のような美女に、我を忘れてしまった。

まずい俺の筆では、とうてい書きつくされるものではないが、ためにやってみよう。

年の頃は十八九。おそらく二十は過ぎていまい。くせのない、しなやかな髪を黒々と肩に垂らし、真白なネグリジェみたいな（ガウンというのかもしれない）爪先までかくれる着物を引いた姿は、天使か妖精かと疑われるくらい。

顔は——そうだ。顔は何といったらよいだろう。美しい事には異論はないが、鼻のところが具合とか、唇の端の結び方などに、この世のものでない奇妙なニュアンスがある。中でもその眼は、つつましさの底から、ときおり人の精気をくらくすくすするような、妖しげな光がさす。肌の白さも無類だ。蒼白いといえは不健康に聞こえるが、彼女の白さは、ちょうど、植物のあの白い根のような白さなのだ。すき通るような白さの中から、にじみ出る水しい精気の輝きがある。

彼女は、細い手指を前につつましく組んで、はじめまして——と挨拶した。声は、か細く深い沈黙の中に消えた。三人は完全に毒気を抜かれた恰好だった。

以下本文五四頁に続く



樹
と
女

吉田 久









裏

窓



一 月 号

第 六 卷 · 第 一 号

闇魔堂絵師

荒れ果てた堂内に縛られた若い女乞食の姿は
残酷ななかにもなまめかしい風情で、のぞき
見ている二人の悪党の眼をそそののだった！

1

かぞえてみると、ちょうど百枚目にあたった。この百枚目を、いのちをかけた傑作に、と歌川楽堂は思うのだ。

適去数年間に描きあげた、ほかの九十九枚の絵も、けっして悪い出来ではなかった。その証拠に、九十九枚のうち半分の五十枚近くは、この荒れ堂を訪れてくる好事者の旦那方に買われていった。

「惜しいな」と、その好き者の旦那衆の、ほとんどがいった。「これだけの絵に、色がついていないとは——」

楽堂の絵は、墨一色だった。

だが、その水墨画の濃淡、強弱の巧妙さ、細微に切りこんでいく筆致の鋭さは、いかなる華麗な色彩をほどこした絵よりも、まさっているようにみえた。

みる者の肌に突きささってくるような迫力があつた。

「わしの絵につまらぬ色など塗りたくったら」と、楽堂は口のなかで、もそもそつぶやく。「死んでしまふわい、絵が——」

楽堂の声は極端に低いから、このつぶやきは旦那衆の耳に届かなかった。

届かなくとも、かれはもうすっかりご満悦だった楽堂の絵を凝視し、うなり、興奮すらしていた。

この墨絵に立派な表装をほどこして、当家の家宝に——とまでは

矢 桐 重 八
小 日 向 一 夢 ・ 画

いかなくとも、ひそかな蒐集の自分だけの楽しみに、好き者の旦那方の胸は躍っていたにちがいない。

かなりの金が、楽堂に与えられた。

きまった額ではなく、おぼしめしだった。

歌川楽堂の世に隠れた筆力を高く買う旦那は、数枚の小判を、ふくさに包んで丁重に置いていった。

なかには、その絵を小脇にかかえるや、ひとつかみの小粒を、楽堂の膝に投げるようにして去っていく旦那もいた。

どうせ乞食絵師、狂人、いや白痴絵師だ、——金の値打ちも、おのれの描いた絵の値打ちすら、わからぬやつに、大枚の金を与える必要はない——その旦那は、そう思っていたにちがいない。

それでも楽堂はかまわなかった。そんなことには無頓着だった。楽堂はそれらの金で紙を買い、墨を買い、筆を買い、ろうそくを買い、最後に米や味噌を買った。

画室も、寝起きの住居も、すべてこの一間半四方の、荒れ果てた閻魔堂のなかだった。

隅田川の東、寺島村もはずれの、この朽ちかけた廢堂へ、いつから彼が住

みついたか、誰もあまりよくは知らなかった。灰色の総髪をさんばらに肩へのせ、おとなしいが、妙にうす気味悪い老人だと、土地の者は噂した。だが、盗みやわるさをしなければ、強いて追い払うこともなかった。そのうちに誰もが彼の存在に馴れた。



ただの乞食とはちがって、朝から晩まで堂のなかにとじこもり、絵を描いていた。

その絵も、変っていた。責め絵——だけしか描かなかった。

2

いまとりかかっている絵が、百枚目だということも、ほんとうははっきりした記憶がない。

なんとなく楽堂に、これが百枚目だ、という気がしているだけだった。

自分に死期が近づいているのを、漠然と楽堂は感じていた。

——わしももう年寄りだから……それに、今年も冬が近いから……楽堂の肉体は、かなり衰弱していた。悪い風邪でもひきこんだら、そのままもう枯木のように倒れ、つめたくなり、腐れていくにちがいがなかった。

だから、この百枚目を、いままでよりも、もっとすぐれた絵にしなければならぬ。責め絵に対する情熱だけが、弱った肉体をささえていた。

「痛いよウ」

泣き声がした。おりんだった。荒縄でうしろ手に縛られ、むしろの上に坐らされているのだ。片隅の板壁に背を寄せていた。

小柄な女だった。年はまだ若いらしい。身につけているのは、こざっぱりした単衣もので、それが無理にひき剥がされた感



じに乱れていた。

白い肩や胸が、浮かんたようにあらわになっていた。そのむきでた肩にも、荒縄がきりりとくいこんでいた。

「痛いよウ、ア、ア、ア……」

また、おりんが泣き声をあげた。こおろぎのように細い声だった。幼児が母親にむかって訴えるような表情をした。

「……………」

楽堂が口のなかでなにかをつぶやいた。幸抱せい、という意味らしかった。

乞食女のおりんが、いつからこの荒れ堂に住みつき、楽堂と同棲するようになったかも誰もあまり知らない。

おりんもまた白痴に近かった。

「似合いの夫婦だ」

近在の者は、そういつて笑い合った。

いつのまにか、楽堂がおりんを養っている形になった。おりんも楽堂のそばにくっついてさえいれば、炎天や雪のなかを、おもらいに歩かなくとも、食べ物心配はなかった。遊んでいても、ひもじい思いをせずすむ。

おりんに、女房役としての知恵があれば、家を戸構えるだけの収入が楽堂にあったのだが、楽堂自身にもはやそんな世俗的な望みはなかった。

「痛いよウおなかすいたよウ……」

三度、おりんが泣いた。

もう夕刻だった。朽ち折れた狐格子の間から、夕陽が赤い縞模様をつくって、堂の内部へさしこんでい

た。

おりんの顔にも、その夕陽の残片が、うすら赤く反射した。

よくみると、目鼻だちのととのった女だった。あどけない、愛らしい顔をしている。口紅をつけていないのに、唇が赤かった。なにか病気をもち、そのための発熱で唇が赤く、艶っぽいのかも知れなかった。

肌の色も白く、これで瞳の輝やきさえ尋常だったら、どんな逆境に育っても、乞食までには落ちぶれまい。

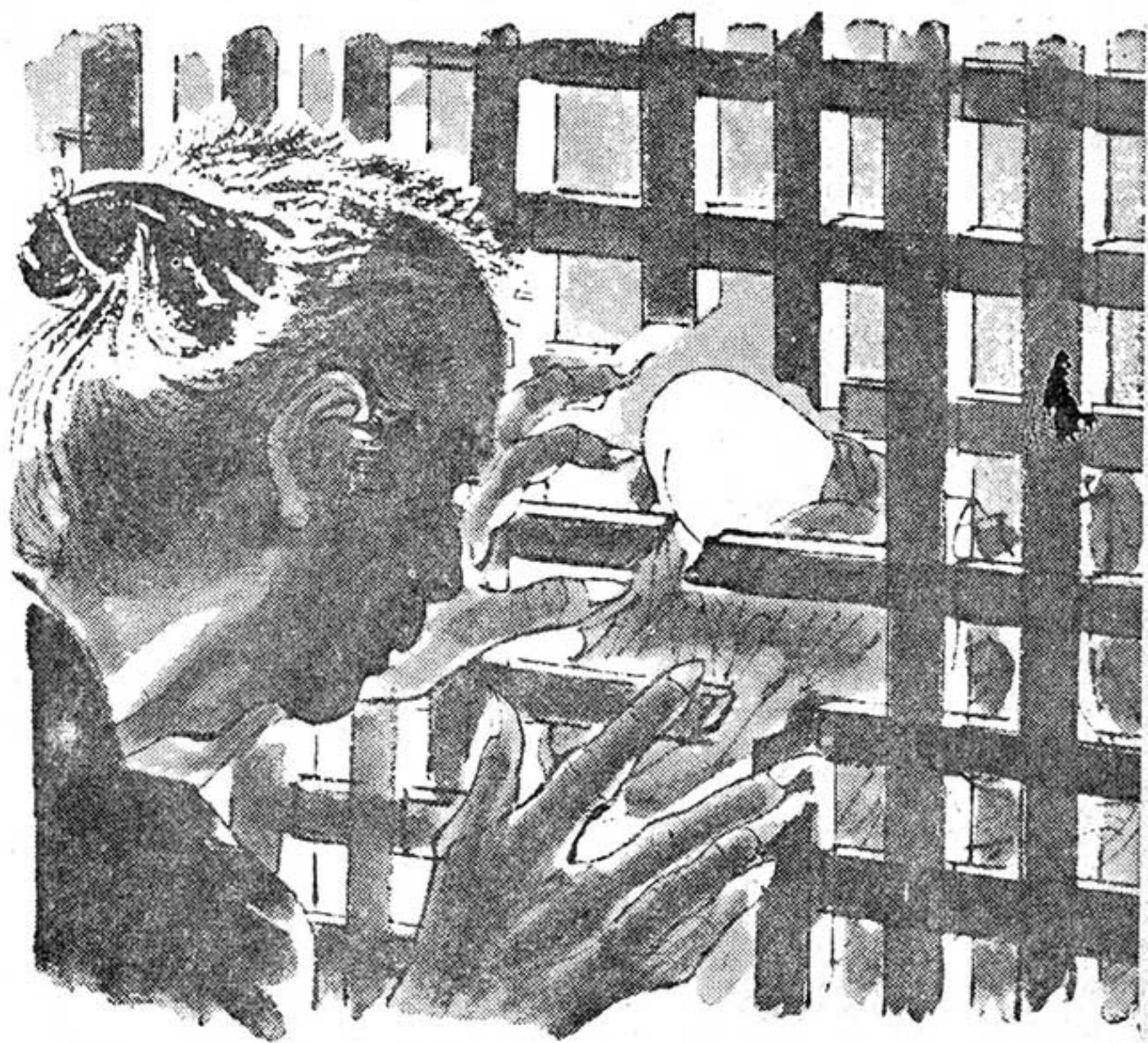
第一、好色の男どもが捨てておくまい。

寒暑に耐えてきた腕や脚は、若い獣のように強靱にみえた。

ほそく、しなやかだった。

その柔軟そうな腕が、いま肩のつけねから思いきり背中へねじまわされ、縛りあげられているのは、むごたらしい眺めだった。

しかし、破れ腐れた板壁、塵埃が白くつもっている床、蜘蛛の巣だらけの天井、それらの荒廢を背景に据え、若い女乞食の縛られている姿は、残酷のなかに、妙になまめいた風情を浮かびあがらせていた。



3

腰から下が、投げだされたようにしどけない横坐り。裾がまくれあがって、膝の上までがむきだされていた。

そのおりんの姿を、楽堂の筆は執拗になめまわし、苦悶にくねる線を、流麗な、しかし鋭い筆致で画紙の上に描写していた。

落ちくぼんだ楽堂の眼窩の底に、小さな瞳が、血のふきでるほどに燃えていた。

——辛抱せい、おい、おりん……と、彼は胸のなかでつぶやくのだ。いつになく、気がのっていた。かつてないすばらしい絵が、今夜じゅうに、一気に完成するかも知れぬ。

残酷美のきわみ、美と凄愴に満ち溢れた水墨の責め絵が。

筆を握っている楽堂の指が、汗と脂ですべった。

痩せ衰えた肉体の、指だけからは、まだ汗も脂もにじみでるのだった。

もう一刻以上も、写生をつづけている。おりんが泣き声をあげるのも、無理ではなかった。

楽堂は筆をおき、ぼろ袴の膝で指さきをこすった。ひと休みだった。

た。腹はすいているのだが、感じなかった。

——この女のおかげで……楽堂はおりんをみつめながら、ふと追憶した。これは珍らしいことだ。

——わしの貧しい生涯の最後に、赤い花がそえられた……

楽堂の過去の、どの女も、女房も、縛られるのをいやがった。女房は五人も変えた。みんな楽堂を気味悪がり、狂人扱いにした。当然かも知れなかったが。

師の家から追われてから、彼の変転の運命がはじまった。どうしてもほかの絵を描く意欲がおきなかった。

——おりんだけだ、わしの望みをかなえてくれたのは……わしのいつけに従い、どんなきびしい縄でも、すなおに受けた……

楽堂の心には、感謝すら湧いてくる。

この数年間、ずいぶんと責めた。長かった過去の飢えを、いちどに満たしたのだ。

おりんの手も足も、よく折れ曲がった。

海老縛り、吊り責め、逆吊り、堂の裏手にある雑木の深い林を利用しての立木縛り、枝からの吊り下ろし、さらには松葉いぶし、雨さらし、雪責め……

痛い痛い悲鳴をあげ、涙をこぼして苦しみながらも、すぐにけろりとして笑顔をみせるおりん。楽堂には、そのおりんが天女よりも美しくみえた。

いとしくてたまらぬ。

おりんにも、わかってきているのだった。憎しみや怒りや、意地悪のために楽堂が自分を縛ったり、吊るしたりするのではないことが……。

辛吟し、苦心し、幾枚もの下絵を描き重ねた末に、やっと一枚の

絵を完成したときの楽堂の晴ればれとした顔。おりんは、そのときの楽堂の顔をみることに、よろこびを感じ、自分が役に立っていることを知った。

おりんは、いつでも縛られた。手首や二の腕や胸や、素肌にくいこむ縄の感触が、このころではうれしく、骨の髄が疼くほどのこころよさを感じた。

年齢をへだてた二人に、奇妙な愛情がかよっていた。

4

楽堂は追憶をやめた。ふたたび、筆をとった。膝の前の画紙にむかった。老絵師の落ちくぼんだ眼が、獲物を狙う鷹のように、けいけいと光りはじめた。

画紙に描き写された若い女の恐怖の表情も、おののく肩の線も、あえぐ胸のふくらみも、そこにくいこんだ数条の縄目も、なまめかしく悶える腰のまるみも、ほとんどが描きつくされていた。画紙の中から、女の悲鳴がほとばしるかにみえた。

だが、楽堂の額や口もとは、深い苦汁の皺が寄っていた。

「まずい、男だ。男がまずい、駄目だ。描けておらぬ」
いつになく声にだして、楽堂はいった。じっと膝もとをにらんだ。

絵の構図は、鬱蒼たる山林を背景にした辻堂。その扉前の腐れ縁に、うしろ手に縛りあげられた旅の娘が一人、のけぞりもだえている。ひるがえっている裾、宙を蹴あげる二本の足の白さ。娘の左右には、雲助ふうの二人の男が、卑しい笑みを満面にただよわせ、毛むくじやらの腕をのばし、あわや、という図柄であった。

かくべつ、奇抜な構図ではない。むしろ、平凡といえよう。だが、写実と誇張を大胆にとりませた筆致が、うす気味悪いほどの迫力をだしていた。

縄にくびれて、ぶっくりとむきだされた娘の片方の乳房は、戦慄の呼吸をみせていた。髪の毛一筋、宙を蹴る足の指さきにまで、血が脈々とかよっていた。

大蛇にからだを巻かれて、じわじわとしめつけられていく小鬼

が、必死にもだえてそのおそろしい緊縛からのがれようとする、恐怖の肢体を思わせた。獣的な残酷味があった。

しかし、楽堂は腹立たしげに、おのれをののしった。

「男の顔が生きておらぬ。これでは、娘も生きぬ。駄目だ」

一度つかんだ絵筆を、また投げ捨て、楽堂は瞑目した。

おりんはすすり泣きをやめ、うしろ手に縛られたからだを、やや起こすと、不安げに楽堂の表情をみつめた。



堂の外では、初冬の夕陽がまたたく間の早さで、雑木林のかなたに落ちていった。雲と空を、血のような赤い色で染めたが、それもやがて消えた。

閻魔堂のなかに、きゅうに冷えびえとした闇がしのびこんだ。縛られているおりんの肩さきが、ぶるる、とふるえた。寒さのためだった。腹がすいているから、寒気がいっそうこたえるのだった。

背骨のうしろに重ね合わされている左右の手首が、死人のようにつめたくなっていた。荒縄でくくりあげられ、血のかよいをとめられているからだだった。十本の指が、十本ともしびれていた。

おりんは耐えかねたように顔をあげ「アアア……」と、うめいた。せつなげに胸をゆすってみた。縄はすこしのゆるみもみせなかった。息をつくのでさえ、苦しくなってきた。

つと、楽堂が片膝をおこした。裸ろうそくに火をともした。なんとしてでも、今夜じゅうに描きあげたい——楽堂の乾いた唇に、決意があった。

5

「お、灯がみえるぜ」

はやての雁八が、足をとめて声をあげた。

「どこに？」



と、首をのばしたのは、ましろの吉太郎だった。「それ、その垂れ下がった松の枝のむこう、おや、閻魔堂じゃねえか？」

「なるほど。あんな荒れ果てた辻堂のなから灯が洩れてるとは、いってえどういいうわけだろうな」

「行ってみりゃわかるさ。まさか狐でもあるめえ」

「とにかく、ひと休みしてえな。足が棒だ」

二人は足音を殺して、荒れ堂へ近ずいた。

雁八からさきに、朽ち縁の上へ用心ぶかく足をのせ、それから格子扉にそつと眼を寄せた。

「おうッ」

雁八は思わず声をあげ、あわてて口をおさえた。

異様な光景にちがいがなかった。裸ろうそくの炎に照らされた堂のなかには、うしろ手に縛りあげられた若い女。

その前に画紙をひろげ、凝然と坐る白髪の老乞食。膝もとは、数本の絵筆が散乱している。

「——なんでえ、こりやア？」

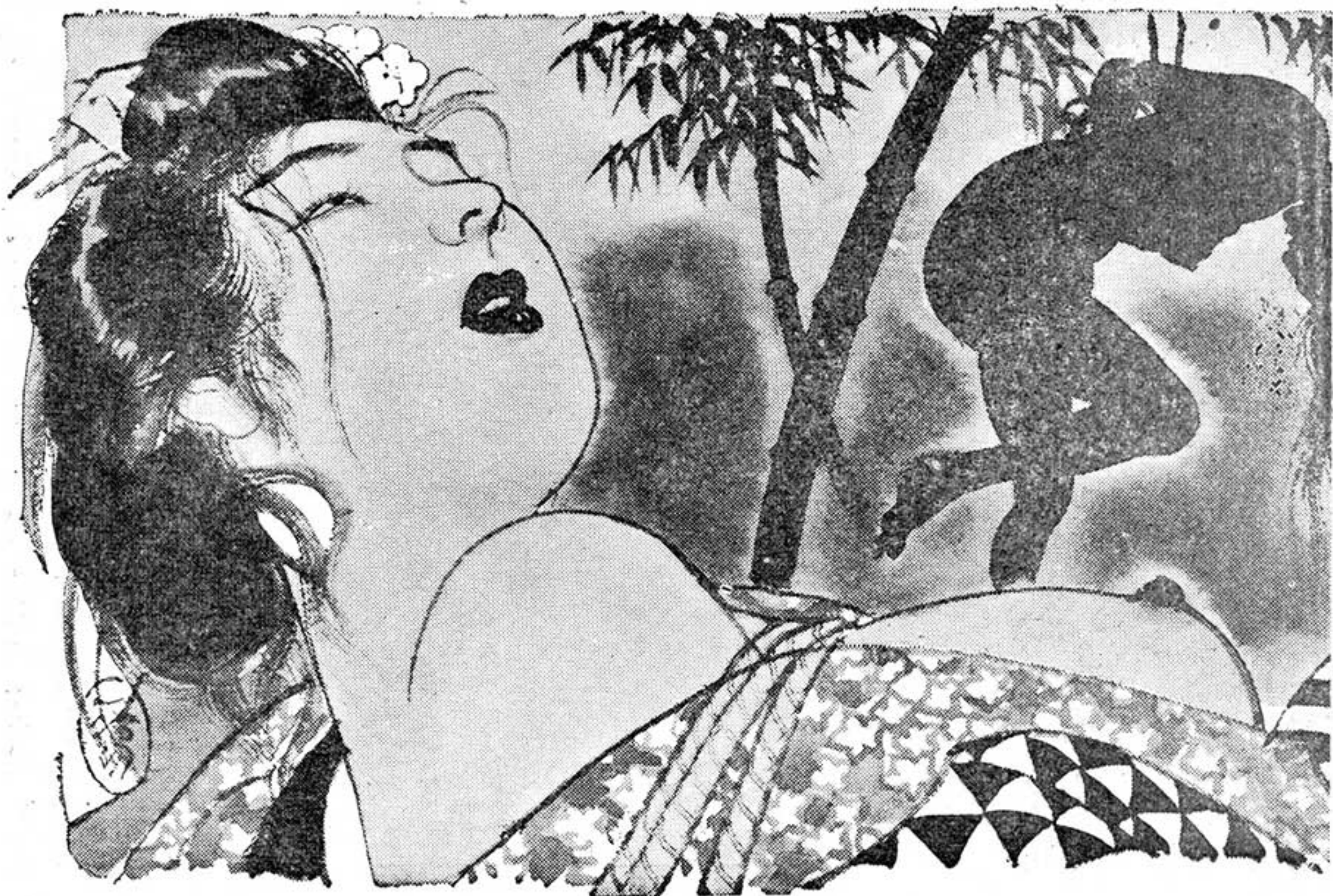
吉太郎ものぞきこみ、啞然とした。そして二人は、安心した。妖気ただよう気配ではあるが、おいほれ乞食と、なにゆえか縛られ、ふるえている女。どちらも、雁八と吉太郎の敵ではない。

敵どころか、二人の男の眼は、むきだされたおりんの乳房、乱れた裾から、あらわに投げだされている白い足に吸いつけられた。

「ううう、女だぜ」

雁八と吉太郎は、鼻づらをつき合わせてうなずいた。女に飢えきっている眼の色で、卑しく笑った。

雁八の手が、乱暴に格子をひらいた。雁八のうしろから、おくれ



じと吉太郎も堂のなかへ足を踏み入れた。

楽堂の眼が、二人の侵入者にむけられた。おどろきよりも、だいたいな仕事中に邪魔者が人ってきたという、不機嫌なにかい顔で、雁八と吉太郎をみあげた。

兇悪な人相である。雁八の左頬には大きな傷痕があった。吉太郎は馬のように長い顎をしていて、二人ともさかやきをのぼし、ひげものぼし放題である。

おりんは、いきなり現われた二人の男に、きょとんとした顔をむけていた。

「おい、おやじ——」

と、雁八が凄みのある声でいった。

「静かにしろ、大声で騒ぎたてるなよ。声をだすと、いのちはねえぞ」

吉太郎があとをつづけた。吉太郎の手は、ドキリと光る匕首をつかみだした。

それでも、楽堂はおどろかなかった。ひどく不機嫌な顔で、黙って二人を見つめはじめた。

「夜露だけは、しのげそうだな」

天井を見あげて、雁八がいった。

「ほう、この乞食じじい、なんだかすげえ絵を描いてるじゃねえかよ」

画紙をのぞきこみ、唇をまげて吉太郎がいった。

絵なんかに興味はなく、雁八の視線は天井から周囲の壁を見渡したあとで、おりんにむいた。おりんの肌から、動かなくなった。

「助けてえッ、こわいッ」

おりんが、はじけるように悲鳴をあげた。絶叫だった。両足をバ

タバタさせた。ただならぬ事態を、おりんはやっと察したのだ。

二人の男は、その悲鳴のけたたましさに、とびあがった。

「やいやいやい！」

雁八もあわてて懷中から匕首をとりだし、おりんの鼻さきに突きつけた。

「静かにしろい、黙らねえと殺すぞ！」

それでも、おりんは黙らなかつた。全身を咽喉にして悲鳴をつづけた。

「お、おれたちはな、一刻ばかり前に伝馬町の大牢を破って逃げてきた二人組だ。ここまでする途中で、ついその百姓家に押し込んでな、一家五人をみな殺しにしたあと、こうして身なりを変え、高飛びをするつもりの大悪党だ。黙らねえと、ほんとに殺すぞ！」

吉太郎は、せいっぱいに脅迫した。

牢破りは事実だったが、五人殺しは口からでまかせだった。悪党の虚栄だった。

だが、それにおそれて沈黙するどころか、おりんの泣き声は赤児のようにますますかん高く、はげしくなるばかりだった。

「くそッ、めんどくせえ、猿ぐつわを嚙ませるんだ！」

雁八がどなった。

おりんの口は、汚ない布でふさがれた。悲鳴はおりんの咽喉もとまで押しもどされた。

「とんでもねえ冷汗をかかせやがる。うまく追手の役人の眼をこまかし、やつとここまで逃げのびたっていうのに！」

雁八の額には、ほんとうに冷汗が光っていた。

「おれたちの足どりを、やつとこのことで役人たちからくらましたっていうのに、まったく途方もねえ泣き声をあげやがったぜ！」

いまいまして舌うちして、吉太郎もいった。

二人はへっぴり腰になり、格子から外の闇を見すかし、注意ぶかく気配をうかがった。

「でえじょうぶらしい。うまく追手をまき終わせたぜ！」

二人は、やっと笑った。

6

おりんが猿ぐつわを嚙まされている間、楽堂は身じろぎもせず、その光景を見つめていた。まばたきもしなかった。

「なんだろう、この乞食じじいは？ どうも変だな！」

雁八が楽堂をふりかえり、気味悪がった。

手出しもせず、逃げだすでもなく、救いを呼ぶでもなく、片隅にただ茫然と、あるいは平然と坐っているだけなのだ。

「馬鹿か、きちがいか、どっちにしても、まともじゃねえ！」

二人の牢破りは、楽堂を無視することにした。

そして、餓狼の眼でおりんを眺めまわし、かわるがわる行動に移った。うしろ手に縛られているために、おりんはなんの抵抗もできなかった。猿ぐつわのために、声をたてることもできなかった。

「なあ、雁八。今夜はこの閻魔堂の中で、ぐっすり眠りてえところだが、もうひとッ走り、遠くへ飛んでいたほうが、安心だな！」

「えれえ。さすがはおれが牢破りの相棒にえらんだけの男だ。いいこというぜ、ましろの吉太郎。さあ、腰の軽くなったところで、もう二、三里もすッ飛ぶか！」

「よしきた。ところでこの女と乞食じじいはどうする？」

「おれたちの顔を見られた上からには——！」

雁八の眼が鋭く光った。

「ばらしていくよりほかに、手はねえだろう」

憐れみのかげが、チラリと吉太郎の眉にうかび、すぐ消えた。

「おそかれ早かれ、役人どもはこの閻魔堂あたりまではやってくるにちげえねえ。そのとき、こいつらの口からおれたちの足どりがばれることは確かだ。ねむらすよりほかに、やっぱり手はねえか」

「おめえは女をやれ。おれはじじいやる」

二人は、同時に楽堂とおりにおどりかかった。

「さあ、ずらかろうぜ」

血ぶるいして、二人は闇のなかにまぎれこんだ。さすがに「はやて」とか「ましら」とかいう異名をとる二人であった。四本の足は宙を蹴った。

7

しかし、二人の牢破り悪党が、御用弁になったのは、その翌朝だった。

二人は、すぐさま向島土堤下の番所までしょっぱかれた。この大手柄をたてたのは、言問の勘蔵という老練の岡っ引きだった。

「ねえ、親分——」ふてくされたつら構えで雁八が勘蔵に声をかけた。「こんなざまになっていまさら自慢も恥しいが、はやての雁八に、ましらの吉太郎、異名のおり逃げ足は早いはずだ。追手のために足どりを残しておくようなヘマをするほど、トウシロウでもねえ。それなのに、親分方によくあつしらの足どりがわかりましたねえ」

雁八も吉太郎も重罪人らしく柱にぐる巻きに縛りつけられて、往

生していた。大番屋送りの同心に引き渡されるまで、このままだった。

「お前たち——」と、唇に皮肉な微笑をみせて、勘蔵がいった。「寺島の閻魔堂に住みついていてる乞食の絵描きに、馬鹿のおりんを殺したな？ 大きな罪を重ねやがった。てめえらの足どりは、そのために知れたのだ。ははは……」

「と、とんでもねえ。あつしら、お牢は脱けだしましたが、そ、そんな人殺しなんて、大それたことは、けっして……第一、絵描きだとか馬鹿のおりんだとか、そんなやつらに逢ったこともねえや！」

雁八と吉太郎は、口をとがらせ、歯をむきだしてわめいた。あの乞食二人の口は、完全にふさいだ。誰かほかの者に見られでもしなけりや、あの殺しの下手人がおれたちだってことは、けっしてわからねえはずだ。

「とほけるな！」ぴしりつと勘蔵がいった。

「てめえらが、あの乞食夫婦を殺したことに、立派な証拠があるんだ。みせてやる！」

勘蔵は、まるめてあった一枚の紙を、雁八と吉太郎の前にひろげた。

責め絵だった。血にまみれていた。その血は楽堂とおりのものだった。

歌川楽堂の、百枚目の責め絵。辻堂の縁で旅の娘をとらえて縛りあげ、あわや襲いかからんとしている二人の雲助。その雲助の顔こそ、まぎれもない雁八と吉太郎の顔だった。

雁八と吉太郎が、おりんをさいなんでいるあいだに、精魂と執念をこめて描きあげた、楽堂の最後の傑作だった。

女中になりたい男の話

阿麻哲郎

江淵晃夫・画

4

■自尊心をこんなにもくすぐってくれる相手の
■言動を、女性は決していやがりはしないのだ■

1

ぼくがドッグボーイとして住みこんでいたのは、半月にも満たない短い期間である。これが許されたせいっぱいの時間であった。もし、この許された時間以上に、理由もなくぼくの失踪が続いたとしたら、いくらなんでも家族の者たちはあわてだし、警察へ捜索願を出すぐらいのことはやったかもしれない。

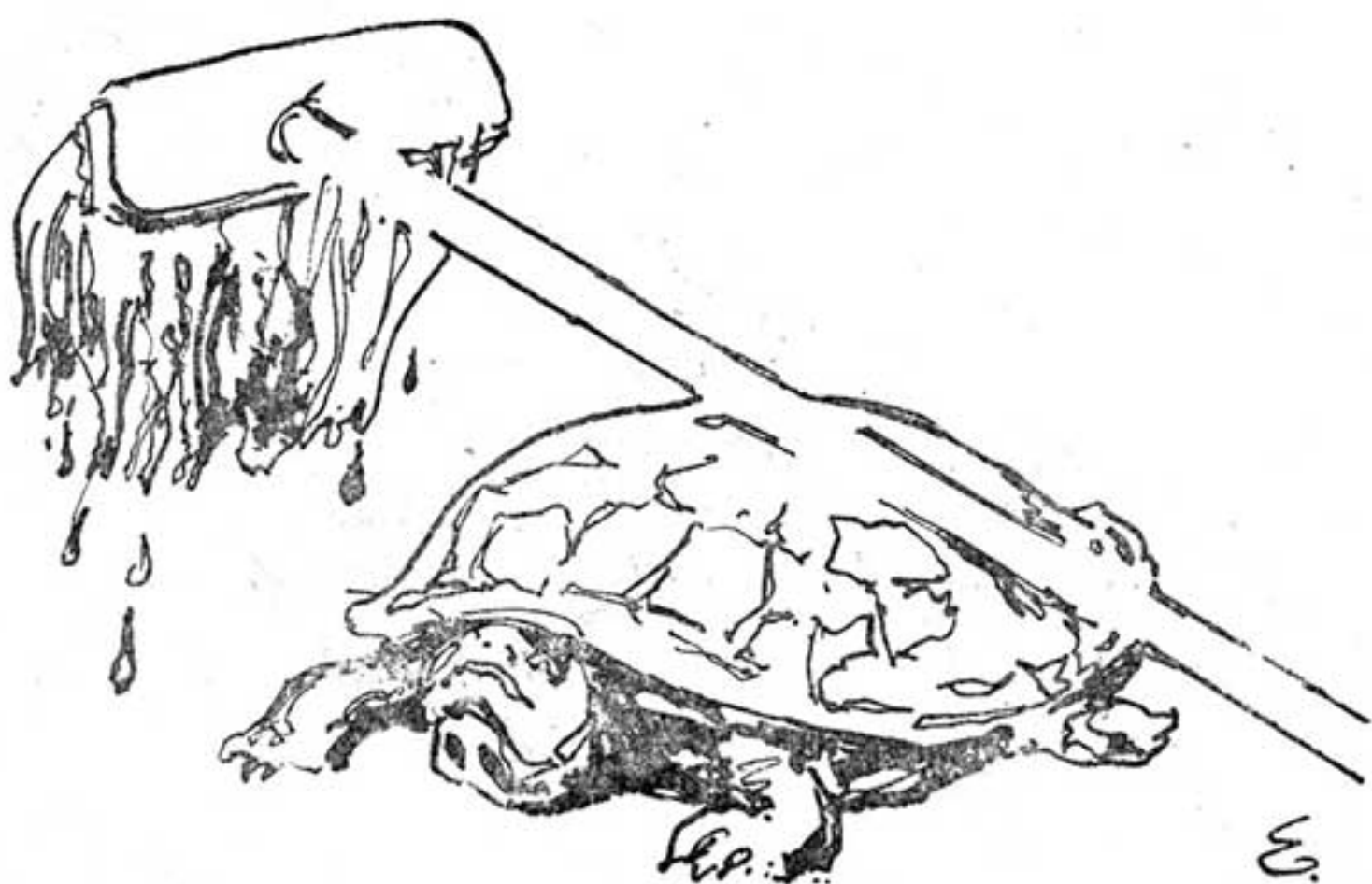
ぼくはせめて、一月の期間がほしかった。一月あれば、きつとぼくの望むもののすべては得られたにちがいない。ひとりの上流の婦人と、ひとりの快活な若い女性とは、現代の

おとぎ話のすべてを信用し、その秘密の決楽をそれぞれに、それぞれのやり方で楽しんだにちがいない。

現代のおとぎ話、それは奴隷を所有する楽しみだ。人格的なものの、ほんのひとかけらさえをも認めてやる必要のない奴隷、それをまるでおもちゃのように、彼女たちの所持品の一つに数え入れてしまう、この王侯貴族にもまさる快楽に、彼女たちの心はしびれただろう。

そしてぼくはぼくなり、その一部始終をことこまかに、彼女たちの名誉を少しも傷つけることなく報告できただろう。

残念ながら、ぼくに許されたのは半月こ



ずの期間だった。だからいっそう、その短い期間を、最も模範的なマゾヒストとして、裏も表もなくぼくは終止した。故にむしろぼくは、そのことをより深く感謝すべきであるのかもしれない。

ある人がこう言った。

「なるほど、君はまるっきりフィクションなしの、体験に基づく事実のみを書いているのかもしれない。それはわかる。しかし、メイドが床にすわった君のところに、食べかけの肉片を役けてよこすということは、すこし唐突で納得がいかない。いくらなんでも、若い娘が、そう簡単にそんなまねをするわけがない。あれは君、少しフィクションもくつついているんじゃないか。事実を書くといってもいろいろあって、書いているうちには思わず筆が走って、つい創作してみたい欲望にかられたりするからな……」

よしんば一歩さがって、あれを事実としても、やっぱり説明不足だな。われわれが知りたいのは結果よりむしろ経過なんだから」耳痛いことばである。またありがたい評言である。そしてごもっともさと思う。

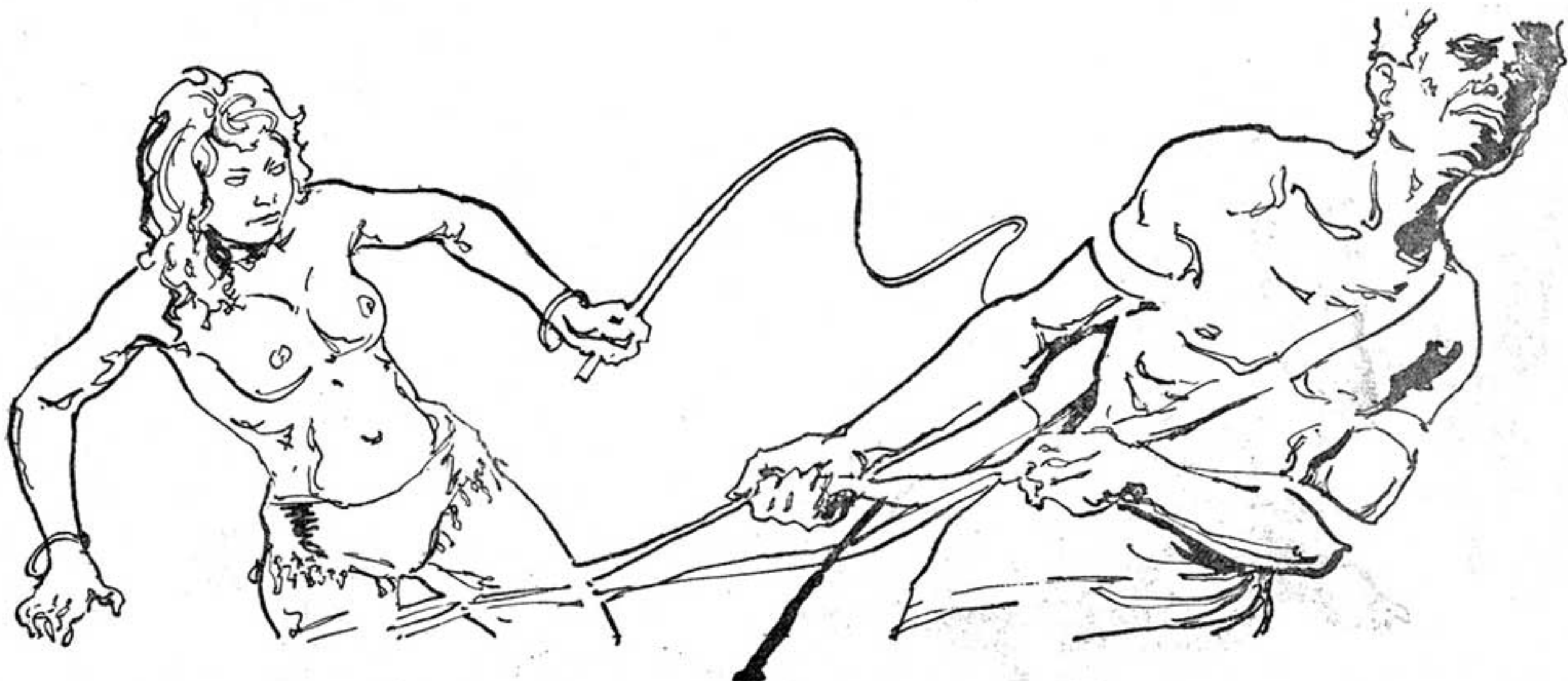
しかし、はっきりしておきたいことは、あれは事実そのものであって、いささかもフィクションはまじってないということである。

フィクションが少しでもまじれば、ぼくの書く一連の原稿の意味はなくなってしまう、そういうふうになさえ厳しく態度を持しているつもりである。いわば医学上の厳密な臨床実験報告、少なくともぼくは気持ちの上ではそういうつもりでいる。それが筆力不足で、なんだか取って付けたような単なる作り事としか諸君に受けとられないとしたら、全く不本意でもあり、また申し訳なく思う。

警戒心をときほぐす、この難事業をじょうずにやってのけさえしたら、女性のほうがどれほど男性より大胆であるかしかない。

ぼくは精薄児さながらの状態で彼女たちのまえに現われた。彼女たちが、本当にぼくを精薄児、つまり馬鹿だと思いこんでしまったら……ひとりでに警戒心はときほぐれるはずだった。そして、それは成功した。成功したからこそ、ぼくは雇われたのだ。ドッグボニーに利口な青年は必要でない、頭ごなしに追い使ってやっても、腹を立てることすら忘れてしまつて、どんな屈辱にも甘んじる根からの馬鹿がいたら、それこそ婦人たちは大歓迎してくれる。

よし乃お嬢さまと、ぼくと、二人だけしかちやうどそのとき食堂にはいなかった。そのよい機会に、ぼくはどれほど熱心にお嬢さま



をくだいたかわからない。もちろん、馬鹿である立場を忘れることなく……馬鹿であるということは、ぼくにとっての唯一の隠れ蓑であった。どんなことを言いだしたって、それはおかしいことではなかった。自尊心をこんなにもくすぐってくれる相手の言動を、女性は決していやがりはいらない。つまり、要するに、なんて馬鹿な男なんだろう。すっかりうれしくなっちゃうわ。というぐあいにある。

「亀文さんって、ぼくいやだ、ぼく、カメっていうの、だから……」

「だって、やっぱり人の名前には、ちゃんと、さんを付けて呼ぶものよ」

「ぼく、やだなあ、ぼく、いつでも、だれからも、カメって呼ばれるんだもん、そのほうがいいもの」

「おかしい人ね。……」

お嬢さまは、おかしそうにほえまれて「あんた、いったい、学校はどこまで行ったの」

「……………」

ぼくはわざと、言いよんだように無言のままもじもじする。あなたという呼びかけがなく、お嬢さまはあんたと呼んでくれた。それが少しうれしい気もする。

「中学校には、行ったの？」

「いや、行かない」

「どうして」

「学校きらいなもの、ぼく、頭が悪いからだめだ、それに、みんながばかにするし……」

「そう」

お嬢さまは、はじめて得心がいったようにうなずく。なるほど、そんなこともあるだろう。だって、学校には意地の悪い子がたくさんいるんだものね。わたしだけは違うけど、ほかの子はみんな意地悪だ、そういうふうにならなくても女性たちは、それぞれに思いこんでいる。そしてぼくのような、かわいそうな子の身の上話は、いっそう彼女の同情と興味をひく。

ぼくはすっかり幼児となんら変わるところもない状態にあった。女性はこのいう場合には、すぐに母性的本能をあらわにする。相手がたとえ自分よりはるかに年長の、しかも相応の骨格相貌を備えていても、少しも臆することなく、じきに保護者の立場に立つものだ。

2

ぼくは床の上にすわりこんでいた。お嬢さまは椅子にかけてこちらを見おろしていた。

ぼくの目の位置は、丁度お嬢さまの膝小僧のあたりに当たった。

ぼくはそのまん前で、常に伏目がちに、ときどきは話の合間々に、あたかも子供がいつときも手先のいたずらをやめない、あのしぐさのとおり、床の上の、手先のとどくあたりの糸くずやごみをつまんで集めた。

お嬢さまのスリッパのあたりにもごみはあった。それから、すわっていられるお嬢さまの椅子の下がわにも、ごみはあった。

ぼくは丹念にそれを拾った。お嬢さまの足もとのごみに手をやるときは、まるでかがみこんでしまって、ぼくのおでこが、彼女のスリッパの先に当たるようなくあいであった。「でもね」

お嬢さまが考えながら言った。

「わたしは年上の男の人を呼び捨てに呼んだことはないのよ。それや、この奥さまがカメッて言われるのはいいけどさ、わたしまでもカメなんて、ちょっと言えないわ。人に生意気だなんて思われるわ」

そのとおり、全くそのとおりである。年上の男性を、いきなり呼び捨てに呼びつける習慣を、特に日本の女性は持つてはいない。とっさにはとまどうしかあるまい。

しかし、考えて下さい。相手は馬鹿なん

だ。つまり子供以下なんだ。しいてどちらの立場かを選ぶとすれば、やはり下女の立場よりはお嬢さまの地位が女性にとってどれほど楽しい場所であるかしれない。

無邪気にごみを拾い集めている彼の頭が、

悪いなどということは決してない、むしろ愉快でさえある。

「だって、ぼく、家来だもの、お嬢さまの家来だもの」

「えっ、だれだって？ だれの家来？」

とお呼びしてもいい資格を、ちゃんと備えていらっしやいます。

そうだ、そのとおりだ。彼女は聡明でかわい女性だった。メイドであるよりは、ぼくの主人に、姫君にこそなるべきである。



彼女の足先にふれんばかりにかがめられた

り、ときには全く体をのりだして、椅子の下の方にまでもくぐりこむ姿勢だ。

椅子にすわってその様子を見守っている

と、まことにこっけいなしぐさである。気味

「お嬢さまの……」

「それ、わたしのことなの、まあ、驚いた、わたしはお嬢さまなんかではなくて、メイドよ。わかる？ この女中さんよ」

いいや、いいのです。あなたにはお嬢さま

「ぼく、でもやっぱり家来だ。お嬢さまの家

来になるの、大好きなんだもの」

「あんだ、変わってるわね、いいわ。家来にしたげる。でも、家来にすればどうしたらいいの」

「ぼくはお嬢さまって呼ぶの、そしたらお嬢さまは、カメッていうの」

「カメ君でもいいでしょう」

「カメ君でもいいけど……でもやっぱカメがいい」

「そお、あんたがそんなに言うんなら、いいわ、カメッて言っただげる。それでいいんですよ」

お嬢さまはおもしろそうにぼくの顔をじっと見おろしていた。ぼくは幾分嘲笑的にも受けとれるその視線を、まぶしく受けとめながら、さっきからのごみ拾いを続ける。

ごみの中には、スリッパで踏みつけられたごはん粒が、平べったく、固くなって床板にくっついていられるのもまじっていた。

ぼくはそれを口に入れてかみしめた。お嬢さまがそれを見ている。椅子の背に両腕を乗せ、それにあごを埋めずめるようにして見ている。ぼくが拾ったごみの中のごはん粒を口に入れるのを見ている。

「そんなきたないもの食べて……あんた、おなかこわさないの?」

ぼくはお嬢さまの足もとに平伏した。

「お嬢さまの家来になれて、ぼくうれしいです。それでお願いします。ぼくのこと、あんたって言わずに、お前って呼んでください。主人は家来に、お前って言います」

「ふーん」

お嬢さまはしきりに感心したようにひとりうなずいていた。

「お前がカメで、わたしがお嬢さま、いいわ、あんたがそう言ってもらいたいんなら、今度からそう言ってやっていいわ」

とうとうお許しが出た。このお許しはぼくにとっての宝であり、絶対の憲法だ。憲法は為政者が当然守らねばならぬものなのだ。

ところが、女性という為政者は、きわめて大胆不遜であるいっぽう、またきわめて臆病

である。たくみな誘導と根気を失ったら、つい憲法は無視されがちになる。

ぼくのたゆみない隷属の道への努力は、この地点からまさに開始されるのである。

ながい繰り返しと反復ののちには、ついに女性に憲法と知恵をば、完全に消化し身に付けるようになる。

一度味わった禁断の木の実の味を、どうして女性は忘れよう。男性から献身的にあがめられ、奉られることの快味を、どうして忘れ得よう。女王の座というものは、どんな女性の心の中にも、ひそやかな理想と憧憬の位置として生きているのである。

3

お嬢さまと、それから先輩のボーイ吉雄とが食堂で話をしていた。

「よーっ、何かくれよ、おれ、腹がすいちゃったよ」

吉雄はお嬢さまにおやつをねだっていた。まだ二十歳になるかならぬかの食い盛り、いくら食べてもまだ食べ足りぬのだろう。彼はいつもこうして、だれかれの見さかいもなく食べ物をおねだった。

「さっきごはんを食べたばかりじゃないの、なに言ってるのよ」



お嬢さまはつつけんどんにはねつけていた。

「そんなこと言わずに、何かくれよ」

吉雄もまけてはいなかった。まるで母親にでも甘えるような口調でねばるのだった。そしてたいてい、このねばりがしまいには効を奏するようだった。

このときも、お嬢さまは、とうとう根負けしたといった様子で立ち上がり、

「しょうがないわね」

と言いながら、二階の居室の方へ、台所のすぐ横手の階段をあがっていった。

ほくは例のとおり、床の上にすわりこんだまま、このときの一部始終をぼんやりとした表情で眺めていた。

吉雄はほくの方を見返りながら、ニヤリと笑ってみせた。

お嬢さまはすぐに降りてきた。そして持ってきた紙包みを吉雄に手渡しながら

「せっかく楽しみにしてとっておいたのに、吉雄君のためなんだもの、まあいいや、これ全部あげる」

と何のわだかまりもなく言った。うれしそうにそれを受け取った吉雄は、紙包みを広げながら、

「こりや、すげえ。羊かんにかステラにシユ

ークリーム」

と、すっとんきょうな声をあげながら

「これ、ほんとに食べちまうぞ」

と言った。

「ああ、いいわよ」

お嬢さまは、これまたすこぶるおうようなものだった。

ほくのすわっている場所の背後には、大きな特大の冷蔵庫が据えてあった。その中にはいつもぎっしりと高価な食物がつまっていた。吉雄の好きなチーズやソーセージもあったし、大きな束をなしたバナナも、いつ、それが食べるかもわからない状態で、いつもそこにはいっていた。

盗み食いするつもりだったら、いつでもやれただろうに、吉雄はそれをやらなかった。

吉雄から食物をねだられたお嬢さまも、それをよいことに冷蔵庫の蓋を開けるようなことをしなかった。彼女は吉雄のために自分のものをしか割いてやらなかった。十分にそれを心得ているはずの吉雄は自分で催促し、手放して彼女のプレゼントを喜んだ。二人の様子はすっかりほくの心を明るくしてくれる。

結構、盗み食いをすれば、それがどんなに微量であっても、すぐにわかるしかけにはなっているそうだと。毎晩この家の奥さまが、冷

蔵庫の中の食物の状態を点検なさって、「ばかに少なくなったわね」と、いやみを言う口ぐせがあるらしいことを、ぼくはその後耳にしたが、しかしその時だって、べつに裏切られた気は少しもしなかった。吉雄もお嬢さまも、そんなことなどに気を使って、くよくよしたりなぞする性格では、決してなかったからである。

「カメさん、これもらったんだ、食べなよ」
吉雄は立ってきて、ぼくに紙包みのカステラをとってくれた。彼はぼくに物を言うとき、少しきまり悪げな、てれくさそうな様子をやる。年かさのおとなに対しての敬意と、馬鹿に対しての侮蔑とが、うまくまじり合わないで、結局はかれの人がらをまる出したしたようなある種のこっけいさをにじみ出している。

しかし、ぼくの方がもっとぐあいの悪い立場に立たされているのだ。かれの前にいるときにも、馬鹿な状態でいねばならぬ苦痛だった。女性の前での白痴演技は、すでにそれが演技の埒外にはみ出して、全く白痴そのものになりきって、そのことにぼくは感覚はしひれてしまう。

しかし、同性としての男性のまえでは、演技は情熱を失い、あじけないてれくささだけ



がのこる。こういう意味のない演技をば、吉雄とてまともに受けとれるはずもない。いったい彼は、ぼくのことをどういうふうに感じているのだろうか。

カステラを手渡してくれたのが、吉雄でなくてもしお嬢さまの方だったら、ぼくは一度それを床に落とし、その汚れたものを彼女にちゃんと見守ってもらいながら口にしたらどうに、彼女の前で食べるこの汚れたカステラは、カステラ以上のこの上ない美味をぼくにもたらししてくれただろうに……

とはいえ、吉雄の好意をぼくはすなおに受けとった。カステラはやはりカステラの味しかなかった。

お嬢さまは人前ではあまりぼくの名を呼ばないようにしていた。このときもそうだった。「カメ」と言わないで「ちよつと」と言っただけだった。

呼ばれてお嬢さまの方を見ると、彼女はあごをしゃくって勝手口への通路のガラス戸をしめるように言いつけた。彼女はドッカと椅子にすわって、足を組んでいた。

最敬礼をするようにぼくはおじぎをし、へり下った調子で小腰をかがめ、言いつけられたとおりにガラス戸をしめた。

「生意気言ってらあ」

吉雄がやゆするようにそう言うと、お嬢さまは、

「だって、何でも用事は言いつけてくれって、そういうんだもの。かまわないじゃない」

と当然なことのようにつた。吉雄はそれに対して、べつにことばを返しはしなかったが、ほくの方に気の毒なような顔をした。

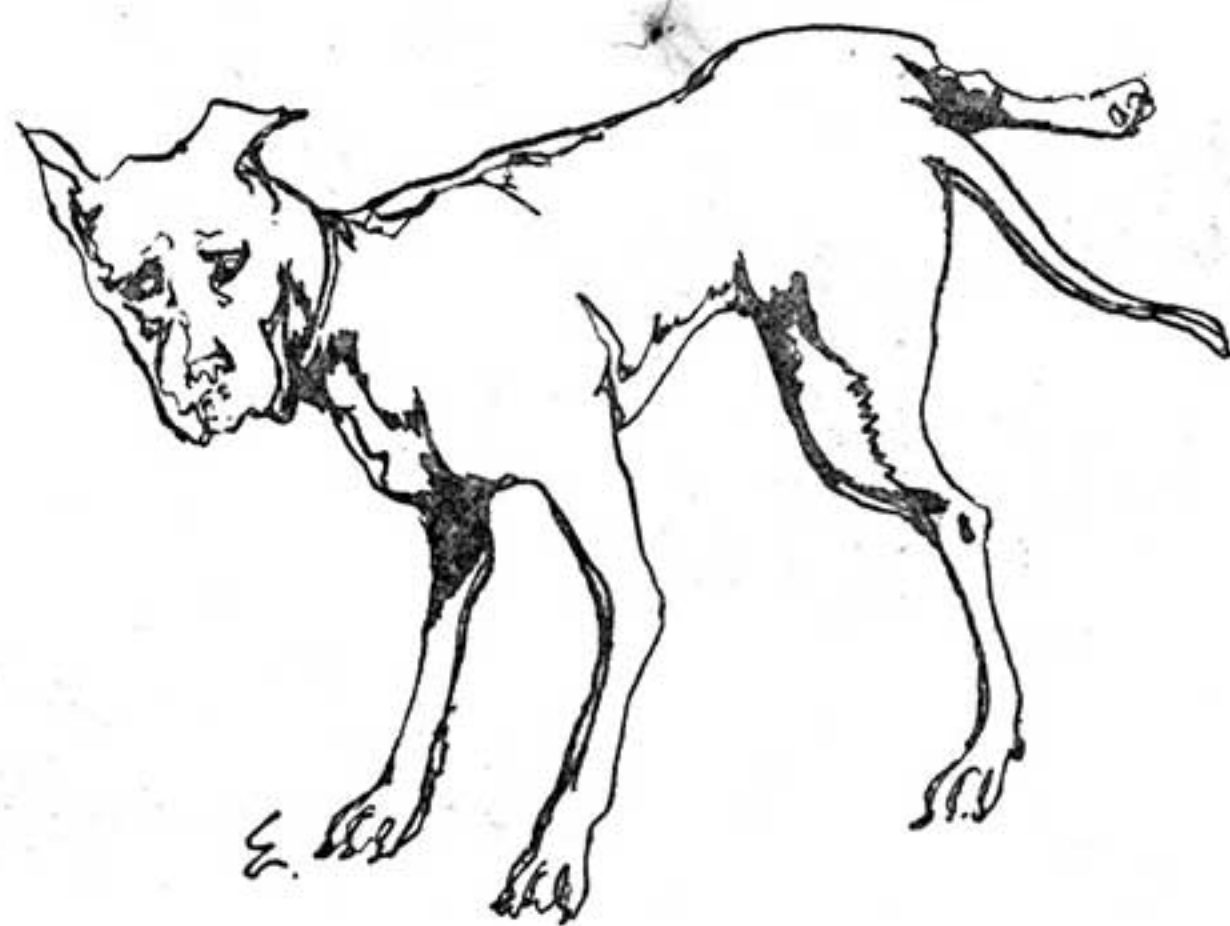
「カメ、この紙くずもちゃんとかたづけるのよ。ほら、くずかごはそこんところにあるから」

お嬢さまの次の命令であつた。立ち上がるうともせず、椅子に足を組んだまま、彼女はほくの動きにじっと注意をこらしていた。

4

フォションが、古い教会建築を愛し、そこにそのまま中世人の息吹きを感じたように、ほくは尊大さや残忍さのなかに、女性そのものの体温を感じた。尊大さや残忍さは、女性を理解するための一つの補足的な部分ではなく、尊大さ、残忍さそのものが、そっくりそのまま女性であるような、そういう確信にとられているときほくの心は異常に高ぶるのである。

お嬢さまと吉雄の二人にとって、いちばんけむったい存在はおばさんであつた。



おばさんは長くこの家の家事をとりしきっている四十年輩の、ギスギスした感じのやせた女だつた。ひどく口ぎたなく人をののしるくせがあつて、いつも吉雄が槍玉にあがつた。仕事のやり方が荒っぽいとか、なまけちやいかんとか、お前は馬鹿だとか、しょっちゅうがみがみがなり立てていた。それでも吉雄はそういうおばさんをつかまえては、

「よーっ、何か食べるもの、くれよ」

と、全く他意のない調子ですねたり甘えたりしていた。

「いくら食ったら気がすむんだい、なんにもありゃしないよ」

おばさんはつつけんどんにそう吉雄を突きはなすが、吉雄の執拗な攻勢には、いつもかぶとを脱がされて、なにがしかのおやつを与える仕儀になるのが落ちであつた。

おばさんの前歴はあいまいである。ただ戦前、満州にいたことだけはわかつていた。大陸では小料理屋を経営して、羽振りがよかつたそうだが、それも実のところは定かではない。

お嬢さまが言っていたように

「何をやってた人か、わかったもんじゃないわ、それにおばさん、どうも日本人じゃなさそうじゃない？」

というところかもしれぬ。

おばさんには身寄りがなかった。青く不健康にひからびた顔の色には、孤独からくる寂しさと、世をすねた初老の婦人が持つ、病的なとげとげしい影があつた。

夕食後の食卓をかこんで、ほくはお嬢さまと吉雄と、それからこのおばさんに、いろいろとほくの立場について、話をしたことがあつた。おばさんの質問に答えながらたどたどしげにしゃべることは、たしかに辛いことではあつたが、この舞台を、うまく演じおおせる必要が、ほくにはあつた。仕事をさせられることが好きなこと、女の人の家来になること

が好きなこと、犬が大好きで、いっそ犬になつてしまいたいことなどを、とつとつと回りがねる舌でしゃべった。

おぼさんはその途中で、何度も遠慮なしに笑い声をあげ、ぼくの話に半畳を入れて、かかったりもしたが、結局は非常に感心してしまい、

「あんたは普通の男とはまるっきり反対だ。ほんとうに偉いよ。よっちゃんも、少しはこの人を見ならうといいよ」

と、変に持ち上げられてしまった。よっちゃんとは、吉雄のことである。

この人を見ならいなさい、この人は偉いよ、といったおぼさんのことには、真情がこもっていた。

ひにくや嘲笑のきみは全然なく、本当に無欲な神さまみたいな無垢の心だ、という驚きであった。

これは大変な誤解であつたが、誤解は誤解のまま置いていた方が面倒がないので、むりな弁解や発言はさけた。

正常な男女の営みにはまるきり興味がなく、すえたパンティのにおいをむりにかがされたり、ちりかごの中の鼻汁のついたちり紙を、くちやくちやになるまでかみしめてみた、クニリングスやネクタール愛飲の話ま

で、いっきにまくしたてたら、反応はどう出ただろうか。

無欲どころか、ぼくのようなマゾヒストほどの欲ばりは、本当はいないのではなからうか。

クニリングスやネクタールの話を伏せている限りにおいては、しかしマゾヒストはまさに神さまである。世の中に、これほどの滅私献身的な男性はいないからである。

ぼくがこうした環境の中で、おおっぴらに犬とほとんど変わらない状態でいられたことは、偶然でもなく、また不自然でもなかった。

食事中的みんなの足許の床に、腹ばいになつてふせつていても、食器をテーブルの上でなく床にじかに置いて食べてみせても、お嬢さまの食べ残しのものを、もったいないからとむりにいただいても、もうだれもそのことには驚かなかつた。驚くどころか、食べ残りの肉片を、

「よかつたら、カメ、あげるわ」

と言いながら、お嬢さまがぼくの食器皿に投げ落としてくれたりしても、それはこの家の台所風景としては、珍しいことではなくなっていた。

ことに、奥さまの食膳には、残り物がたくさんあつた。以前はそのまま捨てられてしま

った残り物は、ぼくがたいいていただいた。まるで手もつけられないものであつても、奥さまは嚴重に捨てることを命じられていたが、ぼくの場合は特別であつた。スープの残りをびちゃびちゃなめているのが、ほかの者でなく、カメであつたら、奥さまは何も言わずに微笑だけなされた。

いろんなことが、めまぐるしいほどにあつた。せめて一月はいたかつた。一月いれば、もっとすばらしい果実を、得ることができたに違いなかつた。

しかし、ぼくのドッグボーイの期間は半月に満たなかつた。おぼさんが人に気を許した経験は、おそらくぼく以外にはなかつただろうに、……ぼくは彼女の信頼と真情を裏切つてしまった。

これは心残りなことであつた。半月たたぬ或る夜、ぼくはこっそりその家を脱け出したのだった。

脱け出すについてのくだくだしいきさは、紙数の都合で割愛する。

が、以上、いささかのフィクションもまじえてはいないことを、はっきりと明記しておきたい。

往年の名場面

山根 豊



上の時代物の方は、昭和二年のマキノキネマ作品で、時代物としての日本最初のトーキー、「浦里雪責め」である。松浦築枝が主演している。

彼女は現在、老婆役などでテレビに活躍しているが、この当時は、美人スターとして有名だった人であった。

当時はすべてにテンポが遅かったから雪責めの場も非常に長く、たつぷりと堪能させてくれたものである。

昭和三年に上映された松竹映画「上陸第一歩」の一カット。

水谷八重子の若かりし頃の作品で、相手役にはこれも当時二枚目で売っていた岡譲二（現在は改名して譲司。テレビで活躍している）が共演したもの。

当時の縛られ写真としては珍らしい作品で、鎖の感じの痛々しさ、悲痛な表情等が、往年のマニアの血をわかせたものである。

なお、この映画は、パラマウント社で

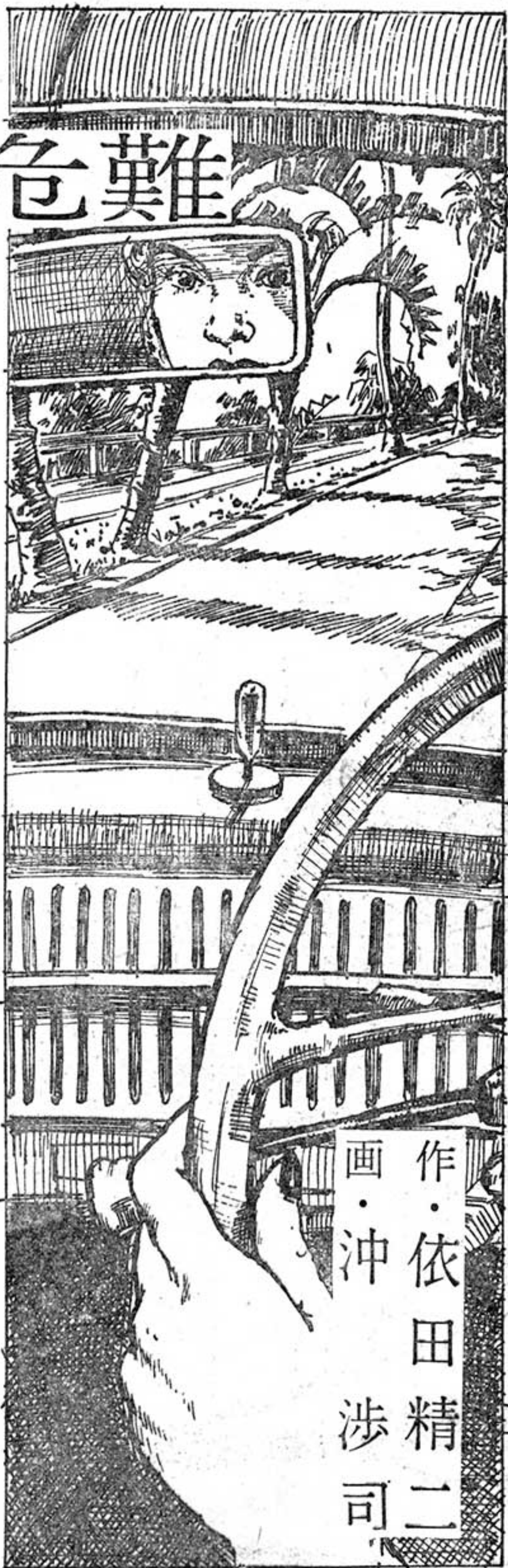


撮ったジョージ・バンクロフト主演の「ニューヨークの波止場」を、まるっきり焼き直した作品で現在なら盗作だとか何とか、やかましいことであろうと思われる。

女間諜余話

招かざる危難

★見知らぬ男の車に乗ったの★
★が運の尽き、巻き添えくっ★
★で捕われた彼女の運命は？★



暑い夏の昼下がりである。

中部アメリカ国のグワナム地方――

ステラは、その海岸線に沿った自動車道路を、C国に向って車を走らせていた。

道路から一段低くなって、点々と連なった

1

美貌のステラ

島々を浮べた広い海原が、青く輝やきながら右手に果しなく続いている。

沿道の椰子と、枝を重く垂らした柳のような立木が涼しげに影を落している。

やがて、車は、建物を点在させていた木立

の深い浜辺なりに左にカーブした。世界屈指

の産額を誇る綿花畑が、両面に展開し始めた。

(おや！ エンジンの音が……)

ステラは、突然、機関の変調に気づいた。

車は間もなく故障して動かなくなった。

(困ったわ……)

ナイロンと絹の交織の白いスカーフで包ん

だ美しい顔で彼女は呟いた。

ステラは、B国に派遣されていたA国婦人諜報部員の一人であったが、今朝届いた本国からの秘密指令によって、C国のアンチ・ミサイル・ミサイル基地に関する資料収集のため、陸路C国に入国する途中だった。

作・依田精二
画・沖 涉司

早速、入国に必要なパスポートも用意し、C国内の仲間達とも今夕七時にカラナグワで遭う打合せを、出発の際に無電で連絡して来たのに……と、彼女は焦立ちながら、何度も始動を試みた。が、エンジンは、鈕を押した時にだけ、悲鳴にも似た遅い回転音を発するだけで、始動しようとはしなかった。時計は二時を回っている。

C国の国境閉鎖時間は四時。そして、そこまではまだ八十キロ近くもある。

C国に向って後から来た車のいくつかは、「どうしました？ 御手伝いしましょうか」と声をかけてはくれたが、それらのいずれ

もがやはり検問所のメ切時刻を気にしているのか、車から降りて来てはくれなかった。

時計が三時を指すに及んで、彼女はついに意を決した。これ以上無駄な時間を浪費しては約束の連絡場所に行けないと思ったから

2

深緑色車の男

だ。彼女は路上で次の車を待つて手を振った。

大型の深緑色の車が、すうっと停った。

「C国に行くのでしたら便乗させていただけませんかしら。今日中にカラナグワまで行きたいのです」

ステラは、窓から首を出した中年の男に向かって、こう頼んだ。

「……」男は、ちょっと、ためらいの色を見せながら、女の上から下に視線を投げかけた。カフスをつけたクリーム色の半袖ブラウス、そして、ココア色のタイト・スカートにくっきりと描かれた腰の丸味。それは、男に、若い引緊った女の肉体を想像させるのに十分であった。その上、髪と同じく金色めいた栗色のベルトや、小さい金ボタンの一番上をはずしたブラウスの胸が、乳房の形に盛り上っているのも魅力的だった。

タイトの下からのぞいた脚線もみごとだ。





「止むを得ませんな。どうぞ……」白いワイシャツの袖を捲くり上げた男は、ぶっきら棒に返事をしながら、ドアを開けてくれた。

「ありがとう」スーツ・ケースを投げこむようにして、ステラは後の座席に乗り込んだ。車を発車させた男は、無言のまままでハンドルを握り、スピードを増し続けて行った。

ステラは、不愛想な男の態度に、始めのうちには、乗せて貰ったことに何かこだわりを感じ、降りようかとも思った。が、それもいつか快いクッションの揺れと、道路の両面に展開する風景の美しさで薄れていた。

やがて、高くそそり立った丘の麓、白い建

物の見える国境線に車はさしかかった。

国境の道路上には、C国側の検問所の遮断機と並行して、手前にB国側のものがあった。

「パスポートを……」ブレーキを踏んだ二人の車の脇に、国境警備員が近寄って来て、パ

3

検問所突破す

スの提示を求めた。

二人は、その手にパスを手渡した。

バス・ポートに眼を注いだ官憲の眼が、一瞬キラリと光り、そして、やや気色ばんだ表情で運転席の男の顔をまじまじと見つめた。

「ウム。ちょっと、待っていてください！」

官憲はこう言い残して、建物の方へ足早に引返して行った。

その後姿を見送って、男が低い声で、

「畜生！ 手が回ってたかな」と呟いた。

そして、いきなりアクセルを強く踏んだ。

そういえば、エンジンはさっきから停めていなかったのだ。急に走り出した衝撃で、ステラは後座席の中で裾を乱して転がった。

「あっ、何をするの、停めてちょうだい」

が、暴走し始めた車は、たちまち二つの障害を巧みに破って、山間の路上を疾駆していた。



「どうするの！ こんなことをして……。こ
っちはC国領よっ！」ステラは激しく動揺す
る車中で、顔色を変えて喚いた。

「うるさいっ！ 黙っているろ」

「あなたは……B国で何か悪いことをしてた
のね。きっと、そうだわ！」

「黙っているろっていうんだ！ こうなった
ら、もう逃げるしかないんだ」

男はステラにどなり返し、血走った眼を前
方に向けたままハンドルを握っていた。

その車の背後から、二条のサイレンの音が
聞えて来た。

「畜生！」男はバックミラーに映った、二台

のオートバイの影を睨んで呻くと、突然車を
木立の切れ目から道路脇の叢の中に乗り入れ
て停めた。

「あばよ！」男は、車中で呆然としているス
テラに声をかけ、車から飛び出した。

4

国境警備隊員

左手の野生バナナの樹間を縫って、男は丘
の傾斜面を一目散に駆け上って行く。

その影を、オートバイを捨てたC国警備隊
員の制服姿が二つ、必死に追い始めた。

暑かった午後の陽ざしも弱まり、夕暮がも

うそこまで迫っている四時過ぎの山間――。

丘の中腹当りの木立の中から、拳銃と自動
小銃の発射音が交錯して流れて来た。

――やがて、ステラの車のところに、二人
のC国警備隊員が、自動小銃を構えながら戻
って来た。

「降りろ！」訛のある英語だった。

「あの……私は……」ステラは口ごもった。

「早く降りて来い！ 手向うと今の男のよう
に射殺するぞ！」

「いいえ。違うのです。私は車が故障したの
で途中からこの車に乗せて貰った者です」

「うるさいっ！ そんなことは後でいえ！」



「本部まで来るんだ！」

警備隊員の冷たい金属製の手錠が、カチッとステラのしなやかな右手に音を立てた。

「違う、違うのですっ！ 私は何も知らない……あつ、放して！ 放してください」

ステラは悶えた。その左手首も素早く後に振られ、もう一つの輪をはめられていた。

「ああ……」魅力的な唇から絶望的な吐息が洩れ、白いハイヒールの足もとが拘束された身の不自由さによろめいた。

「B国の検問所に問い合わせてくださいっ！ 私は、あの男とは一緒じゃないのですから……ね、お願い！ パスポートを見ていただ

ければわかります。お願いします！ B国の検問所に……」後手につけられた手錠の鎖をガチャガチャと触れさせ、全身をくねらせるようにして訴え続けるステラ。

耳を隠した形で優しくふくらんでいたシヨ

5

金属製の手錠

ートスタイルの金髪がくずれ、耳に下った真珠のイヤリングがキラキラと哀しげに光る。

「だめだ！ 密入国の現行犯だから……」警備隊員達は、彼女がいかに泣き口説いても、一向に耳をかそうとはしなかった。

「さ、歩け！」一人がステラの腕をとった。

（パス・ポートを失い、唯一の証人だった男も殺されてしまった今、私は一体どうしたらいいのかしら。それに、スーツケースの中の例の万年筆でも見つかったら、それこそ私はおしまいだわ）ステラは、降って湧いたようなこの危難と、それをみずから拾った不運に戸惑いながら、事の重大さに心を凍りつかせた。

万年筆——それは赤色の女持ちに形造られてはいるが、実は内部に、磁石、医薬品を仕込み、さらに先端には止金を押すと猛烈な勢いで飛び出す小針を隠した、スパイの武器なのである。



ステラが、カラナグワ市のC国警備隊本部に護送されて来たのは、彼女が仲間と会う約束をした七時を少し過ぎた頃だった。

冷たい暗い独房の中で、ステラは、自分のこの事故も知らずに待ちあぐんでいる仲間達の姿を思い浮べて、大きな溜息を吐いていた。思わぬ破局が、そして、大きな眼に見えない網が、彼女の身の回りを取り巻いているかのようなだった。

しかし、不安に蔽われた暗い気持の中にも（B国側に問い合わせ、そして、持物の秘密さえわからなければ、無事に釈放されるかも知れない）と、淡い希望も心の隅にはあった。

一沫の希望——が、それは、みごとに打ち破られた。手錠姿で取調べに引き出された席上で、スーツケースの中に秘めた万年筆の秘密が暴かれたのだ。

机上に並べられたケース中の携行品——

6

秘密の万年筆

日用品、イブニングドレス、ナイロン・タ

フタで縁取りされたスリッパ、背抜きされたバックレス・ブラジャー、裾に白いフリルをつけた淡いダーク・ブルーのパンティ……等、色とりどりで、いかにも若い女の持物ら

しい芳香を漂よわせる下着類に混って、その万年筆はすでに解体されて置かれてあった。（発見されてしまった。すべては終りだわ）ステラは観念の臉を伏せ、静かに首を前に垂らした。

こうなつては、いかなる弁解も無駄である。「きれいな顔をしやがって……フフ、大した女狐だな。ちよつと、隣りの部屋で音を上げさしてやれ！」

取調べ官の将校服姿の男が、煙草の火を灰皿でもみ消しながら椅子から立上った。二人の兵士が彼女の両腕を左右から掴んだ。



薄暗い裸電球のともった鉄格子の中——
小窓からさしこむ月光が、片隅のベッド上
に幾条かの縞を描いている。

別に変った構造ではないけれども、中央の
太い柱と小数の鉄製具が、ステラの視線に目
ざとく映った。

兵士に縄尻をとられ、ガックリと肩先を落
したステラの影が床上で揺れた。

「着物を脱げ！」彼女から手錠をはずした一
人がいった。いわずと知れた拷問への序曲で
あろう。

「……」ステラはためらった。

「早くしろ！」将校が鋭くどなる。

ステラは恐怖と不安に青ざめた顔で立ち竦
んだ。しかし、この屈辱的な命令にそむく手
段とてない。

力なくステラは、ブラウスの金ボタンに手
をかけた。ボタンを一つ一つはずした。匂う

7

素晴しき乳房

ような色気が開いた胸もとから発散する。

クリーム色のブラウスを脱ぎ、ココア色の
タイトスカートのチャックも引いた。

脚線に沿って脱がれるスカートの後から、
透明な伸縮自在のタイトスリッパに引立たさ

れた輝くような白い肌と、肉感的な肢がむき
出された。

「スリッパもとれ！」

冷酷な命令に、一瞬、彼女の頬が羞恥に染
まった。が……仕方がない。

きらびやかな純白の乳当てを張った彼女の
素晴らしい乳房。すっきりした脚線を包んだス
トッキング。サスペンダーのないそれを直結
した新式のナイロン・パンティ。

本能的に手で胸もとを覆い、思わしさに喘
ぐ姿態がそこに現われた。なめらかに張った
肩、腕、腰から腿——白い曲線がくねくねと
蠢めくさまが、一段と強烈に男達の眼に挑む。

「さ、そいつを、あの壁際の横棒に、腕を後へ曲げて括りつける！」

淫らな視線で、彼女の裸身に近い姿を舐め回していた将校が、二人の兵士を促した。

合点した兵士達の非情な腕で、ステラは、壁際に取付けられたちようど脇の下辺りの高さの横棒に、両肘がそのパイプの後になるようにされて、手首を両方に拡げた形で括りつけられた。

反り身になった女体。ハイヒールを爪先立てて喘ぐのが、何かセクシャルな魅惑をそそる。

手首を縛りつけた革紐の余りが、その白い

乳房の上側にもかけられ、キリキリと喰い込んで来た。

「ウウウ」

彼女は呻いた。

「よし、それでいい。正直に答えるように、

8

恐怖の責道具

さ、今度はこれをつけさせろ！」

部屋の隅から、鉄製のコルセット状の冷たく光る物を手にして将校が戻って来た。

爪先立ちを緩めれば、腕のつけ根が引きつれそうに痛む固定の身のステラには、それが

何の目的の道具かを考える余裕とでもない。

が、兵士達が、自分のそばへ近づいた時、彼女ははじめて、あることに気づいて愕然とした。

「いやっ、いやっ！ ああ……そんな！」

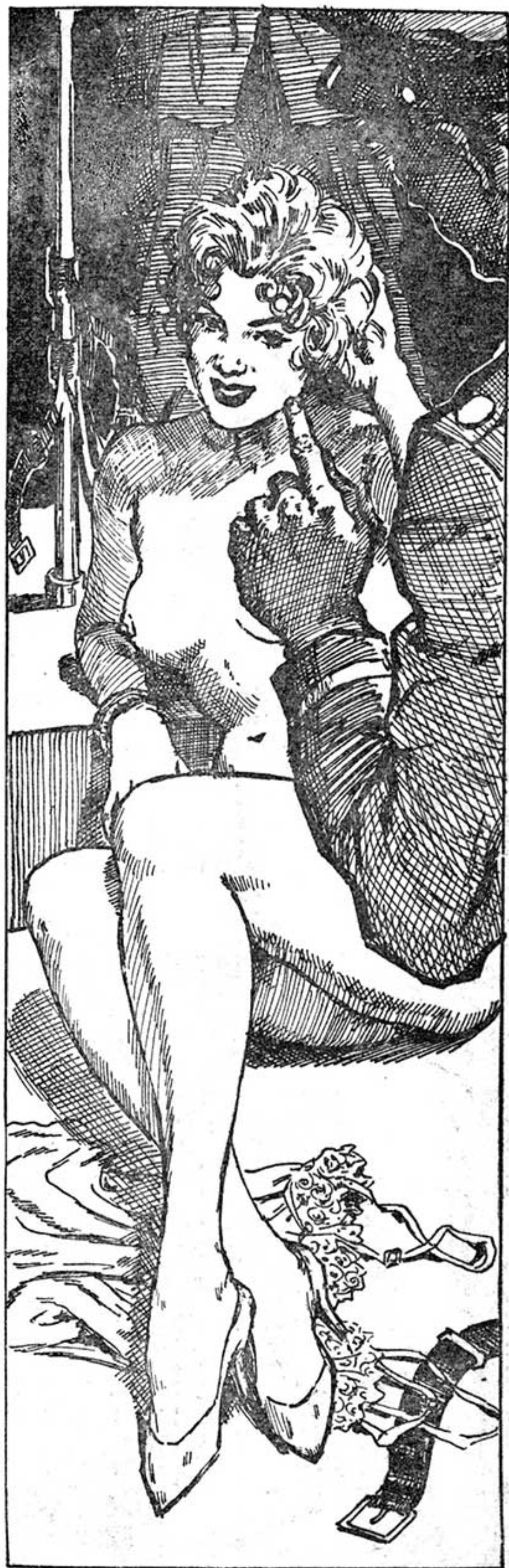
女は、固く膝をすり寄せ、必死に腰を引いて、激しく悶えた。

しかし、それははかない抵抗でしかない。

たちまち腰部に、鉄のコルセットをガッチリとかけ回されて、その前後の錠に、眩しいくらい白く脂が乗りきった内腿を閉ざされ、

「ヒューッ」と、女の絶え入るような断末魔の声とともにしっかりと留められた。





恐しい苦悶の表情が女の顔を歪め、瞳を吊り上げさせた。十指が虚空を掴んだ。でも、身体を動かすことはできなかった。

(ああっ、苦しい……) ステラは、体中の筋肉を小刻みに痙攣させながら喘ぎ続けた。歯を喰いしばっても見た。身体を動かすとかえって苦痛を増すからだった。

(こんな拷問ぐらいで……誰が……誰が秘密を明かすものか。例えこれがスパイの末路になるとしたって……)

人間は死の直前には、自分のたどって来た思い出を映画のフラッシュ・バックのように脳裏に写し出すというが、彼女は、苦痛と闘

いながらも、ここに到るまでの自分の不覚さを悔んでいた。それは、彼女がまだ生きる望みを絶っていないからかも知れない。

「最後まで望みを捨てない」スパイの不屈精神。まだ金髪の中には、鉄の棒でも切断でき

9

苦悶する裸身

る特殊な糸鋸が巧みに髪飾りの一つとして残っているし、ハイヒールの踵には強烈な爆薬と鉄溶解剤も密封してあるのだ。

(それを利用するのは早い方がいい。発見され取り上げられてしまってからではもう遅

い。それに、責め抜かれて体力を消耗しないうちにやって見なければ……) ステラは、こう思いついた。

「ゆ、ゆるしてください！ な、なんでもいます。早くはずして……解いてください」息も絶えだえに彼女は口走った。

——やっと拷問から解放されたステラは、さっきの苦痛を思い出しながらも、精一杯の媚態で素直に彼らの尋問に答え続けた。

できるだけ相手の印象を柔らげ、後の部屋内での拘束をゆるくしたい考えからだったがもちろん機密に関することはうまく避けた。彼女の思惑は成功した。



取調べを一応打切った男達は、それでもステラのブラウスを羽織っただけの姿態の上から左手首と膝を錠で繋ぎ、歩けても走れないようにしてベッドに結びつけて出て行った。

部屋の電灯のスイッチも切った。

ステラは足音が遠のくのを待って、月光を頼りに、糸鋸で鎖を切った。

窓の鉄格子は、ハイヒールの踵から取り出した三種類の粉末を次々に作用させて切断することに成功した。寝台のシーツを裂いて綱がわりにして、窓に残った鉄格子の出っ張りに回した。急いで身体に衣服をつけた。

——こうしてステラは、月光に映えた警備

隊の庭に脱出することができた。

突然、人の足音が聞えて来た。

彼女は素早く、建物沿いの地面に這って息を殺した。足音はだんだんハッキリ、それはまるで自分の心臓を蹴って近寄って来るよう

10

スパイの武器

に響いた。と、足音は停った。二つの黒い影が建物の先で話し合っていたが、幸いにもステラには気づかなかった。

二人の立ち去るのを確かめてから、彼女はその場に小型の爆薬を仕掛け、ベルトの縁か

ら引き出した細い導火線をそれに結んで装着した。そろそろと身を這わせながら、導線を引いた。高い塀を越して脱出するのは不可能だと、彼女は三十メートルほど先の、哨兵控室の暗がりにおいてある自動車に身を潜める決心をして大地を進んだ。

やがて、夜空を一瞬閃光に染め、一大音響が湧き上った。乱れ飛んだ破片の下で、残った部分の建物に火焰が移った。

寝ぼけ眼で立ち騒ぎ始める人影。

一台の自動車が走り出した事には、誰も気づこうとはしないのだった。(終)

映画『大菩薩峠』について

★三代の映画に見る三人のお浜の危難場面★

由 茂 滋

昭和10年 日活作品 入江たか子のお浜



ここは甲州、万古の白雪を頂く秀麗富士をはるか彼方に遠望し、春は鶯の声を聞き夏は……云々のイントロダクションで始まると、どこかのバス会社か電鉄会社の旅行ハイキング誘致宣伝のチラシ文句になりかねないが、くれぐれも早まっていけない。
本誌は周知のごとく、間違っても旅のガイドブックではないはずである。

まず万事早目の方がよからうと思う人間は

存外多いものと見えて、もう大分前から相当な人であった。もっとも有史以来？ とあって一ヶ月前から抜け目なく要所々々を陣取り五、六人背中に行燈を背負っての街頭宣伝が結構効を奏したものでらしい。

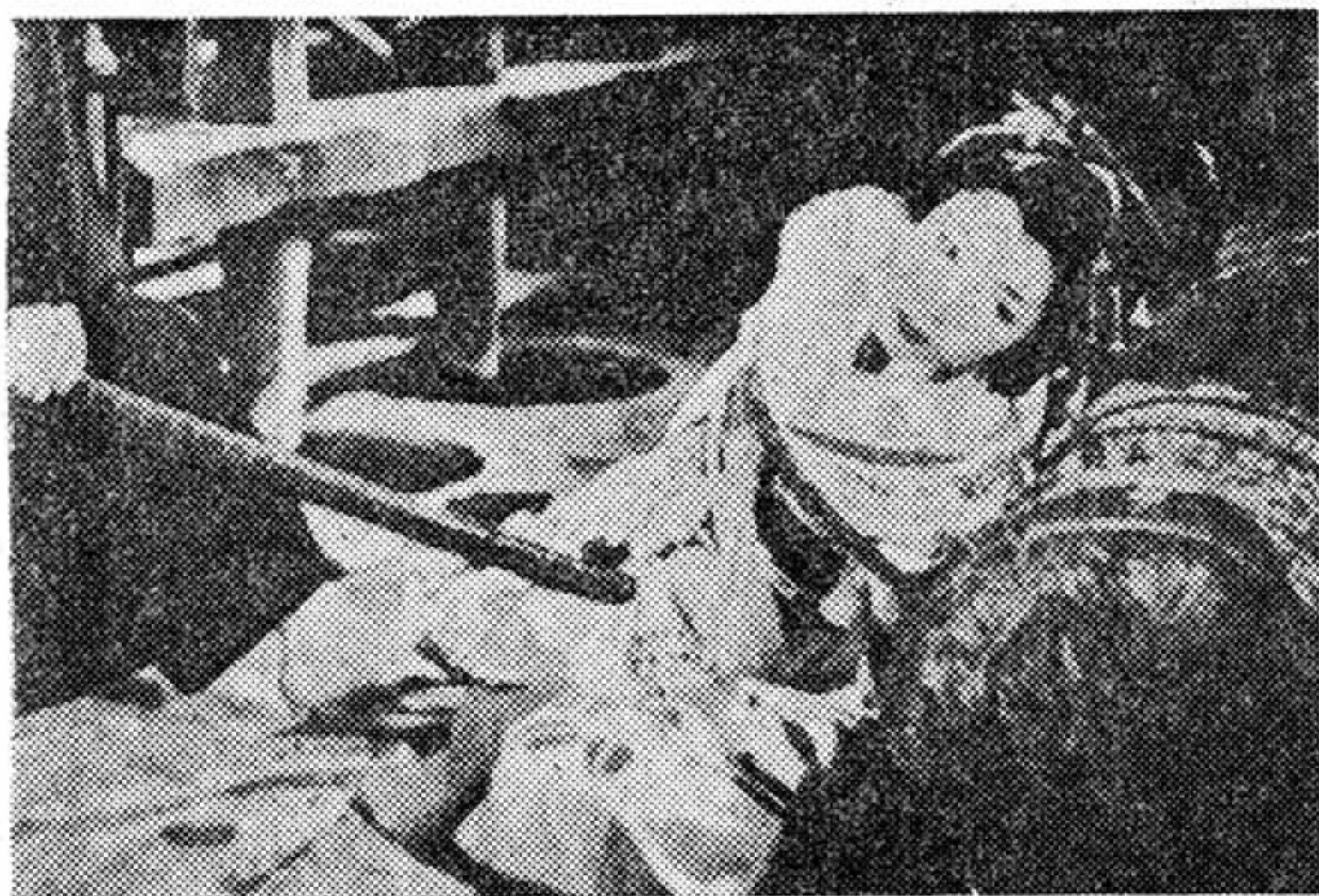
で、まずその頃からの「峠」の模様やいかに……実は「大菩薩峠」の映画と芝居の今につながる見聞懐古ばなしなのである。

世界一と称せられる原作中里介山の小説をうまく脚色し映画化を企劃、そして初めて全国津々浦々の映画館のスクリーンを飾ったのは今から二十有余年前——昭和十年の事であり、製作会社日活（当時は今日の東映の如く時代劇の覇者であった）の太秦撮影所作品、監督稲垣浩、机龍之介大河内伝次郎、お浜入江たか子（戦後化猫専門役でも奮闘した）、白黒標準版、ただし当時としてはオールスターキャストの文字通り超特作物であったのだ。そのオールスターの中でも脇役として、例のファーストシーンの峠地藏堂前で斬られる老父の娘お松に扮した深水藤子の伊東深水、好み日本調の澄んだ瞳と白衣巡礼姿の可憐さは、その後およそ三代（日活—東映—大映）にわたって製作されたどの映画にも、これ以上のものはなかった。

それはそれとして、ここに筆者なりの秘蔵？ のはなはだ不鮮明にして、かつ少々かび臭い文献印画を添え、大方諸兄姉の御清覧を仰ぎたいと思う次第である。

まず、ストーリーの波乱万丈型はともかく

昭和32年 東映作品 長谷川裕見子のお浜



として、あの中里介山氏がニヒリストの机龍之介を描くのになぜ御ていねいにも水車番の与八を介し他人様の許嫁であるところの生娘を辱しめることからスタートしたかである。どうもしよっぱなから“女”につまず

くあたりが日の本の女ならではの夜の明けぬ国らしく、見方によってははなはだ結構？ な話だが女の側はしごく迷惑な話（でもなさそうだ）。

「与八、……よいか、わかったのう、必らず……」と眼で合図するシーンあたりから不思議と観覧席はシーンと静まり返るが二代目東映作品の龍之介（片岡千恵蔵扮）は確か荒縄を投げ出して与八に催促したと思うが、三代目大映作品では省略されていた。さて、初代のお浜（入江たか子扮）は時代劇にも向く美



昭和35年 大映作品 中村玉緒のお浜

貌に髪は文金高島田、紫矢紺の着物にピンク花模様の長襦袢を着て供をつれ夜道を帰る途中、待ち伏せしていた与八に襲われ……多分与八はその場でまず供の者を一撃の下に倒し続いて逃れんとする長着のお浜に抱きつき組伏せ、てめえの腰の手拭で素早く猿轡をかませ用息の荒縄で一重、二巻、三重巻と胸部がくびれるようにぐるぐる巻きに縛り上げ、そして丹念に後手首を締めつけたに違いない。まことにおせっかいかつよけいな想像である。

このお浜誘拐のシーンは東映のお浜（長谷

川裕見子扮、内田吐夢監督も大映のお浜(中村玉緒扮、三隅研次監督)もともに総天然色で幾分暗ら目に撮られてあった。

ところで問題はヤマである水車小屋の場なのだ。筆者がかりに監督で演出を担当するとすれば、万難排し? 本誌好みに丹念に、しつこく自由を失った無抵抗の女性をどこまでも上品に、かつ写實的でなく、わざと芝居風に仕上げて(映倫ノーカットを目標に)後味のよい責めと濃艶なエロチシズムをたっぷり盛るつもりだが……初代のお浜は裾も乱さずきわめて行儀よく、はずれた猿轡も首にかけたまま大河内の龍之介とセリフのやり取りをしている。ウエスタントーカーによるセリフの内容は残念な事に今日忘れてしまったが、後手に縛られたお浜の姿態のうちこの入江たか子のものが一番純情さが溢れており、長谷川裕見子、中村玉緒と引き継がれて来るに従って次第に妖艶さを増した感がないでもない。

どうも峠というものは入れつ交わりついろいろな人が登り下りするところらしく、本篇も「縛られた女」となると途端に逆上して、前後の見境いが混同するので、構成に不首尾の点は御了察を願っておきたい。

さて、東映の水車小屋はワイド天然色のス

コープとあって、まことに重厚に水車杵の廻る音を伴奏に、シワシワと長谷川裕見子のお浜が責められたが、薄ピンク地に花木模様の着物と緋縮緬の長襦袢、ピンクの帯揚げもだらりと下り荒縄で二重の後手縛り……(もつとも撮影本番直前までこのお浜先生は縄を胸にかけたまま台本を両手で抱いてセリフを練習、本番で両腕を後ろに廻わして格好を取ったスナップ写真を見てはゲッソリ——そんなモンですぞ、映画の縛りなどというものは……)だが、もともとこの裕見子という女優は東映生え抜きのスターであるばかりでなく、まことにお気の毒ながら役目柄縛られることが多く、しかもどの場面も上手にこなすので口の悪い文士からは「名縛られスター」と一級ニックネームを奉られていた不世出のスターなのであった。

ところが一九六〇年十月に封切られた三代目最新版大映のお浜はどうであったか?

本誌をひもとこうという賢明なる読者ならば——自分がわざわざ高い観覧料まで払い封切館で前以て大いにひそかに胸をとどろかせたにもかかわらずあの館に限って皮肉にもカットされたフィルムが上映されたのではないだろうか疑念を持ちたくなる——つまり、

中村玉緒嬢に胸の荒縄がたとい目を皿のように開いても、一片だに見当らないことであつた。

文字通り一杯喰ったか、監督が編集上品に逃げようとしたのか、それはともかく、いつの世にも一番馬鹿を見るのは麦めしを喰うこちとら共であり、今さら別にスポンサー顔をして宣伝の肩を持つ訳ではないが嘘だと思し召すなら、週刊特ダネ実話十月二十九日号のオピニオンスクリーンを御覧になるとすぐおわかりになるほど、左様に筆者は余りにも空虚囁々なる宣伝時代の世相を心ひそかに歎く一人である。

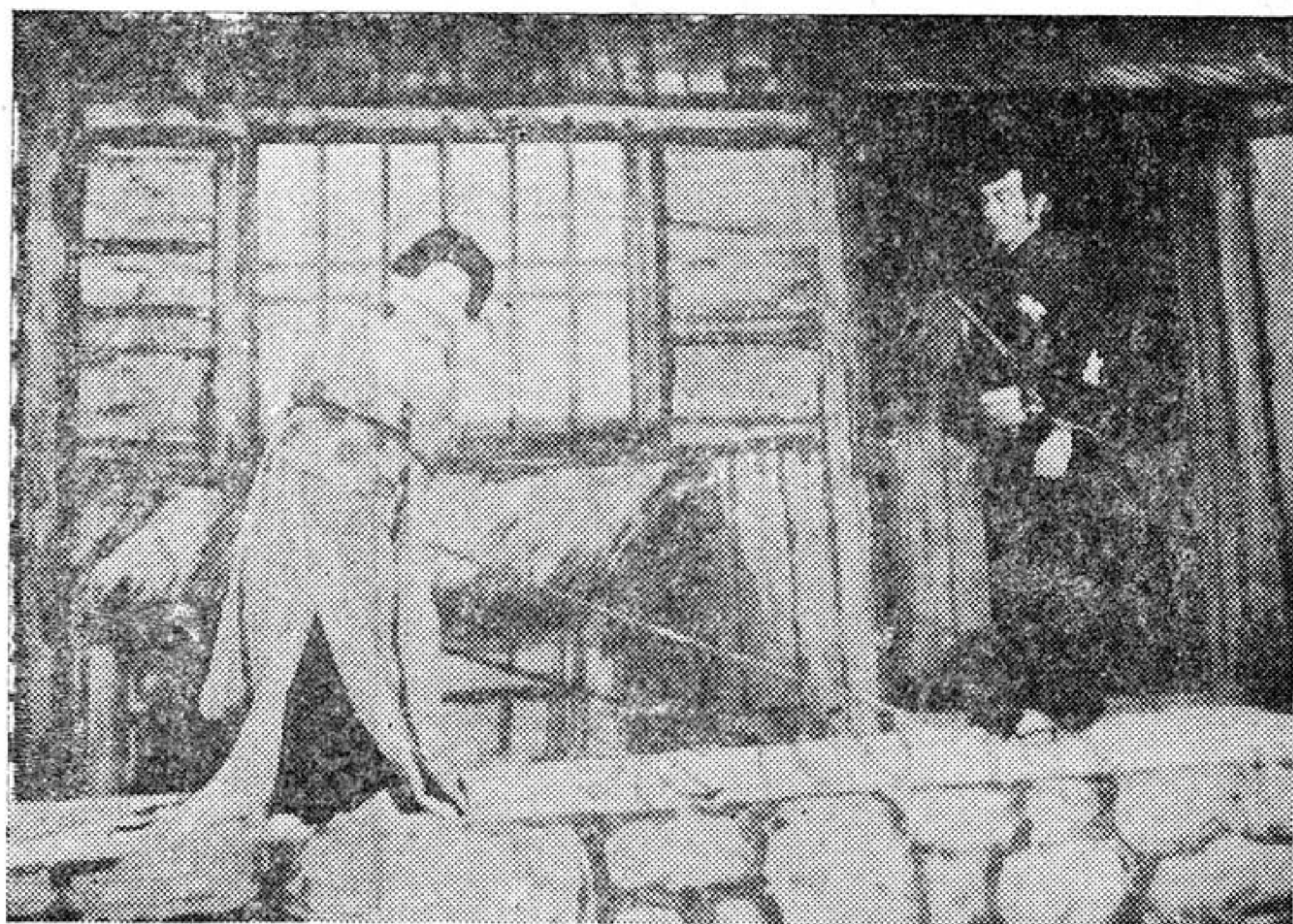
心ならずも? 縄目のあるお浜比較コンクールに際しあえて上映されなかった玉緒嬢のお浜の哀姿を謹んで掲げる次第である。余談はさておき、いたずらにお侮みしても始まらないから話を端折ると、三代ともなればさすがのお浜も演技派らしくなるものと見える。玉緒嬢の雁次郎譲りの吊り上った三白眼?

もさりながら、少々オーバーじゃないかと思われる凌辱の場面は後手首縛りのまま必死に逃れんとする着物の乱れ、特に古典好みの殿方にはあの燃えるような真紅の長襦袢が膝元からふんだんにこぼれるあたり、哀れさの中

にもエロツぽく迫力があり一方サシスチックな龍之介（市川雷蔵扮）は、そのままでの性格がたっぷり溢れ出たかのようにこれまた真に迫っていたのは、高く評価してもよからうと思う。

かくして大菩薩峠は東映はこのあと間男と密通する内儀が縛られ、東映、大映共に成長したお松が旗本神尾主膳の腰元に上るのはよいが、とんだ趣向で着物を脱がされる例のカルタ取りの落花狼籍の場面はそれはそれなりに面白く書き出したら限りがないが一方芝居の方、つまり舞台の大菩薩峠はどのように演出されたか筆者の観たものを最後に挙げてお別れしたいと思う。

およそ映画でヒットすると、必ず柳の下のドジョウの如く、東京では浅草の松竹座で早と上演された。龍之介が当時珍らしく早川雪洲、お浜が松竹蒲田で売出した川田芳子（晩



浅草松竹座における早川雪洲の竜之介と川田芳子のお浜

すくめられて出て来る。正面の水車小屋の扉を蹴って入れる。しばらく間を置いて突如何んとも云えぬうめき声と共に小屋の中から両手を後手に縛られ手拭で猿轡されたお浜が縄尻を長く曳いたままパタパタと白足袋姿で飛び出して来る。もう少しというところで冷徹な雪洲の龍之介が悠然と姿を現わし左足で縄尻を踏む、ひっ張られた余勢でお浜は思わず観客席に向ってぐっと突張るように身体をそらした……裾が左右に割れ、歌麿描く緋縮緬の天然色ノ「龍」ちゃんもって冥すべしである。型の通り縄をたくり寄せる、お浜三転五転の後再び龍之介の手中に陥ちて小屋の中へそして障子の灯がポツポツと明滅するがついに消されて舞台は暗転、あとは諸兄姉御存じの通りである。

つらつら顧りみるに、今流行のベッドシーンを描く術も採れずいたずらに畳に「の」の字を描く娘心の時代とあってみれば、けだしこれで充分であったであろう。

全篇を通じてMは薄いかも知れないがS色の濃いこの大菩薩峠、雲の流れがどこへ果てようとも、幸い本誌につながる点と線とがもし見出されるならば取材の筆者望外の喜びとするところである。



消える 沼の家

九十九十郎
画・檜山紀太郎

★口絵より続く

清江の華やかさも、多枝子の奔放さも、莉香の前では青菜に塩同様影がうすかった。

そして、彼女の姿はそれ以来というものの一度も見かけない。邦彦にいわせれば、病身でこの邸に引きこもっているのだから、都会の害毒を一身に集めたような俺達には、そうそうたやすくつきあわせたくないとのことだが何かその裏に秘密めいた影がちらほらした。

こうして、第一夜は不安とも期待とも知れない気持ちのまま過ぎていった。

×月×日

昨日は沼を探したのだから、今日は森の中を少し探して見るといって、朝から邦彦は出かけている。

俺も行こうと申し出たら、かえって足手まといになるからと、体よく断られた。もうほとんど望みはない。天井に開けられた唯一の明り取りの窓から来る光で、俺はこの日記を書いている。

最初の晩、俺と多枝子の寝室に割り当てら



れたのがこの部屋だった。部屋といっても天井の傾斜した屋根裏部屋である。窓は天井の明り取りしかない。

最初部屋に入って眼についたのは寝台においかぶさるようにして壁に掛けられた大きな複製画だった。百号位の大きさはあろう。今も眼をあげると、その不気味な画面が俺をおどしつけている。

あの時も薄気味悪くなって、邦彦に「何の絵だ」と聞いたものだ。道楽に絵筆などいじくった事のある邦彦は、ニタリと唇をゆがめて答えた。

「食欲の秋とかいう題だった」

そういわれればそれらしくも見える。澄み切った青空と、遠く地平線にまで拡がっているノリの海みたいな風景を背にして、前面に大きく彎曲したテーブルがある。

人が

さすぺんす
すとおりの

その陰から四本の手がニューと伸びて、手にナイフやフォークをつかみ、テーブルの上の得体の知れないフニャフニャしたもの、刃を当てたり突きさしたりしている。一見人間の顔らしいものはないが、よく見ると、タコの頭みたいなのがテーブルの上にのしかかっている。巨大な口が今しもフォークにかぶりついている。耳もボロボロみたいにくっついていて、テーブルからは粘液がドロリとたれ落ちていく。

画面は原色をフンダンに使って、決して暗いものではないが、その内容たるや、すべてがつかみどころのない軟体動物を思わせる曲線が支配的で、まるで人間の臓腑を開いたよ

うな印象を与えるのだ。

こんな不愉快な絵を描く奴だが、これをありがたそうに壁にかざる邦彦の奴も普通じゃない。しかし、俺は黙っていた。この絵の雰囲気、どこかこの屋敷のそれにピッタリしていて、抜きがたく思われたからである。

その夜この土地の不気味さに興奮した多枝子は、長旅の疲れも忘れて俺を求めて来た。それを見降す絵が、なぜか二人の行為に拍車をかけた。

翌朝から単調な生活が始まった。沼には一尾の魚も住んでいない様子だったし、深い森の中には鳥の影、兎の穴さえ見当らない。まれに落葉をガサリと鳴らす者はと見れば、冬眠のねぐらを求めるマムシだった。

しかし、不気味な中にも、あたりの風景はやはり美しい。濃緑の針葉樹のあちこちに細と枝をさしのべている落葉樹の紅葉が、さざ波ひとつたたない暗い沼の面に深紅の色を浮べ、遠山の雪の肌が清らかさをひととき輝かせている。

俺達二人はよく沼の葦の茂みの中に寝こんで終日たわむれたものだ。互の体にあきる

★消えた女達はどこへ？ のぞき見た兄妹の奇妙な饗宴！

と、空を流れる早い雲を見あげては、葦のそよぎに耳をかたむけた。

夜になれば、夕食の前後三時間だけでも事になっている自家発電の電灯の下に四人が集って、この時だけは、東京時代と変らないドンチャン騒ぎに時のたつのも忘れた。平常のものぐさにも似ず、食事の準備はすべて邦彦がやった。その腕も、カンズメ料理を思わせないほど確かなもので、皆が異口同音にほめあげると、彼特有の唇のゆがめ方で「材料が良いからね」と柄にもなく謙遜するのだった。

昼も夜も、莉香はあれ以上一度も現れなかった。ある月の冷たくさえた夜の事、莉香の白い姿が、沼のほとりをさまよっているのを確かに見たと多枝子が主張したが、俺は信じなかった。また、ある日、かねて目ぼしをつけておいた離れの一室を、昼間のぞいて見たが、深々とカーテンを降したままで、内部の事はついにわからなかった。そして今では、莉香は単なる夢の中の人物くらいにしか頭に残らなくなっている。

しかし、表面だけは平和に見えたこの生活も長くは続かなかった。

四日前の朝、突然清江が、同衾していた邦彦のベッドからいなくなつたのだ。

その朝六時頃、扉をたたく音に眠気を覚まされた俺と多枝子は、寒さにふるえながら、邦彦からその知らせを聞いた。彼はいつもより一層青ざめた顔をしていたが、態度は女を失ったと思えぬほど落着いていた。俺達は屋敷内や（もちろん彼のゆるす範囲内で）、朝霧が濃く残っている沼や森の入口などを手分けして探したが、結局徒労に終わった。不思議なことに彼女の身につけていた衣服は、すべて残っていたのだ。彼女は素裸のままどこへ消えたのか。俺は、朝霧の奥から声もなく呼びかける人喰い沼の亡霊に自い肌をおののかせながらも、憑かれたもののように水の深みへと入って行く清江の後姿を想像して慄然とした。この雰囲気には、それを不自然に思わせないものがあつた。

清江の搜索はそのままになった。沼をさらっても上ったためしはなし、森は一步中に迷い込めば、よほどの偶然でもない限り、死体の発見はむずかしい、と邦彦はいう。客の俺には返す言葉もないのだ。多枝子は俺にしがみついて恐怖に泣き震え、しきりに帰ろうとせがんだけれど、俺達は次に村の迎えが来るまでは、ここを一步も出られない運命にあつた。

沼の岸を清江を探してかなり遠くまで足を

のぼした時、俺は奇妙なものを発見した。文明社会にいれば奇妙でも何でもない物なのだが、この環境では、ちよつと変な気持ちにさせられる物だった。

それは、かなり大きな荷物を解いた残骸だった。木肌もまだ新しい梓組みやパッキングハトロン紙などが葦の茂みの中に、半ば水につかつてのぞいていた。満目蒼然たる中に白々とした木材やパッキングを見た時、俺は正直いつて清江の死体を見たかと驚いた。しかし、落着きを取りもどして、親しみさえ感じながらこれらの残骸を突つき廻っていた時、ふとハトロン紙に大きく印刷された文字が眼に入った。

×××電気冷蔵庫

ははあ、自家発電の電力をおしんでいるのは、これを使っているためだな、と俺は邦彦の秘密の一端を握つたつもりで微笑した。人里はなれたここで何よりも必要なのは食糧の確保だから、照明用の電力をおしんでも、電気冷蔵庫にまわすのは当然のことだ。俺は秘密めかした邦彦が案外合理的に事を運んでいるのを知って、いささか好奇心をそこなわれた。

それにしても相当大きい。食糧品店か料理屋用のものだろう。ここまで考えて俺はハッ

とした。台所には冷蔵庫は置いてなかったはずだが？

家に帰ってから、さんざんためらった末、とうとう邦彦に聞いて見た。邦彦はマジマジと俺の顔を眺め入っていたが、平然といったのけた。

「あれは大きいものを入れるのに使うんで台所に置いておく必要はないんだ。地下の食糧品置場に置いてあるよ。何しろ俺達の命の綱だからなあ」

階下で邦彦の帰って来たらしい音がする。結果は聞かなくてもわかってるから、ここを動かしたくもない。どうやら俺も沼の精に魅入られたらしく、日毎に生気を失って行くようだ。自分の女を亡くしたというのに部屋にこもったまま動かしたくもないということでもそれがわかる。

×月×日

多枝子がいなくなってからもう三日になる。ガサガサした女だったが、わりに長く一緒にいたせいか、いざいなくなつて見るとなつかしい。バネのように俺の体に巻きついて来たあの四肢の暖かさが恋しい。

彼女の場合も清江の時も同じだった。久しぶりに熟睡して眼を覚ました時、俺の隣は藻

脱けの殻だった。ネグリジエはもちろん、前夜床に入ってから脱ぎすてた薄っぺらなパンティまでも蒲団の奥に残したままだった。

あの若鹿を思わせる裸身が、どんなふうに乗ったのか。俺は蒲団のぬくもりに手をやって呆然とした。

その結果も清江の場合と同じだった。そして今度は俺の番らしい。

これを書き始めたのはいいことだった。一度失われた気力が再び俺にもどつて来るように思えるからだ。こちらに着いてから起った事をふり返つて見て、謎めいた事があまりにも多過ぎることをつくづく感ずるのだ。そして、この謎めいた雰囲気は結局二人の女の失踪に通ずるとすれば、謎をひとつひとつあばいていくのが最善の道ということになる。

清江が失踪してからは夜になると部屋の戸に外から鍵がおろされてしまう事を知った。

邦彦にいわせれば、悪霊に魅せられて、夜中に夢遊病者のように抜け出るのを防ぐためだそうだが、どこか臭い。俺は今天窓の枠をはずしにかかっている。寝台を立てて、その上に乗ったかつての作業なので、はかのゆかないことおびたしいが、今夜は何とかなりそう

今夜こそ、あの莉香の正体を突きとめてやるのだ。

×月×日

十時になると、しのび足が扉に近づいて来て、部屋に鍵を掛けた。カチリという音が陰にこもつて俺の耳に響いた。

しかし、今夜はこれ待っていたのだ。俺はやおら立ち上つて着がえた。ジャンパーにゴム底靴、手袋。懐中電灯は万年筆型のものを持つてゐる。

慎重にネジをゆるめて、天窓の枠はずす。ポツカリ開いた穴から冷たい夜気がしのび寄つて来た。三日月が細く沼に影を落している。屋根に出て、つたのつるにすがつて地上に降りる。ロープの用意がいらなかったのは大いに助かった。しかし、ちょっとした葉ずれの音が、とんがった俺の神経に万雷の響きのようにこたえた。

星明りの中に見当をつけて、そろりそろりと離れの方にしので行く。ぶあついカーテンを下げてあつても、この闇の中では、内の明りが窓の形をクッキリと縁取つて見える。しかし、中をのぞき込めるようなスキ間はなかった。耳をすますと、ボソボソと話し声が洩れ、食器の触れあうカチカチという音もかすかに聞えるのに気をふるい起して、反対側

にまわる。こちらにも窓があるはずだった。

沼の岸すれすれにまで張り出した窓に気をゆるしたのだろう、そこは二十センチばかりカーテンのすき間ができていた。小躍りしてそこに近寄る。足元は、ジクジクと沼の水がしみ通って来る湿地で、くるぶしあたりにまで来る水の中に俺はつま先立って中をのぞき込んだ。

外観から想像していた通り、内部は古びた洋間造りになっていた。十畳ばかりの広さの向かい側に暖炉がいかめしく口を開き、暖かそうな火が燃えている。そしてその前に三人が向き合ってテーブルを囲んでいた。ランプがひとつ、ポツンとそれを見降している。

莉香は相変らず真白のガウンを羽織り、邦彦と何か楽しげに話している。小声なので、切れ切れにしか聞き取れないが、様子から見ると何か今自分達が食べている御馳走についてらしい。

テーブルの上には肉料理らしいものが盛り沢山に乗っている。ナイフとフォークが忙がしく切ったりさいたりする。病気の莉香の特別料理なのか、カンズメ料理しか食べていない俺の喉がグツと鳴った。みごとに赤い脂の乗った切身、ペロペロしたモツのようなもの。そして多分シユースか何かなのだろう、コッ

プのドロリと赤い液体。それを飲む彼等の唇までが赤く染まる。長い舌がそれをペロリとなめまわす。お上品ぶった莉香までがペロリとやるところは、妖しい色気みたいなものがある。

「……これでおわりだよ。明日は……」

「……のわりに大しておいしくなかったわね。今度の……」

「……しまっているから……」

二人は僕に見られているとも知らずゲラゲラ笑う。もっと奇怪な何かを見られるものと一緒に期待していた俺は馬鹿らしくなって、つま先を休ませた。水につかった足先の感覚がなくなって来ている。あたりにはコソツとも物音がしない。

しばらくして再び顔をのぞけると、二人は食事を終えたらしく、食器が片附けられ、暖炉に向って休んでいる。火がひととき勢いよく燃え上っている。俺は無性に腹が立った。

ガラスの曇り具合や彼等の服装から見ると中はホカホカと暖かいのだろうか、この俺は半分水につかってガチガチ歯を鳴らしている。

やがて、邦彦が莉香をうながした。立ち上ってこちらに向いた二人の顔は不気味に紅潮している。

莉香は胸の紐を解くと、何のためらいも見

せずにガウンを足元にすべらせた。俺は息をのんだ。その下は一糸まとわぬ素裸なのだ。

(あいつめ、妹だなんてぬかしやがって)

だが、次の瞬間、俺はあやうく驚きの声をあげるところだった。

純白のガウンの下にかくされた莉香の肌を不気味にいろどる赤黒いシミ。暗緑色に垂れ流れるウミ。紫色にぶつぶつふくれ上った腫物。俺は吐き気を無理におさえ、一段と曇りを増して来たガラスに業をにやしなから、眼をこらした。

(これだ。これだったのだ)

だが、それはほんの序の口にすぎなかったのだ。次に展開されたおぞましい光景を俺はどうてい口にする勇氣がない。

一口にいつてしまえば——邦彦がそのたれ流れるウミを長い舌でペロペロなめ、すすり始めたのだ。ポツと染まった頬にたれかかる長髪を気にもとめず、唇は耳まで裂けんばかりに広げ、眼には恍惚の光さえ浮かべながら。ベッドに長々と横たわった莉香は、舌の愛撫に我を忘れて身をもだえ、髪をかきむしる。俺は眼をおおってしゃがみ込んでしまった。

どれだけそうしていたろう。気を取り直して頭をもたげたが、ガラスの曇りが視界をさ



またげて、何も見えない。二人の会話だけが
前と打って変って生き生きと聞える。
「すまないわね。兄さんの楽しみを短かくす
るようで」

「いいさ。そのかわり、今夜はうんと楽しむ
さ」

「兄さんも、ずいぶんと悪趣味ね」
「何だこいつ、お前のためを思えばこそなの
に」

後は仲のいい笑い声。邦彦が部屋を出て行
った様子。俺も寒さやら気味悪さやらで、今
夜はこれで切り上げる事にする。冴え返った

三日月がまるで魔女の大鎌のように見えた。
以上が昨夜の経験の全部だ。今夜は冷蔵庫
のある地下室に降りて見るつもりでいる。そ
の結果とこれとを一緒にして見れば、何かハ
ッキリした結論が得られる事と確信する。

同日夜十二時

見つかった。もうだめだ。奴はすぐ後を追
って来るだろう。いや、奴のことだ、袋の鼠
とたかをくくって、じわじわ時間をかけて俺
の命を縮めて来るかも知れない。どっちにし
ても、できるだけ急いで書き止めておかねば
ならない。

今から二時間前の十時に、いつもの通り錠
がおろされるのを待ちかねるようにして俺は
昨夜通り外に出た。今夜は彼等の食事時間の
隙をうかがって地下室に忍び込む予定を立て
ていたのだ。

昨夜と違ってドンヨリ曇った空には星ひと
つ見えず、ソヨとも空気が動かない。いやら
しい生ま暖かさだ。

地下室は台所の裏手に入口が開いている。
その扉の鍵は邦彦が手ばなさに持っている
が、針金ですぐ開けられるほどチャチな物
だということは、昼間見ておいてわかってい
た。

案の定、錠前は難なく開いたが、ガタピシ

する板戸を開けるのにひどく手間取った。ちよっとした物音でも、宇宙にこだまするかに思えるほどの静けさなのだ。

そこから急な石段を十段ばかり降りると、もうひとつ扉がある。そこには鍵はかけてなかった。

万年筆型の懐中電灯では、とうてい早く仕事ができないので、俺は思い切って電灯のスイッチをひねった。地下室は発電室を兼ねているのだから、電灯の設備ぐらいはしてあった。

ガランとした地下室の中に頑丈な大テーブルがデンとすえられ、奥正面は発電室の扉になっている。右手にはカンヅメその他食糧品の木箱が天井にとどくほど積みあげられ、左手が問題の大冷蔵庫だった。

室内は思ったより清潔で、中央のテーブルなどは、脂か何かで、テラテラ輝いてさえている。何のためのテーブルか、その時は考えて見ようとさえもしなかったのだが――。

ブーンとにぶいうなりが響いているのは、発電機か、それとも冷蔵庫か。俺は期待と恐怖に震えながら、その白く光るエナメル扉を開けた。

ああ、その時の戦慄を俺は一生（といっても後だけでもあるまいが）忘れることがで

きない。

冷蔵庫の壁にもたれて、素裸の多枝子が立っていたのだ!! 青白く透き通るような素肌に霜をキラキラ輝かせて、彼女はマジマジと俺を見つめた。化粧をどこしてあるのか、顔だけがほんのりと色づいて、肉感的に半ば開けられた唇が、生きているもののように赤い。

俺はのどをヒクヒク鳴らして悲鳴を必死にこらえた。膝頭の力が抜けて、全身から冷汗がにじみ出た。

もちろん死んでいるのだ。しかし、しかし――庫内の冷気を俺に吹きつけながら、その死体が俺の方にゆっくりと、ゆっくりと向って来るではないか。両手をためらい勝ちに俺の方に伸ばして、次第に早く、俺に抱きついて来るではないか。

（抱いて、抱いて。どうしてあたしをこんな冷たい所に押し込めておくの）

多枝子に抱きつかれたまま、俺は仰向けざまに引っくり返って気を失ってしまった。

今から考えて見れば、冷蔵庫の扉を開けたために温度が上って、死体のこわばりが取れ俺の方へくずれ落ちて来たに過ぎないのだがそんなことは考えているヒマも冷静さも持ちあわせていなかった。いや、今でさえ、あの

時の彼女は生きていたとは思えない。

どれだけそうしていたのだろう。失神から覚めて見ると、多枝子は俺の上に乗ったまま、死体特有の心のズイにまでしみ込むような冷気が、俺の心臓を凍らせかかっていた。

死体も無気味だったが時間も気になった。こんなところを見つかっては俺の命があぶないのだ。無我夢中で死体を冷蔵庫の中に押し込むと（多枝子よ、俺を責めてくれるな）後も見ずに地下室を逃げ出した。電灯を消し、扉に錠を降ろすのを忘れなかったのが、やつとのことだった。

しかし、自分の部屋にようやくぐり込んで服を着かえる段になって、俺のわずかばかりの安心感はケシ取んだ。

懐中電灯を忘れてきた。

地下室の電灯をつけた時テーブルの上に置いたままにして来たものか、それとも多枝子に抱きつかれてブツ倒れた時落したものか。もうおしまいだ。今頃は奴はあれを見つけて例の薄気味悪い笑いをもらしていることだろう。

ここまで書いたら、彼等兄妹が何をしているかいわなくてもわかるだろう。俺ももう書きたくない。ただ、この二人の悪業がいつか

見たもの聞いたもの

むだのない食物

★米国のボーイング航空会社宇宙医学部という所でこのほど画期的な研究をはじめたということだ。

★コプロ趣味の人には興味深い話題と思われるので御紹介すると――

★つまり宇宙旅行につきものの献立研究で、今まで宇宙食として研究されていた濃縮食料とか宇宙食用錠剤とかいったもので実際に人間で実験してみたところ食欲異常、食欲不振などを起したりしてとても使いものにならなかったのがことの起り、ロケット内だからできるだけ軽くする必要があるわけで、それに味と栄養も上々でなくてはならないのだが、ここにクローズ・アップされたのが「ティラピラ」という魚とのこと。

★この熱帯魚が何と人間の排泄物を餌に一厳密に言えば、排泄物溶液中に生ずる藻類を餌にだが一旺盛に生長繁殖をして、しかも大変美味であるそう。また同溶液には美味で栄養満点のキノコまで発生成長するというから傑作だ。

★宇宙食にはもちろんのことだが、その前に地上でこんな魚とキノコの新式料理が出現して流行しないとも限らないと思うとちょっと奇妙な感じがして困ります。

★いつそのことこんな面倒臭い魚やキノコなどを繁殖させる操作の代りに、画期的な特別操作で日々の人類のおみやげに含まれる多量の窒素分から良質の蛋白でも合成したら、などといった叱られるかな。

★そんな食餌を常食したら長生きや健康はうけあい？ 特に何の処理で頭を悩ましているわが国などでは耳よりな話ではないですか。

★科学は全くめざましい勢で進歩しているようです
＜ふみとべ生＞



陽の下にあばかれた時のたしにと事実だけを
書くにとどめる。

この日記帳は、例の絵のうしろにかくしておくことにする。何という絵か知らないが、この絵こそ、この家にかくされているいまいましい罪業を象徴していたのだ。邦彦の悪魔のような皮肉だったのだ。

× × ×
神坂邦彦は日記帳を閉じると、ポイと暖炉の中に投げ込んだ。ポーツと燃え上る炎に青

白い頬が嘲けるようにゆがむ。

「この肉はバカにスジが多いな、え」

テーブルに向き直ると、口をモグモグやりながら莉香に問いかける。

「でもあたしは好きよ、歯ごたえがあるんですもの」

邦彦はゲラゲラ笑いながら今度は例の絵をバリバリ引き裂いて暖炉にくべた。

炎の中に消えて行く時、裏に小さく印刷さ

れた絵の題名がハッキリ読み取れた。

「秋の人肉嗜食」サルバドル・ダリ画。

黒髪夜話

★黒髪の放つ香りと艶と妖★
★しい魔力に魅せられて…★

黒崎良之

出物腫物ところ嫌わずという
が、女性を恋うる念が先天的にあ
るいは後天的にそのバランスを失
い、頭髮に偏よる時は毛髪フェチ
となり、また、下に移るに従って
乳房、パンツなどになってくるの
かも知れないが、それはともか
く、本誌十月号を楽しみながら読
んでいると、斯界の権威、高橋鉄
氏の著書「アプノルム」の近刊予
告が出ていた。



黒え

その広告文をみると、(人間の
その当人でさえ判らない心の奥底
に秘む異常性! 尿を呑む男、少
年を鞭うつ女、毛髪蒐集狂……)
の字句が目飛び込んできた。

尿を呑む! ふうむ! 文字通

り臭い話で、こんな異常愛がある
ものとは、と唸ったが、しかし、
何を隠そう、私などはこの「アプ
ノルム」の頂目にある毛髪愛好者
の一人なのである。

毛髪愛好者ではあるが蒐集狂で
はないというのは、つまり、蒐集
するのが困難であるから、愛好者
に止どまっているにすぎない。

過日、某会社の課長さんが稀代
のパンツ蒐集狂で、深夜、蒐集に
歩くこと幾夜かの末、ついに官憲
にとらえられた、と実話週刊誌が
報じていたが、この課長先生はま
ことに見上げたる蒐集魂に徹した
というべきで、小心翼翼たるわれ
われ風情の足許にも及ばぬ猛士で
ある。

機会があれば、いつでも蒐集狂
に变身すべき心構えを有するに吝

さかではないが、そのような事も
なく今日に及んでいる。そんな訳
であるから、まず「裏窓」をみつ
ちり読んで、空想妄想の中に溶け
こむのが私などの最上の秘事なの
である。

× × ×

いかにすれば女の黒髪を得る事
ができるか、と真剣に考えたもの
だが、まず「買う事である」とす
ると、これは簡単なようでなか
か簡単ではない。

黒髪長く美しき女性に、あなた
の髪をどうぞ売って下さい、とい
ったら、その女性はどんな顔をす
るであろうか。

毛髪フェチズムとは当の本人だ
けの話で、世の女性は、マサカ自
分の髪を買い取って愛撫したい男
のいる事などは考えてもみない事
であるから、自分の髪が金になる
ことよりも、自分の分身(昔は生
命であった)が男に求められ、何
にするのか知らないが、買われる
となると、不気味さが先に立つ
し、また、今さらながら黒髪の価

を知ってかえって逆効果になるのである。

昔は、少額の金に困った女性が、自分の美しい、長い黒髪を、根元からぶつ切り切ってカモシヤに売ったものだそうだが、今では黒髪への観念がうすくなり短かくされるだけ短かくしているのです、売るところの騒ぎではない。全く、昔のカモシヤになりたいものであった。

現代ではせめて、パーマネット屋になりたいものであったが、残念ながらこれも縁がない。

いつぞや、美容院に、勇を鼓して、「パーマをかける人が置いていった少し長目の髪をおゆずりいただけないものでしょうか？」と伺ったことであつたが、その返事は、「サア、今時髪を長くしている人はありません。それに、そんな方はお見えになりませんがネエ」というものであった。

道ゆく女性群の中には、目を瞠

★読者随筆★



らせる素晴らしい黒髪の持主が、豊かな黒髪を背中一面になびかせ、あるいは腰の下までも編み下げ、あるいは高々とアップに結い上げているのを、時折見受けられて垂涎の思いをさせられるのであるが、こんな女性は総じて美容院には行かず、また、行っても決して髪を切らぬものと見える。

× × ×

私などの幼時にはまだ、女性が自分の黒髪を信仰によって奉納する風習が盛んで、女性に縁のある仏閣などには、赤や白の奉納の幟りと一緒に、今、根元からぶつ切り切って奉納したのかと思われる、艶やかに光を放っている、なよやかな、二尺にあまる女の黒髪が赤や白の紐でしっかり根元を結んで下がっているのや、永久に解けねようにとの心持からか、麻の紐で厳重に根元を結んで下げているのもあり、幼い私の気持を興奮のにもあり、幼い私の気持を興奮に妖しくふるわせ、寝ても覚めても、そのなよやかな、すばらしい黒髪が赤や白の紐でキッチリ結ば

れて奉納されている光景が頭から、目から離れず、子供ながら、異常な妖しい想いに、心を打ちふるわせられたものであったが、これもまた、現代ではどうであろうか。

かつて私は、黒髪への慕情止みがたく、女性に縁の深い弁天堂、淡島堂や、戦時中、出征した父や夫の無事を祈るために黒髪を切つて奉納したという摩利支天堂や、不動尊などを歴訪したが、幼時の生々しい、妖しい思いを再現すべき黒髪はなく、拝殿はキチンと清掃され、整頓され、あるいは、うすく白いゴミがかかったものでしかなかった。せめて、短かいパーマ髪の一房でも、と思ったが、そのようなものも全くなかった。

ある願望のために黒髪を奉納するには、まず、その艶々しい、豊かな二尺にあまるなよやかな黒髪を、よく梳いて香をたきこめ、水油をたっぷり、しっとりするほどつけ、切るべき襟元の二ところを元結で結び、紙を巻いてざっく

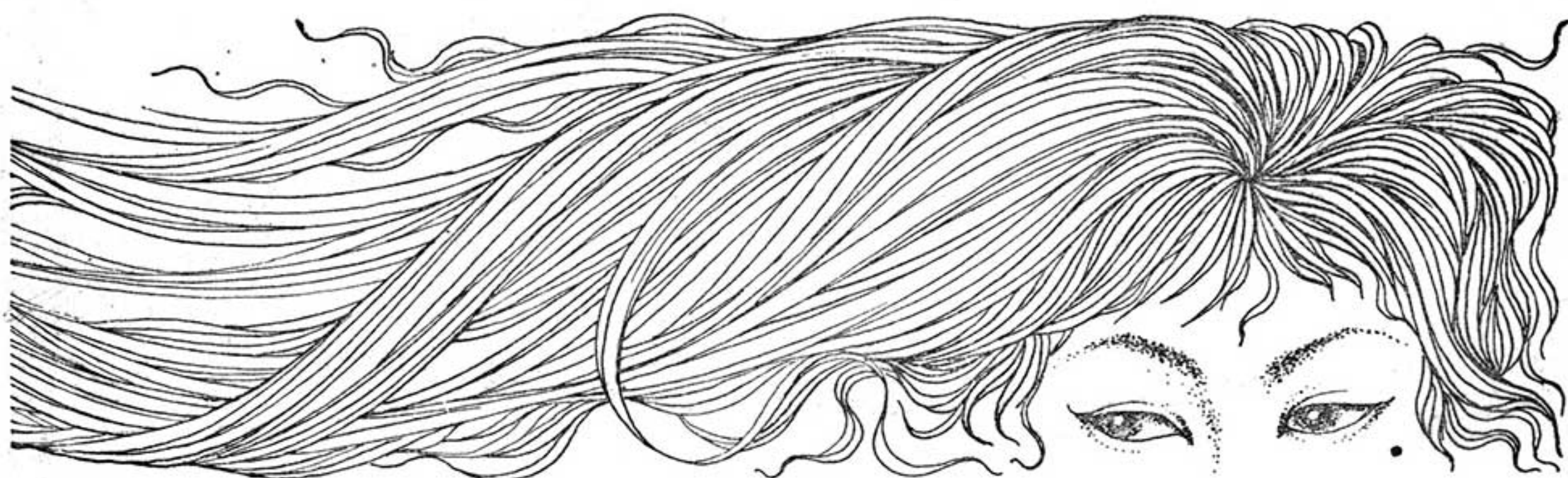
り切ったものだそうだが、その切った黒髪を恭々しく両手に持って祈りを奉げたのち、格子にでも紐でシッカと結びつける。

その結びつけられた女の黒髪は、その後、幾日も、幾日も、艶やかな、なよやかな、たっぷりした分量のうねりを見せ、上品な香の匂いと、なまめかしい髪油の匂いに混じって、成熟した三十女の体臭がほのぼのと漂うていた事であつたろう。そのような垂涎欲泣させられる光景も、現代では全く見る事は不可能である。

× × ×

またかつて私は、「黒髪地蔵」というものを建立し、黒髪をぶつくり切って奉納する事の功德を宣傳して、巷間の女性の黒髪を得ようと空想した事があつた。全く、本誌でお馴染みの「黒髪教」物とそっくりな話であるが、もちろん、実現などするはずがない。

『女性の黒髪高価買入れたし』の広告を、どこか知人宅を借りて出したいと、真剣に考えた事もあつ



たが何分にも小心なる性分にて、依然として心中だけに秘めている始末なのである。

もつとも、それでこそ、日々これ平穩無事となり、善良なる小市民の地位を堅持できるというものである。

蒐集するのは斯様にむずかしい次第であるから、これはまず諦めるとすると、わが黒髪愛好者の喜びというものは全く限られて来て、切りとられた黒髪でなしに、「女性の頭に現に生きている黒髪を鑑賞」するよりほかに芸がない事になる。黒髪の鑑賞について第一に思い出すのは、大島はアンコの黒髪である。

ほとんどクルブシまで届きそうな凄じいほどの長く豊かな黒髪、純粹の椿油をふんだんに含ませた美しい黒髪が、クルブシまで艶々と光りながらなよやかに流れ下る絶景は、これこそ黒髪滝の鑑賞というもので、わが黒髪愛好者共の永遠の垂涎理想像であらう。丈なす黒髪をサイソク髷にあるいはイン

ボンジリ髷に結い、手拭から大きく出っ張った髷が艶々しているのを見るのもまた、美しい。

このような島のアンコをわがものとし、黒髪をわがものとして自由にできるとしたら、その興奮、そのよろこびはいかばかりなものであらうか。丈なす艶髪を両手にシッカと握りしめ、魂は宙外にスッ飛ぶ事であらう。

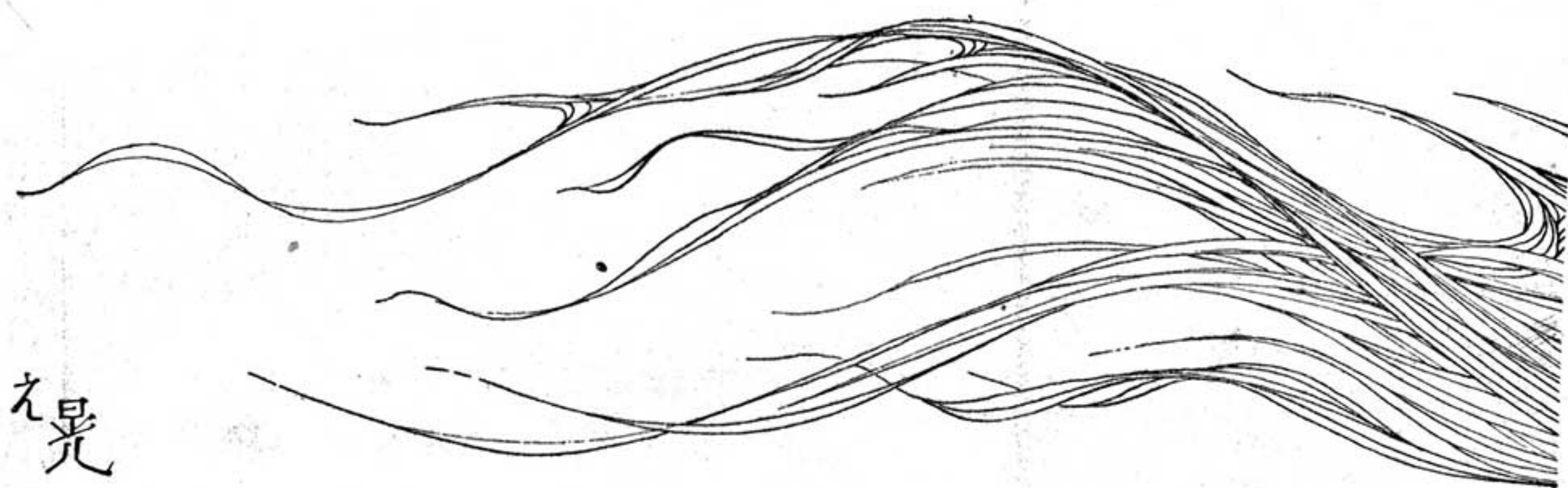
黒髪の長さを大島の誇りとして伸ばして来た彼女らも、現在では観光的なものに従事している女性だけ、ホンのおしるし程度に伸ばしているにすぎないと聞く。アンコの黒髪と長さにおいては比ぶべくもないが、伊勢神宮などの巫女の黒髪はまた神々しさを加えた美しさである。杉の巨木のうっそうとそびえ立つ神々しき境内に、白衣に緋の袴を腰高にはいて、若い緑の黒髪を奉書紙？でキリリと結び巻いて、長やかに背にすべらせた姿は特別の味わいで興奮させるが、これもまただんだんパーマ髪の巫女がふえて来たとは全く情

けない話ではないか。

いずれを見ても短かい、しかも油気のないパーマ頭の婦人が横行する現代において、コレハ、コレハとばかり感嘆し、垂涎せしめる黒髪美人を時折り見受ける時の驚きと喜びは今さらいうまでもないが、解けば腰までもあるかと思われる見事な黒髪を、水油をタップリつけて高々と結い上げている女性！ 白いさわやかな襟足をみせ、艶々と濡れ光る黒髪の美しさは、われわれの心を痺れさすに余りある。

日本髪風に濡々と結い上げた髪。長い黒髪をキュッと引きつめ、一糸乱れず頭上に編み上げた髪。根を高目にキリッと結び三ツ編を一本にして固目に編み下げた髪。あるいは後頭部で一束に結んで柔らかな曲線を持って垂れ下るソフィ・ロープの髪。これらはまさに愛好者をして口中に生唾を生ぜしめ、思わず、畜生！ と叫ば

★読者随筆★



しめるほどの圧倒的魔力を有し、吾人の魂を吸引して止まぬ黒髪美の極致なのである。

黒髪の鑑賞には、「また美容院のぞき」も入れずばなるまい。夕方から夜にかけて煌々と照り輝やく螢光灯の下で、美容師の手によ

って次々と結い上げられる黒髪の群像を、窓外から眺める事はコヨなく楽しいものである。見習い程度の美容師なら虫の這うようなノロノロしたものだ、熟練した美容師であれば、少し邪慳なほど、

キリキリと手早く結い上げるもので、これが日本髪であれば一層その邪慳性が顕著となり、客の女の黒髪を力いっぱい梳き下ろし、前髪の部分をば馬の尾結びにチョイとからげ、元結の端を口に啞えて根をキツク縛り、順次伸ばしたり、丸めたり、キリキリと縛りながら結い上げるのである。

かつて、大部屋女優が髪結いにつけ届けを怠たると、髪を結う時に、荒目の梳き櫛が頭の地肌につき刺るように邪慳に梳きつけ、目

尻のキュッと上るほどキツク元結で根を縛り結ったものだそうで、しかも用いる元結は新しい純白のものでなく、使い古しのものだったそうである。

そうして結いあげられた大部屋女優こそいいツラの皮だが、守銭奴のガメツイ髪結い婆が意地悪く口を歪ませて、長い美しい黒髪を邪慳にギュウギュウの目にあわせて縛り結う光景を想う時、その痛さに顔をしかめる大部屋女優の姿もおのずと目に浮んで来よう。

髪は短かくとも、美容院で結い立ての女性を見るのもまた、楽しいものである。その結い立ての黒髪は美しくもまた、におやかなもので、柔かなウェーブでセツトされた黒髪が水油をしっとり吸って艶やかに光りくねるのを見る時は、長い黒髪とはまた別なよろこびに誘うのである。

本誌は、黒髪愛好の諸士を喜ばせること厚く、感謝に堪えない。今後ともよろしく御願ひする次第である。

えん

★憲兵のネチネチした拷問にさいなまれて悶える女スパイノ★
 ★野獣のように縛られた密林の裸女は必死に抵抗するノ★
 ★いずれ劣らぬ美女たちのハラハラさせる名場面ノ★

“カルタゴの女奴隷”より



○旧作拾い集めの弁

黄金の六〇年——などといって

いるうちに一九六〇年も何となく
 終ってしまうようである。善良で
 ないが故に「よく眠る」お歴々に

芝 利 泰

は黄金であったかも知れないが、
 われわれ庶民には別にどうという
 こともなく過ぎてしまい、何だか
 無責任な予告編だけを見せられた
 ような気分である。

そこで——イマイましいからウ
 ヅブンばらしに、キレイな女優さ
 んがいじめられた映画の数々でも
 思い出していただき、予告編が嘘
 でなかった世界もあったというこ
 とを、記憶にとどめておくのもま
 んざら無駄じゃないデス——とい
 う趣向。

以下は「黄金でもなかった六〇
 年」に上映された外国映画の中か
 ら、裏窓派映画ファンの期待を裏
 切らなかった名場面の数々を拾い
 集めたものである。

○縛られた裸女

「ジャングルの裸女」というドイ

の 面 場 難 受

ち た 優 女

ツ映画が夏の頃に封切られた。スタンダード・サイズの色彩映画である。

宣伝写真を見ると、ほとんど全裸の女がターザン流に木から木へ飛び移る場面があるようだったので「これは、つまりセンデン用に過ぎるのであろうな」などと、実は見る前には、そう思っていた。

ところが——あにはからんや実物を見るに及んでこれは相当に大胆な映画であることがわかった。

主役のマリオン・ミヒヤエルなる十七歳の少女は「一万四千人の中から選ばれたズブの素人」だということだが、これがまさしくハダカでジャングルの中を右往左往するのである。赤ン坊の時に難破船から漂流してアフリカ大陸へ流れついた白人——という設定であり、蛮地の土人達からは「白い女神」とよばれ、生きた守護神としてあがめられている。

別にターザンの先輩のようなス

ーパーマンではないから、これは、「若さと美貌」に対する未開人の崇拜によるのだろう。

そこへお定まり通りに、ドイツの「東南アフリカ学術探検隊」なる一行がくり込んで来て、裸女を発見する。

美人の女医と御誠実な二枚目などの他に、悪役タイプの中年男が混んでいるところなんかも、これまた定石通り。

裸女をいじめる奴がすなわちこの定石氏なのだ。

どのテイドの裸女かと申しますと、先年のメキシコ映画「アダムとイヴ」のイヴなんかよりはぐつと本格の裸女であり、数条の縄ノレンみたいなのが腰の前後（周囲ではありませんぞ）に垂れ下っているだけの、つまり準全（？）裸というところである。

そういうのが活発に逃げてくるところを、木の上で待ち構えていた定石氏が投網で、生け捕りにす

る。バタバタと暴れるのを押さえつけたり組み敷いたりして、両手首をロープで縛ってしまふ。ただし、非後ろ手（ここが遺憾なところだ）である。

引っ担いでキャンプへ戻る。ベッドへ投げ出す。裸女は暴れ、若い乳房が揺れる。手首はリアルに縛ってある。

バタバタする娘の足の方からカメラを向けているところが憎いところであり、聖人君子でも多少は身を乗り出すようにできている。

ただし、裸女の体にかけられたままの投網は、この場合、一種の衣裳となり、いくら身を乗り出しても差し支えがないことになっている。

やがて二枚目ハーディ・クリューガー青年が登場し「獣じゃないぞ！縛るとは何事だ！」と定石氏を難詰し、縄を解こうとするが、娘は言葉がわからないから、ハーディ君を迫害者と思って、その手

首に噛みつく。

ハーディ二枚目氏は縄を解くのを中止し、娘にバナナを与えたりして善意を示す。

乳房も露わな縛られた裸女が、男の差し出すバナナを喰べる——などという場面は、そう滅多にあるものじゃない。

娘はハンプブルグの老富豪の孫娘と判明し、二枚目と共にドイツへ行く——。結局「裸女」の部分は最初の二十分間ぐらいであり、あとは財閥の跡目相続騒動の話となるのだが、約二十分にして切り上げないと、ドイツの映倫でも、やはりウルサイであろう。

マリオン・ミヒャエルはこの一作でスターダムに突入し、「ドイツのB・B」というキャッチ・フレーズでおおいにオンナを上げていくという。

この映画では若さと美貌の女医が定石悪役氏に挑まれる——という準危難場面もある。

もつとも

この場合は女の方にも罪がある。

乳房やヒップの一部がチラチラするような、

はなはだ挑発的な服装を白昼して

いるのだ。ただし、これも無意味に露出して

いるのではなく、彼女はハーディ

君を恋しているのに、恋される方は至って鈍感なので「ああ、じれ

ったいノ」という気持と、アフリカの暑さが手伝って、ついついそういう仕儀とは相成ったのであらう——と、そこまで察してやらなく



“女猫”のアルヌールとマイゼル

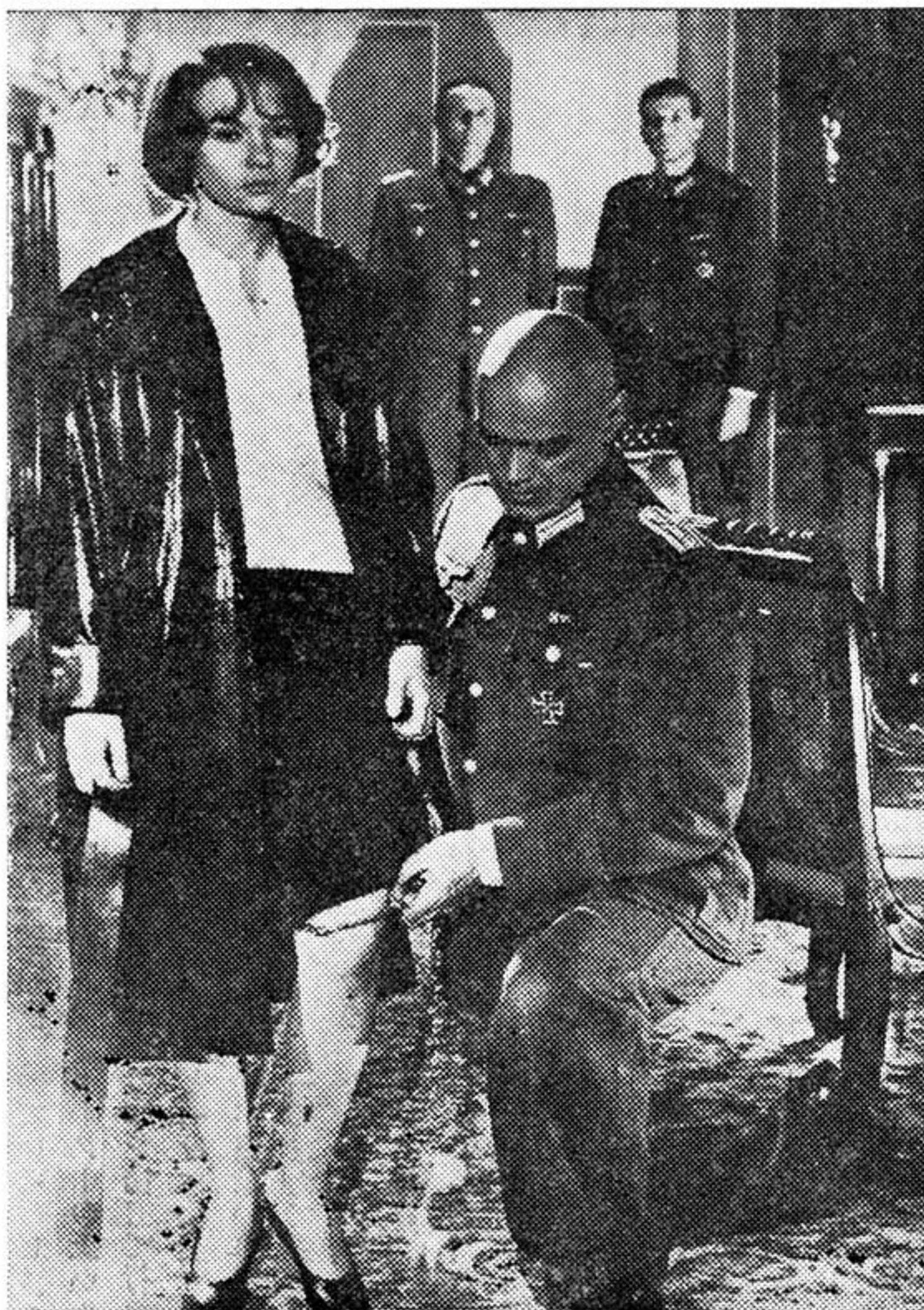
○必死の抵抗

ドイツ映画が出たところで、同じ国の映画をもう一つ御紹介しておく。

「大いなる神秘」というインドを

ては、映画を見る資格も恋を語る資格もないというものだ。

裸女はハーディ君と結ばれ、女医は失恋して一時間半の映画は終りとなる。



足錠をかけられるアルヌール。『女猫』より

舞台にした色彩大型映画だ。第一部の「王城の掟」と第二部「情炎の沙漠」あわせて四時間近い長篇であり、インドへ実際にロケしている。

監督は恐怖映画で知られるフリ
ブラ・パジエット。

新聞の映画評では「ダラダラと長い凡作」というようなのがあったが新聞の批評というものは往々にして信用できない場合がある。何しろ、試写会の日に野球を見に行っていないながらチャンと映画評を書くあつばれなツワモノもいるくらいだから——。

その際の女の抵抗ぶりが特筆大書に価いするのであり、縛る方も縛られる方も必死かつ懸命だ。これほど必死なのは他に例がない。荒地に捻じ伏せられ、数人から押さえ込まれ、精一杯の抵抗を試みるが、結局は後手に縛り上げられてしまう。監督の演技指導には少しの妥協もない、ということがハッキリとわかる場面である。

お安い出来の日本映画やテレビなどに見受けられる、モタモタと争ううち、自分から手を後ろへ廻したが縛る方のタイミングが合わない——なんてのは、ランク老監王様に恋

督の厳しさを少し見習うとよい。

デブラはこのほかに二度ほど縛られるが、他に大胆なヌード場面が一つある。今にも襲いかかるうとする毒蛇の前で必死に恐怖と戦いながら宗教の儀式としての踊りを踊る——という場面がそれであり、ストリップダンサーも顔負けな、最少限度の布しか身につけていない。裸に関して制約の厳しいハリウッドでは撮り得ぬ場面——ということが、すぐにわかる。

大体がこの女優は、エキゾチックな役柄を専門に演ずる存在であり、今までもインディアンの娘とか、ハワイ原住民の娘などの役が多かった。従って裸にされる率も多かったのだが、B・Bなみと相成ったのは、この映画が最初である。美しいヌードだ。

上半身裸体で鞭打たれる二枚目氏、同じくその破牢、人喰い虎との死闘、地底の牢獄に閉じ込められたレブラ患者の群れの鬼気迫る

集団脱走、王宮の地下の迷路が洪水となるスペクタクル——等々、見せ場も多く用意されており、サービスが利いている。

○拷問されるアルヌール

フランス映画「女猫」は、フランスワーズ・アルヌール主演のアンリ・ドコワン監督作品で、黒白普通サイズ。

パリがドイツ軍に占領されていた頃、抵抗派スパイ団の中に「猫」とよばれる若さと美貌の未亡人（アルヌール）があった。

彼女は首尾よく大任を果たしながらも、ドイツ軍将校との恋が仇となり、独軍憲兵隊に捕われ、拷問され、ついには「裏切り者」として仲間から射殺される。

「女猫」を責める憲兵隊の将校ハインツ（クルト・フォン・マイゼル）はプリンナー刈りの坊主頭をしたサディストであり、一度アルヌールが捕らえそこねた恨みを持

っている。ピッタリと密着したスエーターの上から、彼は両手で女の体を撫でて行き、乳房、胴、腰と「身体検査」をしたのだが、証拠が出ないので釈放する。

「捕まえて責め上げることもできただぞ」と独りで叫んだりする男である。

ところが、その直後に「V I号ロケット」の秘密がアルヌール達によって盗まれたと知り、彼は職務と邪念の両方から、女猫捕縛の執念を燃え上がらせる。

折よく、私服の独軍大尉ベルナル・メンツエル（ベルンハルト・ヴィッキ）が正体を隠したまま女猫と恋におちたのを知り、彼は厭がるベルナルを脅迫しながら、一網打尽の機会を待つ。

ベルナルは「あの女だけは見逃してやる」との条件をつけられて、逆スパイを行なう。敵国の女を愛し、ドイツ軍人としての忠誠も貫きたいベルナルのジレンマ

を、ハインツは冷笑する。

「君がその気にさえなれば、もつと別な愉しみ方もあるんだが……」などと云う。別な愉しみ方とは、すなわち女を責める愉しみのことであり、正面きってサディストとしての看板をかけた、これは珍しい役柄である。

圧巻は拷問の場面であり、彼は女を自室に連れ込み、まず女に靴と靴下を脱がせて、素足で意味もなく部屋を歩かせる。

フランス女にとって、それは耐え難い屈辱なのであり「せっかくの美人が、台無しになったな」と冷笑されると、アルヌールは壁を叩いて泣き叫ぶのだ。

次に、彼は女のコートを脱がせ身体検査を口実に、その体をまさぐり始める。まるで女体の感触を味わうような手つきを続けながらハインツは偏執狂的な眼を輝かせ、さらには「ベルナルの話だと、ベッドでは飛び切り素晴らし

い女だってな。本当かノ。俺にも話せノ。さあいえノ」などと、完全に脱線状態を示してくる有様。その上、女に紙とペンを突きつけ、私は白状します、白状します白状します……と、休まずにいつまでも、書き続けることを強制する。この拷問で女は疲れ切ってしまう。

「約束が違うノ」とベルナールが詰問しに来ると、あくまでも残忍なハインツは女のコートに左袖を鉄で切り取り、左手首と左足の膝を錠でつなぎ「これなら歩けても走れないからな」などといい、ベルナールにその身柄を預ける。

ベルナールは屋外へ女を連れ出し、説得を試みるのである。——この場面に使われる手錠兼足錠は珍らしい道具であり、足に嵌める方の輪は手錠よりも大型に造られている。

スナナリと形の良いアルヌールの足の曲線美が足錠によって冒瀆

される瞬間——これは一つのハイライトとなっている。

釈放された直後、レジスタンスの隊長（ベルナール・ブリエ）に機関銃で狙われる女猫は、逃げ隠れする意思を少しも持たずに、観念して射殺され、冷たい舗道に崩れ折れるのだった。

その姿は、まるで路上に死体をさらす小猫のようであった——。という情景がラスト・シーンだがフランスで大当たりをとったこの映



“錠”のロロブリジーダとモンタン

画は「女猫の復活」というような題の続篇が作られ「アルヌールは奇蹟的に一命を取りとめたのでアリマシタ」という話になっている。

一つ当たると、大がいその主人

○鞭打たれるジーナ

イタリア映画（あるいは仏伊合作か）の「掟」は、イヴ・モンタン、ジーナ・ロブリージダ、マルチェロ・マストロヤンニ、ピエール・ブラスール等が出演し、ゴンクール賞受賞小説の映画化であり、監督はアメリカ映画界の出身で最近ヨーロッパでもつばら異色作を手がけているジュール・ダッシンである。黒白普通サイズ。

この「ゴンクール賞プラス異色監督」という組み合わせが「難解作品」を作り出す結果となった。別に、物語そのものは難解ではないのである。「ああ、そういう話ですか」というような話だが、さて何をいわんとしているのか、ウツカリ見ているとわからない仕掛けになっている。

題名になっている「掟」とは、賭けに勝った者が、敗けた者達を支配できるという遊びであり、その掟や支配、権力などは恋人、夫婦、親子、いや、すべての人間の心を左右するものである——というようなことが主題であるらしい。物語の舞台となる南イタリアのある町のボス、イヴ・モンタンは「何も掟あそびだけとは限らねえ世の中のことは、すべて同じだ」と思っている。

介にならない女は少ないくらいのもの——というような、途方もない連中が集まって、いろいろの事件を起こすのである。モンタンに狙われている娘ロロブリジダは少年かつぱらい団の団長であり、母や二人の姉と共に町はずれの城に住んでいる。城の主人ピエール・ブラッサーは一夫多妻主義の老人で、ジーナの母や二人の姉も以前はみな彼の情婦であった。

「たとえば、女だ。女にしろしをつけてやって、お前は俺のものだと云い、まず掟を作っちゃう。すると女は、あたしはあんたのもの、捨てないでね……と、こうくるってえ寸法だ。こうなればあとは思いのままだ」といい、それを実行している。モンタンはもっぱら生娘専門であり、それも「強姦するのが最もいい」と広言している。

この町の警察署長もモンタンの女に対する掟主義には全面的に賛成で、この二人は共同使用の密会の部屋を持っているくらいだ。もっとも署長の方は人妻専門であり、この町の人妻で署長の御厄

他国の農林技師マルチェロ・マストロヤンニはジーナを女中に欲しいと申出てくるが、ジーナは一向に承知しない。そのため、彼女は母や姉達からひどい折檻を受ける。

物語の後半、ジーナはブラッサーの遺産を相続し、母や姉達を「支配」する立場となる。そこでジーナは、自分を鞭打った姉を、以前の自分と同じ姿に縛り付け、烈しく鞭打って責める。泣き叫ぶ姉。

「お前がそんなに厭がるのは、誰かほかに男がいるからだろう。白状するまで懲らしめてやるから覚悟をしろ！」

という母の号令一下、ジーナは三人がかりで大きな調理台に両手

制止しようとするもう一人の姉や母にも、ジーナの鋭い鞭は飛ぶ——という具合で、異様な設定の続出である。

「何々賞」などと名のつくものを貰うにはすべからず異常な物語の方がよろしい、という教訓を、この映画は示しておるようであります。

どういふものかイタリア映画の鞭打ち場面は迫真的なものが多いようである。

どういふものかイタリア映画の鞭打ち場面は迫真的なものが多いようである。

どういふものかイタリア映画の鞭打ち場面は迫真的なものが多いようである。

どういふものかイタリア映画の鞭打ち場面は迫真的なものが多いようである。

どういふものかイタリア映画の鞭打ち場面は迫真的なものが多いようである。

どういふものかイタリア映画の鞭打ち場面は迫真的なものが多いようである。

どういふものかイタリア映画の鞭打ち場面は迫真的なものが多いようである。

どういふものかイタリア映画の鞭打ち場面は迫真的なものが多いようである。

この映画もそうだし、他には、「カルタゴの女奴隸」「剣闘士の叛逆」その他、実際に鞭が女優の体に当たる映画を幾つか見たが、すべてイタリア製のものばかりであった。

振り子仕掛けの

責道具

「狂乱のボルジア家」という映画は、仏独合作か、あるいは伊独合作であったか——ハッキリした記憶はないが、鮮明度の悪い大型色彩映画は確かシネパンスコープと銘打たれていたから、やはりイタリア製だったかも知れない。

ただルクレチア・ボルジアがリユクレス、チェザーレ・ボルジアがセザアルと直っていたから、台詞はフランス語だったように思う。

とすれば伊独合作映画をフランス語に吹き替えたプリントが日本に入荷したことになるが、そうい

う妙なことは今までにもしばしばあった。

もう少し戸籍調べをしてみると主演の二枚目ジャック・セルナスはイタリアの俳優であり、ルクレチア役のベリンド・リイは西独映画界の新進妖婦型女優である。

以前、マルチン・キャロル主演、クリスチャン・ジャック監督の「ボルジア家の毒薬」という映画が上映されたが、材料としては同じであり、中世のイタリアで悪名高かった、乱虐と権謀術数の渦巻くボルジア家の兄妹を描いたものである。

「毒薬——」の方は大作としての風格あり、ルクレチアを美化した映画だったが、「狂乱——」の方は二枚目剣士のセルナスがボルジア家を打倒するまでのアクションを狙った安手なチャンバラスコープである。

ただ、この映画のクライマックスに現われる美女の危難場面は、

ちよつと手の混んだものであり、記憶にとどめる価値がある。

地下の石牢に捕われた美女、セルナスの恋人は、ルクレチアに拷問を受ける。

拷問台に仰向けとされ、両手両足を縛り付けられた美女の真上に



の胸の辺りを狙って揺れながら降りてくるのだ。

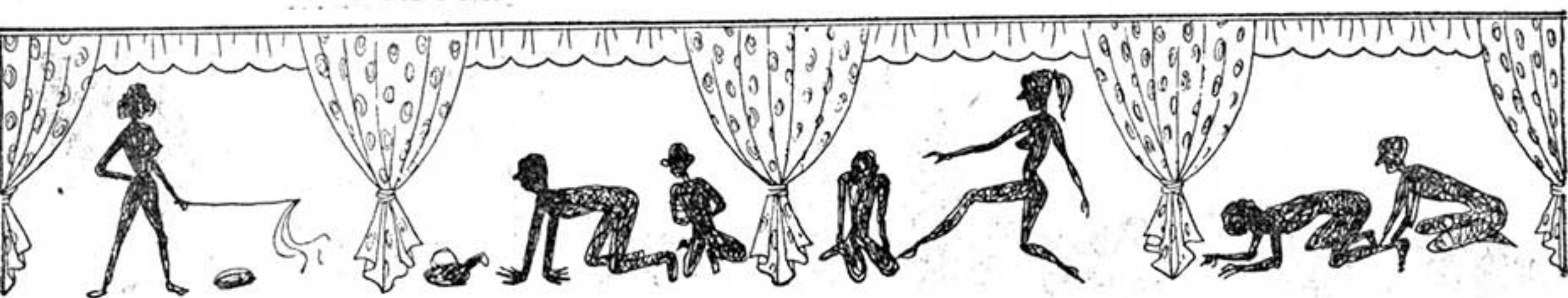
女は恐怖し、悲鳴を上げ、必死に身をもがくが、縄目は少しもゆるまず、セルナスもまた姿を現わさない。

やがて——危機一髪というところで、やっとセルナス氏が救出に到着する。

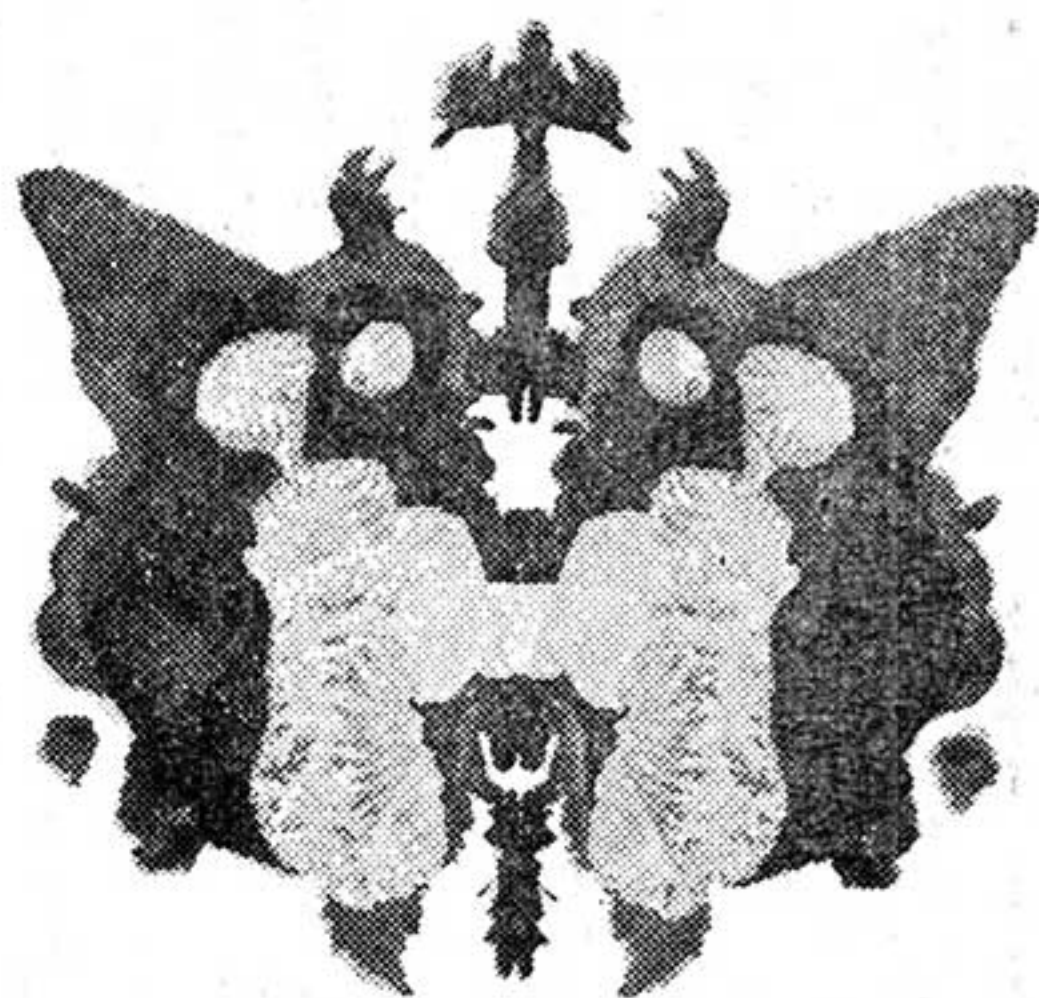
ボオの「振り子と陥穽」以来よく応用される場面だが、江戸川乱歩の往年の作「大暗室」に活写された一場面をフィルムにしたような描写であった。

以上、いずれもまだ、当分はどこかで上映が続けられる映画であり、未見の方には、折紙つきでおすすめできるものと思う次第である。

美女危難のシーンもなかなかタネが尽きないようで、また新しいタイプの美女、新しい設定の迫力編を期待しよう。



★ 日常生活にひそむ ★
マゾヒズム
への誘惑 I



黒田 史朗

カット・佐久間 淳

——世間の人々が、人格的な神という、途方もなくありそうもないことを鵜呑みにできなくせに、人格的な悪魔を認めることをためらう理由がわたしにはわからぬ——

「愛の終わり」グレアム・グリーン

一 電車にて

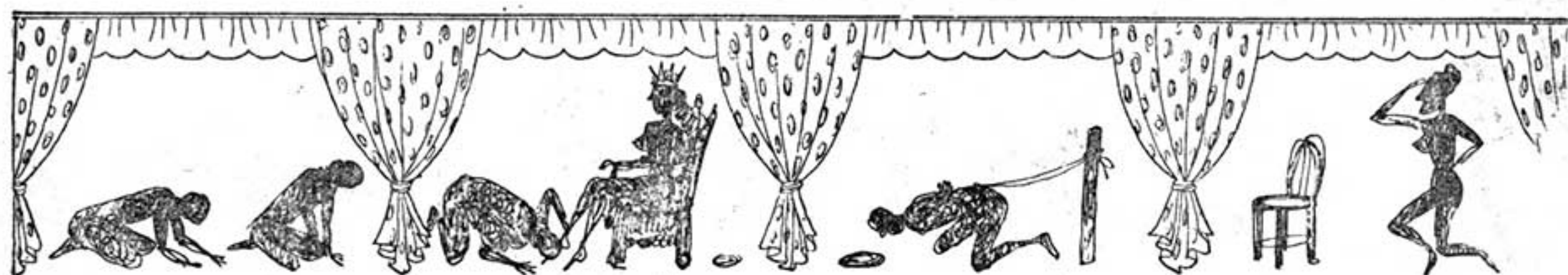
国電の信濃町駅で、一人の少女と、それから青年が乗りこんできました。中央線の下り電車です。

午後五時すぎといえば、夕刻のラッシュアワー、車内は混雑していました。ぼくはドアのすぐ内がわに立っていました。人ごみに押されてはいつてきた少女と青年を、目ざとくみつけました。

ドアがしまり、電車が動きはじめるころは、混雑した車内ではありますが、いちおうは平静にもどります。さ

いまいにも、少女と青年はぼくのすぐそばに並んで立っていました。そのとき、ぼくは大変つかれていました。ぼくだけではありません、車内にすし詰めに詰めこまれた人たちは、だれもがいちようにつかれた表情をしておりました。その日一日の仕事のつかれが、それぞれの表情にぎざまれているのです。

でも、少女と青年だけは、違っていました。殊に少女の、いきいきとしたつぶらな瞳は、思わずぼくの注意をひきつけました。そこで、すっかり目がさめたようにぼくは元気になり、よく二人の様子を観察しました。



少女、とはいっても子どもではありません。十七歳には十分なっていたように思われます。高校三年か、あるいはもしかすれば、女子大生であったのかもわかりません。背たけのぐあいも、女性としての發育のようすなども、すっかりおとなと同じであつたからです。油っ氣のない髪を、無難作にリボンで結び、背筋の方へ垂らしている彼女の印象は、全く清潔の一語に尽きます。少女からふつうの女性へと変貌する時期にあたる、あの微妙な、自負とはじらいの織り交じる、ふしぎな芳香をたたえた清潔感です。

ところで青年の方はどうでしょう。彼は日本人ではないようです。色が浅黒く髪の毛がわずかにちぢれていました。どうやら東南アジア、それもパキスタンあたりからの留学生のような様子でした。年齢は二十四、五歳ぐらいいに見受けられました。温和な、というよりも、すっかりこの異国の少女を、崇拝しきつているとでもいった柔順さを物腰に示していました。彼は意外に背たけが低くむしろ少女の方が立ちまさって見えました。青年は浅黒い皮膚のために、かえって日本人には感じられぬ、或る種の奥床しさを身に備えているようです。東洋の神秘、とでもいったらよいのでしょうか、青年の持つ優雅な陰影から推して、彼はきつとパキスタンの貴族の子弟でもあるのでしょうか、きつとそうに違いないように、ぼくには思われました。

少女が何者だか、よくはわかりませんが、とにかく学生であることだけは、まずまちがいはなさそうでした。

では、少女と青年は、いったいどういう関係におかれていたものか、これは大変な興味をほくに感じさせてくれたものです。

青年はたえず温和な笑顔で、少女の顔の方を仰ぎみるようにしていました。

少女は、たいへんはきはきした口調で、一語一語をゆつくりと、ていねいに、こう青年に言っていました。

「西山先生のお講義を、おもしろいと思いましたか」

青年はなにやら、ほそほそと低い声で意志表示を行なっているようでしたが、ぼくにはそれがよくはききとれません。ただ少女のことばだけが、一語一語、かんで含めるような明瞭さで伝わってきました。

「そう、そうです」

「……」

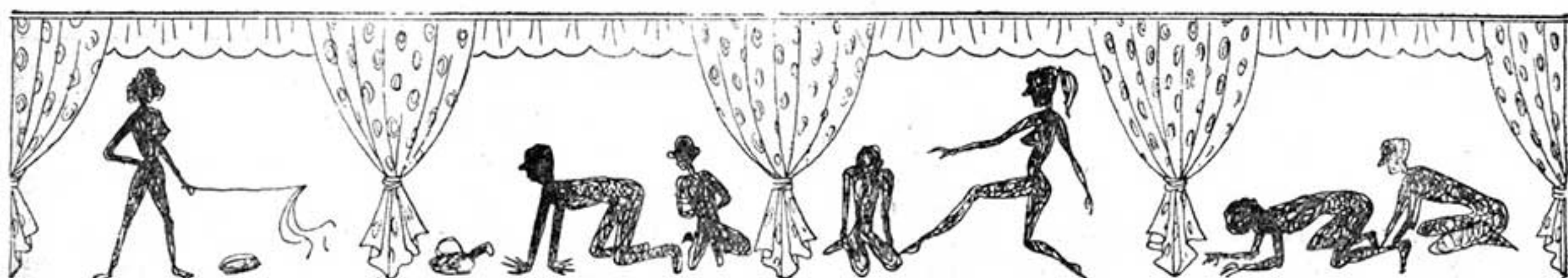
「それでは今度、それでは今度……」

二度、このような繰り返しのあとで、少女は言いました。

「わたしのあとからついていらっしやい。ちゃんとわたしのいうことをきいて、おとなしくしていらっしやい。わかりましたか？」

青年はわずかにうなずいた様子でした。そしてニコリとあどけない微笑を少女にささげました。

青年が少女に語りかけることばはききとれませんが、少女の澄んだ声はまるで秋空のようにさえ渡って明瞭でした。パキスタン語や英語ではなく、はっきりとした日本語です。そして日本語以外のことばを使うことを、意



識的に少女は避けているようでした。つまり日常のすべての会話をむりにでも日本語でおしとおして、もっとも実際のな語学教授を青年にほどこしているのだと、推察されました。

少女はすべての点で優位な立場にありました。まるで幼児をあやすような、また一方ではだれよりも峻厳な教師の趣で、青年に接しているのが感じられました。

「さあ、こんどのえきでおります。わかりましたか。まちがわないようにわたしのうしろについてくるのですよ」

ひかえめにうなずくこの異国の青年を、まるで従者のように従えながら、少女は新宿駅で降りてしまいました。

さわやかな涼風が過ぎさったあのような感じに、ほくは捕われていました。そして同時に、この少女と青年との対象が、あやしくもぼくの心に残っていたものは、砂漠の中の旅人のいたくあの激しい渇きでした。そして、このようなつかまえどころのない渇きこそが、マゾヒズムと名づけられる心理的傾斜の源泉ではないでしょうか。

〈饒太郎〉の中で、谷崎潤一郎氏は、「マゾヒストは異性から受ける苦痛を喜ぶ」とはっきり定義しています。が、谷崎氏ほどの大先達が、なぜこのような誤った見方を、つい一時的にしろ、してしまったのか、残念でなりません。

マゾヒズムは、しょせん一つの観念的世界です。女性

崇拜という、もっとも香りたかいロマンチズムが、もっともリリックな形で内部心象を極限に押し詰めた地点に醸成される、美的心理風景であるからです。

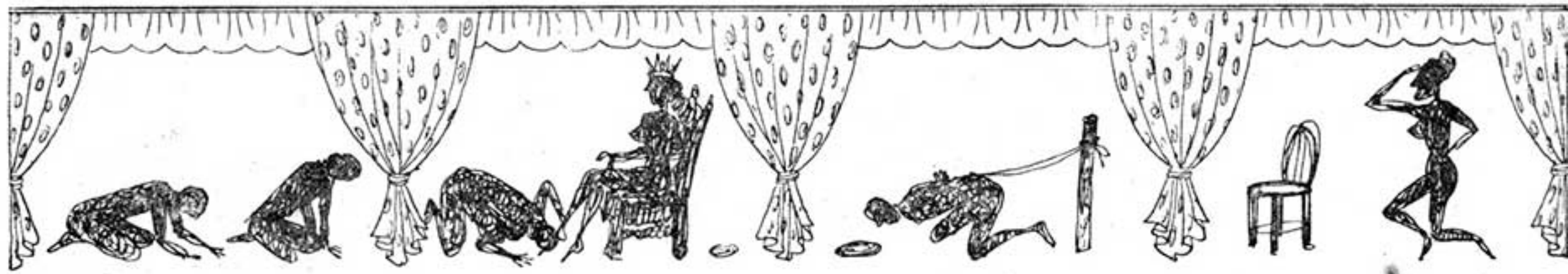
二 女性のサジズム

戦後、いちだんと美しくなったのは女性です。その女性たちを前にして、マゾヒストの嘆きと期待はいっそう熾烈化します。

さりげない週刊誌の中の、女性モデルたちのポーズから、電車の中で膝頭の露出をはじらいながら、しきりに短いスカートの裾をひっぱる女性たちに、満たされぬ夢をこがすのは、マゾヒストにおけるほど切なるものはないでしょう。

ある知人の家を尋ねたことがあります。石神井池にほど近い閑静な場所ですが、また多少不便なところでもあります。わざわざ出向いて行って、その目当ての知人が不在だったのには、少しばかりがっかりしました。が、わたしは彼の若いかわいい奥さんと、三十分ばかり水入らずで雑談をかわす光栄に浴しました。わたしたちは、陽当たりのいい縁側であたりさわりのないことばを交わし合っただけです。奥さんもわたしも、庭に面したお縁にすわり、それぞれ両足をぶらぶら庭土の上へぶら下げていました。

その家には雑種の飼犬が一匹いて、それが庭の隅から尾を振りながらとんできました。そしてしきりにお縁の下から奥さんの足にじゃれつくのです。これはもっとも



ありふれた風景でもあり、また決して見のがすことのできない風景でもありました。

「かんじゃだめよ、くすぐったいじゃないの」

と、奥さんは犬をたしなめるのですが、犬はいっそうはしゃぎながら、奥さんのくるぶしのあたりをかむのです。奥さんは無邪気に両足を縁側にぶら下げたまま、たくみに足首をくねらせながら、この犬難をさけるのですが、しまいには守勢を転じ攻勢に移ったようでした。

ほくとの会話をとぎらせることもなく、一方でいどもかかる犬の鼻面を、爪先で払いのけ、また押し返すのです。そしてときどきは、たしなめるためもあってか、犬の頭を土ふまずで軽く叩いたり、なでるようにしたりするのです。

ほくはこのとき、奥さんとの会話もうわの空、大変な興奮におそわれました。

ところで、小説新潮の八月号に、南条範夫氏の「六弥太の報酬」という時代短編が掲載されています。南条氏の数ある異色小説の中で、これほどマゾ向きの読み物はないように思われます。そのクライマックスの場面を、とりあげてみましょう。

主君の着物の裾を、あやまって踏んだ腰元が、みせしめのために縛られました。身分いやしい六弥太が、彼女のいましめをといてやってこういふのです。

「あなたのような美しい方が、着物の裾をふんだぐらいでこのようなお仕置きをなされるとは……わたしならば、着物の裾どころか、顔をふまれても本望です」

しかし、この六弥太の出すぎた言動が主君の耳にはいいり、主君三好笑岸はたいそう立腹して、すぐさま六弥太を捕えさせ、こう厳命を下しました。

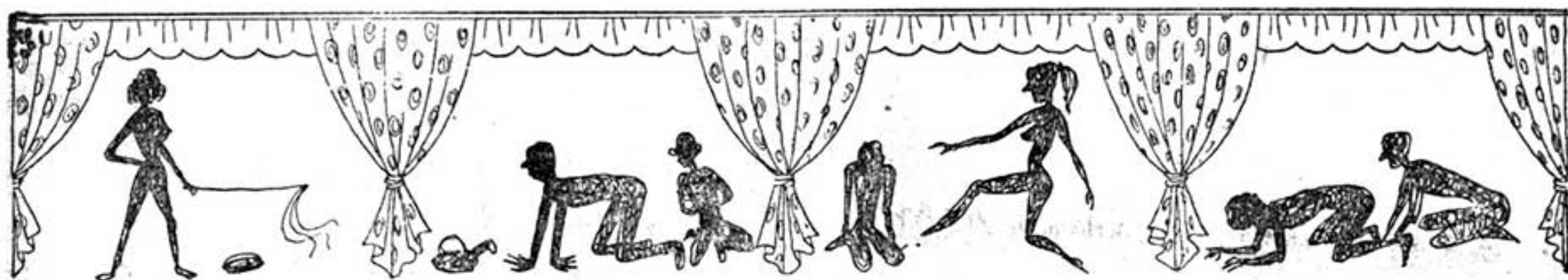
「こやつ顔を仰向かせて埋めるのじゃ」

母屋と離れとを結ぶ通路に当たる地面に、六弥太は埋められます。顔だけを仰向きに、丁度地面と水平になるようなあんばいで、やっと呼吸はできるのです。

「女子どもに顔を踏まれたいとな。よし、思いどおりにさせてやる、……女子ども、よいか、この通路を通るときは、必ずこやつ顔をふんで通るのじゃ」

六弥太の地面と水平になった顔の、鼻がじゃまだとこととでそぎ落とされていました。その傷ついた顔を、邸づとめの女たちは、みなこわごわふんで通るのです。気味が悪いような、グンニヤリした足ざわりでしたが、主君の厳命を、皆忠実に果たしたわけです。六弥太の苦痛は大変なものでした。顔でもって女の全体重をもろに受けるわけですし、特にそぎ落とされた鼻の部分が、女たちの草履の裏の金具でこすられるとき、絶息せんばかりの苦痛が電気のように足先にまで響くのです。

小説の冒頭に、顔を地面がわりに、踏んで通る女性の挿絵が書いてありますが、印象的です。踏まれて無念の六弥太の表情より、踏んではじらう女性の羞恥が、女の後姿に表われております。この羞恥は、裏を返せば秘密の或る快感に連なるものです。この秘められた快感こそ女性におけるサジズムです。これは隠微な楽しみであって男性のサジズムのように露骨ではなばなくあります。



せんが、根は氷山のように深いものです。

三通りの場合が考えられました。一つは電車の中の少女と青年です。というより、まるで拝跪せんばかりに従順な異国の青年を意のままにリードする少女の優越感、一つは犬とたわむれる奥さんです。というより、相手が犬だというなれあいの上にすっかり安心して、たとえ犬であつても、立派に生命あるものを足先でもてあそぶ立場。

もしこの少女と奥さんが、六弥太の顔をふんで通らねばならぬ羽目に立ったとしたら、どうでしょう。彼女らは、主君に対してそれをこぼむでしょうか。きらいな男に、強引に貞操を奪われるとか、あるいは、衆人の前で裸になることを強要されたりしたばあい、女の中の幾人かは舌をかみ切つてでも主命をこぼむでしょう。ところが、六弥太の顔を踏むことをこぼむ女性は、ひとりもないだろうというところに、女性のサジズムをとく、一つのかぎがあります。

若い女性の残酷な行為といえ、数知れぬほどたくさんの実例があります。

殺した夫の死体を、鋸でばらばらにきざんで川に流した女子教員の話、生まれてまもない赤ん坊のからだに、ごはん粒をまぶして鶏舎に入れ、ニワトリたちにつつき殺させた母親の話、住みこみ女中に売春を強要し、その上ことごとく焼火箸で打檻していた飲屋のマダムの話、——これに類した話は、新聞や週刊誌で、きりなく報道されています。

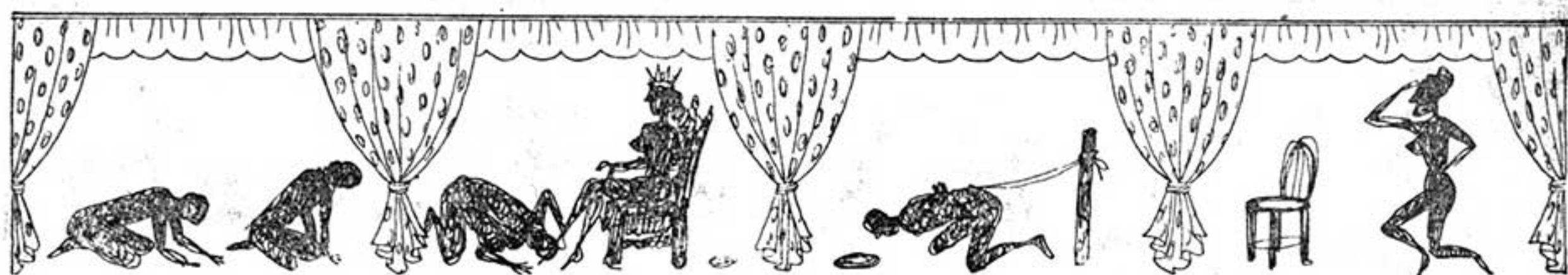
そして第二次大戦中の、ナチ強制収容所における、イ

ルゼ・コッホをはじめとする、婦人看守たちの行なった残虐行為は、あまりにも有名な記録です。ところで、ジャーナリズムを騒がせる、こうした女性たちの残虐行為と、サジズムと呼ばれる不思議な誘惑をさそう悪魔の心とは、いったいどういう関係があるのでしょう。

女性におけるサジズムが、マゾヒストの待望する真のサジズムとしての資質を現わすには、ほくとしては次のような条件を考えます。一つには女性としての健全で聡明なる心、二つは女性としてのはじらいの心、三つには背徳感に伴ういたみとうずきです。

女性はいくまでも女性であつて、中性化したり、男性化した女性であつてはならないことです。しかしながら残念にも、戦争は女性を中性化し、あるいは中性的女性に多くの活躍の場を提供しました。男尊女卑の我が日本軍隊においても、中性的古参看護婦がはばをきかし、殊に婦長ともなると、平気で兵隊のビンタをとったものです。彼女らは男でも女でもない、一種の不具性というべき存在でした。彼女らの心は、感受性という泉はかれ、底までが石のように固まっていました。このような不具性と、救いようもない無知蒙昧さが結び合つたとき、とんでもない残虐行為が生まれられます。その好例が強制収容所のナチ婦人看守たちの記録ではないのでしょうか。

マゾヒストの待望するサジズムとは、このようなものではありません。あるいは夫殺しの妻、嬰兒殺しの母親の場合でもありません。彼女らは、生理と結びついた復



鬱心、うっせきした不安や劣等感、猜疑心が、一時的に精神分裂的自己喪失を行なったので、その犯行のいっさいに、本来備わっているべきはずの、女性としての健全な素質が、そのままあずかりたずさわったのではありません。

サジズムは、健全な女性の、健全な心の中にこそ、はじめて宿る可能性が与えられます。マゾッホがその代表作『毛皮を着たヴィナス』で描きだしたドミナの理想像ヴァンダ・フォン・シュナウ嬢は、健全で聡明なる、女性でありました。思い詰めた精神分裂的自己喪失の症状を呈したがためでもなく、一種の無知と、中性化から来る粗暴さによったがためでもありません。

彼女はあくまでも正常な、そして中庸を得た女性でありました。彼女の知恵は女性としての知恵であり、彼女の冷酷さはあくまでも正常な女性の心、そのままの中に宿る冷酷さでありました。その知恵と冷酷さあるがために、かえってはっきりと、彼女の中に典型としての女性を見いだす、そのようなものでありました。

彼女の酷薄さの一つ一つを、サジズムの典型として保証したものは、行為に対するはじらいと、背徳感による一種のうずきです。この二つがまじり合い、はじめて真の快感が彼女の心に育ったのです。

未開地の蛮族の女たちの行為が、いかに兇悪無残だらうといって、なんでそこにマゾヒストの夢が託されましょう。精神分裂的の症状に陥った女たちの行為が、いかに残酷性にとんでいようと、なんでそこにマゾヒストの夢

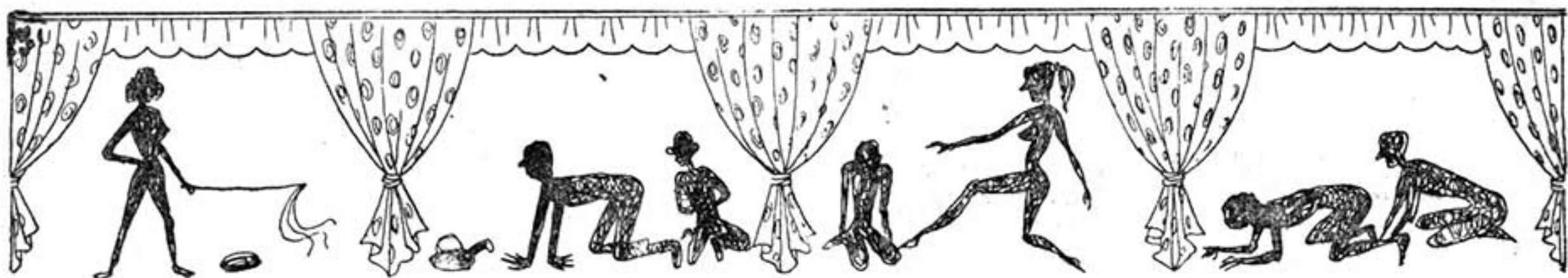
が託せましょう。浮世の荒波にもまれすぎ、すさみ果てた紅燈の女たちの行為が、いかに粗暴であろうとも、なんでそこにマゾヒストの夢が託せましょう。

オフィス勤めの女たちの、若やいだ嬌声の中に、自家用車の貴婦人の、とりすましたほこらしげなポーズのなかに、いつも挨拶を交わす隣家の若い人妻のつつましさのなかに、そして受付嬢のもらす魅惑的な笑顔のなかに、マゾヒストの待望する女性の真の秘密が隠されているのです。勇気と知恵をもって掘りおこせば、そこには際限もないほどの可能性が、マゾヒストを迎え入れてくれるのです。

三 らくにしてあげるわ

前項でほくは、「女性におけるサジズムとは、生の形でむきだしにあるのではなく、秘められたものだ、最も女性らしき、そのはじらいと、背徳的なみとの振幅作用から、真の快感を伴って姿を現わすものだ、だから、兇悪犯罪を犯した女性や、ナチ強制収容所の女看守、特に伝説とまでなった所長夫人イルゼ・コッホなどは、真のサジストではない、彼女らは精神病患者であり、中性化したかたわたちだ、サジストはむしろ平凡な周囲の女性たちの心に住んでいる、埋められた男の顔をはじらいながら踏んで通る女の心に住んでいる」という意味のことを書きました。

ところが、実はそのようにだけ、言いきってしまうことはできません。まれには、文字通りのサジスト女性が



いるのです。生まれながらにしてサジズムの知恵を身に付け、その快感のみを求め、あえて兇悪なる犯行をも辞さない女性がいます。彼女にあっては、サジズムは秘められたものではなく、むきだしのままその牙を見せます。はじらいや背德的なうずきを乗り越えて、ただサジズムという快感の美酒に酔いしれるのです。

むしろ例外ともいうべき、この種の女性の、きわめて貴重なケースを次に述べます。週刊実話の九月二十六日号からそれを拾ってみました。

レーナ・テレサ・ナイステッドという、十六歳になる少女の話です。彼女は、一人の老人を撲殺し、一人の老人に瀕死の重傷をおわせました。通称をテリーという、かわいらしいブロード娘の、まれにみる資質を、この犯行の様子からうかがってみました。

テリーになぐり殺された考人は、ニューヨークの北部、クイーンズ地区で洋服店を営んでいた、ポップ・ワグナーという、当時七十六歳になる独身者でした。ワグナー老人は、ブルックリンのペーパー・カップ製造工場に出入りしていましたが、工場にいたブロード娘テリーとは、じき仲良くなりました。

テリーは、ワグナーに限らず、老人が好きでした。老人によくなつき、またワグナー老人もテリーをかわいがり、まるで孫娘をあやすぐあいに、結婚するよ、と軽く言ったのでした。が、これがわざわいの元でした。

その後、老人のことばがはっきりしないという理由で、いとも無難作に、テリーはワグナー老人を殺そうと

思ったのです。

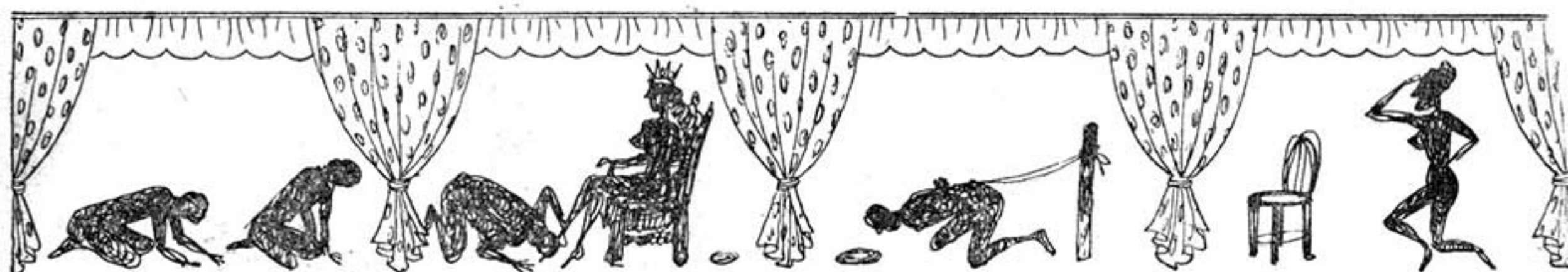
それは今から九年前、一九五一年四月二日の夜のことでした。それほど理由があるとも思えないのに、少女は本当に老人を殺したのです。毒薬を飲ませるとか、熟睡しているところを細紐で締める、とかいった方法ではありません。彼女は正面きってそのあわれな老人を殴り殺したのです。老人は扉のカンヌキの鉄の棒で戦ったらしいのですが、ブロード娘、十六歳の少女テリーにかなわなかったのです。さて、それでは、その時の様子を、その後つかまつたテリー本人の自供からうかがってみましょう。

まずテリーは、バッグに小さなハンマーをしのばせていました。いつものような行為（おそらく老人からのクニリングスの奉仕）の後、彼女は持参のハンマーでいきなり老人を殴りました。じょうだんとも思えぬので老人は驚き、必死になって抵抗しましたが、發育しきった少女の体力にはかないません。テリーは力まかせに何度も老人の頭、それから顔を殴りつけました。とうとう老人はその場に倒れてしまったので、彼女はいったんそこを去ったのですが、気になってまたひき返してみしました。すると、老人は正気を取り戻したようで、床の上に半分起きかかっていました。テリーはかがみこんで老人に聞きました。「気持ちわるいの？」

老人はこわごとと、そしてかすかな声で

「とても気持ちわるい」

と言いました。テリーはゆっくりと立ち上がりました。



「じゃ、らくにしてあげるわ」

もう一度ハンマーをバッグからとりだした彼女は、起き上がろうとする老人を床につきころがし、その上にまたがりました。そしてねらいを定めておいて十回以上もあわれな老人の頭と顔面を殴りつけたのです。

下手人不明のこの殺人事件は、一時迷宮入りの様相を呈しましたが、それから四か月後、テリーは一度の犯行に味をしめ、また別の老人を犠牲者に選び、ワグナー老人と同様、思うさま叩きのめしたのです。老人はこともあろうに、彼女のいたペーパー・カップ工場の主人、アドルフ・グリーンバーグという七十三歳の独身者でした。彼は幸いにもやっと一命を助けられ、その瀕死の床からの証言で下手人テリー嬢はつかまりました。

人々は驚きました。十六歳のかわいいブロード嬢が、このような残虐行為をあえておかそうとは……。

彼女は言います。「わたしは老人にしか興味が無い。なぜって、老人は性的に娘にけがをさせない」

これはどういう意味でしょう。つまり、じたばたしてもずっと自分の方が体力がある、思い通りのことをやっのけられる、そんな快感が彼女をかりたてたのでしょう。

日本の女性の犯罪には、いつもじめじめした暗さがつきまといまいます。しいたげられた女性のせいっぱいの抵抗、いまだに低い女性の位置、それから日本社会の特殊なゆがみ、そういう社会問題をきわだたせるのです。そしてその方法も毒薬を使うとか、就寝中をこっそり紐で締めるとか、あるいはだれか、ほかの男に頼むとか、し

ます。彼女らは男に正面から立ち向かえないのです。彼女らは必死です。いささかの余裕もないのです。

ところがテリーの場合はどうでしょう。彼女のいかにも悠々とした、余裕たっぷりな行動はどうでしょう。

老人たちにはきつと壮健な青壮年時代があったに違いないのですが、いくら年をとったためだとはいえ、孫ほどの小娘につきころがされ、もなく殴り殺されるとは！これほどの屈辱とはずかしめが、ほかにあるでしょうか。ここにマゾヒズムのひとつの極地があります。そして、このようなはずかしめを老人に与えるテリーこそ、まれに見るサジストといえましょう。テリーが、もし戦時下のナチ強制収容所の看守にでもなっていたとしたらきつとコッホ以上の女性になり得たかも知れません。

ほくは、前項で大変はやまった言い方をしてしまったようです。イルゼ・コッホは実に完ぺきなサジストであったのかもしれませんが。ちょうどテリーと同じように。

と考えているところへ新聞が配られてきました。かたすみになんとか、かつてのナチ女性マグダ・フォンタージュの死が報ぜられていました。シュネーブで服毒自殺したのです。ヒトラー、ムッソリーニに信頼された彼女のゲシュタポの一員としての活動はすさまじいもののようにでした。数少ない女性のひとり、こうしてまた世を去りました。

「じゃ、らくにしてあげるわ」

テリーのようにこういうせりふを平然とつぶやける女性、今世界に、いったい幾人残っているのでしょうか。

女剣断腸録

落武者非命

久富浩司

★練絹のように白い胸を最後の夕陽が赤く染めた★

栗原 伸・画

暗い納屋である。

積み上げた藁や俵から発散する、蒸れた藁の臭気が、生ぬるい晩春の温気のせいもあって、澱んだ空気を一層重苦しいものにしていった。

夜半すぎて、いよいよ落城も必至と見えた常山城を抜け出た右源太は、小近を伴って夜明けまでを歩き続けた疲れに、打ちのめされたような鈍痛を全身に感じていた。

もつとも、足弱の女づれという悪条件ばかりではなく、たとえ落城を早めるために退き口をひとところ見逃がした気配もあったと

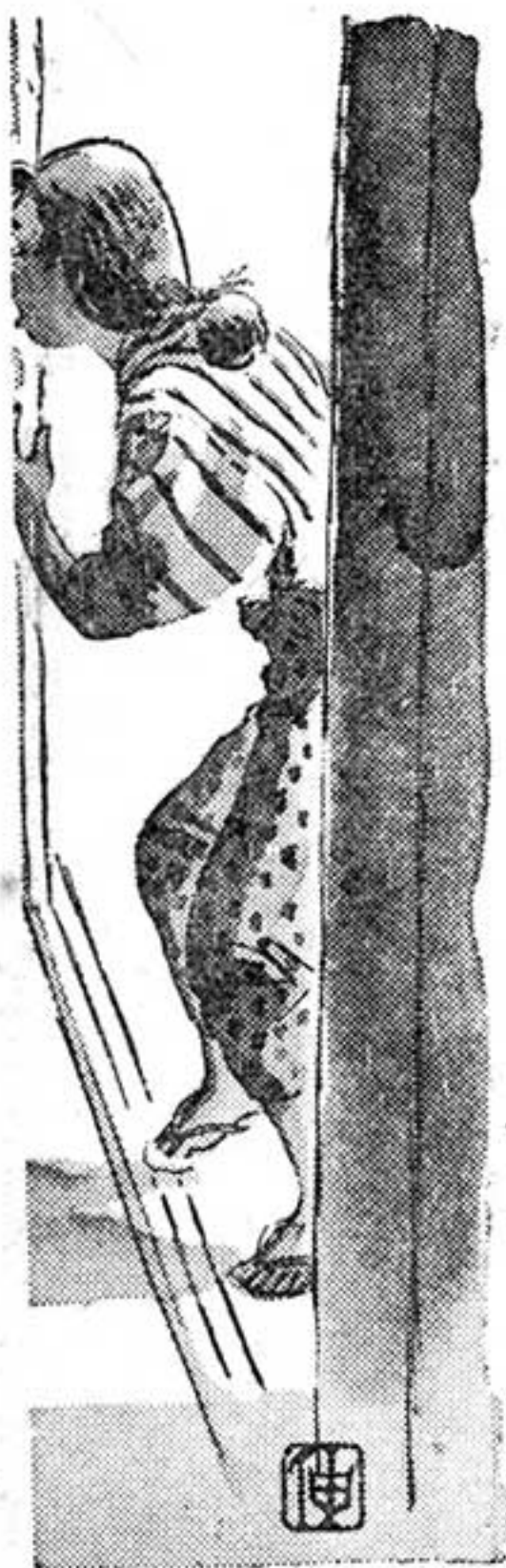
はいえ、一万に余る寄手が、備中鬼ノ身から松山と席捲して来た余勢を駆って、ここ常山の小城を囲んだのであったから、そこを潜り抜ける間というものは、白兵戦のように無我夢中で剣戟を交えるのとは異なっていて、なお、落武者の位置に身をおいた不安と怯えが、拍車を掛けた心労を、累加せずにはおかなかった。

山道から村里にかかる一とすじ道を、わずかに逸れた一軒家に忍び寄ったとき、もう右源太も小近も、一步も動けそうになかった。

先へ進めばとて、夜が明ければたちまち危うい命と知る二人は、その納屋に忍び込んだ。

黒く大きな母屋に人の気配とてなかったが、万一を慮んばかりのことであつた。崩れかけた戸口を恐る恐るわずかばかり引き開け、転がりこむなり二人は、もつと奥へと思う反面に、暗いばかりか勝手も知らぬところで物音を立てても、と手さぐりに探り当たった藁に横たわった。横になるなり、深い眠りに陥ちてしまったのだった。

ガタリという物音にハッと眼覚めた右源太の、胸もとに寄り添うて丸く、小近は眠っている。その体をソッと押しのけて、彼は片ときも離さぬ脇差を左手に、サッと



身構えた。

しらじらと明けかかった朝の光りを背にして、開けさした戸口に立ち塞がる黒い影は、逆光を受けて定かではないが、若い農婦と見えた。

「あねえ」

意外に澄み切った声で背後へ呼びかけるなり、女はサッと身をひるかえした。後ろ姿から推してまだ年のころなら十五か六としか見えぬ、野良着の紐の赤さが、右源太の疼む眼に沁みた。

小近を庇いつつ姿勢を立て直したとき、別の人影が戸口に射した。「出て来いよ」

ものを叩き斬るような激しい言葉とともに戸口が広く開いた。女が後ろ手に隠している刃ものの光りが、白く瞬間に閃めいた。

女ばかりの二人と知ると、右源太は、落ち着きを見せて立ち上った。目覚めて不安げに振り仰ぐ小近を隠すように、

「われら、常山の城を退散した者、決して危害を加えはせぬ、日中歩



行も叶わねば、いま半日見逃がしてくれい」

そういう武士の、若いというよりまだ稚ないところの残った顔を、姉娘はジッと見ていたが、

「お城の衆だな」

「そうだえ」

二人で顔を見合わせたのち、
「よかろうよ、だけど、お城も落ちるはずなア、お侍が、おなごを連れて逃げるになア」

姉娘の、いかにも侮蔑しきった言葉つきが右源太の胸に刺さった。たかが百姓娘、切って棄てるに仔細もなし、と一旦は思ったが、一人でも取り逃がしたら身の破滅とも思い、右源太は唇を噛んだ。

低い声で、

「なにことも我慢なされませ」

小近が囁やいたのへ彼はうなずいてみせた。

明けきつてみると、思いのほか広い納屋の奥に姉妹が隠れ、右源太と小近はそのままの場所で空俵を積み上げた蔭に潜んだ。

いずれにしても踏み込まれればすぐ見つかるような位置ではあったが、男手を城攻めの入夫に駆り出されたあとゆえ、姉妹も昼間は納屋に隠れ、夜だけ母屋で過ごすのである。小近が眼を覚ましたので右源太が眠った。城を抜け出るとき分け持った糶もあるにはあったが、食慾がなかった。眠っている間、右源太は夢を見た。

のように殉死を願い出たが、許されない。「松山で働いてくれい、それが予の最後の頼みぞ」

淋しく微笑して、実親は、こういい残したまま切腹の座に着いた。

籠城の将士も大半は退散し、わずかに残った者も、女子供に至るまで、己が命の助かるためなれば、実親の自刃を今や遅しと待ち構えたのである。

二

一体、鬼ノ身の城では、華々しい合戦もなく、若い城主の上田孫次郎実親が、降伏の条件として独り腹を切ってしまった。

その夜右源太は人目を避けて城中の仏前に忍び、実親の遺体に一礼すると、

「ただ今、お供を」

実親は備中松山の城主故三村家親の子で、家親が宇喜多の手の者に謀殺されたあとは、兄の元親が松山にいた。元親が毛利勢と事を構えたとき、毛利は宇喜多と結び、まず端城から落して廻る策を立て、鬼ノ身を囲んだ。

先を、白く艶やかな脇腹めがけて発止と突き立てようとした瞬間、

「お待ちなされて」

しかし松山からの付け侍までが寄手に内通する有様に、実親も今はこれまでと覚悟して、使者を送り自刃する旨を申し入れたのである。

声とともに、刃を控えた右源太の右手に縋ったのは、侍女の小近であった。

「えい、放せ、先を急ぐ身の邪魔立てされるな」

右源太は今若と名乗った幼年のころから実親に仕え、二十歳の春を迎えてまだ娶らぬ実親から格別の寵を受けていたこととて、当然

激しく振り切ろうとする右源太を、女はじつと見つめた。黒く濡れて輝やく瞳に、哀しみに似た翳が射した。手を放すと、

「では、お心のこりなく、……妾は、お前さ

まのお供をいたしまする」

静かに告げて坐り直した小近は、懐剣を抜き放ち、袖ぐるみ柄を両手に握りしめた。

「ば、ばかな」

右源太が驚いて叫んだ。相對死は武士の恥辱と思う。むしろ、もう一人だれかおればよい、二人きりではいかぬと思う。

「小近どの、人目につかぬうち、早う腹切らねばならぬ、拙者ひとりにしてくだされ」

憤りさえ覚えつつ、穏やかにいった。

女は首を振った。

「死ぬだけが忠とは存じませぬど、どうあつても右源太さまお腹召されますなら、生きて甲斐ない身と思い切っておりまする、お察しなされませぬか」

小近の瞳もまた火を噴くように激しい。もとより右源太とても、敵に一矢を報いたかった。

「殿を先立たせ参らせて、今さら松山の殿へお目どおり叶うと思うか」

譜代の臣としての苦悩が右源太には身を切られるように辛かった。

「ならば、常山城の奥方さまをお頼み申せばよいではござりませぬか」

そう小近が云うも道理、もともと実親には姉に当る、三村上野介高德の奥方が、小近を

実親の身边に侍らせたのである。

いつか実親の供をして訪ねたことのあった常山城の、険峻を利した、小さくとも堅固な構えが脳裏に浮かび、そこに淡いながら希望が持てるようであった。

迷う右源太の耳に、長廊下をこちらへ来る

人々の足音が、話ごえに混って届いた。

翌る朝、鬼ノ身の城を出て松山に向う人々を、二人は山蔭から見送ってひそかに常山城を指した。

夢はそのときのことである。

「ならぬ、わしはどうあってもここで腹を切る」

小近が止めたとき、右源太はいききった。

「それこそ犬死に等しい、おやめなされませ、生きて、常山のお城へ」

「ばかを申すな、その常山はいま落ちるではないか」

「奥方さまのお情け、何と思し召されます、それより妾は死にとうない、生きたい、お前さまと……」

取りすがる小近を突きおきのけざまに、右源太は刃を揮った。斬ってしまった、という後悔と同時に、ぎゃーっと悲鳴を挙げて小近は倒れた。……

誰かが彼の肘を押えた。

三

「放せ…… ううむ……」

呻いていたが、すぐ知覚が戻り、夢であった。だから常山と鬼ノ身が混ざって思い出されたのだ、と思いつつ眼を開いた右源太の耳に、

「誰か、参りましたぞ」



小近の囁やきが意外に大きく耳を打つ。

「母屋には人影もないが、ここはどうじゃ」

「おう、構うことはない、踏み込め」

二、三人が入り込む気配である。

寄手についた野武士どもがこの辺りまで来たのだと気づいたとき、それがまた落城を意味しているのだ、と右源太は思った。落武者の悲哀をしみじみと思った。

もっとも、それだけ考えるのも転瞬の間のこと、次の瞬間には、小近を隠して、不意を打たれぬように少しずつ後ずさりした。

「女の、匂いがするぞ」

叫んだ一人が拔身で空俵の山を突き刺している。もう隠れ切れないと感じた右源太は、壁ぎわを後じさりに戸口へ近寄った。

とにかく外へ出よう。狭いところで追い詰められては串刺しになるばかりだ。それに、小近や農婦らから雑兵どもを遠ざけねばならぬ、そう咄嗟に判断していた。

敵の注意が奥へ向いている間に、戸口まで彼は跳躍した。

「なに奴ッ」

「あッ、城の者だな」

振り向いた二人が叫ぶ前に、彼は、戸口に背を向けている手近の一人が振向く前に、その背を大脇差で割り付けていた。首筋から背

へ切り込んだと見て取る間もなく、右源太は身を戸口から躍らせて外に出た。

しかし外には、万一、と慮んばかっっていなくてもなかった敵の影があった。

納屋から十数歩のところ、柿の木の下に、一と目で荒武者と知れる、針のような髭の濃い武士が立っていた。

彼は無言で、右源太を阻むように立っている。

刀を八双に構えて、右源太は斜めに跳んだ。

納屋の戸口と、柿の木から、等分に離れた位置に身をおいたのである。

「上田孫次郎実親が譜代の臣、吉見右源太が最期の働き見しようぞ」

もう必死である。

この間に女どもを逃がし得たら、と思つたのは納屋を出るまでで、出てみたとき、

野武士の首領らしい男と対峙して、もう一切の迷いや思案は雲霧と散った。

ただ力の限り戦うまで、それだけを考えていた。

「待て、四郎、六兵太、控えろ、わしが相手になろう」



柿の木の下から、男が進み出た。刀こそまだ抜いていなかったが、眼は右源太の眼を見ていた。その言葉で、右源太は、納屋から出て来た野武士どもが背後にいるのを知った。右源太は足は動かさず、刀を青眼に付ける

と、甲高く、

「名乗れ」

と叫んだ。

大きくうなずいた男が低く圧えた声で、
「備中の住人、もと松山城主莊勝資の臣、篠木五郎兵衛」

この男こそ三村の先代家親に攻め亡ぼされ城を奪われた莊勝資の遺臣だったのである。

三村一族最後の拠点、常山城の攻囲にこの男たちが欣然と加わったことは疑いもなかった。

面魂を見ても尋常に戦って勝てる相手でない。晩春の陽が次第に西に廻り、柿の木の方角から射して来る。いよいよ不利になった右源太は、五郎兵衛の右手が大刀の柄にかかるのを見ながら、西陽を避けて左へ廻り込んだ。捨身の一撃しか念頭にないのである。

「若い、一応やるな」

五郎兵衛が静かにいって、抜いた大刀を大きく振りかぶった。その右足が、少しずつ前に出た。右源太の必死の構えを読んでいる。

そのときである。
納屋の戸口から女が走り出た。

背後で、五郎兵衛と右源太の動きを見ていた野武士どもの

横を走り抜けようとして、女は倒れた。小近である。

切られたか、と右源太の注意が小近に逸れたとき、彼の眼の前で白い光りが大きく孤を描いた。と同時に、右の高股に強い衝撃を感じて、彼はゆっくり膝をついた。

呻いて立とうとしたが、力が抜けていた。

「若い、刀を捨てろ、戦は終わったのだ」

五郎兵衛が油断なく構えながら云う。

「無念、斬れ…… 斬れ……」

「斬って何になる、もう貴様、まともには立てなからう」

太股の筋を、激しい大刀先が引き裂いているに違いなかった。齒がみして、右源太が刀を取り直そうとしたが、一瞬早く、肘を五郎兵衛の剣が、峰で打った。たちまちシーンと疼みが指先から肩まで走り、思わず右源太が落した脇差を、五郎兵衛は遠くへ蹴った。

そのまま振り向きもせず、
「来い」



倒れている小近の側に立つ二人の仲間に声をかけた。

「この女は」

「息を吹き返すだろう、捨ておけ」

峰打ちと、五郎兵衛は一と目で見ていた。

「篠木、見逃がせ」

四郎が急にいうと、片膝ついて腕と太股の痛みをこらえている右源太の肩口に、跳び寄って一撃加えた。何の得ものも持たぬ彼にとつて、それは鬭り殺しに等しい。たちまち右肩から血を噴いて、右源太は黒土にのめり込むように崩折れた。

「六平太、縄を」

もう一人の野武士に彼が指図した。

「四郎、また悪いくせが出たな」

吐きすてるようにいうと、五郎兵衛は、

「わしは行くぞ」

四郎が、

「ふん、わしはな、落城の時の、女房の死にざまを忘れてはおらぬわ」

そう口を歪めて叫ぶのへ答えもせず、歩き出していた。広い肩が左右に揺れ、そのたびに具足の金具が光っている。その後ろ姿を、肩からも太腿からも血を噴き出させた右源太の眼が、薄い膜を透したような明るさで見送っていた。

四郎と六平太が、氣を失ったままの小近に近づいて行った。

四

陽は、いつの間にか西山の真上にあり、一とひらの雲が、すっかり陽を隠している。

淡く白い雲が金色に縁どられて見えるのであった。残光に似て黄ばんだ明るさが漂う庭に、小近は乱れた髪と着衣を繕ろっていたが、不意にガバと突伏した。

そのかたわらに、柿の根もとで右源太は、瀕死の重傷を負ったまま縛られていた。

納屋の戸口から、百姓娘の妹の方が恐る恐る顔を覗かせたが、振り返って何か手真似するの、小近の震える肩から逸らした右源太の、もう力のない眼に映った。

「泣くな、泣いて、どうなるものか」

喘ぎながらいう彼の言葉の冷たさに、小近がビクッと泣きやめて首を挙げた。右源太の方を見たが、彼の眼の方向をたどって、娘た

ちの歩み寄る姿に気づいていた。

「妾が、悪うござりました。やはり仰せの通り常山で」

「いうなッ」

激しく右源太がさえぎった。常山の城では鬼ノ身から身を寄せた二人は、あたたかく迎えられ、そこでまた攻囲されるまで奥方に仕えたのであったが、いよいよ落城も間近と見えた昨夜、小近は奥方の情けで暇を賜ったのである。

どうしても今度こそ城と運命を共に、という右源太を、小近は、ただ生きたい、右源太と添い遂げたい一心で、城から脱け出させたのである。もっともそこには、常山城譜代でもない右源太を巻き添えにしては城士に代って腹を切った実親の遺志に反する、という考えの奥方の口添えもあったのではあるが……

「縄を、切ってくれ」

右源太は喘いでいった。落ちていた彼の脇差を持って小近は、柿の木に近づいた。

縄が切れると、辛うじて縄で支えられていた右源太の体が、切れた弾みでドサリと前に倒れた。

血が新らしく肩口から噴き出し、見る見る黒土に滲んで行く。首を挙げてキッと眼をみはった右源太は、

「もう暮れたか……、実親さま……このたびこそ……お側へ」

辺りの明るさが、もう彼にはわからないのだと気づき、小近が取りすがったとき、右源太が首を垂れた。

そのとき、もう命のないのを知って、せめて縄目の恥を避けようとした右源太の気持がわかるような気がし、あわてて彼女は縄をひとまとめにすると、少しでも遠ざけるように投げ棄てた。

娘たちは、恐ろしいもののように及び腰で二人を見ていたが、妹の方が、

「また死びとかよ」

ポツリといった。

人目を憚かって、少しずつ冷静を取り戻して来た小近は、その一言に籠った農婦の、憎悪に近い合戦への嫌悪を身に痛いまでに感じた。こうして、合戦のたびに斬り合い傷つけ合い殺し合った跡は、やはり荒れ果てた農地が、住みついた農民の重荷になるのだった。

「でも姉え、あの人、哀れでねえかよ、頼りにする人は討たれなかってよ」

妹娘が取りなすようにいう。しかし、姉娘はふんと嗤った。小近を見る眼が、青く光っているようであった。もっとも、右源太が息

絶えたときすでに彼女は覚悟を決めていた。
こんなことなら常山城で死ねばよかった、と
悔いが衝き上げて来たが、いずれにしても右
源太を追うより途はない、そう思い詰めてい
た。

「お前がた」

彼女は落ちついていったが、その異様な冷
静さに娘たちが不気味さを覚えたとき、むし
ろ微笑んで見せながら、

「妾は、もと鬼ノ身の城に仕えた吉見右源太

が妻、小近、ご迷惑ながら跡を願います」

二つに分けて隠していた金子の、一と包み
は奪われ、残った方を彼女は、端座した膝の
前、土の上に差しおいた。

「どう、なさるに」

姉娘が、さすがに膝をつい
た。

無言で小近は思いきりよく双
肌を脱ぎ棄てた。真赤な夕陽が
その横顔を照らし、練絹のよう
に白い胸のあたりまで赤く染め
ているのを姉妹が、ハッと吸い
つけられたように見つめた。

袖を脇差の刃に巻き付け
と、小近は眼を閉じた。常山城
の奥方の、十五歳にもなる嫡男
を持つとは見えぬ、苦々しく秀
麗な容姿が浮かんだ。わずか二
十四時間以前のことである。昨
日の今ごろ、彼女は奥方の最後
の身じまいを介添えていたので
あった。

根を白紙で結んだ奥方の垂れ
髪も、しばしの籠城の塵埃を落
して、つやつやと濡羽色を取り
戻していた。



その潔いまでに白い頸すじを、彼女は心を籠めて剃っていた。

（右源太はどうしてやる）

（はい、明日こそ、ともどもにお供申そうと

……、つい先ほど、お廊下で……）

（おお、会えたか、無事で重畳、が、供はな
りませぬぞ）

キッパリした奥方の口調であった。

美しく剃り揃えた髪ぎわを拭うて差上げながら、

（お方さま、なぜお供、かないませぬ……）

にわかに耳まで熱くなる思いで小近は叫ぶようにいった。

（心ざしは忝けないが、其の方ども、家の子でもないに殺すは本意ない、まして、実親が鬼ノ身で、城士の命に代って腹切ったは何のため、この夜半、城を脱けるがよい、妾もムザムザ自害などせぬ、一と戦って見しよう）
奥方はしみじみとした声音ながら、顔には常に変らぬ微笑を絶やさなかった。

（お方さま……）

一家一門もろとも、と覚悟した奥方の清く澄んだ瞳に合い、小近はたちまち涙が盛り上がるのを覚えた。

鬼ノ身以来、死処を求めて働く右源太とは反対に、いつまでも生きていたいと思う小近

は、自分自身にも浅ましきを感じないでは居れなかったが、人間は生きて行くために生きているのだ、そう本能的に考えていた。そしてその通り、渋る右源太を強いて城を脱けたのであったが……。

二十四時間を経たとき、右源太は斬られ、彼女は、汚された身をここに生きながらえていようとは、想像し得る最悪の状態なのであった。

汚されただけなら、まだ生きる望みは棄て切れなかったであろう。

合戦の前後、落城の女は殊に運命の哀しいものであった。

抗らえば斬られ、従うとしても斬られるかも知れなかった。

しかし右源太と小近を襲った野武士たちにしても、二人を斬り殺すまでの気持はなかった。反抗を抑えて奪い、汚すにとどまるものであった。

しかし、右源太を失ったことは彼女の未来に何の生き甲斐も感じさせない。そこへ汚辱の条件が加わっていた。

城を逃げ出したことに対して嘲笑を浴びせた農婦の目前で、夫は討たれ、彼女の身は汚されたのである。吾に返って眼を開いた小近は、

「鬼ノ身没落以来、腹切る折を求めていなされた夫に代り、妾が腹を切りますよ。よく見届けて、毛利宇喜多が手の者に、伝えておくれ」

いい終ると、堅く握った右手の脇差の切先を脇腹に当てがい、鏢にかけた左手で力一杯押し込んでいた。

ありようは、野武士どもに汚された体を思うさま苛なみたい、そんな気もして彼女は、女の身に最も惨烈な方法を選んでいた。

たちまち刃は白い光りを没し、小近はジリジリと腹をかき切って行った。

一旦引き抜いた刃を鳩尾に突き立てようとしたときには、さすがに手が震えていたが、「ううむ、汚された腹、切れぬとは……」呻きとともに、刃は彼女自身の体を裂いていた。

茫然と立ち尽くしたままの姉妹は、もう俯伏してしまった小近の背が、暮色の中に灰白く浮かび上がるまでを、息が詰まるような苦しさを覚えつつも見守っていた。

辺りに噴き溢れた血の色は、はや土に紛れ明らかでなかった。

ボクの仕事は、クツ磨きですが、街の一回30エンの磨き屋サンとは違います。もつと高級、お仕着せの金ボタンのユニホーム、自家用のシューシャインボーイです。

職場は、結婚式で有名な都心のT会館2階美容室の一隅、カーテンに仕切られた中で、T会館のサービスボーイという身分です。

お客様はここに来る良家のお姫様や奥様、外国女性も少くありません。もちろん男性はオフリミット。

カーテンを排して入ると、デンと置かれた豪華な高脚のイス。かければおみ脚が床上七〇センチに

来る仕掛けです。高価なドレスが汚れないようにみなさま、スソを高くまくり上げて、おすわりになります。

スラリとムキ出されたおみ足が開かれ、一礼したボクはうやうやしくその間へ首を差入れ、なめるように磨いて差上げるわけです。

★読者随筆

やわらかそうな、食べてしま

たくなるようなおみ足にはさまれ

てくらす楽しさ、他の誰にも、嗅

ぐことは許されない、かくわしい

体臭……高級香料のミックスされ

たそれを思いのままに、嗅ぐこと

もできます。こ

れでサラリーが

頂けるのですか

ら幸福です。

でも、ボンヤ

リしているとは

変です。『早く

してよ、グズ

ネエノ』と、勇

敢なお姫様から

イヤという程頭

を蹴られたこと

もあります。お姫さまの中には、

気がせくあまり、あわててイスか

ら下りようとして、ハズミに、ボ

クの手をイヤというほど踏んづけ

られるなんてことも珍しくありま

せん。

やわらかいクッションに身を任

す。クリームは、じかに指で塗る

とか、カカトについた、ガムの嚙

みだしは、自分の歯と舌で取り去

るとか、他の誰にもできない方法

でやりますので、かなり評判はよ

いようです。

ボクは、美し

いお姫さまのお

クツをいじるこ

とに生甲斐を感

じ、許されれば

ツマ先に口づけ

したり、クツの

底をなめさせら

れても平気です

あんなキタナ

イものをと云わ

れるかもしれま

せんが、泥ダラケでもトイレから

出たばかりでも、美しいお姫さま

のなら決してキタナイとは思いま

せん。だからこそボクは一日中熱

心におみ足の前にひざまづき拝む

ようにまごころこめて磨き上げま

お姫さまのクツを磨かせて頂
く、ボクは生きた便利な道具

I・K 生

ボクは、美し

いお姫さまのお

クツをいじるこ

とに生甲斐を感

じ、許されれば

ツマ先に口づけ

したり、クツの

底をなめさせら

れても平気です

あんなキタナ

イものをと云わ

れるかもしれま

せんが、泥ダラケでもトイレから

出たばかりでも、美しいお姫さま

のなら決してキタナイとは思いま

せん。だからこそボクは一日中熱

心におみ足の前にひざまづき拝む

ようにまごころこめて磨き上げま

す。クリームは、じかに指で塗る

とか、カカトについた、ガムの嚙

みだしは、自分の歯と舌で取り去

るとか、他の誰にもできない方法

でやりますので、かなり評判はよ

いようです。

お姫さまがたは、クツ磨きなど

人間とは思われず、せいぜい便利

な生きた道具くらいにしか思っ

いらつしやらないようです。

クツ下がズリ落ちたのを、わざ

わざ、カーテンの中へおはいり

なって直したり、ハンドバッグや

ポケットの中のチリ紙の不用にな

ったのをボクに捨てさせたり、雑

用まで命ぜられます。

脱いだおクツをお磨きすること

もあります。汗や脂に、黒ずんだ

内部や敷皮の、あの、むれるよう

な、スエタにおいもすばらしいも

のです。踏まれてみたいおクツ、

食べてしまいたいようなおクツ、

そして形容しがたい美しいおみ足

に囲まれるボクは幸福です。

明治時代の女権無視

★法律も慣習も女の身に酷く行われていた★

★開化とはいえ封建の尾を引く時代のお話★

○初夜権奇談

極言すると昔の女は、不幸になるために生まれて来たようなものだ。

美しさ、女に不幸のみ与え——と、川柳にもそんなものがある。

売買婚でないにしても、結婚が女に幸福を与えるとは決していいきれないものがあつた。

一般的にみて不幸の方を約束する公算の方がはるかに大であつた。

河西恒一
カッタ・秋吉 巒



しかし、女は誰でも結婚の前後には甘美なる幸福を胸に描き、期待するであらう。

それがやがて次第に裏切られて行くか否かはともかくとして、かりそめの幸福ぐらいなら誰の場合にもあるはずである。

ところが——結婚当日の初夜から完全に人権を踏みにじられる女たちの例が、一部にはあつた。

昔は、地方によつては「初夜権」と称する悪習の行なわれたところがあつた。

これは夫となる者の父か、または仲人の男がまず花嫁と同衾し、しかして後に「花婿対花嫁」の初夜がようやく許される——という奇々怪々な悪習であつた。

どういふ理由でこんな習慣が生まれたかは知らぬが、これでは新郎新婦の立つ瀬がない。

「初夜権」は日本ばかりではなくヨーロッパでも昔は行なわれていたという。

広辞林には「(一)ヨーロッパの封建時代に、領主地主などが、管下の

裏窓殘 酷物語

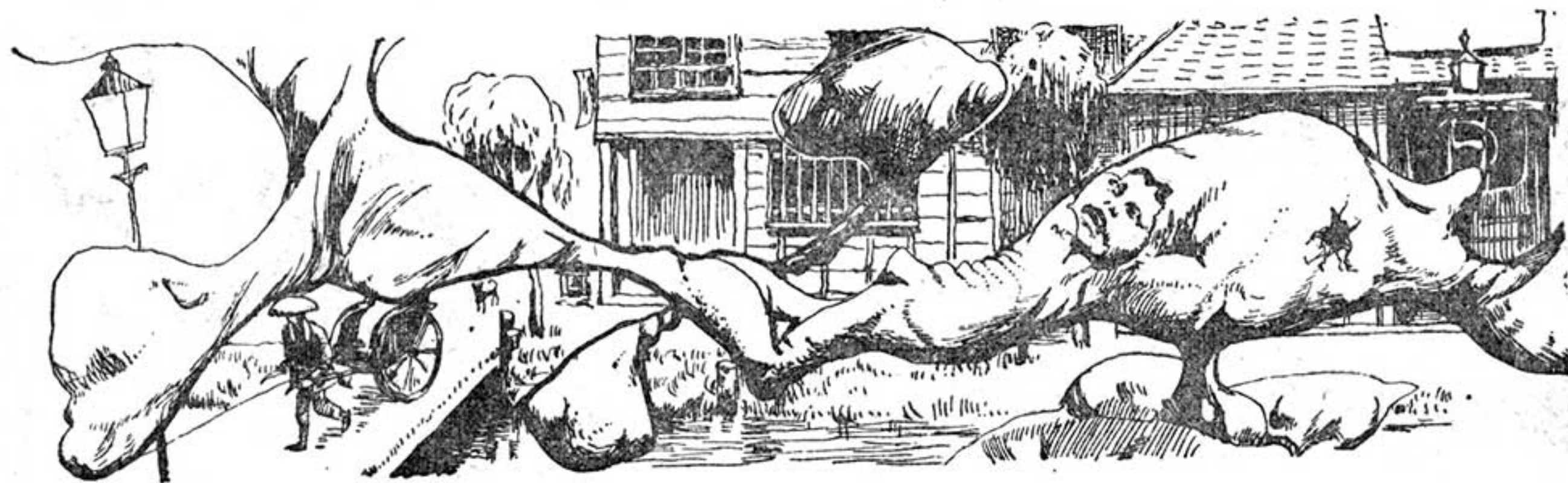
処女に対し、新郎に先だちて行ひし同衾の陋習。(二)新郎にあらざる男子が、新郎に先きだちて行ふ処女との同衾」と出ている。

この悪習が明治になつてもまだ続いていた土地があつたのである。

以下は明治十六年一月に宮城県宮城郡花巻ヶ浜という村で起つた出来事を当時の新聞が伝えたものの――。

水島治右衛門といへる老夫が倅の治作(十八)へ、同村大内某の娘おとみ(二十二)といふを貰ふ約束調ひ、去月二十四日を黄道吉日とし、其の夜に婚姻の式を行ひしが、例に依つて宴席の次の間へ衾を設け、屏風を立

廻したる中へ新郎のおとみを誘ひ、父治右衛門が入りて一寝したるは未だ宵の九時頃なりしが、何時まで立てど舅と嫁は出で来らず、早や曉方の二時ともなれば新郎の治作は、親類の手前と云ひ自分も余り馬鹿々々しいと堪え兼ねて、父を呼びしが更らに返辞が無きゆえ、屏風押し明け夜具引き捲れば、コハ如何に治右衛門とおとみの二人は、何時の程か息絶えて五体も冷えて居たるにぞ、治作はもとより来客の人々も婚礼が交じて葬礼と成りたる騒ぎに、其の混雑は一方ならず、これぞ二人は前世からの宿縁にて、斯る事にて死ぬといふ約束ならめ、さらば二つに引分けるより、此の儘一つに葬る方が当人共の本望ならんと、二人振の棺を拵らへ同二十六日先祖代々の墓の側へ二人の死骸を埋めしといふ。(明治十六年二月十五日付、郵便報知新聞)



○暴虐な色魔医者

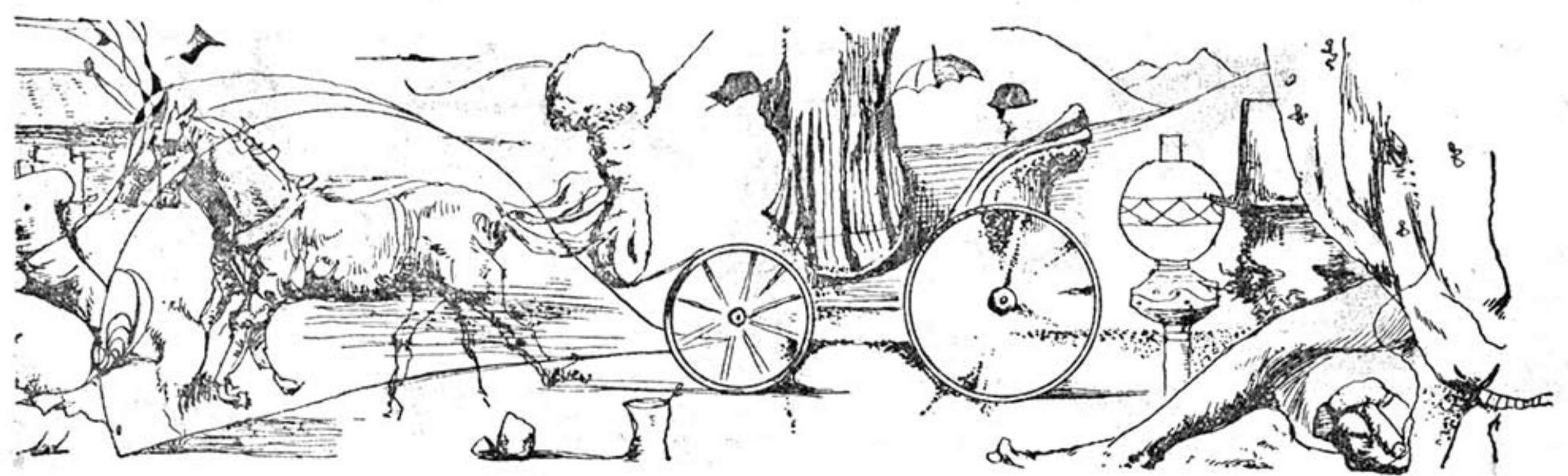
明治七年の東京は浅草に起こつた事件で、はなはだ暴虐な医者のお話を御紹介してみる。

少し長いが一篇のトルーストリーイとしても、その全文を紹介する価値があるものと思う新聞記事を、明治七年十二月二十七日付の東京日々新聞より――。

浅草瓦町に北川おりよとて薪炭渡世の寡婦あり。其の子金之助、去年六月中病氣に依りて奉公先より療養の為に帰りけるが、近辺には医者も無かりければ、隣町裏門代地に住める花岡幸庵と云ふ医者に療治を乞ひ日長女のおふちを薬取りに遣はしけるが此のおふちは四年前より目の内に星を生じ居るを見て、かの幸庵より今の内にはやく療治を為さば全快すべし、併し通ひ療治にては行届かず、必ず我方に引越すべしと云ふにおふちは只、目の直したさに頼に母に相談して幸庵方に寄宿し

療治を受けし間に、外の技術をも施せしにや、十月下旬に至りて遂に幸庵よりおふちを妻に娶りたき旨を云ひ込みければ、母おりよは今更いなみ難く、親類へ談合し媒灼をも入れて十月十六日衣類諸道具等を調へ随分手厚くし支度して婚礼を行なひたりしが、其の後三十日ほど過ぎて又馬喰町辺よりおときと云ふ女を妾に抱へたれども（妻妾同居である）其の女一泊して翌朝たちまち逃げ返りたれば、幸庵怒りて自から追ひ行き連れ来たり其の後は厳しく用心して一寸も外へ出さぬ様にしけるに、十二月中小ごろ少し雪降りて寒き夕がた、妾おとき銭湯に行かんと乞ひしかば幸庵その逃去らん事を心配して、妻ふち先妻の産みたる娘おはな門人清之助ならびに下女等を添へて遣りにし、湯屋に至りておふち等は裸体に成りしが、妾おときは帯を解かんとして未だ脱がず又直して一寸と小用にと出で行きしまま何

時迄も帰り来らず、おふち等はスハとて俄かに之を捜せども更に行方知れざれば、詮方なく急ぎ宅に帰りて斯（こう）と告ぐるに、幸庵大いに憤りおふちを奥の一室に連れ行き戸を切り無理に酒を飲ませ丸裸にして後手に縛り置き、何ゆえ妾を逃がしたかと責めつつ無暗と是れを打擲して面部その他に数ヶ所の黒痣の出来る程の目に合はせたる上誠に申し訳なき趣の書付を取り、其の節娘おはなが癆症の様なればとておふちに看病を申し付けたりしが、其の後は益々残酷なる仕向けのみ多かりければ日々忍び泣き暮しける。幸庵は再び常陸の国下妻辺よりおよねと云ふ女を迎へて妾と為したりしに、本年六月三日娘おはな病死して三日目の墓参りに、おふちが紋付の帷子を取りておよねに与へ、おふちには薩摩木綿の単物を着せければ、おふち其の服称はず（つり合わず）とて不平を鳴らすに依り、幸庵怒り



て兩人を止め置き自分一人にて墓参りせしが其の夜三時頃、俄かにおふちを引き起こし赤裸にして一間に連れ行き手足を縛りおき夫へ向つて口答えせし段不届至極なりと罵りつつ棒を以て頻りに打たたきけるに、身中処処紫色に腫れ上りて痛み苦しめり。

○例の通り虐待

まことにひどい男もあつたもので、病氣治療を口実に女を誘惑し、結婚後一ヶ月にして妻妾同居をさせ、妾に逃げられたからといって妻に酒を無理に飲ませて全裸にして縛り上げ、折檻の上で「詫び状」まで書かせ、正妻に粗衣を与え、その不満を口にしたからとの理由で赤裸にして縛り、棒で打った——というのだから、ただ単に「暴虐な亭主」というだけではない執念深さがある。

新聞の記事は、その執念深さや悪どさがさらにますます激しくなっていく様子を伝えているが――

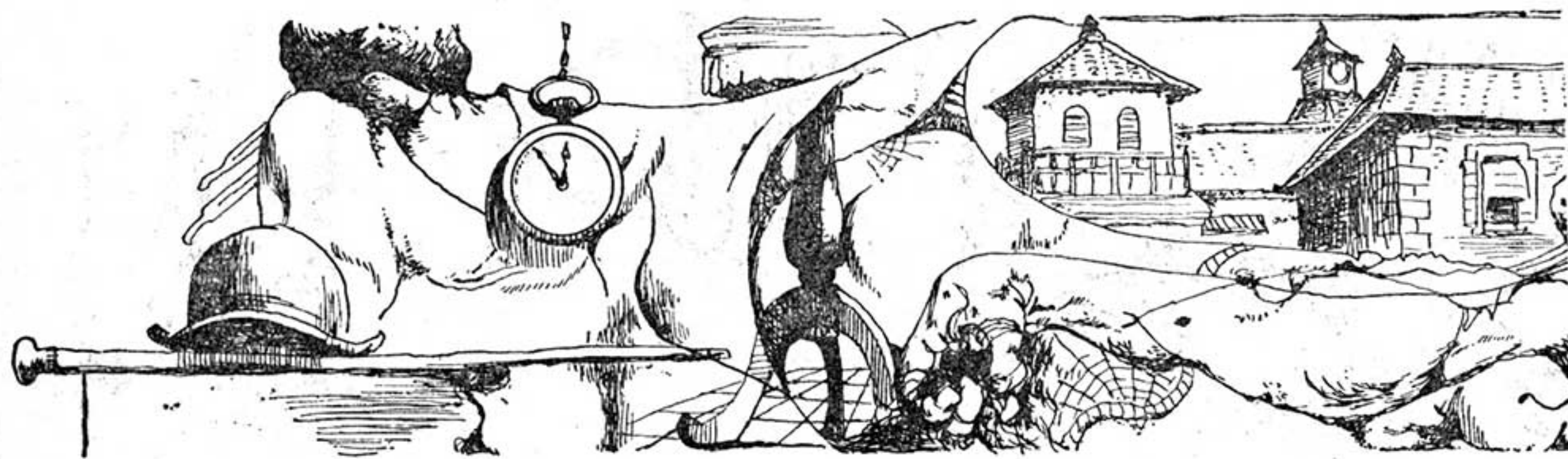
実は、幸庵の新妻虐待のかげには恐ろしい動機がひそんでいたのである。

再び新聞の記事を続けてみよう。

其の後、妾およねにも暇を出しけるが、八月三日の夜半すぎ又々おふちを一間に連れ行き例の通り、縛りおきて、其の方こと不義（姦通）せしに相違なし、隠さず白状せよと責め苦しめけれど、更に覺なき事なれば何とも答へずして只苦痛に堪へず泣き叫び居たるに、只不義せしと云はば縛を解き許すべし、さもなくば何時までも責め苦しめんと云ふ故、せんかた無く不義したりと一言云ひしかば、速かに硯箱を持ち来たり強っておふちより不義致したる段申しわけ無きとの書付を取りおき、さて幸庵いはく、我が門人清之助もし兩三日の中にと来る事あらば一間へ伴なひ縋り付くべし、其のとき我は屏風の後ろより現はれ出て密通なりと取り押へんと云

ふ故、おふちは人に悪名を負はせる事気の毒なりと答ふるに、其の儀は少しも仔細なし只この旨よく承知せよとて其の夜は共に臥したるが、翌日かの清之助ふと来たりけるに幸庵は速かに物蔭に隠れたれども、おふちはさる馬鹿らしき真似もなし難しと思ひ平生の通りに挨拶して差し置きたる故、幸庵は待ち兼たるにや奥より出で来たり清之助おいでかと云ひつつ無理に奥へ連れ行きければ、おふちは如何なる事の起るやも知れずと恐れて瓦町の母がもとへ遁げ帰り其の始末を語りしかば、母おりよ大いに驚ろき直ちに同道して幸庵方へ行きたれば、今来客なりとて玄関に待たせ置きしが暫らくして幸庵いで来たりおふちを奥へ連れ行かんとする故、母おりよはいはく我いま此の場に在る上は我が目前にて談判すべしと。

幸庵怒りていはく其許（そこもと）は面倒を好まるるや表向き



にする心得なるや、此の度の事は我は内済に取り計はんと思ふ故に清之助おふちを別間へ連れ行かんとするなれども其の了簡ならば媒約人を呼ぶべしとて使を遣りければ、横山町江戸屋右衛門来たりけるに母子は是に任せて漸やく此の場は事済みたり。其の後幸庵より種々母子を欺き誘しておふちを妾に抱へたる事に書付を取り、八月二十日下総の国木間ヶ瀬村鶴岡勘次郎が娘おさいを迎へて本妻とせり。

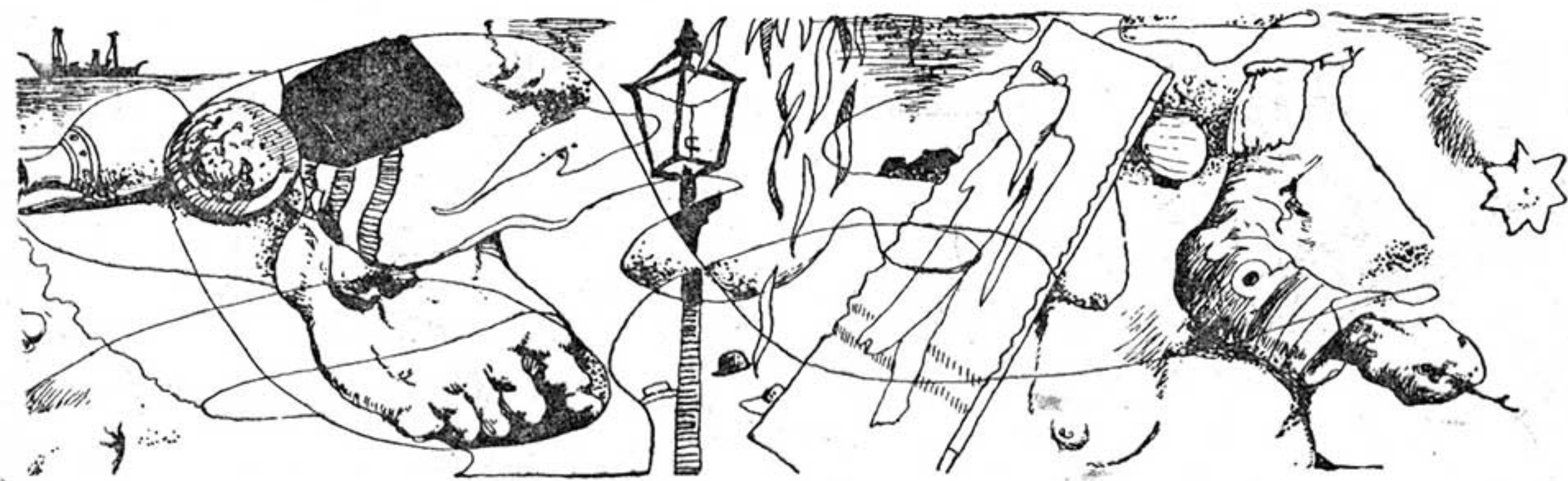
然るにおふちは兼て懷妊して居たりけるが十一月十三日産に臨みたれども、幸庵少しも構はず漸やく出産したる後に穩婆（産婆）を呼びしが、産湯を沸かすは費（ついで）。勿体ないの意なり水にて洗らへと云ひ付くるに穩婆もあきれて、水浴は宜しかるまじとて只汚穢を拭ひ取りしばかりにて早々帰り去りたり。翌日に至り幸庵鏝を以て嬰兒の臍帯を切りて去年死したる

娘の古衣を着せ置きけり。産婦には米飯は毒なりとて日々小豆を煮て其の汁を飲ませ、小豆は砂糖をまぜて幸庵が飯の菜となせり。さればおふちは乳汁の出すくなくして小兒も肥立ち悪しければ日々ただ心を痛め居たりしが此の月一日に至りて幸庵いはく、近ごろ入費多く掛るに付き妻を離縁し妾に暇を遣はすとて、おふちを親元瓦町へ送り返したり。

其の後幸庵また瓦町に来たり種々の事を云ひ掛け或は威しなとせり。是は嫁入りの時持ち行きしおふちが衣類諸品をも返さぬ策をなさんとの下心なるべし。右様の次第に付きおふちが母北川おりよは、たとえいかやうの事にて夫に背くは婦道に非らずとこそ是までは常々我が娘にも諭したれ、離縁せらるる上はモハヤ縁なしと嬰兒を抱き母子三人にて本月十四日第五大区一小区の屯所へ訴へ出たるに屯所より警視出張所へ廻され双

方呼び出されたるに、幸庵より自談（示談）致し度しとて三日間の日延べを願ひ出たるよし。其の後多少の紛縛ありて去る二十三日双方裁判所へ呼び出され吟味ありし由、未だ其の裁決の如何を知らずと雖も幸庵が奸点もとより芝居中に伝ふる所の村井長庵にも劣らざるべしと聞く。

此の幸庵は下総国岡田郡蛋曾根村の農、渡辺利左衛門が二男にして曾って北海道の松信嘉吉方に厄介に成り居しが去年六月二十日この浅草新片前六番地にト居し医業を開けり。年はまだ三十に満たず丈高く色白く容貌美にして衣服もまた常に美なり。又曾って富人の女を娶り妻とせしが密かに朋友に勧めて之れに姦せしめ遂に妻の家に迫りて内済金三百円を取り、是を資本として高利貸しを始め今専ら活計をなせり。蓋し此回の一件は寡婦おりよが蓄財を掠めんと欲つして成らず却って其の忿を



おふちに洩らすものならんか。というのである——。

○男女同権のハシリ

要するに幸庵が妻を迎えるのは姦婦の汚名を着せてその実家から金を取るのが、目的だった訳である。

まだ三十前の若さで、新聞記事に現われただけでも五人の女を妻や妾にし、しかも妻妾同居を常としている奴だ。

恥も外聞もなく、ただひたすらに「わが道を行く」完全なる色魔である。

一方、おふちの方は完全に近い忍従する女だ。

「ひとたび嫁してはその家を出でざるを女の道とする事、古聖人の教えなり。若し女の道に背むき、去らるる時は一生の恥なり」という女大学の言葉の通りに、あらゆる虐待を堪え忍んでいたのだからアテがはずれた幸庵は腹いせにますます「例の通りに裸にして縛り上げ——」というような所業を続

けていた訳である。

昔は、こういう「妻妾同居」などという事例は特に珍らしくもないことであつた。

第一、「新律綱領」などという明治初期の法律では「妾」というものの存在がレッキとして認められていたほどであり「妾を置くのは男の甲斐性」ぐらいに思われていたのである。

欧化主義の急先鋒であつた森有礼や福沢諭吉などは、しきりと、「廃妾論」をとねえたがこういう事柄はなかなか、一朝にして改まるものではなかつた。

「明治教育史料雑考」という書物は、当時の廃妾論問題に関して次のように伝えている。

森有礼氏の廃妾論には、賛成者が多かつた。福沢諭吉氏の如きも其の一人である。福沢氏は「妻妾並んで一屋に住まば、金殿玉楼も亦畜生小屋なり」と叫んだ。併し当時の世の中から、此の弊風を除くことは中々困難

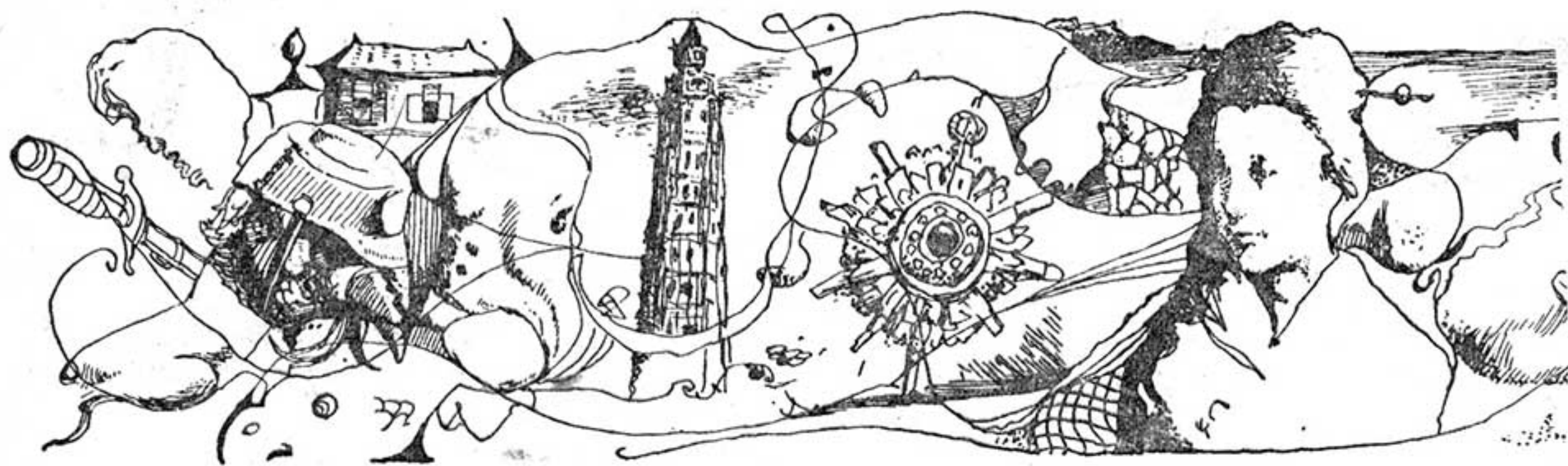
であつた。廃妾尚早論といふやうな奇説も現はれた。夫婦の人間倫に関する森氏の意見は、大体に於いて穏当なものであるが、あまりにも外国の風俗を尊重し外国の思想を讃美した点は、国粹主義者から常に烈しい攻撃を受けた。云々――

後に森有礼は、明治二十二年二月十一日、憲法発布の日の朝、西野文太郎という国粹主義の青年に刺されて落命した。

廃刀論を真つ先に唱え、男女同権を率先して実践したのも、この森有礼であつた。

明治八年、二十八歳の森は十九歳の妻を迎えたが、その際に彼は婚姻契約書なるものを作つて世人を驚ろかせた。

第一条 自今以後森有礼、広瀬阿常ヲ其ノ妻トシテ広瀬阿常ハ森有礼ヲ其ノ夫ト為ス事
第二条 双方存命ニシテ此ノ約条ヲ廃棄セザル間ハ共ニ余念ナ



ク相敬シ相愛シテ夫妻ノ道ヲ守ルコト

第三条 有礼阿常夫妻ノ共有スベキ品ニ就テハ雙方同意ノ上ナラデハ他人ト貸借或い売買ノ約ヲ為サザル事

右ニ掲ル所ノ約条ヲ為シ一方犯スニ於テハ他ノ一方之ヲ官ニ訴テ相当ノ公裁ヲ願フ事ヲ得ベシなどという条項を含む当時としては破天荒な文書を作つたのである。

特に「共に余念なく愛する――」の余念なくが面白いと云つて大評判と相成つたが――しかし、これはまあ、つまり「浮気などは致しません」というつもりの文章だったのだろう。

○墨の貞操帯

妻、または夫たる者が最もしてはいけない事柄は、すなわち「浮気」である。

従つて夫、または妻が最も惧れる事柄は「配偶者の浮気」だ。

だから、特に根拠といえるものはないのに、ただ、相手に全面的な信頼をおくことができないため嫉妬深い人——などという存在が往々にしてある。

もとより嫉妬というものは愛情から起こるものであり、つまり「偵察機」みたいなものであるから、本来、決して、無益なものではない。

「美的嫉妬」などはなかなか結構なものである。

ただし、何事もケタはずれなのは困りものだというような話を、明治の新聞から。

深川区森下町の人力車夫萩原林蔵（三十）は至って恪気深き男にて、毎日職業に出る前には女房のおかつ（二十五）の何処かへ墨にて印しをし昼飯に帰る時篤と検ため、それから又た印しをして出掛ける故、女房も馬鹿々々敷くはありうるさくも思へども是は又た名代の朴なる女なれば亭主の為す如くに任せける

が、此のころ林蔵の弟の亀吉と云へるが同町に引越して曰く、此処へ遊びに来るを兄は大不承知にて云々。

それより後は昼の一度では済まざず日に三四度も帰り来たりて亀吉が来て居れば大腹立ちにて当り散らす。

さなくても臭ひが変だ、色が怪しい、と下手な衛生家が、土用の牛肉を買ふ如くやかましく小言を云ふ。

おかつも堪へ切れずして四五日前に本港町の親類某かたへ逃げ行き委細を話して、とても私には辛抱が出来かねますと云ふ折から林蔵は例の検査に戻り来たり。おかつが居らぬに狂気の如く諸方を尋ねて遂に此の家へ来たり。

女房の顔を見るより怒鳴り込みて手を取って連れ帰らんとするを某は止めて、是迄の心得違ひをいろいろと説諭しければ、林蔵は一言もなく謝り入りて帰るが、それより一層右の検査



が厳しくなり、其の後仕事にも出ずして朝から彼れ是れと口喧ましく罵りければ、流石のおかつも愛想がつきて一昨日其の筋へ訴へ出でしとぞ。

是は女房の苦情がもつともらしい。（明治十二年十一月十七日付 東京日日新聞）

というのであり、女房のどこへどういう印しをつけたのかは、御想像にまかせる。

こういう事件は、まああるものと見えて、郵便報知新聞の明治十六年三月十日付の記事にも似たようなものがある。

——略——横山町の人夫和泉三吉（三十五）は、異常なる性格にて、すこぶる疑心深く、おのが女房まつ（二十八）間男しおるやの如く思いこみ、男の越中のごときもの着けさせ、糸にてとめ、仕事に出ず。戻れば必ずその糸どめを検めたるが、さて女房、小用のときは如何せしにや……と、いうのである。

白い壁

深森映士



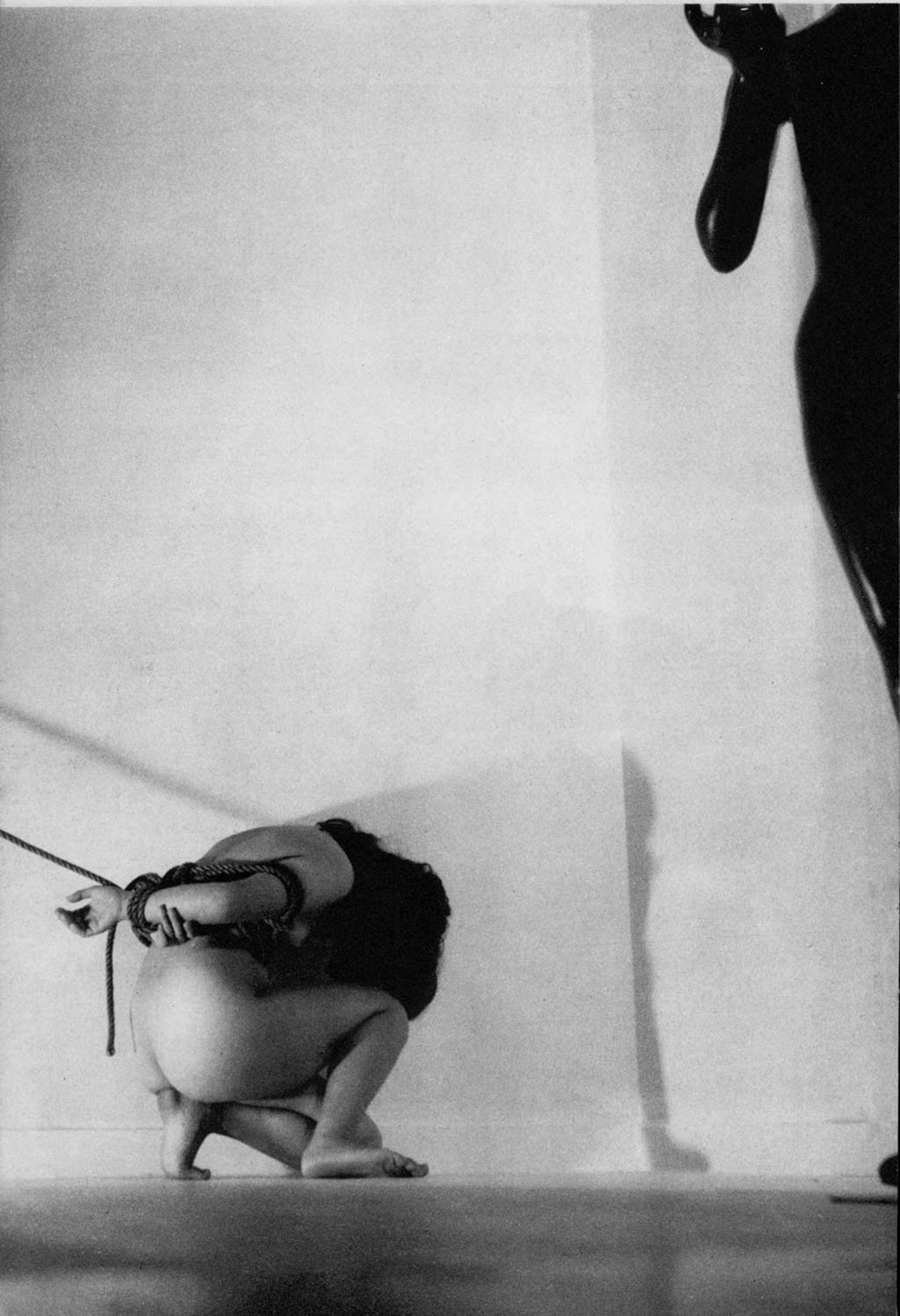














緋恋罪業記

藤見 郁 作
畫



① つめたい風

つめたい風が、わたくしの頬を叩きました。柱がまっすぐにひき起こされ、わたしは宙たかだかとさらされたのでした。たいていの女は、ここで気を失って首を垂れるのだそうです。けれども、わたしはまだ正気でした。たくさんの人が、わたしの眼の下におりました。寒風にさらされて、ふるえながら、わたしのからだを見あげております。

ふるえているのは、寒さのせいばかりではなさそうでした。磔柱にのぼった一人の若い女が、もうすぐに非人の槍で突かれ、まっ赤な血を流して苦しみ死ぬだろう——そのおそろしい見世物を前にして、きつとふるえているのでしょ。

わたしの両腕は左右にひろげられて柱の横木に縛りつけられております。胸にもおなかにも足にも、ぎっちり縄がかけられ、磔柱に縛りつけられておりました。

わたしは、わたしのお仕置きを見に集まっておいでのご見物衆のなかから、たった一人のひとを探がしました。

そのおかたは……ああ、お顔がみつかりました。若旦那、伊之助若旦那さま……。まるでご自分がお仕置きされるような、まっさなお顔で、わたしを見つめています。わたしは、そんな若旦那を励ましでもするように、磔柱の上から笑顔をおくったのでした。

② 女 師 匠

そもそもは、女中ふぜいのわたしが、若旦那さまをお慕いしたのが、いけなかったのです。

いいえそれよりも、一番いけないのはわたしの心のなかに——からだのなかに息づいている。あの不思議な、みだらな虫なのでしよう。女のからだの業の深さを、しみじみとおそろしく思います。

いまから、みつき前の、あの暗く降りこめた秋の雨の夜——。

根岸の別宅に起き臥している若旦那さまのもとへ、いつものように常盤津の師匠をしているお艶さんが忍んできた、あの雨の夜、ふとのぞき見た毒しい戯れ事の模様が、わたしの胸に狂おしい火をともしたのです。

「お千代、お前、今夜はもう、早く寝ておしまい」

若旦那が、わたしにいいました。ちょうど十本目のお銚子をお居間に運んだときでした。

「そうよ、いつまで起きていることはないよ。お前さん、早くおやすみ」

お艶さんが、若旦那の尻馬にのっついていいました。

「はい、それではおさきに、やすませていただきます」

わたしは頭をさげながら、お二人の仲を嫉妬しておりました。

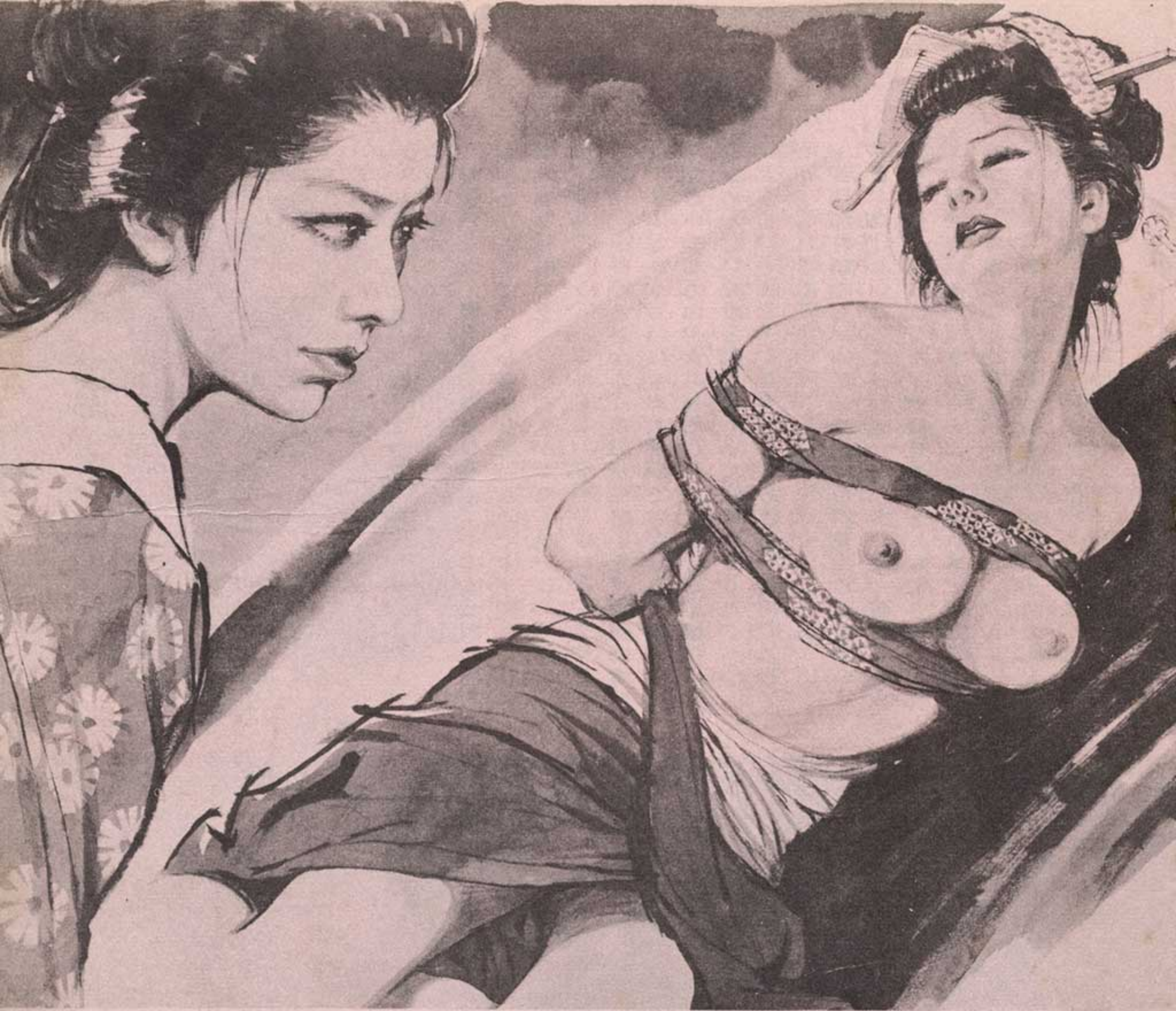


③ 夜のむき玉子

神田左衛門河岸に、大きな材木商を営む木曾屋。ご当主が重兵衛さまと申され、かくしやくとご健在。そのご長男さまが伊之助若旦那。

ところが、この若旦那さまがたいへんなお道楽好きで、お店の仕事をほうりだし、お金を盗みだしての放蕩三昧。とうとう大旦那さまのご勘気につれて、伊之助さまはこの根岸のご別宅へ、むりやりに若隠居、とでも申すべきお身の上になりました。

大旦那さまのおいっつけで、わたしが伊之助さま附きの女中として、この根岸へお供して参ったという次第なのでした。けれども、親御さまのお眼を離れたのをさいわいに若旦那さまのご道楽は、かえっておさかんになり、怪しげ



な女師匠をこうしてお家へひき入れてのご酒宴。

嫉妬ばかりではなく、やきもきするのです。

女中部屋の布団のなかに身を横たえたものの、わたしはなかなか眠りにつくことができませんでした。お艶さんが今夜もまたこの家に泊っていくことは、わかっています。

(しかたがない……)と、わたしも思うのです。

お艶さんは江戸育ちの遊芸の女師匠、お器量もお姿もお美しいし、男の心をとらえる手練手管も、ぞんぶんに知りつくしていらしやる。

けれど、わたしだって、いままでに若旦那のおなさけを頂戴した夜が、二度や三度ではなかったのです……。

わたしはつい寝そびれ、知らず知らずのうちに、いままでの若旦那のことを思いだし、すると、疳ばかりがたかぶって、とても眠るどころではなくなりました。

とうとう辛抱できずに、わたしは起きあがりました。膝で這うようにして、若旦那とお艶さんがいる、奥の居間のようすを、うかがいにいきました。はしたないこととは知りつつ、襖の隙間から、そっと中をのぞいたのです。

(あッ！)

思わず、わたしは声をあげるところでした。

あろうことか、お艶さんはわずかに腰のもの一枚の裸でしごきでうしろ手に縛られていたのです。行燈の灯にてらされて、むき玉子のように、しらじらと光る素肌の艶。眼に痛いような緋縮緬の色。腕を縛りあげた緋しごきの色。わたしは、自分の眼をうたぐりました。ねぼけているのか、それともこれは夢なのだろうか、と。

④ 歯ざしりもだえ

（お艶さんがなにか粗相をして、それで若旦那に叱られて折檻されているのだ、それにしても縛るなんて……）わたしは、そう思いました。しかし、それは間違いでした。お艶さんは叱られていたのではなく、なんと、可愛がられていたのです。

「痛くないかね、師匠」

若旦那が妙にうわづった声音で、女にききました。

「いいえ、ちつとも。もっときつく縛っても、あたしやよござんすよ」

お艶さんは、痛そうに眉をひそめ、そのくせ眼の色をうつとりさせて、そんなことをいうのです。形よく熟れた大きな乳房の上に、しごきがかたく喰いこんでいました。なんという、むごたらしい眺め。けれど、くやしいことに、小さいときから江戸の水で磨いた女師匠の素肌は、まぶしいくらいにきめこまかく、うしろ手に縛られたむごい姿なのに、女のわたしが見ても、不思議なほどなまめかしい光りと影をつくっているのです。

「ようし、それじゃ、もっとしめあげてやるぞ。これでもか、これでもか！」

若旦那の顔にも、いままでわたしが見たこともないような、はげしいよろこびが光っていました。若旦那は衣紋竹を取りました。衣紋竹の先を、お艶さんのお乳にかかっているしごきの下にこじり入れて、ぐりぐりとゆすりあげるのです。

「あ、あ、あ」お艶さんは肩をゆすつてのぞけり「わ、わ、若旦那、たまらない、あたしや、たまらないよう歯ざしりしてもだえました。」

⑤ 煮えたぎる血

もだえながら、お艶さんのからだは、畳の上に横倒しになりました。緋縮緬の湯文字の裾が大きく割れて、雪よりも白い内腿の肌が、ひくひくとふるえていました。

「も、もっと若旦那！ もっときつく！」

「こうか、こうか！」

衣紋竹の先を、緋しごきと素肌の間に、なおもこじ入れて、若旦那は自分が責められてでもいるように、熱っぽい息をはずませてうめくのです。若旦那の眼は赤く血走り、額には玉のような汗をうかべておりました。

（きちがいだ、きちがい師匠だ！）と、わたしは思いました。といっしょに、いままでにはいはい嫉妬が、わたしの胸のなかに火よりも熱く煮えたぎっていたのです。若旦那を、これほどまでに夢中にさせる女を、殺したいほどに……。



わたしののぞき見を、若旦那も女師匠もすこしも気づきませんでした。同じ屋根の下にいる女中への気づかいなどは、そのときのお二人には、小指のさきほどでもなかったのです。まるで、けだものが戯れるように、雨の降る夜を、いつまでもそうして、狂いまわっていたのです。緋しごきと衣紋竹の筈で……。

（負けるなるものか、あんな女狐なんかに、若旦那をとられてなるものか！……）わたしは自分を忘れました。頭に熱い血がのぼり、膝を握りしめて、不遜な決心をしたのです。





⑥ 作意の粗相

それから二、三日あと、わたしは頃合を計って、若旦那の眼の前で、若旦那がたいせつにしていた三味線に、わざと足をかけて蹴り膝で踏み折ったのです。

「あッ、なにをする、お千代！」

若旦那は顔色を変えました。その三味線は“弦月”とかいう名をもち、お金をだしても容易に買えないという名器だということを、わたしは知っておりました。

「これは、とんだ粗相をいたしました。どうかおゆるし下さいまし」

わたしは、畳に額をこすりつけました。

「粗相？　じょうだんじゃない、あたしの眼を節穴だとも思っているのかい、お千代。お前は、わたしの前でわざとこの三味線を踏みつぶしたんじゃないか。あたしに、どういう遺恨があるんだ、いえさ、恨みがあるんだ」



⑦ 遊蕩の果て

「よし、それじゃ、折檻してやる。さあ、着ているものをぬげ、みんなぬぐんだ！」

若旦那は、怒りをおさえたふるえ声でいいました。わたしは黙って帯を解きました。わたしの胸も、波にうかんだ木の葉のようにおののいていました。こんなことで、若旦那の心をとらえることができるのだろうか。

「腕をうしろへまわせ！」

わたしは、いわれたとおり、左右の腕を、すなおに背中になわしました。すると若旦那は、しごきではなく、今夜は長い細引で、わたしの手首を重ねて縛りはじめました。こんな細引を、いつ用意されたのでしょうか。

これもきつと、あの女師匠を縛るために用意したのにちがいない、とわたしは思いました。わたしの胸はまた嫉妬に騒ぎはじめました。みんな、みんな、あの女狐が教えるのです。

女を裸にして縛り、衣紋竹の筥で突いたり叩いたりする——みんな、あの海千山千のしたたか女が、若旦那に教えこみ、やらせたにちがいません。道楽好きで、女好きで、げても遊びが好きで、あらゆる遊蕩をきわめつくした若旦那にとっても、こんな不思議な、気味悪い色事は、きつとはじめてだったのです。あの女は、こういうあくどいやり方で、若旦那を自分のものにしようと企んでいるのです。

よ、さあ、それをお言い、お千代！」
若旦那はわたしの髪をつかみ、力まかせにぐいぐいと畳にねじ伏せました。

「どうかおゆるし下さいまし、若旦那さま、わたしの粗相でございます。どんなことをしても、おつぐない致します。どんな折檻でもおとがめも、お受けいたします」

折檻、という語句に力をこめて、わたしはいいました。それはわたしの誘い水でした。案の定、若旦那の眼に、妖しい光りがよぎったのです。

「どうだ、お千代、痛いか、苦しいか」

若旦那は、せわしい息を、わたしの襟すじに吐きかけていいました。

「いいえ、ちつとも痛くはございません」

わたしはこたえました。痛くないはずはありません。細引は素肌に、容赦なく噛みこんでくるのです。女のようにかぼそい若旦那の腕に、よくもこんな力があるかと思うほどに強くわたしの両手や胸を縛りあげるのです。

「アア、ムム、ムムッ！」と、ついにたまりかねて、わたしはうめきました。両足も、足首をそろえてくぐられ、その縄尻を、手首の結び目につなげて、ぎりぎりとしめあげるのです。わたしは全裸の恥しさも忘れて、畳の上をころがりまわったのです。



⑧ みだらむし

けれども、ほんとうに奇妙なことでした。素肌の身に、ひしひしと喰いこんでくる苦しさ痛みのなかに、わたしは、いつとはなしに一筋の心地よさを覚えはじめていたのです。

痛いことは、たしかに痛くつらいのですが、その息づまる苦しさの底から、なにかこう、骨の髄が疼くような、腰骨のあたりがじいんとしびれるような心地よさを……。

あたしはいま、若旦那に縛られている、折檻されている……あたしのお慕いする若旦那に……好きで好きでたまらない男に……。

その男のために手足を奪われ、責めさいなまれているのだ……。そう思うと、なにやらあまざっぱい、やりきれないような悲しみとうれしさが、胸底からこみあげてくるのです。

た。わたしの心とからだのなかに、いままでいなかった、たちの悪いみだらな虫が忍びこんで、わたしをそそのかしているような気持ちでした。そして、わたしは愚かにも、（ああ、わたしはこれであの女師匠に勝ったのだ！）と、思ったのです。けれど——

若旦那は、わたしが思っているよりも、色ごのみで、多情でした。それから二、三日たって、またお艶さんが、この別宅に姿を見せると、若旦那はわたしのことを忘れて、さっそくあの女を相手に、縄と笞とのほげしい戯れ事をはじめたのでした。

わたしは逆上しました。女と若旦那を呪いました。女中だからといって、これほどまでに踏みつけられてよいものか。わたしは、若旦那の子供を、一度ならず苦しい思いで、おろしているのです。

わたしは台所に走り、出刃庖丁をつかみました。そして、若旦那の居間にかけてこみました。それでも、女の性の悲しさ、こんなにも憎んでいる若旦那を刺すつもりの出刃を、わたしは、ふと気づくと女の胸に突き刺していたのです。縄に縛られて、身動きもできないお艶さんの胸に……。

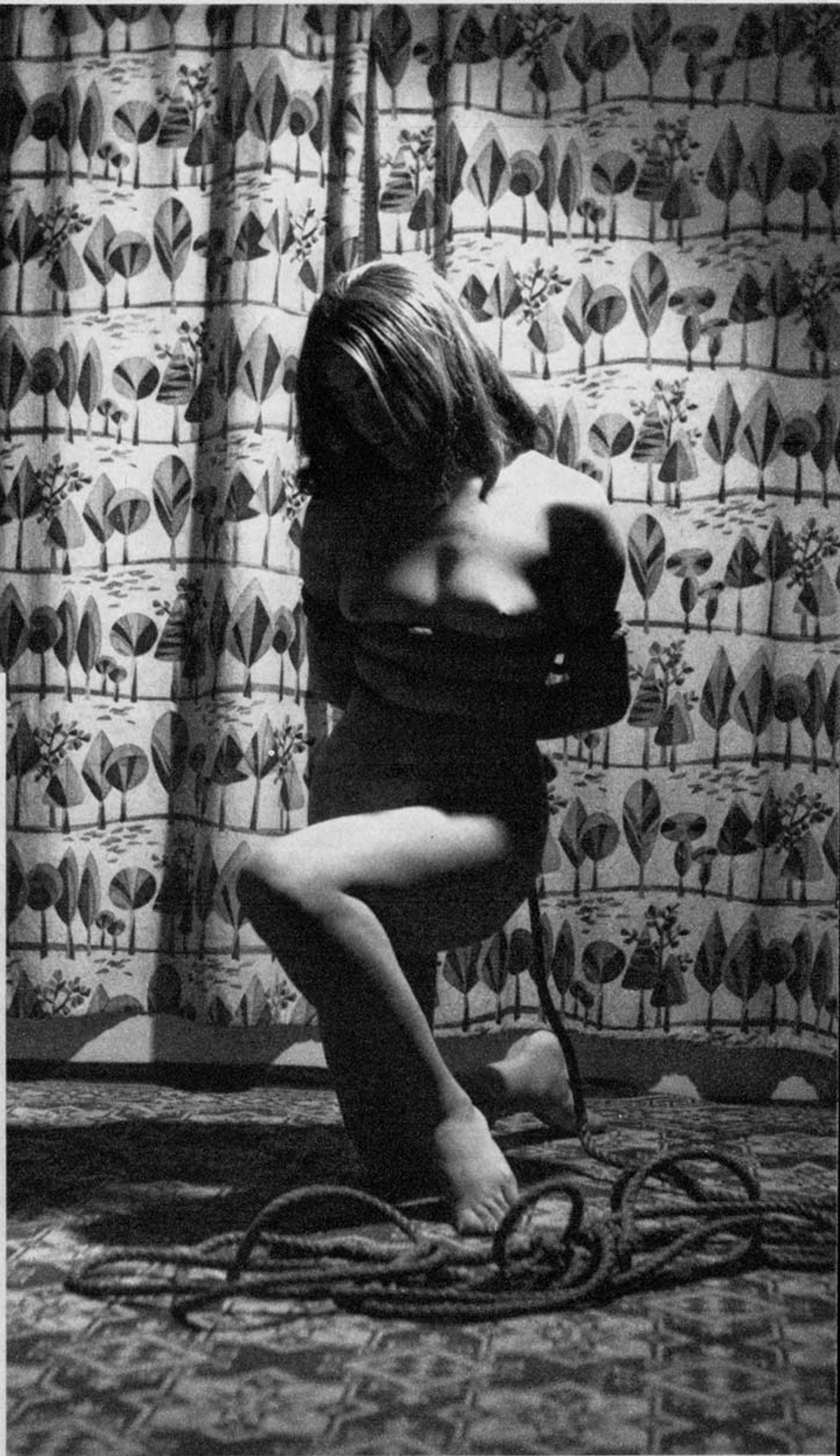
狂いたったわたしは、行燈を蹴り倒しました。若旦那は悲鳴をあげて外へ逃げだしてきます。畳に這った火は、襖や障子に燃えうつり、ついに一棟を焼きつくしてしまつたのです。

いま——人殺し、つけ火の大罪を犯した女の顔の前に、非人のくりだす槍がひらめきました。たくさんのお客の中、とくに青白い若旦那の顔を、もう一度しっかりとまぶたに刻みつけ、わたしは眼をとじたのです。

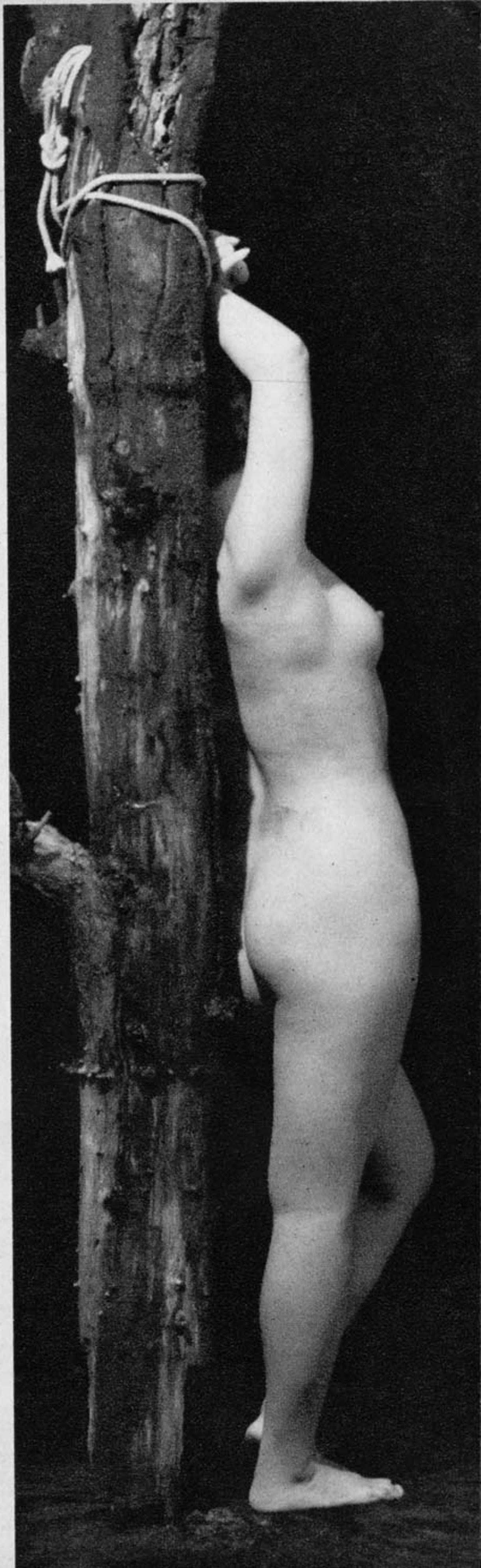
悦虐ヲ才ト傑作選



深森映士
吉田久















テレビにもタノシイ番組がふえてきました。

なめられるカルメン

★十月十六日(日)第8チャンネル、午後一時十五分の東宝劇場中継『華麗なる手拍子』から――。

★劇中、カルメンの斗牛場面、宝塚女性の

はいった『牛』が、主演の春日野八千代(?)にカラミ、口の中から、手をヌイグルミの舌にして、ペロリと出し、女優のスネからヒザ小僧、ヒザからモモ、モモからおナかと手あたりしだいになめ廻す。

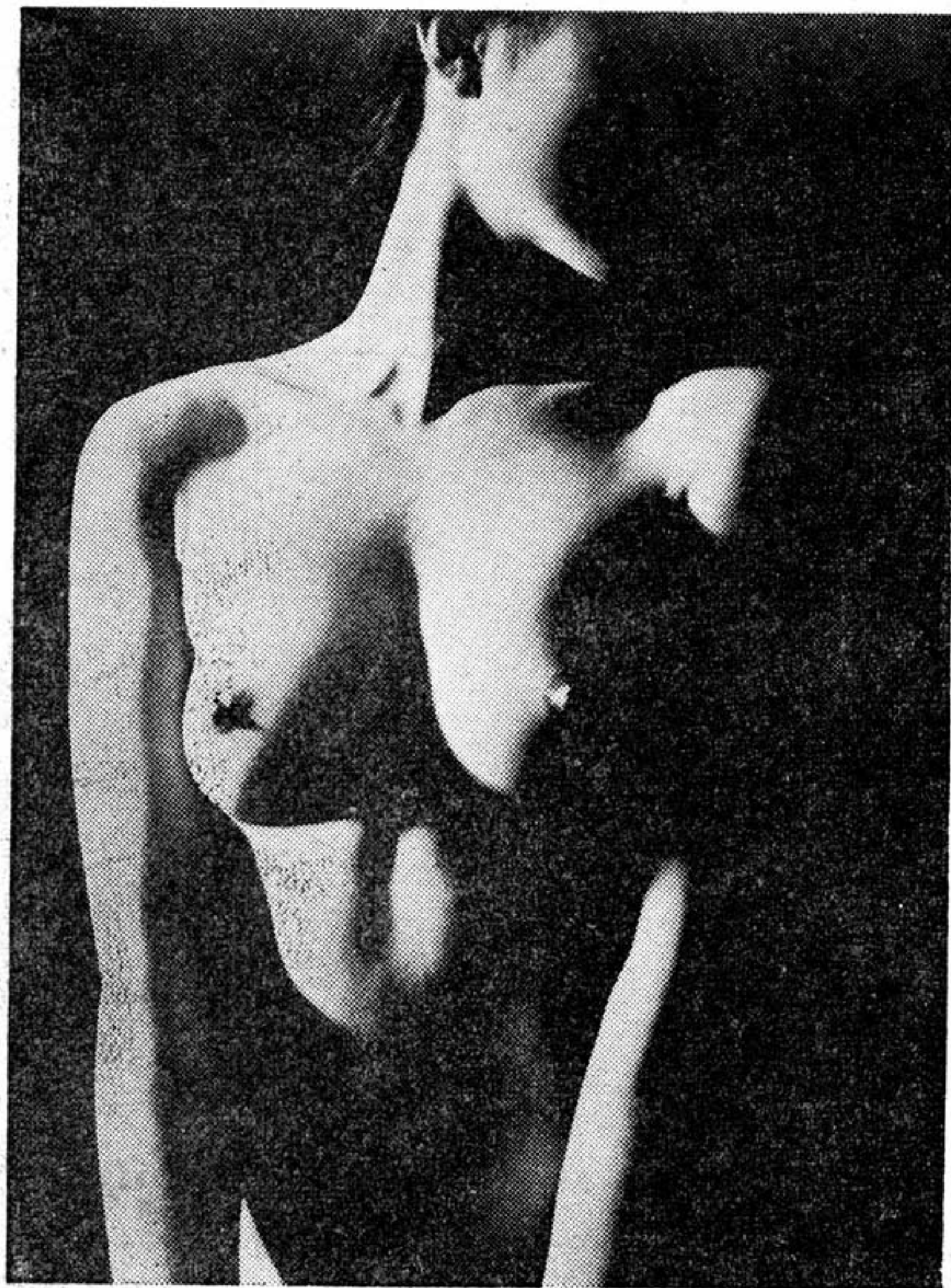
★ワイセツな気分とは程とおいが、舌の動きと、なめる部位が、いかにもエロティックで眼をたのしませてくれた。

男を踏む女たち

★十月二十三日夜十時五十分、フジテレビのピンクムード・ショー。あまり裸が多すぎてテレビにはドギツすぎると騒がれている、この番組。今夜も田園風景で、四ツん這いの男の背に、楽々と腰をおろして、軽く唄う半裸の女性や、同じく床に寝た男の背中を、腰から頭の近くまで踏み渡りながら、事もなげに踊る女性など、仲々MS趣味で楽しめた。

★出演者が、テレもせず、このような演技をいかにも楽しそうに見せるのは、まことによい(殊に、イジめられる男性側は、いかにも嬉しそうで)

★この番組には、しばしばこうしたSMシーンが飛びだすので見逃せない。(戸塚生)



東京八と野郎



南村 蘭

美濃村 晃・え

1

くだらない。退屈だった。とても見ちゃいられなかった。

胸がむかむかした。こんなことじゃないかと、ぼくは想像していたのだが。

歯切れの悪い詩の朗読が終わったあと、ステージでは、奇妙なストリップがはじまっていた。

いや、奇妙な、なんていう形容は、かれらを増長させる。かれらは、奇妙が売り物なのだから。

なんのことはない。露出狂の女の子が、裸になって手足をバタつかせているだけ。セッ

これが、ネオ・ビースト・グループなる女の子の集団の「野心的な、破壊的な、前衛的な」と自称するショウだった。

——ネオ・ビースト……新しい獣か。

しかし、すくなくとも、五百人の観客の前に並べるシロモノじゃない。

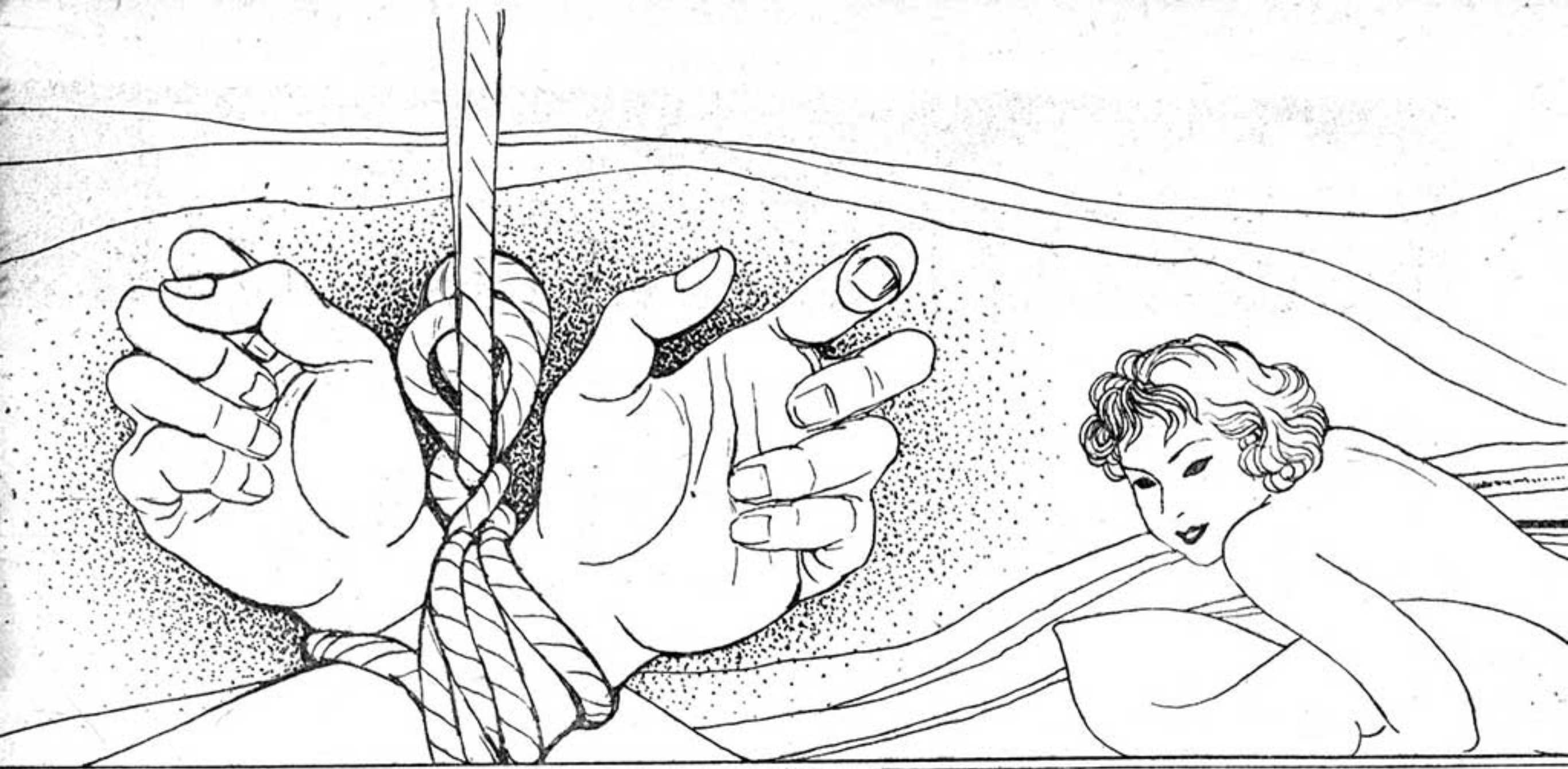
新しい女獣たちのグループだけではなく、つぎつぎとステージに現われるショウの、ほとんどが思いつきだけの、空疎なドタバタだった。

商業主義オンリーの既成のショウに対決する、小指ほどの抵抗も、主張も、表現もなかった。いたずらにむなしく、騒がしいだけだった。

クス・アピールもない。頭からバケツをかぶっている女の子がいる。腰のまわりに靴をたくさんぶら下げた女の子がいた。

からだじゅうに赤や青の絵具を塗りつけたのもいる。おなかに洗面器をかぶせて、それをむやみにペコペコ叩いているおねえちゃんもいた。なんという陳腐。

そんなのが七、八人てれくさそうに、そのてれかくしに、やたらに舞台をはねまわるだけなのだ。



「なにも意味のないところが、ビートのビートたるところで……」

リーダーのモード・デザイナーが、手際の悪い幕間のカーテンの前に出ては、苦しい弁解をしていた。

——これが、ビート・パーティーっていうやつか……

ついに、ぼくは苦笑した。

ぼくは五枚目のコーヒー・ガムを口にいった。へんにひなたくさいコーヒーの甘さが、またぼくの唾液のなかに、寂漠と混った。

「——ロンパスの会、案内状。ロンパスとは子供の悪戯着のこと。それが俗語に転じて、『風変りな』とか『異常な』とか『もっとも尖端的な』という意味の形容詞に使われています。ロンパスの会は、日本で一番現代的で芸術的なビートの集団。ここにはモラルをこえて恋があり、もっとも新鮮なヒューマニズムが交換されます。詩が語られ、ジャズが叫

び、新しい演劇運動の母胎ともなる出発点。今夜のこのビート・パーティーを機会に、ぜひロンパスの会にご入会ください——」

その横に、こまかい活字で、発起人の名前が印刷されている。

絵描き、漫画家、カメラマン、作家、映画批評家、ジャズ評論家、詩人、テレビタレント、服飾デザイナー、etc……

この案内状兼入場券を、ぼくは友人のバーテンから五百円で買わされたのだ。

買わされたから、やってきたのだ。おまけに、今夜ぼくは、さびしくてならない時間をもて余していた。

約束していたのに、チサねえさんにふられてしまったのだ。一週間も前から約束してあったのに……

きょうの午後、ぼくは念のために、チサねえさんに電話した。すると、返事がこうだ。「今夜、ダメなの。Fテレビの柳本さんと、打合わせがあるの。わるいけど、またにしてみね。残念ね」

★ぼくはうめいた。のどの骨が圧しつぶされて鳴った。

★みあげると、ママの白い足の肉がぼくを踏むたびにゆれた。

とたんに、ぼくの胸にぽっかりと穴があいて、黒い風がふきぬけた。

Fテレビの柳本。ぼくも知っている。プロシューサーだ。口ひげを生やしたやつ。

ぼくは嫉妬した。こういう時には嫉妬し、それから打ちのめされたようなきもちにならなければいけない。恋の快感は、こういう場合に、もっとも感傷的に、陶酔的に味わうべきなのだ。

そしてぼくは、すっぱかされた悲しみに、ほんとうに打ちのめされて、絶望的なきもちに没していくのだ。

残酷なチサねえさん。

ぼくは「商売」をはなれて、チサねえさんだけは、本気で好きだった。

テレビなんか、でなけりやいいんだ。派手な顔つきだし、小柄ながらも均勢のとれたプロポーションをもち、肉感的なので、ちかごろはまったくテレビ専門だ。新劇女優としての修行なんか忘れてしまったらしい。

美しく残酷なチサねえさん。

今夜逢えないと思うと、よけいにさびしかった。肩のあたりが疼き、胸がジーンと息づまった。いま泣いてみろといわれれば、ぼくはすぐ涙をこぼすことができる。

女のひとを、ほんとうに好きになるのは、

これだからイヤなんだ。

——うそつけ。

この嫉妬、このつらさ、せつなさが、ことのほか好きなくせに。

ぼくはチサねえさんと柳本との間に、むりやりにストリーをこしらえあげ、そして自分を憐れみ、自分を虐める。

捨てられた男——の錯覚に自分を落としこむ。このさびしさのなかにある快感。倒錯の快感を、ぼくはじいっと噛みしめる。

青みがかかったピンク色の、あまずつぱい果汁のなかに、ぼくの心はからだごと、とっぷりと浸る。

いい感じなのだ。涙がつきあげてくるほど被虐な、いい感じ。

ロンパスの会の、絶えまない騒音の中に、ぼくはひとり溺れる。

3

ステージでは、ストリップにいかかわって第四次元舞踊集団と称する一群が、なにやら黒っぽい衣裳を着て、いさましい踊りをはじめた。いさましいが、さむざむとした技巧。埃っぽかった。高校生の学芸会に似ていた。

発起人たちのほかに、このビート・パーティーなる集まりには、各方面の「前衛的」な名

士や、有名人や、人気者の顔が、招持されて見えていた。

新しいバスには、一応片足をのせておこうという顔。コマリシャリズムの顔。顔と顔とを見せ合い、利用し合って食べようとする顔の群れ。ビートの、Bの字も感じられない、おさまった顔。

そのなかで、ぼくのななめ前側の席にいる若い男性の横顔が、ぼくの眼をショッキングにとらえた。

去年だか、おとしだか、映画女優と結婚したシナリオ・ライター。広い額、硬そうな黒い髪、高い鼻、鋭く深い瞳の色。

ぼくは生唾をのみこんだ。ぼくは彼の書いた、鮮烈な批評精神に満ちたドラマを知っている。感動のあまり、ぼくはそのドラマを、くり返して二度みた。

だが、彼の容貌と肉体とを、生理的に眼の前にしたのは、今夜がはじめてだった。

典型的な秀才の風貌。しかし、丸顔なのでやさしみもある。さらにセーターをひっかけただけの服装は、無造作なおしゃれを示していた。

ぼくの心臓は、たかい鼓動をうち、ぼくは彼に魅せられた。

彼の両眼のまわりは、まるで麻薬患者みた

いに黒ずんでいた。そこもまた、すてきだった。清潔のなかの病的な陰影。

ステージを眺めながら、彼の茶色の唇に、ときおり、皮肉な微笑がうかんだ。嘲笑、と

ほくは、惹かれたように、彼の後姿を追った。惹かれたように、ではない。惹かれて、だった。

ほくは彼の長身におどろいた。ほくよりも

ほくは驚嘆し、見惚れた。

——彼になら、ほくはほくの肉体をささげるノ……

ほくは胸のなかで、そうさげんだ。そう思



晃

もとれた。ほくはもう、彼だけを疑視していた。うっとりで見つめていた。

いきなり、ツツと彼は席を立った。後方の休憩室へ歩いていく。

二十センチは高いだろう。ワイヤレス・ラジオのように、細く強靱な、そして気品のある長軀をもっていた。下半身の長さで、まぶしいほど魅力的だった。

ただで、ほくの背筋は、電気ショックを受けたように、けいれんした。熱い液体をのみくだした時のように、胃のあたりがうずいた。

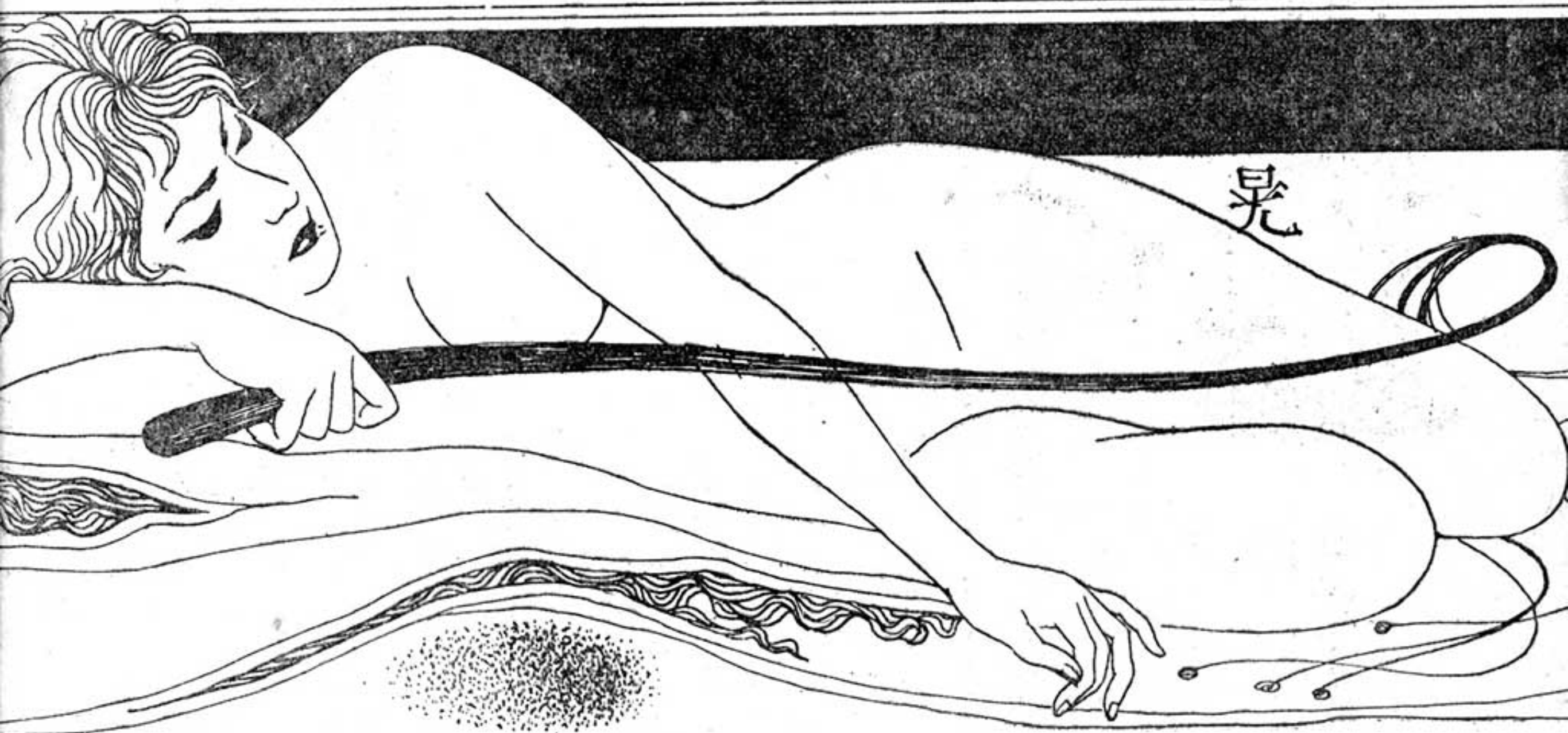
彼の肌は、どんな匂いがするだろう。

彼の腕は、どんなに知性的なあなたかみがあるだろう。彼の唇は……息の匂いは……

ほくは激しく憧憬した。ほくは四五メートルを離れて、彼をみつづけた。

だが、なんということだ。いままで気づかなかったが、彼は、彼の若く美しい妻と一緒に、この会場にきていたのだ。

彼女は、仕立てのいいスーツを着ていた。彼は彼女に、いたわりのそぶりをみせ、やさしい笑顔をむけた。



ほくは、また嫉妬した。

幸福そうな若夫婦は、寄りそって廊下へ出た。エレベーターにのって、階下の出口へ降りていった。ほくは見送り、せつない咽喉のかわきをおぼえた。

休憩室へ、人がそろそろ集まってきた。ステージの方が一段落したらしい。たちまち、ざわめきが充満した。煙草をふかしたり、ビールを飲みはじめたり、交歓がはじまった。ほくは雑音と埃と、汗ばんだ汚らしい体臭の渦にまきこまれ、むせた。

——逃げよう。

耐えきれずに、ほくは決心した。ほくは人の肩や胸や背にぶつかりながら、エレベーターの前に歩いていった。

4

コートの襟をたて、うつむいて舗道を歩きながら、ほくはもうさびしくて、さびしくてたまらなかった。

秋も終わりの銀座の夜は、ゆきかう人がそっぽをむいて、なおさらにわびしいのだ。ネオンの色が、まるで旅行歌のようにセンチメンタルに、流れては消える。

——そうだ、今夜はママのところへ行ってみよう……

ほくは、そう思いついた。ママのほっそりした腰の大きさを思い、するとすこし元気がでた。

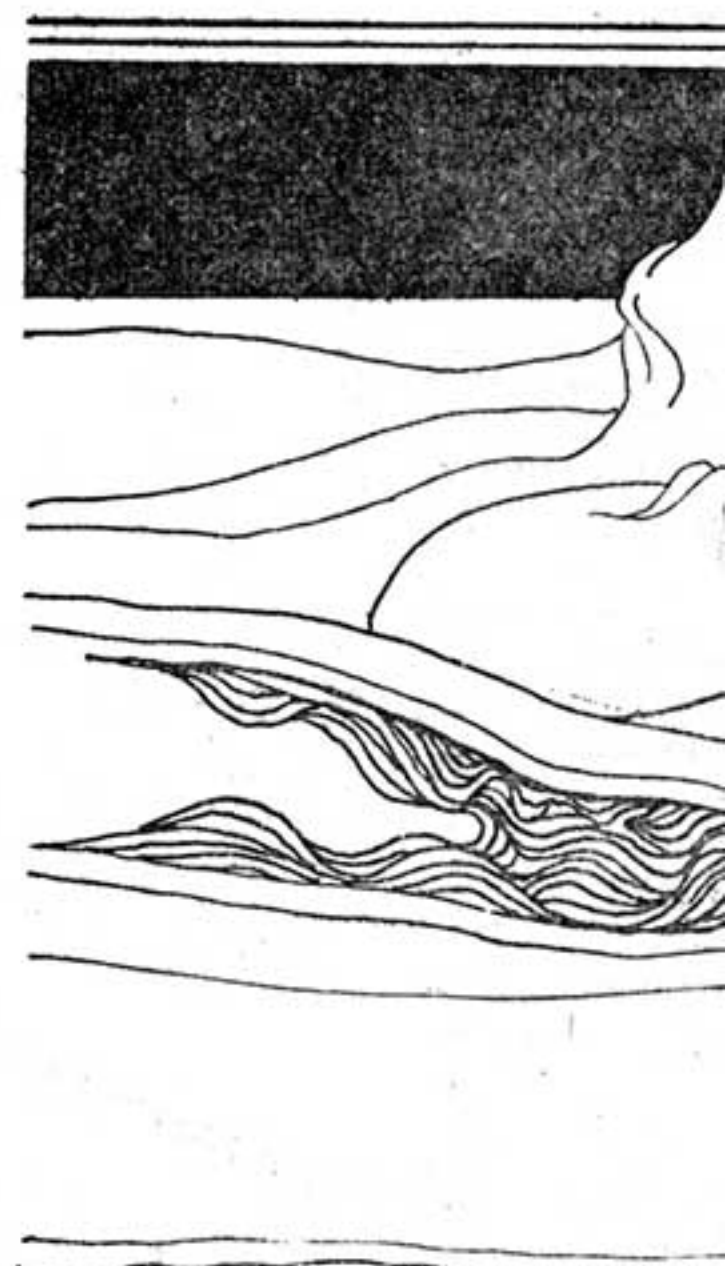
「バーウィップ」は、薬局の二階にある。店の横の細い木の階段をのぼっていく。数えてみると、三カ月ぶりだった。

「しばらくね、坊や」

カウンターのむこうから、ママがいったように暗い洋酒棚の前に、白い花がひらいたような顔のりんかく。

「うん」

ぼくはこたえた。
客は三人いた。静かな客だった。ぼくにふりむきもせず、グラスをなめていた。



「このごろ、チサコがひいきにしているんだってね、坊や」

そのことを、ママはどこからきいたのだろう。まずいな、とぼくは思った。

「よく知ってるね、ママ」

ぼくは止まり木によじのぼった。

「チサコ、自分で言ってたもの」

「いまでも、この店へくるの？」

「ときどき。——チサコ、このごろ、たいしたものじゃないの。よくテレビにでているわ

た。

チサねえさんは、以前このバーで働いていたのだ。働きながら、劇団の養成所へかよっていたのだ。

「——坊や、今夜は？……」

ママの瞳が、のぞきこむようにぼくの顔をみた。ママの顎は二重にふくれていた。ママ肥ったな、とぼくは思った。男は痩せているのが好き、女性は肥っている方が、ぼくは好きだった。

ね」

「もうすっかりテレビスター気取りさ。墮落だね」

ぼくは柳本の口ひげを思いだし

「今夜はね、ママと、あそびたいんだ」
ぼくは、うわ目使いにママをみながら、媚びていった。

「いいわよ、あそんであげる」

ママは微笑した。ぼくはホッとした。今夜ママに断われたら、ぼくは苦しくて苦しくて、薬の切れた麻薬患者のように、のたうちまわるだろう。ぼくはママの寛大さに感謝した。

腕時計をみると、十一時半だった。ママが自由のからだになるまで、まだ一時間以上ある。

「なにかおくれよ、ママ。あまいやつを」

ぼくは、ママのつくったスロージンを両手でかかえながら、ゆっくりと飲んだ。

おかわりをした。ぼくは酔いはじめた。

☆史実・文芸に現れた切腹に日本人の精神にひそむ悲愴美憧憬の源を探る！

— 悲愴美の世界 —

○切腹の沿革 ○切腹の作法 ○少年切腹史 ○美童切腹史
○寛永美少年録 ○殉死考 ○殉教切腹史 ○散華白虎隊
○会津娘子軍 ○女人悲傷譜 ○文芸切腹史以上収録

発売中！

中 康 弘 通 著

定価 二五〇 千 四〇

株式会社 久保書店

東京都中野区江古田 1の2302
振替口座・東京 10756 番

「きょうね、ママ、ぼく、ちょっと愉快なパーティーにでたんだ——」ぼくはおしゃべりになった。「自称ビート族の集まりでね、ロンパス会」っていうの。それがけっさくなの。

五百円も払ってね、ひどい学芸会みせられたの。だいたい、自分でビートなんていうの、おかしいよね、齒が浮くよね。発起人という

のがね、一応ジャーナリズムに名のおとっている人たちばかりだけさ、ビートの集団に発起人なんてのが存在するのが、考えればお

かしいよね。だいたいビート族っていうのはさ、資本主義の型にはまった無気力な生活、

惰性的、商業主義的な芸術に対して、新しい抵抗を示している連中のことをいうんだろ。

それがさ、立派なホール借りてさ、うわべだけマネしたってさ、そんな形式的なところから、新しい芸術への意欲が生まれてくるはずはないじゃないか。ねえ、ママ？」

ぼくの舌は、アルコールにすべって、よく回転した。

カウンターの客は、一人だけになり、低い声で歌をうたっていた。

「ふうん——」ママは肥えた首を左右にふつた。「坊やは、やっぱり坊やね。そのパーティーのこと、さっきテレビのニュースで見たわよ。おもしろかったわ。テレビにでたってい

うことだけで、もう成功じゃないの。坊やがそうムキになることはないのよ。坊やのお尻は、まだ青いわ」

ママは、赤ん坊をみるような目つきで、ぼくをみて笑った。それから、まるい指でぼくの頬を撫でた。

「だってママ」

ぼくは顔をあげた。それからまた、自分でもわからないことを、しばらくしゃべりつづけた。

「酒癖が悪くなったね、坊や。さあ、帰ろうよ」

ママがいった。客は一人もいなくなっていた。二人いる女の子が、バタバタと店内の後片づけをはじめた。

すこし酔ったな、とぼくは思った。チサねえさんへの思慕が、酔った脳裏にまたチラとかすめた。

5

ママが借りているアパートの一室。ママだけが住んでいる部屋。

ぼくは裸にされ、そして縄でうしろ手に縛られていた。ぼくは快感のために硬直していた。

「ママにいじめられるの、しばらくだね、マ

マ」

ぼくは、あえぎながらいった。ぼくは床にころがされ、ぼくの顔の上には、黒いスリッパだけのママが立っていた。

「そうだよ、この三カ月のあいだ、お前はあたしを忘れ、チサコとばかりあそんでいたんだ」

ママはぼくを見おろし、にくにくしげにいった。ママの胸は大きくはずんでいた。「ごめんよ、ママ。ぼくはママを裏切ったような形になったね」

「だからね、今夜は裏切りの成敗をしてやるんだ」

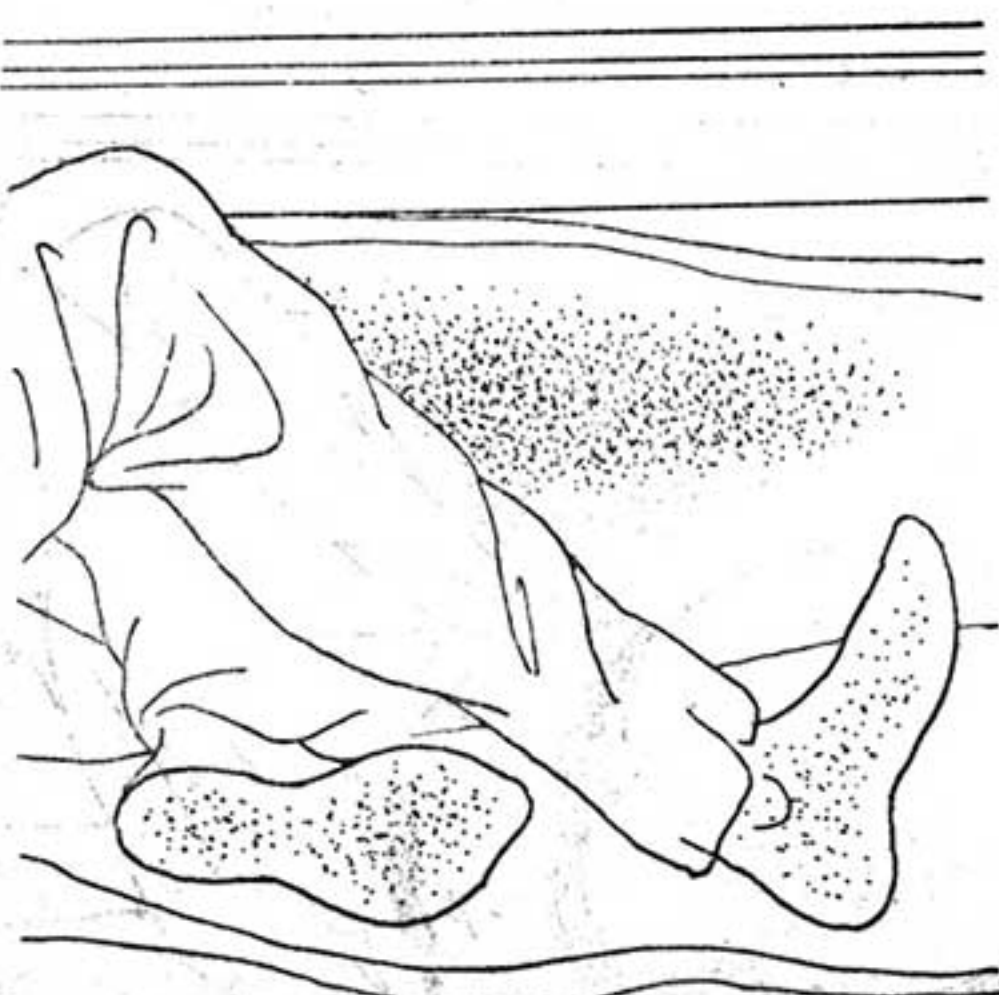
肥えているママは、腕力のほうもそうとうだった。

ぼくの腕に、手首に、胸に、縄は刻みこむようにくいこんだ。ぼくの両手首は背骨の上にくくられ、

肩の方向にひきしほられた。すごく痛かった。

すごく、きもちよかつた。この縄

の味は、な



つかしかった。

「チサコはあたしより、十も若いんだ。お前もよかったろう。オモチャを横奪りされて、あたしはすこしばかりくやしかったよ」

ママの語気は芝居じみていたが、半分は真実味があった。

チサねえさんは若いし、きれいだし、気前もいいし、ほくはほんとうにチサねえさんに夢中になっていた。

だが、はじめてほくにこの愉悦を教えてくれたのは、ママだった。ほくはママに可愛がられた。なにもかも、ママが仕込んでくれたのだった。

「チサコはお前を、どんなふうにしたね？」

というと、ママは片足をあげ、仰むけにころがされて、ほくの咽喉の上を、白い足の裏で踏まえた。じわじわと力をいれた。

ほくはうめいた。咽喉の骨が圧しつぶされて、ごりごりと鳴った。みあげると、ママの腿はねっとりした白さで、ふとかった。ややだぶついた肉が、ほくを踏みにじるたび

に、重そうにゆれた。

ほくは歯をくいしばり、苦しい息の下からいった。

「ママだって、ほかの男を縛ったりしたんだろう？」

「もちろんさ」ママはいった。「うちのバーテンも。それから、店にくる若い客のなかで手頃なのをひろって——」

妖しい瞳の色で、ママは微笑した。

「それじゃ、おあいこじゃないか」

ほくはあえぎながら、きょう三度目の嫉妬を感じていた。

「でも、やっぱりお前が一番さ。お前の顔や

からだつき

や、ちよっ

とした動作

までが、あ

たしみたい

な女を、と

てもよろこ

ばすんだ。

ぴたりと呼

吸が合うし、

お前はどこ

いつをよろ

こぶ男は、

晃



ほかにいない」

ママは、洋服ダンスのひきだしから、皮の鞭を取りだした。その鞭をみたとたんに、ほくの身内に、衝撃が伝わった。

鞭を見ただけで、激的な疼痛と快感がよみがえった。

チサねえさんには、この皮鞭はない。いつも、細い皮のベルトで代用している。それでもほくは満足だった。チサねえさんは若くて美人だったから。

だが、いま本式の、まるでサーカスカ動物園で使うような調教用の皮鞭を、ひさしぶりでママの右手に見たとき、ほくはちかごろ感じたことのない強烈な快感と、戦慄をおぼえたのだ。

ほくは、うしろ手のまま、膝を使って這いあがり、壁際のベッドの上に身を投げだし、「ママノ」とさげんだ。

ほくは、やわらかい布団に顔をうずめて、俯伏せになった。ほくの背に、ママの皮鞭が打ちおろしやすいように。

そして、眼をつぶった。ママの吐く荒らい息が、ほくの耳にきこえた。

ほくの背中が鳴り、ほくは思わず歯を噛んで肩をのけぞらせた。

焼け火箸を押しあてられたような、熱い痛

みが、ほくの背の皮膚から肉につらぬいた。痛みの中に、気の遠くなるような快感があった。ほくは短い悲鳴をあげながら、ベッドの上を、犬ころのようにころげまわった。ママを挑発した。

スリッパの裾をはねあげて、ママは鞭をふりあげた。ほくはこういう肉体と心をもった人間なのか。鞭の下で、ほくは声をあげて感泣するのだ。ママは髪の毛を逆立てていた。「こいつめ、こいつめ」

鞭は鋭くほくの素肌を打ちつづけ、ほくは首にナイフを突きたてられたトカゲのようにのたうちまわった。汗みどろになった。ほくの眼の前に官能の火花が散り、このましい血の匂いがした。

ママの肌にも汗がながれ、黒いスリッパが尻から腿にべったりと貼りついていった。ママの鞭は、嵐のように、ママのどこにそんなエネルギーが秘められているかと思うほど、ほくの裸身を追って打ちつづけた。

ほくはのけぞり、ベッドから転落した。ママの足が、乱暴にほくの腹を蹴った。ほくの眼の上に、鼻の上に、口の上に、ママの重量のすべてが、やわらかくずっしりとのしかかった。三秒、四秒、五秒、ほくの呼吸はふさがれた。

ほくは床の上をごろごろと反転してその肉塊からのがれた。いたずら小僧が、半死の蛇を追いまわして、しまいには竹棒で叩き殺す光景を、いつかほくはみた。いまのほくが、その哀れな蛇だった。哀れだが幸福な。

あきらかに、ママも興奮していた。ママの興奮はほくの興奮を呼び、お互いに作用し、刺激しあうのだ。ほくはうめきながら、なおママの鞭を誘ってころげまわった。ママの体内からほとばしるサディズムの血は、ぎらぎらと燃えたぎり、ほくの身も心も熱きつづいた。

やがて——ほくは虚脱した。

6

朝になったららしい。が、まだ戸外は暗いのだ。

ほくの腕を縛った縄は解かれていた。ほくはベッドの脚もとの床の上に、毛布一枚にくるまって眠っていた。ベッドの上には、ママが軽い寝息をたてていた。ママの顔には、そばかすが増えていた。

毛布のなかで、ほくは計算した。

——今朝はママ、いくらほくにくれるだろう。一枚か、もしかすると、二枚か……。

一枚とは五千円札のことだ。楽しんで、お

金がもらえる。こんなごきげんな世渡りってないな。

ぼくは口笛をふくマネをした。だが、半身を起こしたとき、思わずぼくは顔をしかめ、うなった。肩が、背中が、腰が、ひりひりと痛む。鞭のなごりだった。起きあがると、頭のシンがひどく疲れているのがわかった。肩から腰にかけて、鉛の板を背負っているように、けだるい。

快樂のあとのむなしさが、きゅうにぼくの心を襲った。胸苦しかった。室内の空気が、ひどく濁っているような気がした。ぼくはそろそろと歩き、カーテンを押しひろげ、窓をあけた。

この部屋は三階であり、窓の下は道路だった。冷えた空気と一緒に、室内へ白い朝霧が流れこんだ。巨大な街は霧を払いのけながら

白みはじめていた。

夜が明けきれば、街の建物はまたうす汚れた顔でのさばりはじめる。だが、いまは嘘のように美しく、すがすがしかった。

窓の下の道露には、朝霧をついて三輪トラックが走っていた。リヤカーを引いた人も、幾人か通りすぎた。肩からブリキの箱を下げた男が、一群のように固まって足早で通りすぎた。女もいた。

それらの車や人間たちは、みんな同じ場所へ、同じ目的のためにいそぐのだった。かれらは互いに大声であいさつをかわし、笑いあい、どなりあっていた。

ここは、築地の魚河岸に近いのだ。みんなそこへ仕入れにくのだ。かれらはもう生活を開始していた。吐く息は早朝の寒さに凍って白く、健康な呼吸をみせていた。

このとき、なぜかぼくは、ふいに激しく自分を恥じた。

自分で自分に、へどを吐きかけたい衝動にかられた。この東京、にせものと愛想笑いと不潔と偽瞞に汚れきった都会のアスファルトにしがみつく寄生虫。うじ虫、へど野郎。

ビートもロンパスの会も鬱積した欲情もママの鞭も、この清澄な朝の前には、みんなうつろな幻影だった。

青い——と、またママに笑われるだろう。だが、ぼくはなぜかこの朝、自己嫌惡のなかにうずくまり、ここからなかなか立てなかった。あまり、朝早く起きたのがいけなかったのだ。窓なんかあけたのがよくなかったのだ。

ぼくは頭の髪の毛を両手の指で握りしめ、いつまでも窓際にうずくまっていた。

発売中!!



アプノルム

人間のその当人でさえ判らない心の奥底に秘む異常性! 尿を飲む男・少年を鞭打つ女・毛髪蒐集狂等々豊富な実例をあげて解くアプ・セックス!!

B6判・美麗カバー装・二五三ページ・定価二七〇円・あととりあ社刊・東京中野江古田一・振替・東京一〇七五六

著 高橋 鉄

誰が正気なのだろうか?

九月上旬発売

三つの謎

東映作品「三つの謎」は岡本綺堂の小説「半七捕物帳」からの映画化。三つの謎——というから「謎

はまた謎をよぶ!! 果たして犯人は誰か?」という調子の怪事件かと思うと、さにあらず。これは独立した三つの事件を一つの映画におさめた、いわゆるオムニバス映画である。大体が岡本綺堂の捕物

小説には「天下を狙う大陰謀」とか「兇悪無残の連続殺人」などという長編向きの重大事件は出てこないものであり、サラリとした江戸風物詩の味が特長となっている。

従ってこの映画も「謎解き」の面白さはほとんどなく、半七の活躍もない。

取柄は江戸末期の時代色が少し出ていることだが、但し、町方役人が寺院の住職を捕縛したりするルール違反もある。もっとも、何分にもオムニバスであるから「この場面は寺社奉行の管轄でアル」などとやっている暇もない訳であ

る。

オムニバスであるから「下手人逮捕」の場面も三つある。この中第一話と第二話はいずれも犯人の中に女が混っている。

第一話は、商家の女中と女軽業師が男達と一緒に捕縛される。後手に縛られ曳き立てられる際、身をくねらせ抵抗をみせるが、縄尻を取る役人達に小突かれながら歩みを進める。

この二人の女優名は判らないが第二話はヴェテランの花柳小菊。

嫉妬深い町道場主を夫に持つこの女は、土蔵のような造りの奥座敷に半ば閉じ込められているような日常を送っている。前夫を殺して情人と江戸へ逃げて来た女だ。ところが、その情人、つまり町道場主をもこの女は殺してしまう。片棒をかつくのは密通の相手の師範代であり、浮気な上に亭主殺しの好きな悪女である。

それが半七(片岡千恵蔵)に召し捕られて夜の街を連行される。半七に協力する遊び人の伊太郎

(鶴田浩二が東映時代劇初出演。

やはり良い役者である)が師範代と闘っている所へ、小菊が曳き立てられてくる。名前は小菊でも大柄美人のこの女優は、割合に衰えをみせぬ容色を保って悪女などを演じると貫禄充分。華麗な着物の上に縄目が五六本掛けられ、観念して静かに曳かれては来たものの抑えた演技で無念さを表情に出すあたり、なかなか濃艶。

ところで——だいぶ前に、捕物帳が大いに流行した時代があった。今でも映画では時々「捕物帳」と銘打たれたものが造られるが、活字の方は、もうだいぶ下火となっている。

この下火の原因は、近來の残酷物語ブームと関係があるように思えるのである。

以前は、無理のない設定下で美女を縛ったり出来るのがすなわち捕物帳であった。役人、あるいは悪漢がそういうことをするのであるから自然である。自然ということとは、つまりは親しみやすいこと

裏窓タウン

であり、白足袋をはく首相でも、サラリーマンの奥さんでも、大っぴらに捕物帳を偷しめたのである。捕物帳を偷しむということは、S心理やM心理が刺戟されてカタルシス（浄化作用）の満足を得る要素が多であった。捕物とは、要するに人を縛ることであり、人には男女両性がある。

S・M趣味の濃い捕物作家としては、銭形平次の野村胡堂など代表的存在だった。

ところが、近頃の残酷ブームは格別に捕物帳というような形式を必要としなくなったのである。

カタルシスの需要と供給が増大したので、以前にはあった捕物帳のような形式が無用となったのである。M娯楽の自由販売時代とはなったのである。時代の反映なのだ。

但し、これはあく迄も、カタルシスの為の娯楽であり趣味である。だから洗練されたものでなければならぬ。

短刀で政治家を刺すような輩は

こういう事柄とは何の関係もない
下等な単細胞を持った存在なのである——。（東京・万根利澄）

恋しぐれ千両勝負

千両の金を用意して色事修業に江戸へ出て来た田舎侍の話「恋しぐれ千両勝負」は東千代之介主演の東映映画。

いくら田舎者の金持ちでも、こんなバカげた金の使い方はすまい——などと考えたりしてはいけないのであり、いうなれば「東映調単独インフレ男の二本立て興行用行状記」だ。

このインフレ侍にゾッコン惚れているのが第一部「嫁さがし千両勝負」に引き続いての鉄火な美人スリ青山京子だ。京子姐御は身の代金目当ての悪浪人原健策の一味に誘拐され、長屋に監禁される。

後手に縛られ、両足首も縛られた京子は口惜しそうに一味を睨んだり、啖呵を切ったりする。時代劇に転向してから縛られる役が妙に多くなった女優である。

私生活でも強盗に縛られたとか縛られて何かされたとか、されなかったとか、いや実は狂言らしいとか、以前そんな事件があったが——まあ、そういうことは忘れて精々時代もので御活躍を願いたい。然し——もし狂言だとすれば随分と風変りな計算に基いて行なわれたことになる。面白いと思う。

アメリカに一人、似たような例の女優があったが、日本では前代未聞の着想ということになる（蔭の声。これこれ、いい加減にせんかい！）

十月に東映入りをしているが、東映の時代劇女優の中ではモダンな顔立ちであり、目立つ存在である。

東宝映画「思春期」でデビューしたのが十六歳の時であり、まだ若い。

脱ぐ気になれば映画界でも屈指のグラマアとなる筈の肉体美——ということだが、御本人は「体格女優」になる気はないようである（港区・十両氏）

英雄候補生

日活映画「英雄候補生」は、シユニア版裕次郎こと和田浩治の観光映画のアクションドラマ。女優は清水まゆみである。

日活は近頃、観光アクション唄入り映画が全盛で、六戸錠など殺し屋スタアがのし上った代りに、女優の影が段々うすくなって行く。

女優がだんだん薄くなる、今来たこのロケ帰りやんせ——というような具合で、ただ色をそえるだけの役が多い。

さて、映画は南国土佐へロケして作られ、浩治坊やの役は殺されたヤクザのひとり息子。

悪党（近藤宏）の一味を相手にゴタゴタして、ガール・フレンドのまゆみが敵に拐われる。たいがいの映画は拐われることになっており、拐われないとクライマックスが来ない仕掛けになっているので「どうも似たような筋だな？」と思って調べてみると、ストウリ

イを書く御仁が同一人なのである。次から次へと暴力映画の筋を書きまくっているこの御仁は、保守政党の代議士だそうで、国会乱闘事件の際の経験を日活映画に活かしているのかも知れない。

「英雄候補生」と併映の「大草原の渡り鳥」という映画の筋もこの御仁が書いたものであり、白木マリのアイヌ娘が拐われて後手に縛られたり、南田洋子が殴られたり、猿轡をはめられて監禁されたりする。

「英雄——」の清水まゆみは、椅子に後手に縛り付けられ、身ももがく。

この女優は個性的な上に芸熱心であるし、演技のセンスも良い方らしい。

縛られている場面には演技は要らないと考えてでもいるような、デクの棒みたいな一部の女優と較べると、はるかに役者根性を持っている、頼もしいところがある。精一杯に身悶えてみせるのである。「俺は銀座の騎兵隊」という旧作やはり浩治坊やとの共演映画だっ

たが、これも原作者が同一人である関係上、椅子に後手で縛られ拷問される場面があった。その時は表情が良かった。

「大菩薩峠」のお浜の役は最初、山本が予定されていたのだが、途中で変更となりお松を演ることになった。お松の予定だった中村玉緒がお浜に入れ替った。

お浜は、縛られて水車小屋へ監禁され、机龍之介に犯される役である。

「ファン」のイメージをこわしたくないので、犯される役は演りたくない」とお富士さんはいうが、東宝の「暗夜行路」は犯される役であり「濃東綺譚」は娼婦の役だった。

東宝の文芸映画に較べて、大映の「大菩薩峠」はファンのイメージをこわすような映画なのだろうか。

もっとも、中村玉緒はこのところ一作ごとに腕を上げている女優であり、お浜はやはり玉緒の役であるのかも知れないが——。

（東京・弥次馬）

裏窓タウン

金髪強盗

テレビに出てくる女の責め場を一つ残らず全部見てやろう——という野望を仮りに持ったとしたらこれは相当に忙がしいことと相成る。

東京の場合は五局（N・H・K教育テレビは娯楽番組がないので除外）だが、夜の六時ともなると、もはや油断はできないのである。

子供向け番組の中にもそれはあるし、以後、十時過ぎに至る間、ざっと数えて三十本前後のドラマが次々と放送されているのだから常にダイヤルを回わし続けているといと何をどこで見落とすか判らん——という心配が生じてくる。も

っとも、ウラマド派の聴視者としては自然にカンが発達してくるので、新聞のテレビ欄を眺めれば大体の予測はつくようになる。ハイウェイ・パトロール「金髪強盗」

声の出演、誰某——とあれば、食指の動くのはアツタリマエでしょう——ということに相成るんであ

る。

十月十日午後九時十五分から日本教育テレビで放送された「金髪強盗」は、二人組み女強盗の話でその中の一人が金髪である。

検挙された亭主だか情夫だかの弁護士費用を稼ぐために、この二人は男装をして高速道路へ出沒銀行襲撃などの犯行を次々と重ねる。自動車の乗り継ぎをする上、逃走の際は女の姿にかえるので、

ダン・マッシュューズ隊長（ブロードリック・クロフォード）以下ハイウェイ・パトロールのお歴々も、なかなか手がかりを掴むことができない。

然しながら、ある日、不用意にも車の傍に落とした化粧品が端緒となつて、女二人は武装の男達に包囲される。

枯草の下に隠れた二人は、息を殺してダン隊長をやり過ごそうとするが、ここで見逃がしてはドラマが三十分では終らなくなる。

ダンには隊員の一人に合図をして女強盗に飛びかかり召し捕ってし

まうのである。

引き起こされた二人の女は、それぞれ後ろ手錠をかけられる。

「別嬪さん、さあ行こうぜ」とダンは声をかけて、二人を曳き立てる。

口惜しそうに身を揉みながら女達は曳かれて行く——。

この女二人は男まさりに兇悪で殺人犯でもあり、ピストルも所持している——というので後ろ手錠にしたのだろうか、こういう場面は映画、テレビを通じて珍らしいことである。

だいぶ前のアメリカ映画で「殺人者はバッジをつけていた」という非行警官の話があったが、その警察内の場面に後ろ手錠で連行されてくる被疑者が出て来たことがある。但しそれは男だ。

美人で若い女を二人も後ろ手錠にしてみせたこのドラマは、手錠に刺戟を感じる一派にとって割合と愉しめる一編でアリマシタ。

（中央区・腐爛軒酒多飲）



おしめをあてる

バスガール

都バス一年生の宇田悦さん(仮名)は、見習時代、新宿——八王子間を乗ってすっかり音をあげてしまったそうだ。

「恥しいわ。でもほんとに困っちゃったの……」

放尿の問題、つまりおシッコに困っちゃったのだという。新宿——八王子間といえば、約二時間、かなりの長距離路程だ。普通の生理だったら、尿意をもよおしても不思議ではない。

「指導車掌さんから、乗る前に必ず便所へ行っておくように注意されるんだけど、お客さんのこと、お金のこと、停留所の名称のこと、そういったことに気をとられて、あがってしまうから……」

そしてバスに乗りこみ、やがて少しずつ落ちついてきて人心地がつくと、忘れていた欲求が、猛烈に頭をもたげてくるのだという。悦ちゃんは、とうとうたまらなく

なあって、泣きだしてしまったそうである。紺の制服を身につけて、胸をふくらませた彼女達が、まずぶつかる困難は、このおシッコの嘆きだということ。

揺れるバスの中で、重心をじょうずにとって立っていることは、非常なエネルギーを消耗して、空腹にもなる。車中で尿意をもよおした際のみじめさを噛みしめながらも、つつい、よく飲みよく食べてしまいうらしい。

入れたものは出る。これは仕方がない。だから、これは本人が責任をとらなくてはいけない。入れるのを我慢する代りに、出すのを我慢するわけだ。

心配のあまり、幼児のようなオシメをつけたり、月経バンドを転用してみたりする少女もいるそうだが、どうも思いつきばかりで、いい感じではなさそうだ。

——以上は「土曜漫画・9月23日号」に掲載の「バスガールの性の悲しみ」という記事から、要所を抜萃したもの。

これは、S派にもM派にも、さらにコプロ派にも、そしてオシメ・マニヤの心にも、そこはかたく(あるいははげしく)興味をそえられるフクザツな内容を秘めた街なかの実態ではないだろうか？

(蘭)

懲罰房の恐怖

戦後ホウハイとしてまき起こった人権尊重の風潮は、あらゆる世帯を一新した。この世の地獄といわれた網走刑務所などは、むしろ待遇がよくて、しかも昔のように刑期の長いものは少く、多くの模範囚をだしているという。

しかし、懲罰が目的である以上、いくら人権尊重の時代とはいえ、服役者の心臓を凍りつかせる「懲罰」はなくなならない。では現代の刑務所における懲罰の実態はどうなってるだろうか？

増刑されるされないにかかわらず、懲罰には次のような方法を併用される。

「正座法」は、懲罰の場合の制裁

裏窓タウン

のひとつだが、固いコンクリート床の上に二時間も正座させられて、関節が冷めたく硬ばりシビれて「立て！」といわれても、自力で動けない状態になってしま

う。
「減食法」はもっぱら作業を怠けたという判定を担当がつけたとき簡単に実施される。なんだ、たった一回や二回食事を抜かされるくらい辛抱できそうなものだ、と思うのは、この地獄の門をくぐったことのない人のいうことで、米食以上に消化の早いバクシヤリ（麦七分）で作業をさせられると、食後一時間か二時間もすると、凄まじい空腹感が背骨のあたりをつつきはじめる。

やっと待ちに待った昼食には、味わう余裕なんかとうていなく、犬のようにバクシヤリにバクつく——こんな生活の中から唯一の生理的満足感を味わう瞬間さえ取り上げられ、囚人たちにはたまらない拷問の一種ともなるわけだ。

また衝動的に狂暴性を発揮した

りすると、「暗室法」をやられる。四六時中、陽の光のささない、シメジメしたコンクリートの箱のような独房にブチ込まれるわけだ。この地球上のあらゆる生命あるものの本能として、耐えがたい孤独感が押し寄せる。いやというほど感じさせる「死」へのおそれ——まさに「暗黒の恐怖の頂点」である。

このほか、特殊な懲罰に「寒房」（コンクリート房）法がある。天井の高さが一メートルぐらい、巾が一・五メートルほどのコンクリート製の箱と思えばいい。この部屋に手錠のまま入れられる。もちろん、糞尿はたれ流しだ。食事は看守がバクシヤリの握り飯を口の中にネジ込む、というがさすがにとうてい食べられるものではない。

この独居房に入れられることはまことに死にたくなるほどの苦しさなのだ。まず「拘禁病」と服役者が恐れている極度のノイローゼ状態に陥入る。神経がヤワな被懲

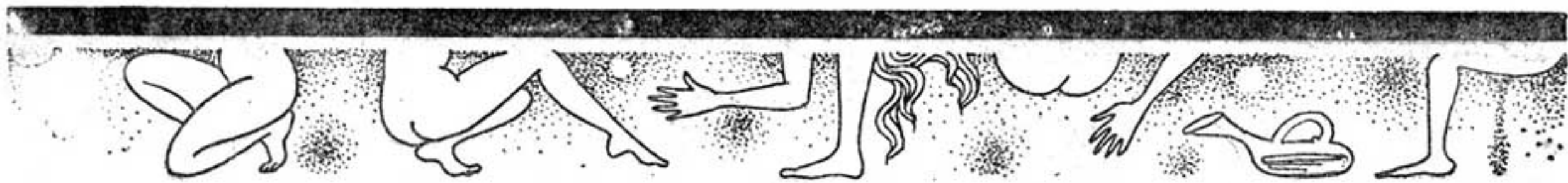
罰者となると、ほとんど発狂寸前に追い込まれるモノ凄惨な非情さがこの地獄の懲罰方法を律しているからだ。独居房からひっきりなしにわめき泣き叫ぶ被懲罰者の怨みにみちた悲鳴は、シカに耳にしな

い者には、想像もつかない悲惨さである。

さらにこうした懲罰方法には、往々にして独特の懲罰用具が併用される。たとえば、頭にきて担当を罵ったりすると、ウムをいわさず「防声具」をかまされる。

手錠にしても、皮手錠一号、二号とあって、身体に密着させられて二重の痛苦をうける。この皮手錠はときどき水をブツかけると、ぎゅっと緊まっつてころげ廻りたくなるように痛む。シャバという鎖手鎖も、前手錠のようにナマぬるい掛け方はしない。片腕を上げて後方に廻した鉄砲手錠や、後手錠がほとんどの掛け方だ。

公的な懲罰ではないが、服役者の間のリンチも盛んである。このモトはたいがいアンコ・カッパ関係



におけるアンコ(女役)の浮気や、他人のアンコを寝取った場合と、バクチの払いをゴマ化した場合がほとんどである。

地方の刑務所へ行くと、まだ若干暴力制裁の名残りがのこっている。N刑務所やK刑務所では「ふとんむし」の刑罰がいまでも盛んだという。みんなで手足を縛り上げ、一枚一枚ふとんを掛けて行く。三枚、四枚まではシタバタ身動きするが、十枚以上になると微動だにできなくなる。あまり長くやると窒息するので途中ちよいちよい息抜きをして、またくりかえすのだ。ふとんむしをされている方はこのときばかりは文字通り「神も仏もないものか」と、がつくりしてしまうという。

——以上は「週刊事件実話」昭和35年11月8日号「鬼も泣く網走刑務所の懲罰房」より抜萃したもの。(重)

浅草のサド劇

切支丹弾圧時代の長崎。外人の

宣教師が、幕府の役人に捕われ「宗徒たちの連名状をだせ」と、鞭で打たれ責められる。宣教師は拷問の苦しさにかけて、その連名状を役人に差しだしてしまう。

そのために多くの女が(フシギにも女ばかり)捕われて、れいの「踏み絵」をやらされる。踏まない女や、怪しいそぶりの女は、たちまち十字架の前へ連れてこられる。そのなかで、もっとも反抗的な女が、着物をぬがされて裸にされ、十字架にくくりつけられていわゆる火あぶりの刑にかけられる

役人がたいまつで火をつけるとステージにはいっせいに赤いライトが照らされ、炎がごうごうと燃えさかる感じ。磔台上の女は、両腕を水平にのばしたまま、首をふったり胸をゆすったり、いろいろな身をつくねらせて苦しんでいる感じ。大道具の十字架が、うすべったくて、ふわふわして、いまにも倒れそうな感じ。その下に、六、七名の女が集まり、膝まづいたり泣いたり祈りを捧げている感じで

この景は幕。

以上は、浅草ロック座十月後半公演の「火あぶり遊女」から。こうして文章に書いてみると、いかにもおもしろそうだが、実際はたいしたものではない。ショウとしての狙いはよいのだから、演出なりとも、もうすこし凝ってしつかりやれば、かなりおもしろくなると思うのだが、いかにもそれが安易で、お座なり。もっとも入場料が安いから、(百二十円)あまりぜいたくもいえないけど。十月二十六日所見。(重)

女性化するには

せっかく、立派な男性として生れてきたにもかかわらず、女性になりたい……とひたすらにコイネガウ倒錯趣味の男性がときどき現われるが、そのような向きは、副シン腫瘍になればいい、という話。最近、阪大病院で発見された症例の一つだが、副シンのガンの疑いで診察を受けた三十一歳の男性の乳房が、ぼってりむっちりとふ

裏窓タウン

くれてきて、見たところ、まるつきり花も差らう女性のソレ。

おまけに、男のタイセツなどころにも強度の「委縮」があらわれて、このまま進めば、外面的には男性から女性に鞍替えるしかテがない状態になりはてた。

泌尿器科で診断の結果、これは副シン腫瘍による世界でも珍しい病状と判った。

この患者サンは、女性になりた趣味がなかったとみえて、早速手術をしてもらい、腫瘍がとれ、乳房も平たくなり、男をとりもどして、めでたく退院する運びになったが近く、この一例報告を、阪大泌尿器科の松永武三先生が学会に発表するという。

副シンは各種のホルモンを分泌していて、ここにガンができるとホルモンの異常から、異性ホルモンの分泌物が途中で異常を起こし女性ホルモンの働きをするためらしい……。これは、十月二十六日付山形新聞に出ていた記事だが女性になりたい読者の方で、モル

モット代りに実験台になる方はありませんかね。(山形市・姐御生)

見たいものだが

ジャン・リユック・ゴダールといえ、**「勝手にしやがれ」**を撮った映画監督として有名だが、最近、二回目の作品**「小兵士」**が、最近、上映禁止処分をくったという話。

若しこれが日本に輸入されていたら、本誌読者必見のものになったに違いないと思うのだが、惜しいことをしたものでアル。

この映画の物語りはスイスでの話である。FLN(アルジェリア民族解放戦線)のメンバーや、その協力者を暗殺するテロ組織に入っていたフランス人の殺し屋が、ある日、命令された兵器商人暗殺を拒否する。そこで、この男は敵と味方の両方に追われることとなり、ついにFLNの方に捕らわれてしまう。ここで拷問をうけるが彼は何とか逃げ出すことに成功し一人の少女にかくまわれる。

この少女が、今度はテロ団の方にとらえられ、やはり拷問を受ける。恩人である少女を救うため、彼はやむなく以前に暗殺を拒否した兵器商人を殺すが、時すでにおそし、少女は拷問によって殺されてしまっていた……。

これがストーリーのあらすじ。アルジェリア戦争の現実から題材をとったこの映画を禁止したドゴール政府のあげている理由は次の二つである。「第一に拷問のシーンが残酷でアル。第二に殺された少女が、アルジェリアにおけるフランスの行動を責め、反徒の行動を称賛していることは、現在の状況から見て許せない」

だが、この事件について、左翼の新聞「エクスプレス」は「ドゴール政府の禁止処分は、この映画に対する輝やかしい公の授賞であると考えてよい」と述べている。

これは、最近の朝日新聞、海外文化欄に掲載された記事だが、イデオロギーの点はともかくぜひ日本で見たいものデス。(呂)

黒髪執着

黒髪懺悔

(少年編)

志摩不二

秋吉 巒・画

艶やかに結い上げた黒髪を描くすべもなく指は汗ばみふるえた：

一

「あらッ？」

老女とはまだまだ云い難い粹な姿の婦人がふとふりかえった顔をそのままに、私をみつめた。薄化粧の顔に皺はあるが美しいひとだ。茅場町から乗った電車が、水天宮にさしかかった時である。

「おや？」

私もその婦人の顔に声を挙げた。

「まアちゃんじゃアないの——」

「小母さん！」

満員に近い電車の中で、双方から人ごみを掻きわけ、近よっていった。

「しばらくねえ——」

「本当に——。しばらくすぎますよ」

「相変らずの言葉つき——。まアちゃんちっ

とも変らない——」

小母さんはしげしげと云った。山本美代子の母である。

「変りましたよ。二十年以上……」

「にもなりますかねえ——」

「美代ちゃんは？」

「元気ですよ。でも今は、名古屋にいますけどね」

「名古屋？」

「芸者をして……」

「小母さんと一緒に？」住んでいるという。

隅田川を渡ると私たちは森下町で、ひとまず電車を降り、近くの「オリブ」という喫茶店に入った。そこには私が知っている女の子が勤めていて、気安い上に静かな店なので私から誘ったのである。

「東京の下町が変わったように、あなたも随分

と変ったんですねえ」

小母さんはホッと溜息をついた。

「もう中学にいったなさる娘さんとおありなさるなんて——」

店で出してくれた煙草を手にとると、器用に火をつける仕草は、「末広」の楽屋で見た小母さんとちっとも変りはなかった。その横でつつましく座っている美代子の姿が見えるよう、汚れ果てた今の私を一瞬忘れさせ、幼き日の清純な頃が想い出され、フツと涙が湧いてくるのである。

「美代子と今でもよくあなたの噂さが出るんですよ。だから二十何年もたっているのに、すぐ想い出せたのでしよう。ぜひ、今度機会をつくって美代子と逢ってくださいな」

別れしなに小母さんは名刺をくれた。私は小母さんにちよっと待ってもらい、本屋に入

って近頃出た与謝野晶子のきれいな装幀の歌集を買った。そして表紙の裏に、

「そのかみの髪美しき人へ」と書いて包んで貰い、美代子へ渡してくれるように、小母さんに頼んだ。小母さんは美代子が結婚しているのか、または旦那もちなのかいわなかった。

私も聞かなかった。ともに、二十数年前の清い夢をこわしたくない思いからだった。

美代子との交際はまる二年とつづかなかった。小母さんの都合で母娘は関西の方へ再び越すことになったからである。学校で先生が美代子と並び、転校するのでお別れしなさい

というまで私はそのことを知らなかった。憤る私に、ふたりきりになった時、美代子は泣きながら詫び、彼女がいつも使っていた花かんざしを記念にくれた。それには彼女の髪の毛が強く染みていた。

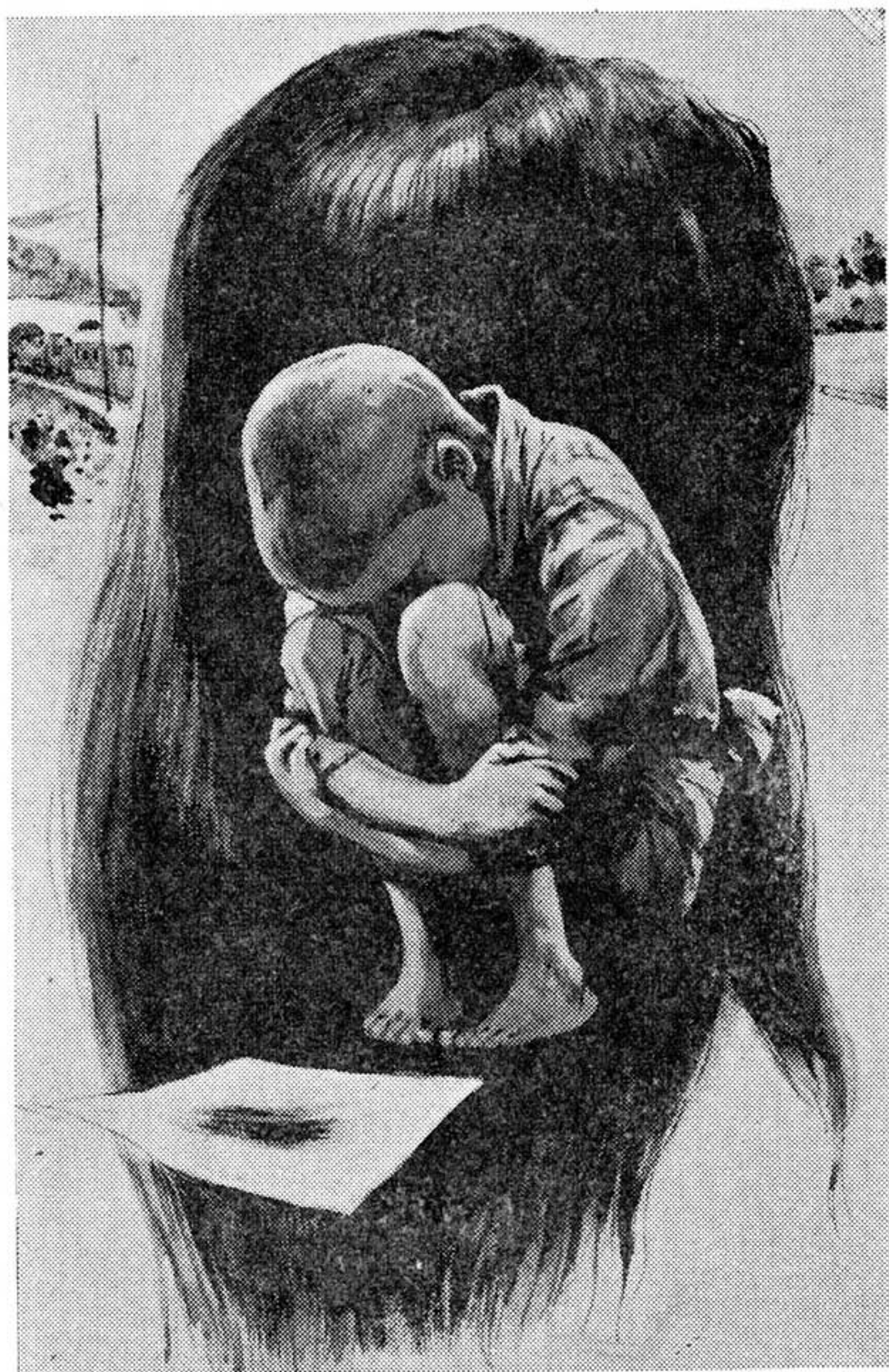
いよいよ出発する時、私は母とふたりで、

美代子母娘を両国駅まで送って

いった。ホームで母と小母さんが話し合っている時、美代子こそっと私の手になにか握らし、その手をいつまでも離さなかった。夜行の汽車で行くのだったろう。空には美しい月がかかっている秋の夜だった。まだようやく小学校四年の幼いふたりは言葉も知らなかった。しかし赤子同士の声がそのまま意思を通じるように、私たちの握りしめた手が、ふたりの心を充分に通わせていた。

あとで美代子のくれたものを開いてみると一房の黒髪だった。母はホッと溜息をついていた。

「女の心には、大人も子供もないんだねえ」



私は家に帰ると、ひとり物置に身をひそめて美代子の一房の髪の毛のなかに顔をうずめて泣いた。そして泣き狂った。鼻にこすりつけて香りを体のなかに吸い込み、口に含んで、その甘さを余さず吸い取ろうとした。

母は私がひそかに美代子の黒髪を後生大事に持っているのを知っても何もいわなかった。女として美代子の心を、母として息子の私の心をわかってくれていたからであろう。かくて私はいつの間にか、幼年期から少年期へと成長していたのだった。

二

今は地名のなくなった深川区（敗戦後江東区となった）の八名川町（同じく新大橋町）を美代子のいなくなったと前後して、私も去らなくてはならなくなった。というのは長男夫婦が嫁を貰うと、世間にありがちな嫁と姑の関係がどうもうまくゆかず、父と母はまだ幼い私と二つ上の兄のふたりだけを連れ、四五町離れた森下町のしもたやの一軒を、借り求めて住むことになったのである。世間態には隠居という名目であった。すぐ近所には小学校があったが、転校せず今まで通りの学校に通うことにした。父から事情を聞いた受持の先生は私を呼んで、

「番地を見ると君の今度のお家は北原沙絵の家さえの近くだね。今日は北原と一緒に帰って家を教わり、明日から君が北原を誘って、一緒に学校に来るようにしたまえ——」といった。

「ええ？ おんなど一緒に学校へくんの？」

「いやか？」

「うん。みんながからかうもん」

「山本美代子がいたときは、一緒に来て、北原とは嫌か？」先生はからかうようにいった。

「……………」さすがの私も言葉につまってしまった。先生は北原沙絵を呼んで同じことをいった。沙絵は私の方なんか見向きもせず、「はい！」とまじめくさって返事をした。

私は放課後沙絵とともに学校を出た。

正直いうと私は沙絵を嫌いではなかった。むしろ好きであった。しかし美代子の面影がまだ消え去らない私はそれ以上の気持を他の少女に抱く余裕はなかったのである。沙絵は私と同程度くらいに勉強ができた。色は美代子とは並べものにならないが、貌だけはキリキリとしまり美少女の方であった。髪はいつもきつちりとおさげの三ツ編みにして、骨張った細い肩のところに垂れていた。瘠せぎすで背丈は私と同じくらい。気性は少し強すぎで私とは喧嘩したことはないが、よく他の男

生徒と口喧嘩をしていた。

私と沙絵は口もきかず離れて歩いた。私の方が一二間先きにずんずんと歩いていたのである。やがて私の家に二三十米ぐらい近くに来た時だった。とつぜん沙絵はうしろから大きな声で私に叫んだ。

「その道を右に曲るのよッ！」

私は驚いて、その命令？に無意識に従ってしまった。すると彼女は馳け足で私に近づき、私の腕を取ると、強い力で引きながら、「あたしの家はここよッ！」と云った。

私は向きをかえられて立った正面の家を見上げて思わず、息を呑んだ。玄関の格子戸は私の家と同じようだったが、傍らの出窓は飾窓でらどになっていて、そこには花かんざしもきれいな、緑したたる艶やかな島田髻のカツラが置かれてあったのである。

「君、君の家は……」と私はどもった。

「髪結いよ。お母さんがやっているの——」

沙絵はこともなげにいつて、私の腕を掴んだまま、手荒く格子戸を開けると、

「只今ア！お母さん、お友達を連れてきたわよオ——」といった。家の中はひと目で見渡せた。幼い日見た芳町あたりの髪結いと同じような内部で、ちょうど十七八の娘がひとりの小母さんに髪を結ってもらっているところ

ろだった。高島田だろう。表の飾窓にあったのと同じ髪型だった。美しい黒髪の輝きが、私にまぶしかった。

「素晴らしい芸術だ」とうっとり見惚れていた。絵の好きな私は家に帰ったら早速この髪型の型を描いてみようと思った。

「あらあら……お葉ちゃんがあんまりきれいだから、坊っちゃんが見惚れていますよ」

沙絵の母であろう小母さんが、鏡に写る娘の顔を覗き込んで云った。娘は確かにきれいで可愛いかった。下ぶくれの色白で黒目がちの大きなつぶらな眼が美しかった。

「いやだ、小母さん……」と娘は頬を染めた。

私も赤い顔になった。小母さんは笑って私に「さあさあ、坊っちゃんお上りください。すぐこちらへ済みますから——」そして沙絵に「沙絵ちゃん、茶ダンスのなかにおやつが入ってるからね、お友達の坊っちゃんと一しよに喰べていなさいよ」

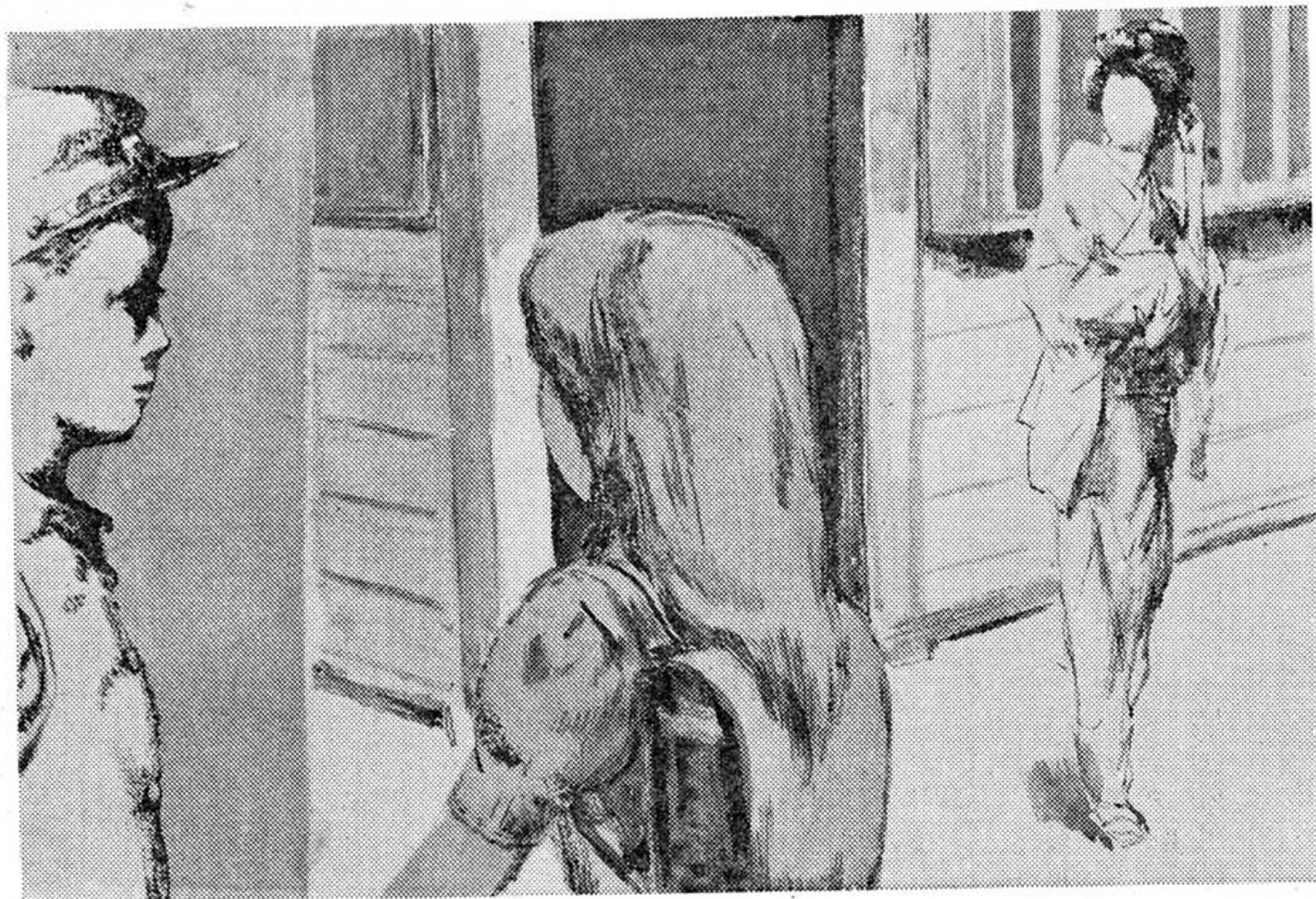
「うん！」うなずいた沙絵は強い力で、掴んでいた私の腕を引いて、さア、とうながし玄関を上った。私はよろめきながら、ゴムの短靴を辛うじて脱ぐと家に上った。部屋は板敷きになっていたが、髪油でギラギラ光っていて、ともすれば、靴下をはいた足が滑りそうだった。

そして家全体に黒髪の匂いが染みついているように、なんともいえない濃厚な甘い空気に満ちていた。

その部屋を抜けると奥は四畳半の小部屋で沙絵の机や人形箱などが置かれてあった。沙絵は隅の茶ダンスから、菓子入れを取り出してきて、一しよに喰べましょ、と私にカステラをすすめた。私はその旨そうな菓子にゴクリと唾を飲み込んだが、たった今鼻口に吸い入れた女の人の黒髪の匂いの甘さが、菓子を喰べることによって消えてしまうのを怖れた。

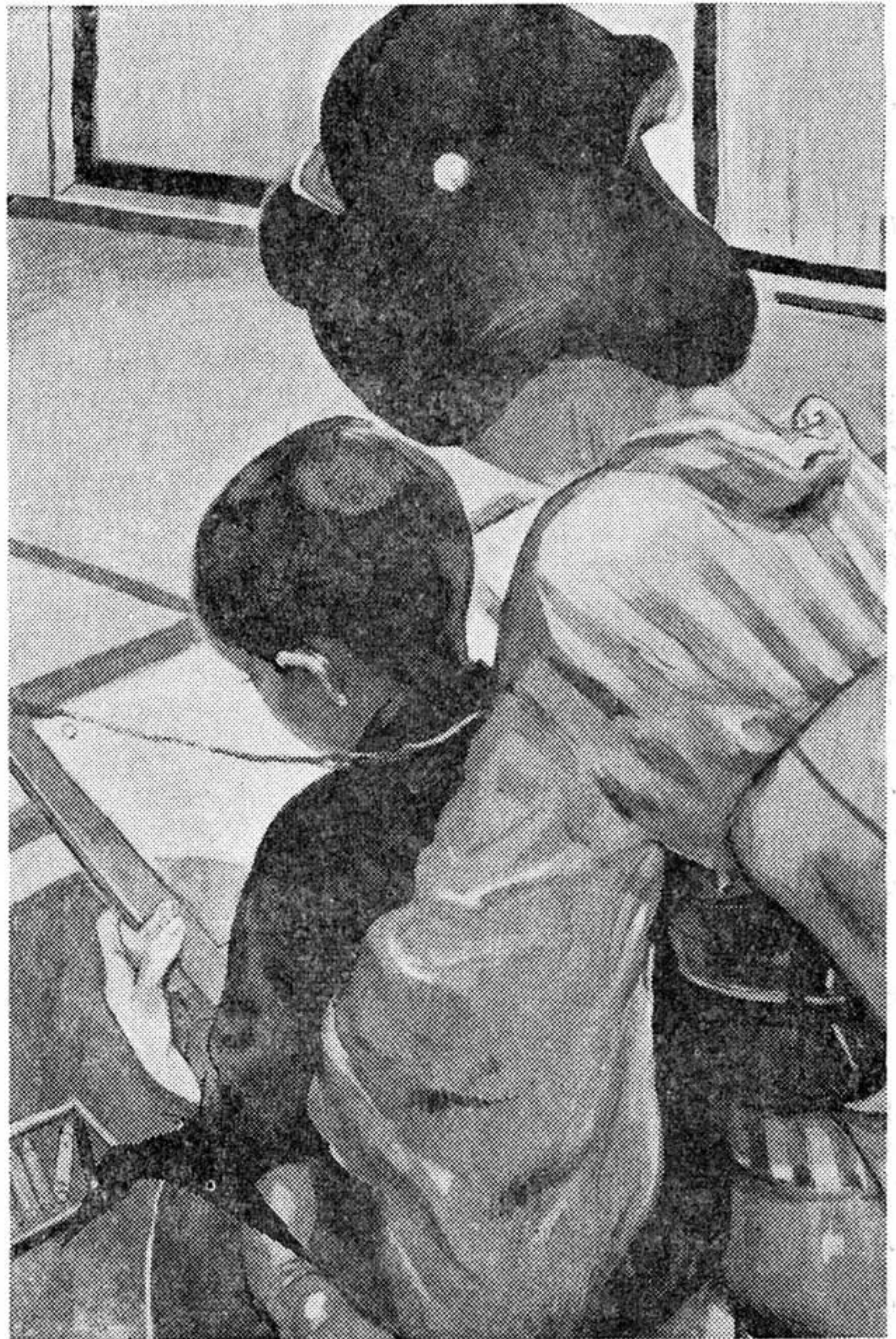
三

私は生れて始めてこの時、女の人の髪の毛



がこれほど甘く濃く強烈なのを知って興奮した。高ぶる気持をもて余したまま沙絵の家からわが家に帰った。そしてすぐ玄関脇の二畳の勉強部屋に入ると、その興奮をおちまけるように、画用紙に日本髪形の髪を描きなく

った。
私をこれほどまでに魅入らせたものが、漆のように黒く光りの当たったところが濃紺に輝く太く柔らかな髪の毛にあることはわかっていた。しかし今、息もつまるほど胸を押しつぶしたものは、その黒髪が、直線の絹糸が、その直線と曲線の巧みな交錯によって構成させる日本髪の結び方にあることが、絵に描いてみて始めてわかったのだった。しかしまだ稚い少年の私には複雑な髪型を描き現わすことは無理だった。一筋々々の流れの方向がどのように曲折するのかわからなかった。一枚失敗しては、バリバリと画用紙を破って、また描いてみた。しまいにはどうしても描けないので泣き出すと、母が驚いて飛んできた。



「どうしたんだい、まア坊、お前にも似合わない、泣き声なんか出したりして……」

「絵がうまく描けないんだよ」

「どれどれ」とのぞき込んで、

「高島田のおねえさんを描くのかい？ そりやむずかしいねえ——。第一男の子にや、そ

んな絵は無理だよ」とからかうようにいうので、

「うわーん！」と、とうとう泣き出した。母は驚いて、おろおろしてしまい、

「いいよいいよ、泣かなくなったって……」と、なだめていたが、急に思いついたように、

「そうそう、あのねまア坊、いいことがある。

絵の道具を持って母ちゃんについておいで：

：」芝の生れで江戸ッ子娘だったことを自慢する母は、ふだんから気が早くて、言葉より実行してしまう性質である。自分でさっさと、画用紙鉛筆えのぐとまとめてもつと私の手をぐいぐい引いて、家の外に出た。沙絵と母はよく似ているな、とこの時私は始めて気がついた。明日学校に行く途中、沙絵に、お前は芝の生れだろう？ と聞いてみようと思った。

母が私を連れていったのは五六間先きの中通りにある化粧品屋の店先きだった。

「まア坊、このうちが、うちの大家さんだよ」

と母は教えた。店には誰れもいなかった。

「ごめんください」母が声をかけると、

「はアーい！」きれいな若い声がして出てき

たのは、なんと沙絵の髪結いにいたおねえさんだったから、うわっ！ といって私は逃げ出そうとした。それを母は単なる羞かしさぐらいにしか考えず、しっかり私の腕をつかんだまま、

「実は、うちの子供が学校の図画の宿題で、日本髪の女の人を描いてこいといわれ、うちで描いてみたんですけど、どうもうまく描けないでとうとう泣きだしてしまっただけです。

厚かましいお願いですけど葉子さん、ひとつモデルになってやっていただけないでしょうか？」誰れも「学校の宿題」だなんて云いやしない。図画を描いていけば宿題だと早呑みこみしてしまう母である。おねえさんは愛想よく、

「それは大変ね、はい、かしこまりました。喜んでモデルにならせていただきますよ。ちやうど、いまさっき髪結いさんに行ってきたばかりなの——」と羞かしさと自慢を半々に、水々しい島田髷に手を挙げて、シナをつくってみせた。母は大仰に讃嘆の声を出し、

「まア、なんてよくできましたこと。ちやうど、うしろを見せて。まアマア、今度は横を、まアマア、女のあたしがほれほれするんだから、お葉ちゃん、さぞ近所の男衆が大さわぎでしょう？」

「あら!? いやだ小母さん——」ふたりは、肩を叩いたり、指で突いたりして笑い合ったあと、おねえさんは、

「それでは小母さん、坊っちゃんをおあずかりして、絵ができ上ったら、あたしが小母さんちまでお送りしていきますから、どうぞ御心配なく——」

「いいえ、そんなにしないでいただかなくて、ひとり帰れますから——。じゃま

ア坊、いつまでもお邪魔してンじゃないよ。ではお葉ちゃん、よろしくお願い致します」

母とおねえさんの勝手ぎめで、私はひとり知らぬ家に取り残された。おねえさんはそのお母さんを呼び、わけを話して店番を頼むと「さア坊っちゃん、おねえさんのお部屋にいらっしやい。そこでゆっくりおねえさんをモデルにして、絵を描きましょう——」

撓やかな手が私の肩にかかり、顔を真ッ赤にしてうつむいている私の顔をのぞきこむようにしながら、やさしくいった。

母にはもちろん、美代子にも沙絵にもない、甘い女の人の香りが私の頭の中を掻きまわした。

お葉ねえさんの部屋は小さかったが、夢のようにきれいで芳い香りがした。私はなおのこと頭がぼうとなり、

「さア、描いてちょうだい」といわれても、体や手がぶるぶる震えて、絵どころではなかった。

四

「どうしたの？ むずかしくって、描けないの？」

4 Bの鉛筆が画用紙の面をカタカタと小刻みに突いて小さな点々を数限りなく作った。

おねえさんはそんな私をいぶかしげに見ながら、正面から画用紙をのぞき込んだ。

艶々と匂う櫛目の美しい前髪が、私の顔面すれすれに迫ってきた。その甘美な髪油の香りが、おねえさんのつけている香水と、おねえさん自身の肌の温い匂いに入り混って、私の鼻口を強烈な勢いで襲ってきた。

すっかりあがってしまった私を、羞かしさからだと思ったのだろう。おねえさんは私の気持を落着けようと、美しい顔にやさしい微笑を浮べて話しかけてくるのだった。

「さつき髪結いの沙絵ちゃんと一緒に、私が髪を結っているところへ、あなた来たわねえ——」私はコクリとうなずいた。

「宿題の絵の勉強のためだったの？」そうじやなかったけれど、他の言葉がいえないので仕方なくまたコクリをした。

「日本髪は見ただけじゃ、ちょっと描けないわねえ。むずかしくって……。自分で結ってもらったり結ったりしてみなくちゃ、憶えられないかも知れないわ」

「おねえさんなら、それじゃア描けるね」

「描けるかも知れないけど、生れつき絵が下手だから、うまく描くことはできないけど」

「そういいながらも、おねえさんは私のうしろに廻って、私の体を抱くような格好です

らすらと画用紙に、高島田の横向きの型を線描きした。下手どころではない。細い美しい線でみるみるうちに美しい絵ができ上った。

「うわーっ！ うまいッ！」私は真底から感嘆の声を挙げた。うふふふ、と照れたように笑ったおねえさんのびんの髪が私の頬にこすりつけられた。それはひんやりと冷めたいのだが私の肌には、何万ボルトかの電流のように劇しく感じられ、ビリッビリッと体を痙攣させたと同時に、びよんと私はおねえさんの腕の中から体を飛び上らせてしまった。それがあまり不意だったので、おねえさんはあわてて私の腰のあたりをぎゅっと掴んだ。と、ふたりの体はもつれ合って、畳の上に転んだ。私はおねえさんの体の下になった。ふっくらした両のお乳が私の顔の上にあった。私は息の苦しさと、甘いおねえさんの体の匂いの喜びとを同時に感じた。

「くっくくくく……」とそのままの格好でおねえさんは、いたずらっぽく笑った。

「どうだ？ いたずら小僧。少しは苦しいか？」

「く、くるし……くない……」と私はもったこのままでもいたので、そう答えた。

「なに？ 苦しくない？」おねえさんは体を少し下にずらせ、顔と顔が重なるようにして

いった。すると冷めたい髪が私の頬にこすりつけられ、あの烈しい香りが存分に私の体を締めつけるように匂った。私の頭の中も胸の中も、うわーん、うわーん、と泣きたいような叫びたいような声を挙げた。耳元で百の鐘を——ぺんに鳴らされたように、がんがんした。

その苦しさを吐きだすために、私は夢中で「好き好き。僕おねえさん大好き……」「うれしいッ！ おねえさんも、僕が大好き！」

それが降参したことになったのだろう。おねえさんはようやく私の体を離してくれた。

私の体も汗びっしょりだったが、おねえさんの顔も真ッ赤だった。

「あたしには男の兄弟って、ひとりもないの——。だから、あたし一ぺんで僕が好きになつて、弟のように思ってしまったのね」

「僕には女の姉妹って、やっぱりひとりもないんだよ。おねえさんみたいなひとが、うちにいたらいいな……」

「姉弟になりましょうか？」

「うん！」私は元気に答えた。おねえさんは細いきれいな小指を出して、

「ゲンマン！」

「ゲンマン！」私も小指を出して大きくふっ



た。ふたりはこのことを内緒にしておくことを約束した。私はうれしくて仕方がなかった。

あの美しい黒髪で島田を結ったおねえさんが、私の本当のおねえさんになってくれたのだ。艶も匂いも素晴らしい島田髻が私の物と同じになったのだ。

その日から私は毎日、お葉ねえさんの家に遊びにいった。するとある朝のこと、私を学校に行こうと迎えにきた沙絵が憤ったような顔でいった。

「あんた小間物屋のおねえさん好きなの？」

私はふたりだけの内緒を知られて、ギョツとした。言葉につまんだが嘘はつけない性質だった。

「うん……。好きだよ——」

「どうして？ あんなひとのどんどこが好きなの？」 あんなひとといわれて私はムツとした。思わず叩きつけるように、

「あのおねえさん、日本髪が素晴らしいんだもん！」といった。沙絵はびっくりしたように目をパチクリしていたが、

「そう？……そうね……。あのひとの髪の毛、本当に黒くて艶があって、長くていい髪の毛ね——」と呟くようにいつていたが、急にまた私を睨みつけると、

「嫌いよッ！ あんたなんか、嫌いッ！」と叫ぶと、とつと、草履袋をふり廻しながら先に馳けていってしまった。

五

喧嘩したようになったので、その日から私はひとりで学校へいった。沙絵と顔を合わせてもお互いに口もきかなかった。そんなある日、少し遅れて学校に行くと、教室のなかがばかに騒々しい。入ってみると、男も女も生徒が多数、ガヤガヤと円くなって誰れかを取り囲んでいた。一体どうしたんだい？ といながら私も人を掻き分けて、なかをのぞきこんで驚いた。

「うううう！」目を白黒させた。そこには小

さな美しい京の舞妓が立っていた。そしてそれはなんと、沙絵だったのである。日頃のお狭な少女からは想像もつかない、夢のような姿であった。

「これ誰れに結って貰ったの？」

「お母さんよ。だって、お母さん髪結いですもの」

「舞妓さんって、ポツクリ履くんでしょ？」

「ええ、あとからお母さんが踊りの道具と一緒に持ってきてくれるの——」

「黒田さんは？」印刷屋の娘と沙絵は同じ踊りの稽古所に通っていて、今日はその発表会があるのだった。

「あの人は道成寺踊るんだけど、朝のうちに出るの、学校休むのよ。あたしはお昼からでしょ。午前中だけお勉強していくの……」

口々に羨望と賞讃の入り混った質問に答えている沙絵は、ふだんと少しも変りがない言葉つきであった、得意そうな様子もない。ところが、ふと私の顔と目があった時、瞬間に「どう？」というようにツン、としてみせ、その美しい日本髪と衣装を見せびらかすように、ゆっくりとひとまわりして見せたのである。いつもの私だったら、チェツ！と舌うちしてなにか冷やかしの言葉を投げつけたろうが、今はとてもそんなところではなかった。

赤い鹿の子に对照して、艶々と黒髪が美しく映え、まだ髷に花やびらのかんざしを差していないのが、かえって黒髪そのものの美しさを見せていた。そして着物は、美しい半衿を幅広く出して、大きく襟を抜き、帯は腰から巻きあげて締め「だらり」結びにして長く下げている。この舞妓の姿は今まで話にきいたり「月形半平太」の映画でみたぐらい、実際に見たのはこの時が、生れて始めてだった。それは私の魂を文字通り宙天に飛ばしてしまったほど美しかったのである。私は他に生徒たちがいなかったら、沙絵だけだったら、彼女の前に膝まづいて、この前の無礼を詫びて許しを乞い、許されたら彼女の黒髪の髷に顔をつけ、その香りを感触を得てみたかった。

授業中私は今まであれほど心に深く刻まれていた美代子のことを、すっかり忘れ、いまはただ沙絵の黒髪だけが、目にちらつき、ひたすらに思われてならなかった。

昼になって、三時間目の授業が終る時先生が私に向い、

「君も北原と一緒に踊りの発表会にいくんだってな。北原のお母さんにいわれて許可してあるから、早退きしていいよ」といった。私は意外のことにはびっくりした。一体どうし

たことだろうか？とまごまごしていると、よそ行きの着物を着た母と北原の小母さんが、そろって教室に入ってきて丁寧な先生に挨拶をした。ふたりは姉妹のように仲よく親しそうだった。またまた私はあせんとしたのだった。あとで知ったのだが、このことはみんな沙絵の計ったことで、私を連れていかなければ発表会に出ないと駄々をこねて、おどしたのだそうである。

北原親子と私たち親子は自動車に乗って、舞踊発表会の会場である日比谷音楽堂に向った。私と沙絵、そのとなりにその母、そのとなりに私の母の順序で座席に掛けたが、坐るとすぐ沙絵は私の耳もとに口をよせて、「葉子おねえさんと、あたしの日本髪、どっちが素晴らしい？」とささやいた。そういわれたって、現在ここににいる者と、いない者とは勝負にならない。現に匂いも艶も真近にある沙絵の黒髪の美しさに、完全に圧倒されていた私は、

「も、もちろん、君のさ……」と喘ぎながら云うと、うれしい！ といって、私の掌をぐっと握った。そのままふたりの小さな掌がぐつしよりと汗に濡れても沙絵は離そうとしなかった。その時、それまで母と親しそうに世間話をしていた小母さんの声かふと私の耳を

見たもの聞いたもの

恐ろしや女の執念

★35年10月22日の新関西新聞に、「変態！ 高級衣類ドロボウ」という六段抜きの大見出しで、下着フェチズムに欲が絡んで来て、4千万円近くの衣類泥棒をやった男の記事が掲載されていた。「女性の衣類は金になる。それにあの女性のやわらかいハダざわりのする着物には、たまらない魅力を感じる」と色と欲の二またかけた女性高級衣類専門の窃盗が東京大崎署からこのほど送検された。男は東京台東区中根岸71、松根荘内、無職渡辺末太郎(38)で盗品は新潟県の女の古物商に送り、衣類を受け取った女古物商は、着物の裏地をとりかえたり、目立つ着物は染め直してさばいていたという手のこんだ故買をやってもうけていた。このように用意周到だったが、被害者が盗まれた着物を覚えていたことからアシがつき、つかまってしまった。

★それにしても、着物にもっている女の執念はすごいものである。

★盗まれた着物を発見したのは、東京品川区上大崎1の475 加藤進さん(57)の妻ミスキさん(56)で去る9月18日午後2時ごろ千代田区神田岩本町8さきの古物商林商店をなんの気なしにのぞいて「本場大島女物裕」が、自分のものとピンと来たのであった。

★早速大崎署に連絡、調査を進めて、前記渡辺末太郎が検挙されたのだが、この男の女物着物専門の盗みの動機は、はじめ近所の庭にあった女のパンティや下着類を盗んで集めては楽しんでいて「これでは金にならない。快感を満足させたあげく、金目になる女の高級衣類を盗んでやろう」と発心し、色と欲の二筋かけて悪の道に足を踏み入れたのだった。

★盗みを働いているのを隠して、妻のT子さんとは34年の5月に結婚し、家庭ではよい亭主ぶりでT子さんも、古物商としての渡辺を信じ切っていたようだった。

★3年間も渡辺のことがわからなかったのは、盗品の処分の方法が巧みなためだが、盗まれた恨みにこりかたまったミスキさんの執念の前に、ついに足を出したのである。

「女の着物には手を出すな—ということですか」と渡辺は留置場でボヤいていたとか。

そばだたせた。

「上川さんのお葉ちゃんね、いよいよ決心したらしゅうござんすよ」

「まあ、あのなんとかいいう建築会社の息子さんからあった縁談を？」

「両方で写真を見て、満更でもなさそうなのに、なぜだかお葉ちゃんの方で、お見合いを

承知しなかったんですがね。昨日、奥さんと

見えて、お葉ちゃん、高島田に結ったんですよ。その時奥さん、これならもうしめたもんだと、喜んでいましたっけ……」

「それでお見合いっ？」

「今日歌舞伎座で……」

私の頭の中に真ッ黒な墨汁が溢れ、ドロドロ

口と廻りはじめ、みるみる、ごうごうと渦を巻きだした。

「バカなバカな……。そんなバカな……。僕に内緒であの黒髪を高島田に結ってお見合いするなんて……。あのおねえさんの黒髪が他の男のものになってしまふなんて！」

(未完)



読者短評



◎他にも御投書は多くありましたが頁数の都合で掲載出来ませんでした事をおわびします。この欄の投稿は、ハガキでも便箋でも結構です。御自由にお書き下さってお送り下さい。今月掲載しました方には本誌次号をお送り申し上げます。誌上匿名は御自由ですが、住所と氏名はお書き入れ下さい。

(読者短評係)

の発展を望みます。

(大阪 TH生)

◎表紙のヌード、これはこれなりに落着いたものでした。このポーズはいただけません。時代物が五編も掲載になったことはうれしかぎりですが、一頃の面白さに欠けているようです。飯田氏の「鬼乳房伝奇」も完結しましたが、この結末は意外にあっけなく常道的です。絵物語の「異変女隠密記」が圧巻で、古正英生氏の挿絵が功を奏しております。大体新装版のこの形式で時代小説を取入れるというのが無理かも知れません。このスタイルでは、やはり空想未来物マゾか、現代物を取入れるのが本当でしょう。ささやかながらも目次カットの秋吉禎氏の作品は、実に珠玉的な小品でした。のけぞった女の表情、バックの怪奇的な城、それぞれ文句ありません。時代物は全部カットして、現代物にする位の決心が欲しいものです。編集部の意向としては如何ですか？

編集後記欄が少ないので物足りません。「読者短評欄」でも編集部の意見を以前のように時々までよいですから発表して下さい。現代物は、個々の作品に

◎偶然本屋で十一月号を拝見し「裏窓」の懐かしい文字に、余りにも装いが変わっているの、他の雑誌かと思いつながら、手にとつて見て驚いた。豹変するとはこのことを言うのだろうか、全く生れ変わった出来ばえです。色々の点で気に入りました。特にこれなるかなと思つたのは写真です。絵ならばリアリステックに画けば画く程、味が出るが、写真の場合は、これまでのどのSM誌も絵の再現を写真でやつたまでに過ぎない。余りにお脳の弱いやり方であつた。馬鹿の一つ憶えのように小道具を並べるか、縛り写真にしても、リアリステックに写る事の欠

点を誇張しているだけで、全く何の意味もないものでしかなかった。写真のもつリアリステックを生かしたものは出来ないのか、と内心馬鹿らしくなつて愛想を尽かしている時、十一月号を見て驚嘆した次第です。「吊られる女」の写真は全く今迄の写真にない表現である。SMの表現も芸術的に高めるには、人間性のSMの面を純化させねばならない。人間の内面にあるSMの心理を昇華させねばならない。幼稚な縛りはもはや過去のものである。それを写真独特の表現をしなくては写真の意味がない。ではどうしたらよいか？「吊られる女」のヌード

写真は代表的な作品である。吉田久氏の卓絶したSMに対する審美眼に敬意を表する。又ズバリこれを編集した御誌の他誌にない近代的芸術的なセンスに頭を下げる。又「囚われの構図」深森映士氏の作品はビニール紐を用い、近代性と優雅さと、そこにSMのきびしさを秘めて、芸術にまで高めようとする意欲がうかがえてうれしかった。吉田久氏大いに健闘されんことを。甘き中にきびしさを、きびしさの中に甘さを織り込んだ氏独特の作品にお目にかかるを楽しみに、深森映士氏大いに奮闘されんことを。脱皮した御誌に心から敬意を表し、益々御誌

ついてふれるまでに至らなかつたのですが「彼の孤独な夜の遊び」「エレベーターガールの夜」「妖髪記」は印象に残ったものです。一月号を期待しながらベンを置きます。(東京・東一郎)

◎裏窓の12月号拝見しました。さつそく短評を寄せたいと思います。表紙は色調がすばらしく高級誌の風格十分です。内容は私がサジストの女性である関係上マゾ小説にのみ興味がありま

の交友の場として開放してはいかがでしょう。そしたら私も裏窓のファンのマゾ男性の上に君臨してその女王振りを大いに発揮できると楽しみにしています。(坂本清子 20才)

◎SMマガジン裏窓も新装12月号を迎えてはや三号。茶のバックに誌名は白の抜文字の表紙。センス溢れる色彩のコントラストは他誌に見られぬスマートなこと。唯、主要目次を表紙に印刷することは新装裏窓のもつス

ッタン倶楽部だけに終らず以後の活躍を期待。鳴滝三郎氏作、妖髪記、氏の作品を愛する私は今回もまた愉しく読了。鬼乳房伝奇、期せずして前記マンハッタン倶楽部と同号で完結。両作者の次回作を期待。旧号に比してヌードフォト、悦虐的作品の増加に感謝。編集S氏曰く「全部自分の好きなものばかり並べろという御熱心な御愛顧も、涙がでるほど有難いが、板ばさみとは辛いネ」名実共にSMマガジン裏窓となった本誌編集部にとつては「偽らざる告白」とも云えるもの、お察しします。(横浜・いさを)

◎毎号発展を続ける意欲的な編集は瞠目に価いすると思えます。それは十二月号の瀟洒な色調の表紙によく現われています。それに紙質も上質となつて

します。

この種のサド傑作小説は多いのですが、この妖気に満ちたニユーヨーク物語の前にはいささか影をうすくさせられる程です。やはり本場(?)の残酷物語だからでせうか? 日本もので対抗出来るのはやはり時代小説の方が得で、「鬼乳房伝奇」のサディックな陶酔は最終回に入つて高潮した感がある。挿画のムードも見事です。その点マゾものは得てして一人よがりのといつては失礼ですが、そんな思考等が時に晦渋に述べられていないとは云えず、又集中力にやや乏しくなりかねないのではな

① 男になりてえ

「仙太、おめえ、男になりてえか？」
馬蠅の甚十が重々しい声でいった。

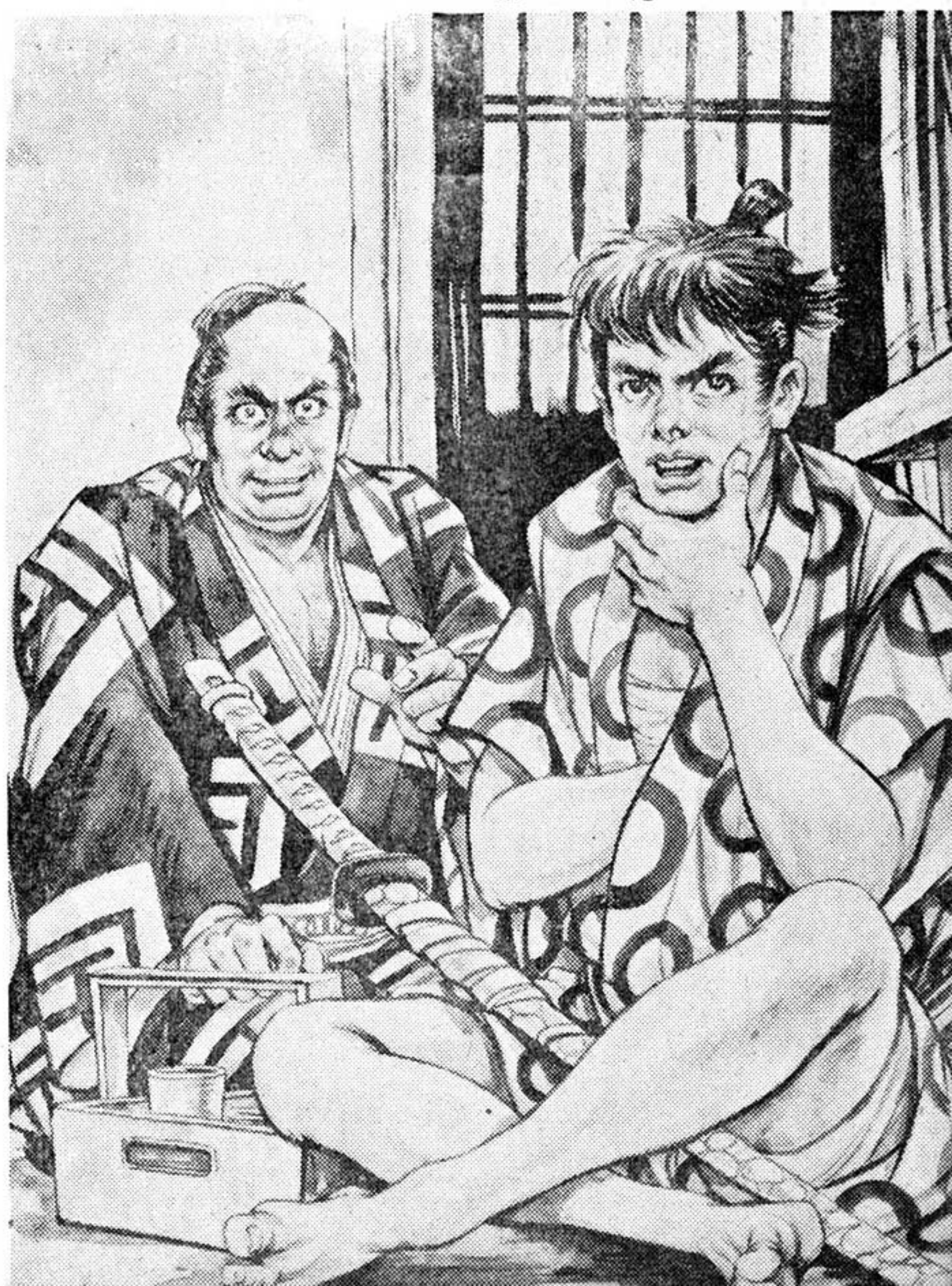
「ヘッ？ ええ、そりゃ親分、男になりてえからこそ、こうして親分の身内に加えさせて頂いた、あつしでござんす」

と、こたえた仙太郎は、まだ前髪も剃り落とせない小僧ツ子やくざ。ことし十七になつたばかりの三ン下だった。

「そうか、おめえ、男になりてえのなら」といってから、甚十親分の目玉が、馬蠅のよう

男 損ったなり

文・松平荘司
画・豊田みのる



に、ぎょろりと光った。「隣りの草加宿の貸元、秋刀魚の勝五郎を叩ッ斬ってこい」

「ええッ、秋刀魚の親分を？ そりゃまた、なぜで？」

仙太郎は、おどろいて顔をあげた。

「いいか、仙太郎。秋刀魚の勝五郎ってのはな、まったく悪い親分なんだ。近在の女をか

どわかしてきては、かたっぱしから手ごめに
して自分のめかけにするという評判。渡世人
仲間の風上にもおけねえ奴だ。そこで仙太、
堅気の衆のために、おめえが秋刀魚を叩ッ斬
れば、いっぺんで男になれるってえ寸法だ」
言葉巧みに、チンピラの仙太郎をそそのか
す馬蠅の甚十だった。



男に

時代 絵物語

② ずるい策略

からだの大きさはもう一人前。馬鹿力があって腕っぷしも強い。ただし、頭のほうは、十七歳相当の知能しかない仙太郎だった。秋刀魚の勝五郎を殺せば、男になれる、とそそのかされて仙太郎は有頂天になった。

「いいか、仙太。さいわい、おめえはおれの身内になってから目が浅い。秋刀魚一家のやつらにも、おめえの顔は知られてねえ。そこで、おめえは白無垢鉄火の旅にんのふりをして、秋刀魚一家へ草鞋をぬぐんだ。いいか、わかったな。おめえが馬蠅一家の者だと知られたら、ことは面倒になる。そのへんの道理を、よくわきまえておけよ」

馬蠅の甚十は、ずるがしこい策略をめぐらすのだった。

「へい、かしこまりやした。親分、それじゃかならず秋刀魚の親分を、叩ッ斬ってめえりますよ」

意気こんでこたえ、仙太郎は長脇差を握りしめた。なにしろ向こうみずのチンピラだ。旅にん姿に身仕度すると、早くも仙太郎は血走った顔で馬蠅一家を後にするのだった。(馬鹿野郎めが、きちがい犬みてえに歯をむきだして、飛びだしていきやがったぜ……) 甚十は腹のなかで笑った。そして奥の間へ声をかけた。

「おい、お絹をここへひきだせ」

「へい」とこたえて二、三名の子分が、うしろ手に縛りあげ、猿ぐつわを噛ませた一人の娘を、縄尻とってひき出してきた。

この娘は、仙太郎の姉のお絹だった。

③ 一石二鳥

お絹はこの界限でも評判の器量よし、そして気だてもやさしい娘だった。弟の仙太郎とたった二人きりの姉弟暮しなのだ。

ところが、その仙太郎がぐれて、馬蠅一家の三ン下になってしまった。お絹は歎き悲しみ、必死になって意見したが駄目だった。

先年女房を亡くした馬蠅の甚十が、このお絹に目をつけた。「おれの女房になれ」と、おどし半分の強談判で掛け合った。

しかし、お絹はいやだった。やくざの親分なんか大きらいだった。博奕打ちなんか、人間の屑だと思っている。

「どうしても、いやだっていうのか！」

甚十は怒った。やくざが怒れば、当然暴力になる。家で賃仕事をしていたお絹は、手足を縛られ、猿ぐつわを噛まされて、甚十一家の奥の間へかつぎこまれたのである。

ところで、ここで邪魔なのは、仙太郎だ。ぐれてはいるが、仙太郎は姉思いだった。

甚十がお絹を暴力でかどわかしてきたなんてことを知ったら、仙太郎は怒って、暴れだすにちがいない。すぐ頭にくる性質で腕力があるから、暴れられては、面倒になる。

甚十は考えた。(仙太郎のやつを、どこか



遠い所へやってしまふにかぎる……)

そこで、隣り宿の秋刀魚の勝五郎を斬らせにやったのだ。勝五郎とは日頃から嫌悪の間柄である。勝五郎が死ねば、その縄張りも自分のものになる。仙太郎にうまく秋刀魚が斬られれば、まさに一石二鳥だった。

「な、なにをするんです、乱暴な！」

猿ぐつわがはずれて、お絹が声をあげた。

「ふふふ……いくらでも声をあげろよ。お前の弟は、もうこの一家にはいねえんだ。いまごろは地獄の一丁目あたりにさしかかっているはずだ。そこでこれからお前を、じっくりと責めあげて、どうでもおれのものにしようっていう段取りだ——」卑しく笑う甚十だ。

④ 夜半の泣き声

一方、その仙太郎は――

うまく旅にんだと偽って、秋刀魚一家へ草鞋をぬいでいた。

(しめしめ、こんなにうまくもぐりこめるとは思わなかったぜ。ヘン、勝五郎のまぬけ野郎め！)

郎め！

長脇差を両腕に抱いて、あてがわれた一室の布団のなかへ身を横たえる仙太郎。どうせバラすのは真夜中だ。それまでひと眠り、と思ったが、緊張して眠れるものではない。

と――奥の間の、勝五郎の寝所とおぼしい方角から、女の泣き声がかきこえてきた。

(おや?) 仙太郎はむっくりと起きあがる。泣き声はときおり悲鳴のような痛切な声と変わって、どうも不穏な気配がする。

仙太郎は、障子をあけて廊下に出た。這うようにして廊下を伝い、奥の寝間へ――

(あッ、こいつはいってえ?……)

障子の隙間から部屋の中をのぞきこんだ仙太郎、思わず目をみはった。

泣き声が洩れているのも道理。

緋縮緬の腰巻一つの女が、うしろ手にくくりあげられて、床の間の飾り柱につながれているのだ。その女の前には、秋刀魚の勝五郎が、あぶらぎった赤鼻をひくつかせている。「えへへ、どうだい、お静、この鶏の羽根の味は、うふふふ……」

勝五郎の右手の指さきには、一枚の羽毛。それをひらひらさせながら、ちょうど女の白い咽喉のあたりを、こちょこちょと、くすぐっているところなのだ。

「あああ、くすぐりたい、苦しいよう、ひひひ、いひひッッ」

女は両手をうしろに縛られたまま、胸をのけぞらせ、肩をすくませ、その羽毛からのがれよう避けようとして身をもだえている。

(こ、こりゃ、いってえ、なんのさまだ!) のぞき見の仙太郎は、啞然とした。



⑤ くすぐり部屋

チンピラの仙太郎にとって、これはたしかにまぶしく、ぎょつとさせる見世物だった。

勝五郎の指さきの羽毛が、咽喉や胸のあたりをくすぐるたびに、お静という若い女は、「ククク……ヒヒヒ……」と奇妙なうめき声をあげて、つきたての餅のようにやわらかくねくねと全身をくねらす。下半身には、燃えたつばかりの緋色をまとっているが、苦しがつて両足をばたつかせるので、その腰巻から白いむっちりした腿までがこぼれるのだ。

上半身は素裸で、両腕をうしろに縛った緋しごきが、乳房の上下にキリキリとくいこんでいる。女がのけぞるたびに、その乳房が、ゆらゆらと重たげにふるえた。

「どうだ、お静、こんどはひとつ、このへんのゴミを掃除してやろうかね、ふふふ……」勝五郎のほうも奇妙な笑い声をあげながらしきりに羽毛をうごかしつつづけるのだ。

「あッ、あれ、親分、も、もうゆるしてッ、かんにんしておくんなさいようノ」

黄色い声をあげながら、お静はもう息も絶えだえだった。胸が大きくはずむ。

のけぞるたびに、縛りつけられている背の柱に頭がぶつかすもいだから、髪がこわれて



元結が切れ、黒い髪の毛が襟から肩さきにくずれ落ちる。白い肩に漆黒の髪が流れているのは、なんともなまめかしく、妖しい光景だった。それでもなお勝五郎は、くすぐり責めの羽毛を休めなかった。

（くそッ、わかったぞ、うちの親分が言ってたとおりなんだ、なんてえ野郎なんだノ）

仙太郎は胸のなかでさげんだ。

——勝五郎というやつは、近在の女をかどわかしてきては、手ごめにして自分のものにする悪い親分だ……と言った甚十の言葉を。

仙太郎の頭に、カッと血がのぼった。

（堅気の衆のために、おれはこの悪い親分を叩ッ斬ってやるんだノ）

⑥ 血ぶるい狂犬

仙太郎は、長脇差をひっこぬいた。いきなり片足あげて、障子を蹴倒した。

「あッノ」おどろいたのは、勝五郎だった。

床の間の柱に縛りつけられているお静も、

「きゃあッノ」と、悲鳴をあげた。

「やい、勝五郎、てめえこれはいってえ何のさまだ。若え女を裸にして縛りつけ、いやらしい真似でくどくなんざあ、渡世人の風上にもおけねえ野郎だ、天に代わっておれが成敗してやる、かくごしろノ」

調子のいいタンカを吐きながら、仙太郎は白刃をふりかぶった。まるで狂犬の勢いだ。

「なんだ、てめえは？ おう、きょうの夕方うちへ草鞋をぬいだ旅にんじゃねえかい。お前さん、なにを血迷ってるんだ。くどくも何もありやしねえ、これはおれの女房だぜ」

勝五郎は逃げ腰になって弁解した。

「うるせえやいノ そんなごまかしになんかのるもんけえノ」

勢いたっている上に、頭に血がのぼっているからたまらない。仙太郎の白刃は、勝五郎の肩さきを、なぐるようにして斬り裂いた。

サアッと血しぶきあがり、悲鳴をあげて勝五郎はぶッ倒れた。

「ひゃあッノ」お静が金切り声をあげた。

仙太郎は、ぶるぶると血ぶるいして、頭によけい血がのぼった。お静を縛った緋しごきを、ふるえながら血刀で切り解いた。

「さあ、お娘御、悪親分はあっしがやつつけた。娘さんは早くここをお逃げなせえノ」

きどった声で仙太郎はいったが、しかしお静は、腰がぬけて立つことができない。

「じよ、じよ、じようだんじゃない。こ、この親分はね、あたしの亭主なんだよ。お前はなんだって、うちの親分を斬ったんだい、誰か、誰かきてえ、助けてえノ 人殺しノ」

お静は裸のまま犬のように四つん這いになって、絶叫した。



⑦ とんちき野郎

お静の悲鳴をきいて、秋刀魚一家の一の子分で、いたちの長次という男が、まっさきにかけてつてきた。四、五人が後からつづく。「あッ、親分ノ」血まみれになって倒れている勝五郎をみて、長次は愕然とした。

「親分をやったのは、こ、この若僧だよノ」お静はふるえる指で、仙太郎をさしてわめいた。

「くそッ、縛られて危いところを、せっかく助けてやったのに、恩知らずの女めノ」

仙太郎は、あきれ顔でいった。

「それじゃ、てめえは——」長次がいった。

「親分とおかみさんが楽しんでるのを、なにかカンちがいしやがったな。馬鹿野郎、親分はな、なにもおかみさんを脅したり、折檻していたわけじゃねえんだぞ、このとんちき野郎のおっちょこちよいめノ」

長次の頭にも血がのぼった。親分が殺された以上、子分としてはこのまま見過ごしにはできない。

「親分の仇だ、おい、みんな、この若僧をやっちなえノ」

五、六名の子分が、いっせいに長脇差をぬいて仙太郎に迫った。



仙太郎の足が、すくみあがった。こいつは殺されるノ と思った瞬間、死の恐怖が全身を襲った。死ぬのはいやだ、命が惜しいノ

(逃げなければ、おれはナマスにされるノ)

仙太郎は、血刀をかついで縁先から庭へとびだした。うまく逃げきれれば、おれはこれで男になれるんだノ 仙太郎は真夜中の外へ

とびだし、ねずみのように走った。

足は自然に、自分の親分の馬蠅一家の方角に向いていた。

「野郎、待てえノ」

いたちの長次を先頭に、親分を殺されたやぐざどもは、息せききって仙太郎を這いかけた。

⑧ しぶとい娘

「おいお絹、お前もよっぽど強情な娘だな。あきれたぜ。このへんでいいかげんに、ウンといったらどうでえ」

馬蠅の甚十が、まだお絹を責めている。

ここは馬蠅一家の、裏庭の片隅にある物置

き小屋のなか。お絹をここへひきずりこんで酒をのみながらねちねちと、気長に陥落させようという甚十の腹だ。

そのお絹は、帯を解かれ着物を剥がされ、いまは長襦袢一枚にむかれたしどけない姿を荒縄でうしろ手に縛られていた。細い、うい

られて、いつそう細く可憐に痛々しかった。「仙太郎ノ 仙ちゃアんノ」

お絹は顎をあげて弟の名を呼ぶ。いまは、弟だけが救いの綱のお絹だった。

「うふふ……その仙太郎はな、いまごろは、もう地獄の一丁目をすぎて三丁目。二度とこへは戻ってこられねえだろうさ」

甚十は舌なめずりをしてあざわらう。

秋刀魚の勝五郎を殺せとそそのかして仙太郎を追い出したが、勝五郎もいっばしの渡世人、たかが十六や七の小僧ツ子に斬られるほど、もうろくはしちゃいめえ、叩ッ斬られるのは、仙太郎のほうだ――。

あの向こうみずのチンピラさえいなくなれば、お絹を煮て喰おうと焼いて喰おうと、もう邪魔者はいねえ。

「親分は、仙ちゃんをどこへやったのです、お願いです、教えてくださいな」

お絹は、不安の心にさいなまれてさけぶ。姉のいうこともきかずに、やくざの仲間に入

った仙太郎だが、やっぱり可愛い弟なのだ。「ふふふ……さあ、その小さな顎をたてにふ

って、親分さんのお嫁さんになりますと言ってくれよ、こう、お絹坊」



⑨ みだれ長襦袢

「それ、返事をしなければ痛い目を見るぞ。この竹棒の先をな、こうしてお前の縄目のあいだにさしこんで、そら、ぐりッ、ぐりッ、ぐりッと同じあげるんだ、痛いぞ」

その言葉どおりに、甚十の手がうごいた。お絹の胸乳に、ぎゅちりと噛みこんだ縄目のあいだに、固い竹棒の先端が残忍にもぐりこんだ。

「ううッ、ああッ、あーッ」

お絹はたまりかねて身を揉む。お絹の柔肌を血のでるほどに容赦なく突きなぶる竹。こじられるたびに、縄がぎりぎり縮んでしめあがり、胸から腕の血が流れをとめて息がつかまるほどの苦しさ。

「これでもいやというのなら、天井からこうして、吊り下げてやるぜ」

甚十はお絹の縄尻を長くのばし、ほんとうに天井の梁へひっかけるのだ。

両足のさきが床から離れ、宙に吊られたその苦痛もさることながら、長襦袢の裾がみだれ、むなしく悶える二本の素足が、膝の上までもさらけだす羞恥に、お絹は歯をくいしばって泣いた。

その泣き声が、甚十の耳には天女の歌声の



ようにきこえる。むきだしにしたお絹の素肌を、竹の筥でペタペタと叩くのだ。肉感的なその音と、竹棒に伝わる生娘の感触。

屈辱にまみれ、お絹は虫のように吊られたまま、身をくねらせて悲鳴をあげた。

「もっと泣け、わめけ、いくら騒いだところで、ここは裏庭の物置き小屋。他人にきかれ

る気づかいはいねえ」

甚十の筥は、なおもお絹のからだを叩き、突きまわすのだ。

ところが――

秋刀魚一家の子分たちに追われた仙太郎が逃げ場に窮し、夢中でとびこんできたのが、この裏庭だった。

⑩ 断末魔の声

「た、たすけてえ、仙ちゃん、ひいーッ！」
どこを突かれたのか、ひと声するどくお絹
が悲鳴をあげた。

「おや、あれは姉さんの声だ！」
裏庭に逃げこんできた仙太郎が、お絹の悲

鳴をききとがめた。姉さんが、どうして、こ
んな裏庭の物置き小屋なんかにいるのか？

仙太郎は小屋の戸をがらりとあけた。
中のようなすをひと目みて、仙太郎は呆然と
した。縛られ吊るされている姉、竹棒を握っ
て責めている甚十親分。

「やッ、仙太、てめえ、生きて戻ってきやが

ったのか！」

甚十は仰天してわめいた。思わず吐いたそ
の言葉をきけば、いくら頭の悪いチンピラの
仙太郎にも、甚十の悪企みはわかった。

「そうか、そうだったのか、ちくしょう！」
勝五郎を斬ってきたばかりの血刀をふりか
ぶり、仙太郎は甚十の脳天をぶんなぐった。

「ぎゃあッ！」ときけび、甚十は血だるまに
なって倒れた。

「姉ちゃん、すまなかった、おれが馬鹿だっ
た。大馬鹿だったんだ！」

お絹の縄を切り解きながら、仙太郎は声を
あげて泣きだした。涙をポロポロ流し、しま
いには大声あげて、くやし泣きに泣いた。

「そうよ、あんたは馬鹿よ、やっと気がつい
たのね、でも気がつくのが遅すぎたわ！」
お絹も泣きながらいった。

たしかに遅かった。物置き小屋から、一步
外へ踏みはずした仙太郎の脇腹に、いたちの
長次の長脇差が、ふかふかと突き刺さった。

「親分の仇！ ざまアみやがれ！」

仙太郎の肩に脳天に胸に腹に、子分たちの
繰りだす白刃は、ところかまわず仙太郎を突
き、切りきさんだ。血だらけの両手を夜空に
のぼして、仙太郎は断末魔の声をあげた。
「ほんとにおれは、大馬鹿野郎だった！」



それはまったく、おかしい話といえはおかしなこともあるものである。

晩秋のある一日、私は町から少し離れた海岸へ釣りに出掛けた。今どきのんきに海釣りをやる者などといふたらどこにもいないのだったが、暇が主役でそうだったのである。

天候のせいもあって（一日中厚く曇ったきりだった）波は終始うるさく騒ぎ、その日は海鳥も鳴かない妙な日だった。おまけに魚は一匹すらかからずじまいで厭な一日を過してしまったものだとは私は呆れていた。

けれどもそれが、竿をようやくしまいかけた夕方になって、思いがけず一匹の魚が私の針に喰いついたのである。手ごたえは恐ろしく強かった。私は固唾を飲み込むと、慎重に糸をたぐりついにそれを陸の物にする事に成功した。

釣り上げた魚というのは少々奇妙な形態をしていたが、馬鹿でかいという代物でもなかったので私



長谷川 勇夫
画・江淵晃夫

悪魔の魚は口まで黒い

どこからどこまでまっ黒なこの魚は
話に聞く不老の珍魚かも知れない!

はそれを殺して家へ持って帰る事にした。

そこまではなんとも思わず、家に着くと私は早速夕食の料理にしてやろうとした。まずおもむろに一フィートばかりのその魚をもう一度摘み上げ、調べて見た。

とにかく私はこんなおかしい魚は、初めてお目にかかったのである。

というのはそいつがまさに全身どこからどこまでもが真黒けで、まるで墨のようだったからだ。どんなに黒い魚でも、たいていなら胸の部分ぐらい白っぽくなっているものだが、こいつは胸どころか口の中まで闇のような黒さだった。

それにもう一つは、目を持って



ないことだ。からだ全体の形はまあ普通なのに、そんなあんばいだったから、たべる勇気が挫けんばかりでしばらくは思案に暮れた。しかし腹もすいて来ると、こんな魚でも食べて食えんことはなからうと、再び食欲を起し、料理せんとした……。

が、私は再び全く驚かされたのだ。思わず握んでいた手から弾かれたように、魚を離してしまっただ。なぜなら、魚が、この闇のような魚がいつの間にか石のごとくコチンコチンに固くなってしまっていたからだ。

いったいこの魚は何だというのだろうか?——包丁と真黒な目のない魚の前で私はますます気味が悪くなり、当惑し果てた。このよ

うな不合理な魚が実際に生きていていいものだろうか? いや、おそらくこの化け物は創造主がうたた寝している間に勝手に出来上ってしまったものに相違ない……。

私はじつと真黒な魚を眺めた。それから腕組をして考えた。捨ててしまおうか、それとも隣りのトマスさんにやってしまおうか、と何遍もその気になった。けれどもこれが半分の大きさなら私はおそらくそのどっちかにしていたに相違あるまい、だが、実際はその気をおこさせるにはあまりに大きくて立派過ぎた。せつかく手に入れたものをそう簡単に諦めたりしちゃうあ、もったいないと思っただ。

第一中国の方には一匹食うと七十七年長生きできる魚というのがあるそうではないか。ことによると、こいつはその仲間かも知れない。インドには一匹それを食すると大変な賢者になれるという魚が千年に一年漁れるそうだ。

色合いから察すると、おそらく

これがその千年に一度漁れる珍魚の方かも知れない。たまたまそれがヨーロッパに、世界漫遊するといわれる途中、やって来て幸運にも私の手に入る結果になったのだ、と私は一人合点をした。

よもや、もう捨てる事などできない。長生きする方が賢者になれる方か、どの道ありがたいことだと感激せずにはおれなくなり、組んでいた腕をはずすと自分の掌を自分の拳で叩いたものだ。

早速鉄鍋にグラグラと湯を沸かし、私は真黒で目のない魚をそこへ抛り込んだ。そしてそのままグツグツとたつぷり四時間は煮つめてやった。

時計にして晩方の八時近くから十二時過ぎまでずっと一息も入れず蓋もとらずに煮たのだ。いくら強情に硬い魚なりといえどもこれだけ煮て置けば少しは軟かくなっただけだろう。

ここで私は一安心することにした。炉から火を引き、夜もふけたのでその日は寝ることに決めた。

さて、翌日の朝方。私は目を醒ますと、ゆうべの魚をすぐに想い出した。気にかかって、むしろ鍋の中を覗きたかったが、私はそれを朝食までこらえられたから偉かったと思う。ところがもう充分に鍋の蓋を開けてもいい頃になってであるが、おもむろに蓋をとった私は鍋の中が大変な結果になっていたのにびっくりしてしまっ

た。しばらく呆然と鍋を覗いて、私は立ちすくんだ。どうしてかという

と、鍋の中にはあの魚が影さえも見当らなくなっていたからだ。骨さえもなくなつただ鍋の底の方に煮のこりの湯がたまつていて、それが私の顔を映しているだけであ

った!?……まったく訳がわからな

い、はじめ猫が盗んだのかとも考えたが、それならばちゃんと蓋が元通りにしまつていたのはへんになるので、いよいよ奇妙だった。

一時はすっかり悲嘆に暮れた。しかしいくら残念がつて悲嘆に暮れていてもなくなつたものはどうしようもない。ついに、悪い夢を見たのだと思つていい加減に諦め、私は鍋に残つたかす湯を捨てることから朝食の仕度にとりか

らねばいけないと立ち上つた。

私が大発見をして声をあげたのはこの時だった。今の今までの

かりなくなつたと悲観していた魚を見つけたのである。それはただの煮残り湯ばかりだと思つていた、鍋底の液体が妙にべつたりとしていて、まるで飴か

コールタールのようになつていたからである。私はこの時やっと訳を諒解した。

実はこのコールタールみたいな液体が、ゆうべの黒い魚だったのだ。それが強い火であまり永く煮過ぎたため、こんな姿に変わり果ててしまつた次第にもう疑いはなかつた。骨も皮もすっかり溶けたのだ、ゆうべのあの硬直した形を考

えると、何だか狐につままれたような気持だった。

そうなるとこれは捨ててしまふ訳にはいかぬ、私はスープレ用の器に真黒でほとんど外見は石炭を蒸し焼にしたときにできるコールタールと変らない液体を、油でも移すときのようにスプーンでとり上げた。

そしてそれをうやうやしく食卓にのせてからまた一通り眺めた。実際、これがあの魚なのかと考えると本当には思えない。でも、いざこんなふうになつてしまふともはや料理の方法も何もあつたものではないから、と私は考えた。やはり塩でもふってから匙ですするより仕方があるまい。

やがて私は朝の腹ごしらえに取りかかった。青豆とパンと馬鈴薯とチーズ、それにこの真黒いスー

プが大きな器に一杯だった。まずパンを私は食つた。次にチーズ、青豆、馬鈴薯を食ひ、いよいよスープの番になった。ねばっこののを三度ばかり匙で掻き廻し



鷹揚に構えて私は一匙取ると、それ
を鼻の下へもって来た。

が、期待していたにおいはず
全くの無臭だった。ちょっと意外
に思って用心しながら一口すす
たのだが……

まさに、意外！ 私はすっかり

自分の舌が信じられなかった。

あわてて二匙目をすくい、すす

ってもう一度確かめて見た……？

続いて三度。……四度、五度、息

もつかず私は何回も器から口へ匙

を運んだ。……こんなはずであ

るものだろうか？！

この黒い魚の溶けたスープは何
と、蜂蜜と同じ味なのである！

この甘さ、この風味、嘯みたい

に蜂の蜜に劣ってはいなかった。

私は思いもかけぬこの風味にわ

れを忘れて喜んだ。とても素晴

らしさで一度なめ始めてしまった

のがそれこそ運の尽き、滅多にな
めやめられるものではなかった。

加速度的になめ減らして行っ

まい、半分はしまっておこうと決

めていながらもついついその量も

なめ越してしまうほどだった！

それでも器の量が多かったおかげ

で私はやつのこと四分目ほどを

残すことに我慢したのである。

残した黒い魚のスープはかたく
密封し、蟻や猫の来ない所を選ん
で秘蔵することにした。

私はこれぞまさしくインドの寓
話にある、千年に一度の薬で大賢
者になれる珍品に間違いなしと判
定を下した。

次の日からの私は、毎夜睡る前
にこの真黒な汁をとり出し、一人
でちびりちびりと嗜んでいた。

しかし一たん匙を手にするとな
ると、とかくその美味に酔い惑い
がちであるので、私はそれを憂い、
できるだけ永持ちが続くよう一日
一匙以上はすすらぬことまで決め
たのである。しかるにその甲斐も
空しく、ある日曜日、隣のトマス

さんが呼びもしないのに勝手に私の家へ遊びにやって来た。

そもそもこのトマスさんであるが、いつもは至って低脳なくせに話がこと魚料理の段になるとたちまち人が変わったみたいに豹変するのである。中国の山奥に一匹食

えば七十七年長生きできる魚のいることも、インドで漁れる千年に一度の珍魚のことも実はこのトマスに聞かされたものだった。彼は

その上、まるで非近世的な男で東洋崇拜を今でも固守している老人である。

それを私は怒らせない程度で適当にあしらっていたのだが、悪いことに彼は密封してある器を見つけてしまった。

「おい、ジョンさんや。馬鹿に大事そうにしまっておくものがあるじゃあないか？」

知らない間に戸棚から私の大事にしていたものを取り出していたのである。私はびっくりし、すっかりあわててしまった。

「まあ、そう騒ぎなさんな。儂と

ジョンさんの間柄じゃないかね。隠しっこなしだよ」

急いでトマスの手からひったくろうとした私の腕を押え、彼はニヤッと笑った。

「小銭でも溜めなすったのかと思つたが、わりに軽いね……儂は開けさせてもらうよ」

彼は勝手にそういいざま器の中をしらべてしまったのだ。私は最後の審判を聞いた思いだった。

「何だ？ こりゃ」

トマスはいとも不愉快な顔をあげて私を見た。それは期待はずれによる間の抜けた顔だ。しかし彼はもう一度器の底をのぞいた。

「コールタールのようだが……」

私はもうこうなつては残念だがうち明けてしまわない訳にはいかなかった。汲々と、まず一匙舐めさせてから私はその味の素性を明らかにした。

トマスさんもさすがにこんなすてきなものを口にするのは初めて見え、残り少なくなった器の底をしきりに匙で音立てながら、

「ふむ。一フィートばかりの闇のように真黒い魚だと？……そいつがたった一匹ジョンさんの糸に夕暮時ひっかかって陸に上つたてわけか」

私の説明を聞いてはうなずいて

いた。

「そいつを四時間も煮たら、すっかり溶けてかかる液体になつたてわけなんだね？……なるほど。全く奇妙な代物だ、儂にも皆目理屈がわからんぞ……いや恐れ入った。とにかくこんな旨い味は初めてじゃったね」

彼はすっかり器の底をなめ終つてしまふと舌なめずりしながら一人であなづいていた。それから笑つた。いかにも満足げな調子で。

しかし別に私が期待していたところの「千年に一度漁れる賢者の魚」だろうという言葉は一言も出はしなかった。一人でそう確信しているものの、やはり私は彼に認めてもらいたく、早く彼が何とか支那とかインドとかの言葉を出さないかとうずうずした。

けれどもこのトマスは何てじれったい奴なんだらう、彼は「うまい」と夢中になつて御馳走になつておきながら、それが終つても私が待っている言葉はインドのイの字も出さなかった。



そしてそのまま彼は帰ろうとするのである。私はついに我慢しきれなくなつて食い逃げのトマスを呼び止めた。

「何かね？ ジョンさん！」

隣りの男は出口の前で振り返つた。私は哀願するように、今食つた魚がインドかアラビアかどこかヨーロッパでないとこの魚じゃないかも一度よく考えて見てくれとどなった。

するといささか私の権幕に驚いたらしく彼は片手をあげた。「まあ、まあ」とでもいうつもりなのだろう、そのままゆっくり戻つて来た。

それから彼は眼を細めて考えるふりをしてくれたが、さらに二度首を振ってから急に声をあげた。「わかった！……あれだ、あれだったんだよ。……と、とんでもねえ奴だった！」

顔色を失くしてトマスさんはあわてて口の中へ手をつっこんだのだ。そしてひどくあわて出した。私は呆氣にとられてしまった。



「大変だあ！……人殺し、人殺しだあ！」

隣りのトマスさんは急に気違ひみたいに騒ぎ出したのだ。私は面喰らつた。私を指さし、しきりに喚き立てる。あわてて私は隣人のあごを押えにかからねばならなかった。

ようやく彼を鎮めてどうしたわけなのか尋ねて見ると……まったくトマスが気違ひみたいに騒ぎ出したのも無理がなかった。こんなことってあるか？！ 彼の言葉をきいて、私まで総毛立ってしまった。血の気も失せるというのがまさにトマスの話だった。

というのはアフリカ南東方マダガスカル島の北部沖にセーシェル諸島というのがあり、百年ほど前その島の一つにやはり真黒いフイトばかりの魚がたくさん漁れたことがあったそう。がとにかくそれは猛毒を持っていて、島の土民は「悪魔の心臓」と呼び、先祖以来誰も食つたことのない代物だった。それを物好きにも当時

船乗りをしていたトマスの祖父さんが一匹の四半分だけ刺身にして食ったところ……一週間たつと……

……そうだった。今日がちょうどその一週間目にあたるのだ。

願から鼻を伝わり、顎へ滴り落ちる真黒な血を手の掌に受けながら私は顎がガクガク鳴り始めるのを知った。間違いなく「悪魔の心臓」をスープにして喰ってしまった祟りが現れ出したのである。

このまま、果てはトマスのお祖父さんがなったようにやはり恐ろしいことになってしまうのだろうか……あのノ、鳥目にノ……しかも三日後か四日後にそうなるんだ。夜だけしか眼が利かぬようになるんだ。

そして、そして最後はやはりそ

うだ、悪魔の弟子のように心情がすっかり変わるのだ。

自分の血が黒に変ったのを知ってから今日で五日たった。私の眼は昼間は眩しくて少しも開けられなくなっているの、仕方なく戸を全部閉ざすと家の中で睡る事にした。その代り夜がやって来ると私は起き上り、なるべく真暗な道や街角などを好んで歩き廻る生活をするようになったのだ……

朝が来るまで私はノラ猫のように歩き廻った。そしてなお私は夜が夜ごとに好きになって行った。誰も起きてはいないひっそりとした街ノ、冷たい空気ノ、街灯の青い光を、砕け散った砲子破片のよう

に反射している石畳ノ、
実際、夜のすべては私の物だ。

た。私は静寂と晩秋の夜に神秘的

なほどひんやりとした空気に当たると、まるで脳が洗い清められるかのように生き返るのだった。ときたま退屈しきっていた犬に吠えつかれる事もある。しかし私はなんともいいがたいくらい嬉しくなるのだ。私は歓迎してくれた犬の方を向いて足を止めずにはいられない。歓迎のお礼に私は口だけを

使って笑いを返すのだ。がそうするとたいていの犬はぶるぶるうると全身で震え上り、尾を股間に隠したきり鼻声一つすら失ってしまったのである。口だけ使って笑うのは相手に好感を与えないことは知りながら、どうもこうなるのだ。小さい犬などは気の毒なほどだ。

しかも当今流行の黒い外套である通称煙突形フロックコートは私

にピッタリだった。襟を立てるとそいつは特にすてきなのだ。ところでやはり私と同じ「悪魔の心臓」を知らずに少しすすってしまった隣のトマスさんはどうなったかという、幸か不幸か彼は量が足りなかったため「悪魔の弟子」になりきれず、半身人間のまま夜と昼の境であえいでいた。

しかし私は夜ごとに別人となつてゆくのが自分でもわかるようになった。物の善悪とか非人間的行動のけじめがつかなくなったのだ。意志を持たず衝動的に慾望を満たすだけになって行った……。

クリスマスに近いある夜、私が一人闇の中を泳いでいたときだった。一人の牧師が私と街角ですれ違った。ところが驚いたことにその神父はどこかで一度見覚えのある顔なのだがどうしても思い出せない。彼は微笑を浮かべていた。しかし私はそのことよりももっと他の意味で通り過ぎてゆく神父



の後姿を見送った。

それは黒い髪を持っていたからだ！ 私は少し以前から黒髪のかつらが一つ欲しいと思っていた矢先だったのだ。

すぐ私は、今の牧師の後を追った。牧師は振り返りはしなかった。ただ悠然と聖人らしく歩いてゆく……その背後からものもいわず私は不意に襲いかかった！
「人殺しだ！……人殺し！」
牧師は闇をつんざくような絶叫

をあげた。しめ上げる私の腕にはその弾みで、野獸的な力が出た！ ついに牧師は首の骨を折られて街頭に崩れ果てた。

私はナイフを持ってまだ暖かい死体から黒い髪を掴むと頭の皮ごと剥ぎとった！ そして例のように口だけで笑ったのだ。

もはや私の心は半分以上人間でなくなっているのだから一片の憐れみも罪悪感も頭にはなかった。剥ぎ取った牧師の頭の皮を無造

作に丸めてポケットへしまうと、私は悠々とその場を立ち去って行った。真夜中のことで牧師の悲鳴に、集まって来る者は誰もなかった。

翌日の夜から私は牧師の髪のカツラをつけ、自分で紐を使い頭から落ちぬよう縛った。

そうしていつもの暗い街角を歩いていたとき、偶然黒い松葉杖を使ったロンドンの乞食らしい男がボロの山高帽を頭に乘せてぶらつ

いているのに出遭った……。

そっと、背後から私はその乞食へ忍び寄った！ 息を殺して。

乞食は安酒が大分体にまわっていると思え、さし迫った危険には少しも気づかずのんきに節はずれの歌をのどからはり上げていた。

その時彼の乞食は背中をいきなり凍い力で突き飛ばされた。「うわあっ！」と彼はぶざまな声をあげて石畳の上に投げ出された！ 後から彼の背を笑き飛ばした私は松葉杖と帽子だけを拾い、倒れた乞食の上をそのまま踏み越えてまっすぐに歩いて行った。

その次の夜はもっとこみ入った迷路になっている貧民窟の方をぶらつきに出掛けた。不快な臭気と足場の悪さに舌打ちしながらも、進んで私は昨夜奪った松葉杖を片方だけ持って行った。

野良犬の巢を空樽捨場に発見したのもこの時だった。大きな母親犬が一匹とその乳房に吸いついている仔犬が六匹だった。

しかしその中に一匹だけ黒い奴

があったので私は欲しくなった。眠っている母親に無断で私は手を伸ばし、そいつを一匹摘まみ上げると、ポケットにしまったのである。

仔犬の悲鳴に目醒めた親犬は怒って猛然と私に組みついて来た。が、振り上げられた松葉杖の一撃で母犬は殴り殺され、地へ叩きつけられたのだ。

残った仔犬共は見えない目で母親の周囲に這い寄りクウクウ鼻声を出してないた。

その頃私の肌、皮膚は大分どす黒く、なつて来ていたが、まだ今までの自分の姿だとうやう見分けられた。

ところがある晩、とうとう私は自分の皮膚が真黒くなってしまったのに気がついて、さすがの私もギョツとした。

全く足の先から胸といわず顔といわず口の中まで真黒になってしまったのだから驚かずにはいられなかった。

それはちょうど私が煮溶かして

食ったあの黒魚とすっかり同じなんばいなのだ。

この時ばかりは黒色を欲しがっていた私でも恐れを知った。膝から、肘から始まって体中の全関節が激しく震え出した。そして急に昔日の自分に戻りたくなり、絶叫しながら目の前の鏡は夢中で打ち砕いた……。

ところが？ どうしたというのだ。

鏡は砕けたと思いきや、何の手ごたえもなく、それは音もなく、うーと闇の中に吸いこまれたように消えてしまったのだ。

私は目をこするとあわてて周囲を見渡した。

はてな？

……と部屋の中が変っているのに気づいたのだ。朝になつていたのである。

驚いて寝台の上に半身を起し、そこで初めて夢を見ていたことに気がついた。

恐る恐る鏡の前へ歩いて行って自分の姿を写して見、いつもの状

態と変りないのを見てやっと納得することができたが、私は割り切れない変な気持だった。

ほんやりした頭を両手で押えながらゆうべのことをだんだん思い出した。

私は早速炉の傍へ様子を確かめに行つた……しかし鍋は何事もなく静かにおいてあつてゆうべの通りである。

でもこわい物でも見るようにして私はそつと蓋をとり、中をのぞいて見た。

中には少しの水とあの黒い魚が一尾ちゃんが入っていた。形は少しも崩れてなぞいなかった。

元の通りにやはり魚の形どおりだったので、私はほつと胸を撫で下ろし、うっすら嬉しくさえた。

それでやっと我をとり戻すと、私はすぐ隣のトマスさんのところへ行こうと気がついた。もう十一時近かった。

けれども、人の好いトマスさん

は、ノコノコ私と一緒にやって来てくれ、鍋の中の魚を調べてくれた。

彼は私の顔と黒い魚を交互に見比べてから開口一番、カンラカラカラと体をゆすって笑い出したのだ。

私はびっくりした。

「ははは、何だねジョンさん。珍魚だ、珍魚だと儂をかつぎなされたな？」

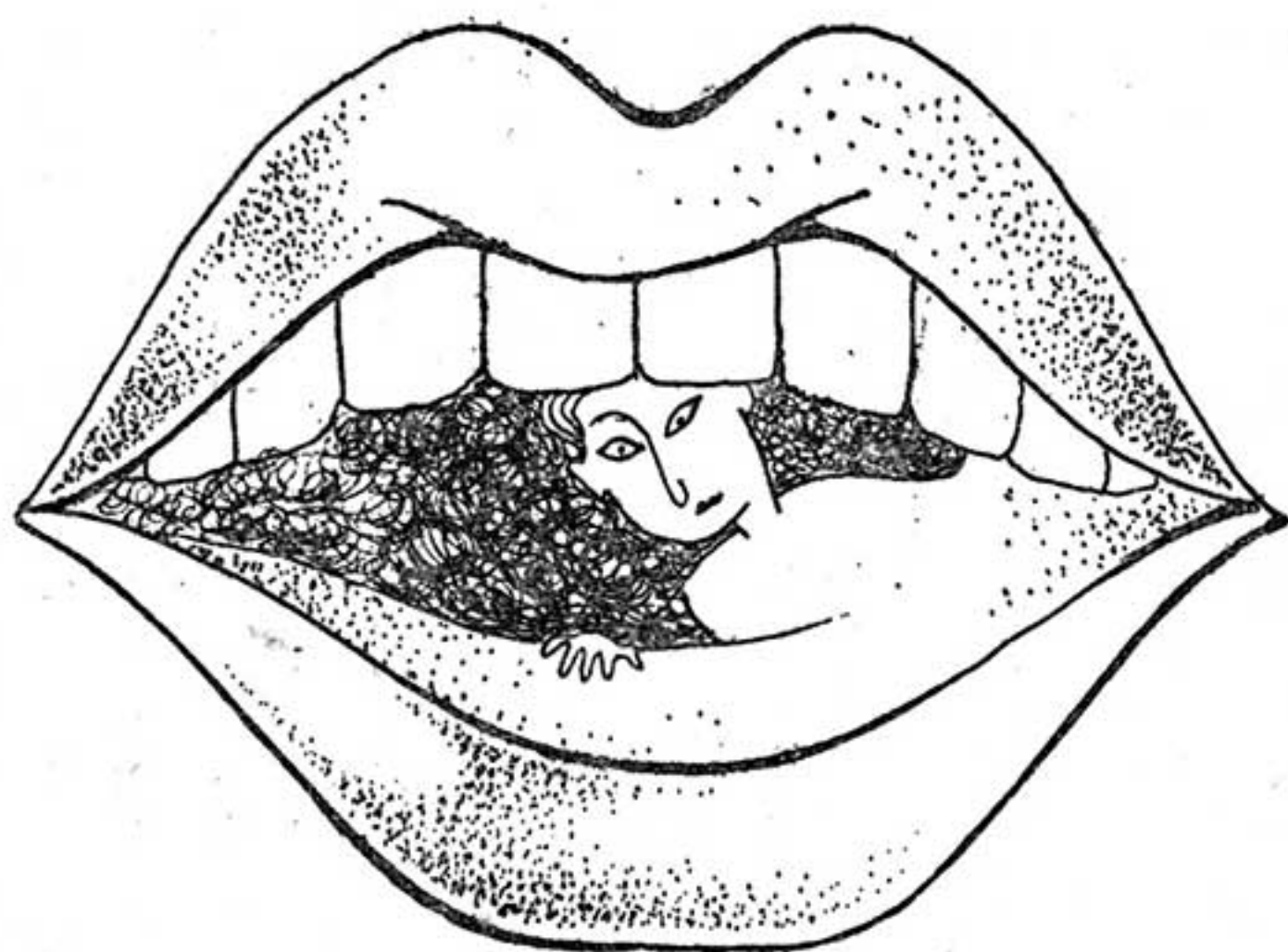
こんなものはちつとも珍魚なんかじゃありませんぜ。こいつは石鯛の一種でよくある奴じゃないですか。

しかしジョンさんこんなものを四時間も煮たのは無駄骨を折りましたな。こいつはまずくてとても人の口に入る代物じゃありませんぜ。漁師仲間じゃ「ゴロツキ」って呼んでる魚だよ。

目だってちゃんとあるさ、ただあまり黒かったんでゆうべはよく見つからなかったのじゃないかね……」

★ コント ★

食べて見せた男



大 場 陽 一 郎

ある警察署の調べ室で、一人の青年が、さき程から二人の係官の前に首うなだれて、調べを受けていた。

青年は、若い女性をくらがりでおそい、ハンドバッグをうばいそこね、ちやうど通りか

かったパトロールの警官に捕えられて、本署に連行されたのであった。

青年は、女性をおそった事実は認めたが、ハンドバッグをねらったのは、金がめあてではなく、まして、その女性に乱暴を加える気

は毛頭なかったといい張った。

いな、自分は生理的に機能を失った人間で女性をどうしようなどということとはできないのだと繰り返し、また、生家は財産家で他人の金をねらう必要などまったくないのだ——要するに、その女性のもっている、ある“モノ”がほしくて、つい前後を忘れて、ハンドバッグをねらってしまったのだ——と告白した。

以下は、その青年の告白である。

私は、只今も申し上げた通り、まったく犯罪を行う意志などはもっていませんでした。

では、なぜ、ハンドバッグをねらったのか……それを答えよとのことですので、その理由を申し上げます。

私は、生れつきの不具者で、お恥かしいことですが、女性に接するのは不能の身、一生結婚はあきらめています。

しかし、生理的の欲望は人並みにもっているもので、ときには苦痛をおぼえることもあり、これは誰にもわかってもらえない悩みであります。

いつとはなしに、私は自分の苦しみを昇華

させる方法を思いつきました。

私にとっては、女性は崇高です。これに手をふれるなどということはできません。

いいえ、崇高な女性が、日常使いすてにされる落し紙を、愛撫するくらいが、私にはちょうどよいのだ。これなら、誰にも迷惑をかけずに、自分の心のなかの炎を、忘れ去れるような気がするのでした。

それ以来、私は外出する時には、できるだけ美しい女性に近づいて、彼女たちが、人目をさけて捨て去る不用のチリ紙の玉を拾い、これを愛撫し、持帰って、やりきれない自分の気持をおさえつけてきました。

ときには、駅のプラットホームのくず入れに、犬のように近づいて、人目をさけて、目的のものをあさったり、公園のクズカゴ、劇場の廊下のクズ捨て、はては、デパートの婦人トイレにしのび込んで、そこにためられている紙の玉を、心ゆくまでもあそびました。常識からいえば、不浄きわまるものかもしれないが、紙の玉をにぎりしめて、その美しい女性の面影を描き、しみのあとにくちづけして、自分をなぐさめました。

欲望のおもむくままに、床に吐かれた、口から出されたままのものを、犬のようにはい

つくばって、すすりとり、呑みくだしたこともあります。

私のような人間を「フェティスト」というのだそうですが、おく病な私は、己れの行動を、人に知られたくなくて、用心ぶかくしていますので、周囲の誰にも気づかれたことはないのです。

聞くところでは、商売人の女性で、金さえだせば、私のような性癖の者にも、望みどおりのことをしてくれて、きたない使用済みの紙や、汚れたパンティなどを、高価で売るのがいるそうですが、私はそういうやり方は好みません。

あくまでも、排出したご当人が気のつかぬうちにコッソリそれをぬすみだしたり、拾い

だして、これを人知れず味わうところに大きなよろこびを感じるのです。

では、なぜ危険をおかして、きょうはハンドバッグなどに手をだしたか、とおっしゃるのですか。

実は、その女性が、あまりに美しすぎたからいけなかったのです。

偶然、日本橋のデパートで、見つけた

その女性が、私の心をふかくとらえました。日本橋から銀座へ、銀座から新宿へ、私はコッソリあとをつけました。

地下鉄の終点ちかくで、こちらの望み通りの女の、ハンドバッグの口を開き、白い紙を取りだしました。

ここまで見れば、私には、あとのことは手にとるようになります。

かの女は、ゆっくり紙をひろげて、鼻をかみました。おかしい話ですが、かんだあとでなにげなくその紙をひろげて見る、誰もがやることをかの女もやり、おしまいに、あかい唇から、ツバキを吐いて、クルクルと紙を丸めました。

このあとが問題なのです。

これを、無雑作に、足の下へ投げ込んでくれれば、降りるドサクサに、靴のヒモを直す



フリして、ひろいとることができます。

だが、捨ててくれる女性は、十人中三人、あとの七人は、ポケットなり、ハンドバッグへしまい込んだり、走る車の窓から外へ放って、みすみす私の手には入りません。

このときの口惜しさは、口でいえません、まして、あなたがたのような、健全な精神のかたでは理解することはできません。

その女性もそうでした。

丸めた紙玉を、ハンドバッグへしまい込むと、ちょうど到着して開いたドアから、プラットフォームへ出てゆきます。

しかし、あきらめるにはあまりに惜しい女性です。

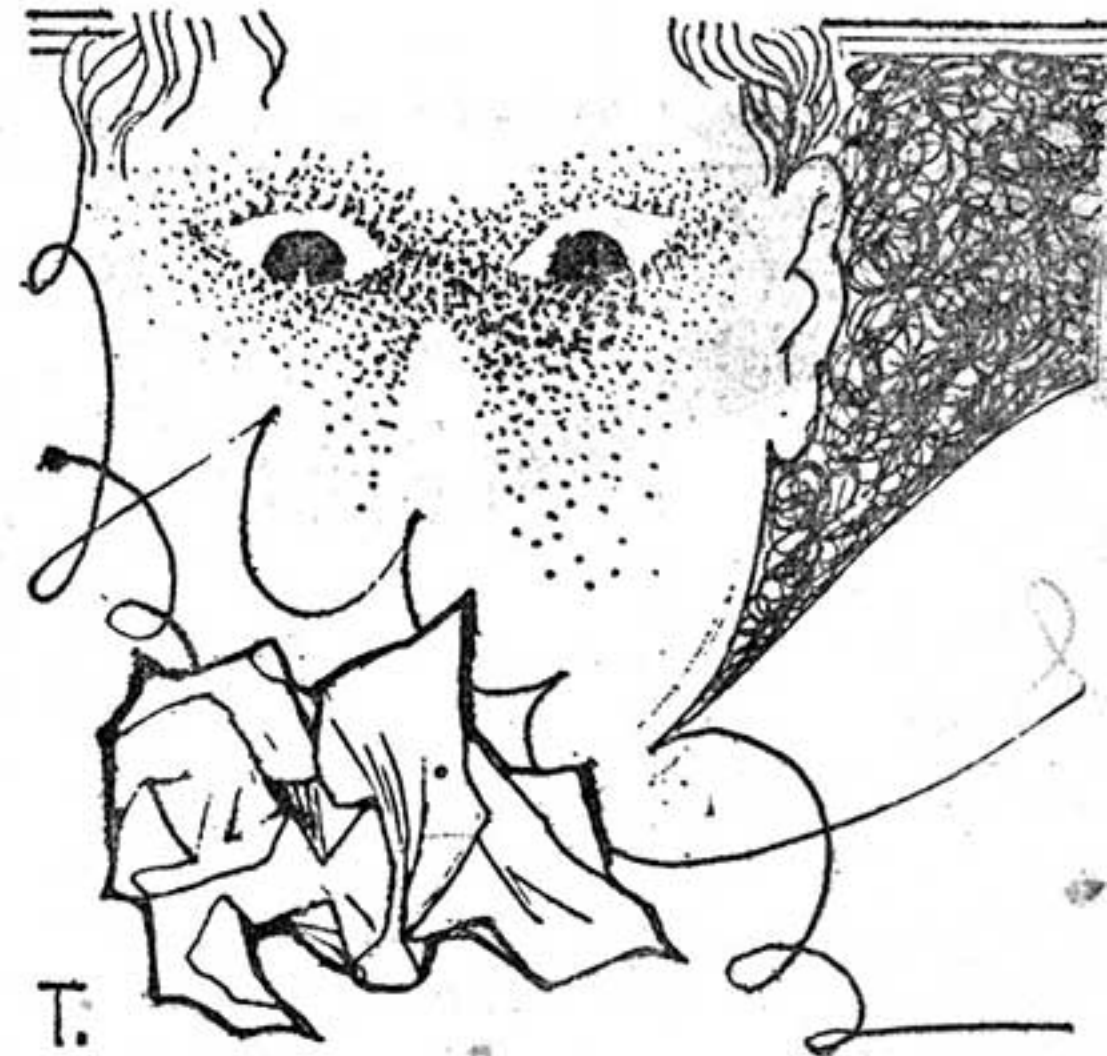
その欲望が、私の自制心をゼロにさせました。

とにかく、ハンドバッグから、紙をぬすみだしてやろう。

ハンドバッグは、なんとか返す方法もある。……

なかば夢中で、私は女性のあとを追ひ、階段を上って、よいやみに消えてゆくあとをつけたわけです。

私鉄の広場のくらい物かげで、やっと追いついた私は、すばやく彼女の側に近づき、夢



中で、白いハンドバッグをねらいました。

するどい女の悲鳴。

そして、気がついたとき、私の両手には手錠がかけられていました。

○

刑事さん、私は決して、ハンドバッグや中の金が目あてではないのです。

ただその紙包みがほしかった。

だから、私は、犯意など毛頭なかったのです。それでも、私は窃盗容疑者なのですか。

「そうだな、お前の気持もわかるよ」
係官は同情した。

「じゃ、実験してみよう。お前が、本当に好きなモノが好きかどうか、ためしてみようじゃないか」

参考人として、ともに本署にきてもらってあった「被害者」の諒解を得て、問題のハンドバッグが開けられた。

男のいうとおり、そこには、まだ、シットリとしめった白い紙の玉が入れられてあった。

「これですよ！ ほくがほしかったのは！」
男が、大声でさげんだ。

「いいですか、食べちまいますよ」
といいざま、かなりの大きさの紙玉を、ムシャムシャ食べてしまった。

さもおいしそうに。

けつきよく、男の主張が通り、身柄は釈放された。

○

「ハハハ、うまくできましたな。トチったときは、シマッタ！ と思ったが……」

男は、ホクソ笑んで、警察の石段を降りていった。

「あんなキタネえものを、もぐもぐ食べちまって、胸クソが悪いが、ああでもしなきゃ許しちゃくれなかったんだな」

彼は、奥歯にはさまった、ハナ紙の切れはしを、指でつまみだしながら、つぶやいた。

新映画紹介

寛 路 砂

妙にムーディな場面

○「あした晴れるか」(日活作品
十一月一週封切) 菊村到原作、中平
康監督。

鬼才の名が泣こうという中平康の演
出で、裕次郎が主演するコミカル・ア
クション。

ヤッチャバ(東京青果市場)勤めの
江戸っ子サラリーマン三杉耕平(石原
裕次郎)が、才女の矢巻みはる(芦川
いづみ)をアシスタントに「東京探検」
という作品テーマそのままの活躍を見

報 雑 窓 裏

せるといってお話。ところが思いがけな
くエロティックで、その上妙にサディ
スティックなムードを持つ場面にお目
にかかれる。ムードはまさにムードで
あって、観ていただかないとお話にも
ならないのだが、舞台は植松クルミ女
史(宮城千賀子)経営のヴィナス・チ
ヤームスクールである。水着姿の女群
が、膝頭を赤い紐で縛ってその端を手
に持ち、股の間に半紙を挟んで一斉に
ヨチヨチ歩くといった光景だが、ピン
ク・ムードの天然色だけに、その印象
たるや妙である。殊に、腰から膝まで
の接写は刺激的である。その他、人斬
り根津(阿部徹)一味に捕われたみは
るの弟昌一(杉山俊夫)が後手に縛ら
れる場面、やくざの足を洗った梶原(東
野英治郎)がその足にちよつと変った
責めを受ける場面がある。伸ばした片
足の上に長い板をのせ、その端に重い
野菜籠を一つ一つのせて行つてついに
はその足をへし折ろうという訳だが、
もちろん危機一発の処で裕次郎の活躍
となる。この梶原に扮するのが東野英
治郎とあって、その苦悶の表情がリア
ルであればあるほど、醜悪に見えてし

まうのはいただけない。

ゴティネイな首吊り場面

○「半七捕物帖三つの謎」(東
映作品、十月四週封切) 佐々木康監
督。

時代劇では珍らしいオムニバス形式
で、お馴染み半七の活躍を描いている
が、普通作品と同じ時間での三つの挿
話の処理は、ちよつと無理だったよう
である。しかしこの三挿話の各々に何
となく気になる場面が盛られている。

まず第一話(主役は半七―片岡千恵
蔵、桐畑の常吉―東千代之介)で、劈
頭寺の境内に殺された上自殺を装って
大枝に吊るされたおきよ(不明)の首
吊り場面がある。雪のように白い首筋
に、黒く太い縄がギリリと喰いこんで
いて凄まじい。ロングで一度、アップ
のカット・バックで二度見せる。その
後にも、おきよの義母お藤(赤木春恵)
番頭の金兵衛(原健策)の心中偽装の
首吊り場面がある。薄暗い土蔵内だけ
に、背筋が寒くなる光景である。これ
も、接写で見せてくれる。

第二話(主役は半七、甲太郎―鶴田
浩二)では、非情で淫奔なおそよ(花

柳小菊)が、悪は栄えずの諺通り半七達に捕われる。胸から後手に縛られ、縄尻をとられて引立てられる訳だが、観念の眼を閉じて塑像のように立ちつくすその姿は、白々として意外にアツピールしないのは惜しい。このおそよの二度目の夫岩下左内(戸上城太郎)の嫉妬心が、また異状である。おそよを終日奥の一室に監禁してその扉口には頑丈な門をさすといった御執心である。ただしお膳立てほど刺激はない。

第三話(主役は半七、菊川新八郎―沢村訥升)には縛り場面はないが、誘拐されたお美代(桜町弘子)が悪浪人の大月孫之丞(吉田義夫)に襲われる場面がある。これなど、その気さえあれば縛り場面も作れたであろうし、工夫次第で雰囲気だけでも出せたのではないだろうか。明眸桜町弘子が演じているだけに、惜しい話である。

人間の非人間性とは？

○「偽大学生」(大映作品、十月二週封切) 大江健三郎原作、増村保造監督)

芸術祭参加の意欲作だが、脚本の白坂依志夫の軽薄さが、そのまま作品を

新映画紹介

軽くしている事は否めない。それはともかく拷問シーンが全体の約四分の一を占めている。意識された薄汚なさと被害者が大津(ジェリー藤尾、好演)というむさい学生である事が興を殺ぐ。

偽学生の犬津は、警察側のスパイと誤解されて東都大学々生寮の一室に監禁される。というより、歴研グループの連中(伊丹一三等)によって残酷なりンチを受ける。椅子に後手に縛りつけられて、食事もロクに与えられず、覚えのない自白を迫られるのである。ついには彼が発狂するという話だが、ケツサクなのは、大小便も自由にならなという悲しくも滑稽な場面である。両脚の間に置かれた空缶が、妙に非人間的でアブティクな印象を与える。左手だけを自由にされて放尿する光景を背後から撮っているのはまだしも、開け放たれたトイレ内での大便シーンは、ちとオーバーであったように思う。発狂寸前の彼が、見張りの一人である女子学生(若尾文子も好演)の掌に喰いついて離れないという場面も、口だけしか自由のきかない(普段は猿轡を嚙まされている)彼の必死さが滲

み出ていて凄じい。

全学連を内部から徹底的に批判した？ 佳作だが、とんだ附録がついていたものである。

異色時代劇

○「炎の城」(加藤泰監督) 第一東映、十一月一週封切。

ハムレットを想起させる心理時代劇肉親への復讐に苦悩する若き魂の相剋を描いて、密度ある格調の高い作品となっている。加藤演出、殊にその画面構成の確かさと大川橋蔵(玉見正人)三田佳子(雪野)の好演は特筆される。

王見師景(大河内伝次郎)の暴政と疑心暗鬼は、領民を虐げてやまない。男女の盲人は、隣国のスパイとして一人残らず捕われる。師景の腹心で雪野の兄の祐吾(伊沢一郎)等によって引立てられ、城内広場に立てられた杭に一行に縛りつけられて拷問を受ける。本縄に縛り上げ縄尻を取って引立てられる場面(無実を叫ぶセリフがある)で、その前後ショットを楽しめる)もさる事ながら、杭を背に、後手のまま青竹を受ける場面が凄まじい。一番手前の女盲人(牧淳子)がついには失神

するまで、たつぷりと見せる。ただどういう意図か、ちよつとフォーカスがぼけている点等、全体に地味な印象は惜しい。この場面にかぶつて、師景の「片端から首をはね、城下に晒せ」というセリフがあつて、斬られた盲人達の絶叫が画面を覆う。

次いで、一揆に敗れた農民達が数珠つなぎにされて、崖つぶちの処刑場に向う。二人ずつ背を合せた重ねもちにされて、海を背後に処刑を待っている彼ら。その胸を、非情の矢が槍が貫き次々に海へ消えて行く彼ら。最後に主謀者の宗恵（阪東吉弥）甚兵衛（香川良介）に狙いがつけられた時、正人が馬をとばして救援に駆けつける。この「彼ら」が「彼女ら」である……、と思うのは筆者だけか。

最後にこの一揆が功を奏し、師景は倒れ、正人が彼ら否すべての領民の祝福を受けて新領主になるであろうという処で終る。これはお定まりであるが雪野との悲恋、実母時子（高峰三枝子）の自刃等、確かに時代劇殊に東映製の時代劇には珍らしい素材であり、作品であろう。

報 雑 窓 裏

恐怖の生体手術ノ

○「顔のない眼」（ジョルジュ・フランジュ監督）仏・ゴーモンプロ製作、東和映画配給、十月二十日封切
ニュー東宝

「白い少女」で一躍注目を浴びた、仏の新人ジョルジュ・フランジュ初の長篇劇映画、その記録主義的な手法がこの作品でも遺憾なく發揮されていて、異常な興奮を呼ぶ。主演者は、二重人格的な外科医にピエル・ブラッスールその美貌の助手にアリダ・バリ、薄幸の娘にエディット・スコブ、第二第三の犠牲者に妖しい眸が売物のジュリエット・メニユエル、ベアトリス・アルタリバという少数で強力な顔触れである。

自動車事故で顔に大怪我を負ったわが娘に、美しい顔を取戻させたいと願う狂的な父性愛と植皮手術の成功を目指す科学者としての執念が、ジェヌシエ医学博士を非人間的というより悪魔的な実験にかり立てる。

失敗に終った第一の犠牲者を河中に葬る場面が始まって、第二の犠牲、女子学生のエドナ（ジュリエット・メニユエル）にその毒牙は迫る。誘拐され

たエドナは、地下の手術台上に厳しく固定され、顔の皮膚が一面にべろりと剥がされてゆくといった凄まじい光景が、執拗なカメラ・ワークで展開される。手術は一応の成功を見て、エドナはそのまま一室に監禁される。ぐるぐると顔中に包帯を巻かれ、うつろな眼と唇だけが覗いている。絶望したエドナは、隙を見て階上から身を投げる。コンクリート上に叩きつけられたその姿態——。一方、エドナの皮膚で甦えつつクリスチアナ（エディット・スコブ）は、ようやくデスマスクのような仮面から脱する。しかしそれも束の間美しいその顔は無数に浮ぶ斑点と共に次第に醜く崩れて行く。

そして第三の犠牲ポーレット（ベアトリス・アルタリバ）、しかし彼女は一連の事件に疑問を抱いたパロ警部の放ったおとりだった。やがて彼女も、手術台に身動きできぬ姿で縛りつけられる。だが、破局は迫っていた。再び忌わしい仮面をかぶせられたクリスチアナは、耐え切れずに恋人のジャックに電話をかけた。彼女は、第一の犠牲者

の身替りとして、すでにこの世にはない事にされているのである。『クリスチアヌは生きている』のジャックからの通報で、捜査陣は色めきたった。しかし、それより早くついに発狂したクリスチアヌは、ポーレットを解き放し馳けつけたルイズ（アリダ・バリ）に実験用のメスを突き立てる。さらに猛犬数十匹を檻から放つと、彼等は一斉に博士を襲う。数分後、無残に顔を喰い荒されて横たわる博士の姿がある。この場面の凄まじさも言語に絶する。すべては終わった。森の小径を一人あてもなく歩いて行くクリスチアヌ、その姿は不気味な美しさを湛えて――。

とにかく、もの凄い映画が作られたものである。この際内容など云々する事はやめ、楽しめ！ その妖しくも美しい画面を、身の毛のよだつ人間の非人間性を、さらに楽しめ！ 非情で無惨で残酷な加虐を、というべきであろう。何はともあれ、一見をお奨めしたい。観て始めて、この作品の真価が、その凄まじさがわかうというものである。

新映画紹介

妖しい眸のメニユエル

○「やるか、くたばるか」(ジ

ョルジュ・ロートネル監督) 仏・ブ
ールドンネ・フィルム作品、S・Y
系十一月一週封切、N・C・C配給。

文字通り「やるか、くたばるか」虚々実々のスパイの暗闘を描いている。

敵方の女スパイ(ジュリエット・メニユエル)の好意を、主人公(ジャック・リベロール)が仇で返して床に押えつけ、素早く後手に縛り上げる。スーツ姿のまま俯伏せに床に転がされ、必死に上半身を起そうとして吐く彼女の科白が、真情を吐露していてなかなかイカす。蛇足だが、紹介しよう。

「殺して！」

「何の為に？——」

「貴男の用心の為に——」

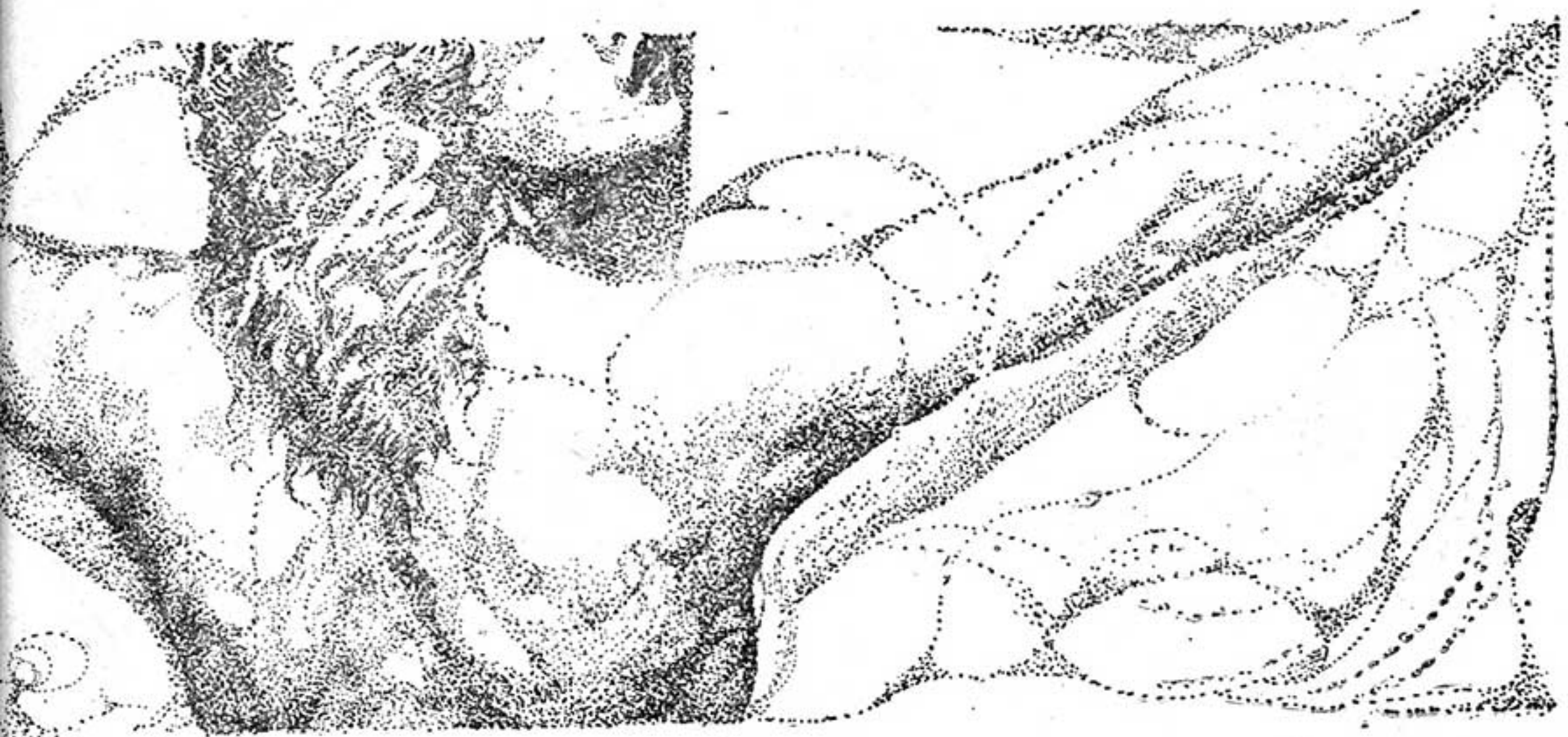
この場面、妖しい眸からそしてそのなだらかな身体の線から妙な性的魅力を発散するジュリエット・メニユエル扮するだけにちょっとした「観物」である。

他に、「武器なき斗い」(山本隆夫監督、大東映画作品)があるが、これは

配給網の関係で一部に公開されるだけに止まるであろう。(例えば、現在の処東京では蒲田国際—11月8日封切—のみ)その作品価値からいっても、残念な事である。

昭和初期、右翼テロの最初の犠牲者となった労働運動の歴史的指導者で、生物学者でもある山本宣治の人間像を当時の社会情勢を背景に描く半記録的な劇映画であるが「特高」の前身ともいべき当時の警察に捕われた山宣の同志が冷酷な拷問を受ける場面を、ワイプで三ショットほど並べている。後手のまま「逆吊り」にあう男、椅子に押えつけられ真赤な火箸を顔に突きつけられて、失神寸前にバケツの水を浴びせられる女——とにかく、一般公開を実現したい作品である。時折公開されるはずなので、その節にはお見逃がしのないように。

尚主演は、山宣に下元勉以下、渡辺美佐子、東野英治郎、細川ちか子、小沢昭一、宇野重吉、信欣三等々、素晴らしいキャストを組んでいる。



肉の花

清志の経営しているレストラン「肉の花」は、その一風変わったやり方のために、美的感覚のすぐれた連中のあいだで、よく知られていました。その名のように、徹底した肉食党の殿堂なのですが、供するものが変わっていただけではなく、こういったレストランでショウ形式のもよおし物をしたりするところは、まあ清志のところくらいなものではなかったかと思っています。

たとえば、ヴァイキング料理のスペッシャル・パーティをもよおすときには、青黛を施したあくどいメーキャップの裸女を女ドレイにみだて、それが銀盆や酒の入った壺をささげて、はだして客のあいだをぬってあるいたり、ちょっとした踊りも踊ったりするのでした。

むろん、そうした珍奇な趣向をあさるために清志がどんなに心を用いていたかはいうまでもなく、たとえばわざわざアメリカまで出かけて行って、プエルトリコの少数民族のあいだで行われている密室の懲罰儀式を見学したり、またアフリカの土人のあいだで行われている珍奇な遺習を採集するために、大がかりな旅行をしたりしたものです。そうした清

志のやり方をみて、

「あなたくらい、熱心な経営者を見たことはありませんね」

人は感嘆するのです。しかし「肉の花」の経営は清志にとってたんなる商売ではなく、ましてや道楽といったものでもなく、言ってみれば芸術家が一生かかってじぶんの芸術の完成に努力するような意味あいのものでしたから、いいかげんなことでは決して満足できなかったのです。そして、じぶんの凝らした趣向に、客たちが、

「ホホウ」

と感嘆の声をもらすとき、はじめてかれは酬いられたような気がするのです。客の心のおく深くねむっている恥部のような部分にひかりをあて、それにアピールすることによって得られる一種のヤニっこい共感のようなもの。その、手ごたえのある感じが清志は好きでした。煽情的な踊りとくいにしているシヨウのダンサーは、これでもか、これでもかと珍奇な肢態をひけらかしますが、それが客である男たちの官能の機微にふれているかどうか、つまりウケているかどうかは、踊っている当のダンサーにはよくわかります。

ウケているときは、なにかこうムツとくるような熱気が客席からはねかえってきて、そ



れはさらに踊りを甘く熟れさせる、そんな以心伝心の交感作用のようなものが濃密に感じられるときは、清志のショウは成功したといっているのだった。

最近での成功の一例をあげますと「姦通した女の肉をくらう会」などで、これはさっき

のプエルトリコの懲罰儀式から思いついたものです。姦通罪はなくなっても、人類は決してそれをゆるしているのではないことは、それにたいするいろんな形の私的な懲罰が、手を変え品をかえ行われていることでもわかるのです。その心理にうったえたこのもおしは大成功でした。むろん、ホンモノの人肉を喰うわけではありません。「肉の花」の顧客である美的感覚のすぐれた紳士淑女たちにとっ

ては、そんなことはとんでもないことです。しかし、ブドウ酒をキリストの血になぞらえるのと同じような意味で、それはとてもスリリングな食味だったのです。

店員教育

「肉の花」はこんなふうなレストランでしたから、従業員の訓練にはとても神経をつかっていました。コックなんかもそうですが、直接にお客さまに接するウェイトレスなんかはとくにそうです。

たとえば、接客動作をきびしく規定した十ヶ条があるのですが、これをテッテイさせるため、清志はまい朝、一人一人のウェイトレスをかれの前に呼んで、それを暗誦させるの

★肉づきのよい甘い体臭を放つウェイトレスたちは、家畜のように★

★従順に飼い馴らされ、客たちの食欲にひたすら奉仕するのだった……★

尻を振って走れ

阿 里 俠 二

あぶ・ふあんだじい

秋 吉

巒・画

でした。そしてその「朝礼」のあいだ、彼女たちは二心のないことを示すために、素裸であることを要求されるのです。もっとも、それは恥かしいさかりの若い娘にとって、あまりにも残酷なことでしたから、それにはとくべつに二つの保護措置がとられていたのです。その一つは、素裸とはいっても、最後のちいさな一枚の下着だけはつけていることを許されていたこと。

もう一つは、オウエルが描いた一九七〇年に出てくるテレスクリーンのような装置によって、彼女たちの姿が清志の肉眼から距てられていたことです。

その装置を、もうすこしくわしく説明してみましよう。

まず清志のいる社長室がある。それに隣りあって、四メートル四方くらいの密室があります。そのあいだは壁で仕切られているのですが、その壁の一部に大型のテレビ画面くらの特殊な集光装置がほどこしてある。そしてその向う側に、裸になったウエイトレスが立つのです。

清志の社長室からは、隣りの密室にいるウエイトレスが画面に鮮やかな天然色で映し出されて見え、その声もきこえるようになっていきます。しかし、向うからは何も見えないの

です。ただ、白く煌々とかがやいている四角い空白の画面が見えるだけなのです。が、声だけは聴えるようになっていました。

「その、左の膝ッ小僧の下にあるカサブタのようなものはなにかね？」

とたずねたり、そのほか、いろんな注意をあたえる上に必要だったからです。むろんその声は拡声器を通した声であって、肉声ではありません。

この装置には二重の効用がありました。

そのひとつは、さっきも言ったように、直接、ほんものの清志と向いあっているという気づまりや羞恥心がいくぶんやわらげられるということでした。ただ密室の中で、空白の画面にむかって演技をしていけばいいのです。

むろん、じぶんの映像が、清志に見られて、いることは、彼女自身知っています。しかし相手がどんな目つきで、じぶんのからだのどの部分に視線を注いでいるか、というようなことは彼女にはわからないのですから、いくぶん救いがあるというものです。

では、もうひとつの効用とは何か？

それはいま言ったようなことが、逆に言いようのない不気味な威圧感となって彼女に作用することでした。

じぶんは見る事ができないが、相手から

は膝小僧のちいさなカサブタ一つまでも見られているという無力感。とつぜん、不気味にこだましてくるつめたい、威圧にみちた声。

その超人的なものの前に立たされたような無力感、目の前にかがやいているキラキラと空白な画面によって、いっそうかきたてられるのです。そうして、

「あ、じぶんはなんの力もないちっぽけな存在で、社長さんはあたしの心の底まで見通していらっしやるのだ。嘘もつけないし、悪いことなんかこれっぽかしもできないんだわ」という気分になれてしまうのです。だから清志が、こっちの部屋から、
「どら、それじゃ向うをむいて三步あるいてごらん」

とか、

「四つんばいになって、ペロを出してごらん」などと命令をだすと、催眠術にでもかかったように、もうまったくなんの抵抗もなく、言われた通りになってしまふのです。

じつは、これが大切なところなのでした。

この「朝礼」で暗示にかけられたことが、彼女の一日の勤務に微妙に影響するのです。

だから、同僚同志で客の品さだめをしたりつまらないおしゃべりをしたり、蔭でアブラをうったり、ということは、「肉の花」にか

ぎってぜったいなかったのです。「朝礼」でたたきこまれた絶対服従、無私の観念はそのままお客にたいする徹底した奉仕の心となつてあらわれるのでした。

店員教育はなにも朝礼のときだけではなくそれはもうあらゆる機会をとらえて徹底的におこなわれていましたが、誰も文句をいったり、イヤだといってにげだす者はいなかったのです。これは「肉の花」のふしぎの一つでした。給与がとくべつよかったわけではありません。いってみれば、朝に夕に嗅がされる肉のにおいが肌からしみこみ、それに独得の教育方針が加わって、家畜のように従順な心にされてしまうのでしょうか。とにかく何かそそうでもして清志にしかられると、「社長さんおゆるし下さいまし。あたしがわるうございました」

彼女らは涙を流して悔悟し、清志が、「よし、わかったら下ってよろしい」というと、清志の足もとにひざまずき、その靴に接吻してから部屋を出てゆくのです。

この店の子はみんな太股の半分までくらいしかないとても短いスカートの制服をつけていたので、彼女たちがさかさまになるようにして清志のひざもとにひざまずくと、その膝小僧がべたんと床につくのはむろんのこと、

お尻がまるだしになって、とてもへんなかつこうでした。そんなことも、反抗心ではなくて服従心をやしなうことに、かえって役だっていたようです。

みち子

みち子はきびしい採用試験をうけて、肉の花のウエイトレスになったのです。

この店では採用試験も変っていました。

女の子はぜんぶ、十七から二十くらいまでですが、

「ぼくの好みでえらぶんじゃない。ぼくはお客様さんの好みを代表しているだけなのだ」

清志はそんなことをいいながら、容貌、からだつき、ウエイトレスとしての適応性などについてくわしいメモをとってゆくのです。

「顔つきはかわいらしくてあどけない感じ。

からだはうんと発達していなければならぬい。しかし、そればかりでもおもしろくないんだな。ちょっと頭でっかちみたいで、足がふとくて、ずんぐりした感じの子なんかも一人二人まじっているといいんだな。要するにひとりひとり現物をみてきめるしかないさ」

店の古参の者に、そんなふうに話しています。そして変っているのは、

「うちは匂いのある子でないととらないよ」

といって、ひとりひとりを、身長でもはかるようにして壁に背中をつけてまっすぐに立たせ、絶対にうしろにはさがれないようにしておいて、鼻をからだに強くおしつけるようにしてクンクンと全身の匂いを嗅ぐのです。

おもしろいのは、こんなときの女の子のようすで、清志に鼻をおしあてられ、絶体絶命といったかっこうで、からだを硬直させて、壁に密着したまま立ちすくみます。まるでモウジウウにおいつめられたように、呼吸をとめ、

「ああ神さま!!」

と念じているようなぐあいです。

「息をつめているからね。からだの匂いがかえってよくでるのだ。それにいつまでも息をつめていられるものでもないから、しばらくすると、フーツと大きく吐きだす。それでその子の息の匂いもよくわかるんだよ。内臓によくないところがあると、息もニゴっているからね。健康そうな、甘酸っぱい匂いの息はいいのだ」

清志は採用試験にたち合う店の者に、よく言い言いましたものです。

また、どうしてからだの匂いのつよい子を採るかという、そういう子はメスとしての機能が活潑で、見た目にもなんとなくおいし

それで、アベタイトを感じさせる、それが肉をたべにくるお客さんにやはり食欲の上でいい影響をあたえるのだそうです。かといって匂いはあっても不潔なかんじのはいけない。

その意味で、清潔そうな、真珠のように肌が白くうつくしい子ばかりを吟味してありました。そして、にのほろほろのするからだを、きりつとしたコバルトのユニフォームでしめくく。スカートの極端にみじかくて、足がうんと出ているのは、ユニフォームではみんな同じ感じだけれど、自前の足を太股のあたりまでのぞかせていることで、それぞれのからだの個性をあらわすためだ、ということでした。たとえばお客さんが、じぶんのテーブルの番にあたったウェイトレスを見忘れたとしても足のかたちをみて、

「ああ、あの娘だったな」

思いたすといったぐあいです。

じっさい、この店にくるお客さんの中には料理を喰べるだけではなくて、

「半分はウェイトレスの魅力だね」

というような人が、何人かはあったのです。ある若い貿易会社の社長などは、ウェイトレスの尻の上あたりで、白い蝶々のようにむすばっているエプロンのヒモを見ただけで、胸がキューン、とせりあがってくる、と、した

しい人にももらしていたくらいです。

みち子は、三十人ほどいるこの店のウェイトレスの中でも、新人ながら、目立つほうでした。そんなみじかいスカートをはくことはさいしょのうち、とてもキマリが悪かったのです。しかし、だんだん慣れてきました。スカートがみじかく、前かがみになったりしたときパンティがのぞけるので、パンティはいつもまあたらしいのをつけていなければならず、朝礼のときだけではなく、一日に二三回も検査がありました。清志はいちいちそこまですて立会っているわけにもいかなないので、ボーイ長などにまかせてあります。

「ちょっと見せてごらん」

ボーイ長がいうと、彼女たちはひょいとスカートのはしをつまみあげ、ボーイ長の前でくるりと一まわりしてみせるのです。

そんなことも、みち子はとても恥かしかったのですが、しまいにはなれてきました。

「いい子だね。あの、みち子っていうのは。」

社長はやっぱり目が高いや」

「なにか、まちがいで起こさなければいいが……」

そんなことが、店の男たちのあいだでひそかにささやかれていたのです。

夜の寮で

この店の員は、男も女も、みんな店の寮に住んでいるのでした。通勤だとしてつけが徹底しないし、外部の悪い風にも染まりやすいというので、そうしていたのです。もちろん、男と女は、それぞれ別な部屋に距てられていて、夜間の往来はきびしく禁じられていたのです。

女の子は女の子で、五十帖くらいもある大広間に起居していて、夜はそこに三十人の女の子が十五人ずつ二列にたんで寝むようになっていました。四十五くらいになる寮長のおばさんがいて、きびしく夜間の風紀をとりしっていました。

男子がここへ入ってくることはできませんが、女子と女子とで、たとえば隣りあって寝ている同志でわるいイタズラをする者もあるので、寝るときは頭、足、頭、足とたがいちがいになっていましたし、両手はかならず掛けぶとんの上に出し、胸のところを組み合わせてねむるようになっていたのです。これはひとりのイタズラを禁ずるためのものでした。そして夜間には違反者がいないかどうか、寮長が何回か見まわることになっていたのです。



みち子はとんだ失敗をしてしまったのです。

夜中にみち子が手洗いに立って帰ってくるとみち子と頭をつきあわせる位置に寝ている女の子がパッチリ目をあいて、

「みち子さん。ちょっと」

と、声をかけました。背中が痒くなったからかいてくれというのです。そして、みち子が相手の夜具の中に手を入れてかいてやっているところを、運わるく見まわりにきた寮長にみつかってしまったのです。

「あなた方は何をしていましたか」

寮長はおそろしいけんまくで二人を問いつめます。いいわけなんか、てんできき入れようとしなのです。そして、

「あした社長に報告します。それまでとりあえず私の判断で処分しますから……」

といって、二人を別々のスリーピング・バッグに入れ、ならべて畳の上のころがしてしまったのです。スリーピングバッグとはいっても、もともと仕置き用にできたものですか

ら首だけ出して全身がすっぽり入ったら最後までまったく身動きができなくなってしまうのです。そのまま二人は朝まですごしましたが、朝になって首だけ出してころがっている二人をみた同僚たちは、しきりにガヤガヤと騒ぎたてましたが、仕置きになっっていることがわかるので、後難をおそれ誰も話しかけたりなくさめてくれる者はありません。みんなが夜具をあげたり、そのへんをパタパタ掃除しているあいだ、二人はホコリの風を浴びなが

ら、首だけ出し、涙をためているより仕方ありませなんだ。

食事の合図があつてみんなが潮のひけるようにゾロゾロと店員食堂のほうへ出てゆき、あたりがしんとしたころ、寮長が入ってきて二人をスリーピングバッグから出し、「社長が仕置きをきめますから、寝巻のまま朝礼室に出るように」

ということでした。朝礼室というのは、例の映像装置つきの密室です。みんなの朝礼に先だって、二人はその部屋に入れられました。

そして、だまって息をのんでいますと、例のガラガラする映写幕の向うで、社長と寮長が話しているのがきこえます。

「みち子っていうと、こないだ入った、あの子だね」

「はあ、さようでございます。おまけにあの子は……」

そこで寮長の声が低くなりました。しばらくすると、おどろいたように社長が反問する声がかきこえました。

「なんだって？ 夢遊病の気があるんだって？ それに寝小便をするんだって？」

それがじぶんのことだとわかると、みち子は頭にカッと血がのぼり、

「ひどいわ。寮長さん」

と思いました。夢遊病だの、寝小便だの、とんだぬれ衣です。

「寮長さんは、あたしをおとし入れるためにあんなことを言ってるんだわ」

よっぽど抗議しようかと思ったのですが、それは、ここでは許されないことだったのです。

それからなおも社長と寮長は何かヒソヒソ話をするようでしたが、そのときカチツ、と音がして電流のスイッチが切られ、声はきこえなくなりました。

おしおき

仕置きはまだ終りませんでした。

もう一人の子は、またスリーピングバッグに入れられたまま、店員の往来がはげしい店のおくの廊下のところへ、一日ころがされておくことになりました。みんながいちいちその顔の上をまたいで通るわけです。

ときどき犬なんかが入ってきて、ペロリと顔をなめてゆく寸法です。

みち子はみち子で、やはりバッグに入れられたまま、屋根裏の部屋に一人でころがされておくことになりました。ここは人目にこそふれませんが、ネズミの跳梁がはげしいところです。そうやって顔をネズミの攻撃にさら

しておくと、ネズミの分泌物が目や鼻や口からしみこんで、寝小便のクスリになるし、またその心理的ショックは夢遊病に効果があるということでした。もつとも、このネズミはみんなおとなしくて、顔の上であばれたりするけれど、噛んだり、害を加えたりすることはないようでした。

バッグに入ったみち子を天井裏までかつぎあげたのは調理場の五郎ちゃんという青年でした。むろん、寮長がつきそっています。

いよいよみち子を天井裏において引上げるとき、そばに寮長がいるので声をかけることはできませんでしたが、チラとみち子をみた五郎ちゃんの目には、ふかいあわれみの色が浮んでいました。そして、思いをのこしながら、屋根うらから下へ通ずる階段を一段一段おりてゆき、ついにその姿は見えなくなったのです。しかし、五郎ちゃんの顔がすっかり隠れようとする瞬間、なにかチラッと目くばせをしたようでしたが、みち子はそれには気がつきませんでした。

ネズミの乱舞がはじまったのは、それから三十分とたたないうちです。はじめ、二、三匹のネズミがかわるがわる屋根うら部屋のはじに顔を出し様子をうかがうようでしたが、相手が自由がきかないと知ると、だんだん大

胆になり、すぐそばまでやってきては、まじまじと顔をのぞきこんだりしています。やがて、すばやく胴体の上をとびこえ、それでもなんでもない知ると、こんどは顔の上をとびこえる。しまいには、ドブネズミのように大きい奴が、顔の上にバサツとかぶさったままじつと腹をすりつけるようにしながらミユウと鳴いたりするのです。なまぐさいネズミの匂いがプンとしました。

それでもみち子が、頭が板になるような恐怖と戦慄を感じていたのは、はじめのうちだけです。

あとでは、もうなかば気を失ったようになり顔の上を、ネズミたちが面白がってとびこえる気配を、夢うつつに感じているだけでした。そんなみち子が、誰かが揺り動かす気配にハッキリ意識をとりもどしたのは、どのくらいたってからでしょうか。気がつくところには五郎ちゃんの顔があったのです。

裸のウェイトレス

五郎ちゃんがみち子を助けにきたとき、おりあしく見まわりにきた寮長にみつかったのは、かえすがえすも不運でした。みち子は次の朝社長によって、あたらしい処刑を言い渡されたのです。みち子は、もうどうなっても

いいような、なかばなげやりな、そしてなかばは自分が刺しつらぬかれるのを快くかんじるような、ふしぎなよろこびの中でその言い渡しをきいたのです。

おひるになって、客がたてこむころになると、店内アナウンスが開始されました。客とはいっても会員組織で常連ばかりですから、「ホウ、肉の花がまた何かあたらしいもおもしろいのか」

といった期待で、みんなスピーカーのほうへ耳をかたむけます。

「肉の花のPRの時間でございます」

と前おきしてアナウンスされたのは店規に反した一人のウェイトレスの懲罰儀式でランチ・タイムの興をそえたいから、よろしく御観賞ねがいたい、という意味のことでした。

「ははあ、じぶんのことだな」

みち子は、他人事のような、ほんやりした気持ちでそれをきいていました。

やがて、懲罰がはじまりました。

全裸にウェイトレスの象徴である白のエプロンをかけ、頭には例の三角の布をつけたみち子が四つんばいになり背中にサービス用のブドウ酒のグラスをいっぱいならべた銀盆をのせて客席のフロアにはい出したとき、それまでカタズをのんだようにしずまりかえって

いた客のあいだからはいっせいにザワメキがおこり、はては拍手さえおこって、潮騒のようにはひろがってゆくのでした。

みち子はそうして、テーブルからテーブルを順々にまわってゆくのです。すると肉食の紳士たちはその背中の銀盆からワイングラスをとりあげ、

「グッド・テスト!!」とさけびながら、それをおいしそうにのみほすのでした。

みち子はもう羞恥心を通りこし、頭の中は板のようになっていましたが、このとき不意に生理的な要求がこみあげてきたのです。

「ああ、いけない」

と思ったが、どうしたものか、こらえる機能がシビれてバカのようになってしまっているのです。チラと寮長の顔が浮びました。それから、

「あゝ あたしはほんとに寝小便だったのかな」

と思いました。おぼえているのはそこまでです。彼女のはったあとから軌跡のようにのびてゆく黒いひとすじの条痕をみとめて客席にあたらしいドヨメキが起ったのはそのときです。そのドヨメキの中を、顔をまっさおにしたみち子が、どこまでもどこまでも這ってゆくのでした。

随筆

女囚と胎教



鳴滝三郎

明治十九年二月五日付の東京日日新聞に、「首無し児」という見出しで、次のような記事がのっている。

伊太利サレルノの獄に一人の女囚あり。此所に捕はるる前より身ごもりたるが、この程虫気づきて産の紐を解きたるに、コハ如何に、首の無き児を産み落せり。人々驚きて如何なる理由にやと会議しけるに、一人の老博士ありて云ふやう、この女、重罪を犯してこの獄に入りたれば己れも遠からず

首を斬らるるならんならんと感じたるものなるべし。その首を斬らるるの念、自ら胎中の児に通じて斯かる変態の児を産みたるにや、と云ひたりとか。我国の古へにも母親が妊娠中、蛙を踏み殺して蛙娘を産み、猫の児に沸え湯をかけて裸児をみえたる例もなきにあらず。(下略)

とあって「胎教」的な「念」の作用による「因果の子」などと、昔のことだからそう解釈しているが、科学的に見れば、要するに劣

性因子によって生まれた畸型児だろう。

イタリアは早くから死刑を廃止していた国だが、この話の頃には、まだ斬首刑が行なわれていたのである。多分、隣国フランスに習ってギロチンが用いられていたものと思う。

この話——明治十九年という西歴一八八六年だが、四年後の一八九〇年にイタリアの死刑は廃止となった。

ところが、その後、独裁者ムッソリーニが一九三一年にこれを復活させた。

戦後、一九四七年にデ・ガスペリ首相が再び廃止に踏み切って、現在に至っているのである。

話は違うが——「胎教」という言葉で、ふと思ひ出したことがある。

筆者が昔、まだ小学生の頃、親戚の家へ遊びに行つた時のことである。

蔵書家だつたその家の主人は、書齋に沢山の本を並べておく。私はその書齋に入つて、いろいろと大人の本を眺めることが愉快かつた。

ある日——そこで「胎教」と題する本を見た。タイキョウと読むんだな、ということはいわかつたが、その意味はまだわかるはずもない。

巻頭に写真が一頁だけあって、外国の彫刻

家の作品がのつていた。それは、後手に縛られた裸婦が、体を海老のように折り曲げて膝の上に置かれたわが児に乳を与えている像を撮影したものであり、一眼見た瞬間、私はドキリとし、目は釘付けになってしまった。

その作品の題は「哺乳する女奴隷」というのであり、裸婦の肢体はすこぶる美しく、そしてポーズはこの上もなく痛々しかった。

女奴隷——といっても黒人ではないようであり（つまり、欧州の彫刻家の作品か）石膏で造った白い女奴隷である。

正直に告白するが、私はその時、生まれて初めての本格な性の衝動を意識し、ほとんど動揺した。

明確な原因は他にもあるが、後にエディボス・コンプレックスが芽生えて、年上の女に惹かれるようになったのも、一因はこの時の強烈な記憶にあると思う。

級友の誰よりも早く大人の小説を読み始め、国語の学科だけは、常に一番で通して来た私は、胎教とか奴隷とか哺乳などという文字を読むことはできたのだが、前記したように胎教の意味まではわからなかったもので、その本の内容、性格というものが、理解できなかった。

た。

縛られた全裸の女と連なる辞句を本文の中に探し求めたが、どこにもそれは見当らなかった。

胎教とは何であるか——ゆっくり読めば少年の私にもわかったのかも知れないが、時間が惜しい気がした。

人に見られぬうち、母が帰ろうといわぬうちに、縛られた裸婦の姿を脳裡に焼き付けることの方が大切であった。

喰い入るように見つめるうちに、ふと連想が芸術家の創造過程に及んだ。

つまり、これだけの名品を製作するには必ずモデルを必要とした筈であり、そのモデルは全裸で後手に縛られ、苦しいポーズをとって、長い時間を耐えたのであろう——と思ったのだ。

創造する立場への憧憬が、そんな瞬間に生まれて行ったとしても、必ずしも不純とは云えないだろう。

後に、駄文を書いて金に換えることを覚え今こうして、こんなものを書いている仕儀というものは、まさに一期の不覚みたいなものである。

だが、そういう妙な具合に育った夢は、ま

だ持ち続けている。

いまに、人を感動させるような小説を書いてみせるぞ。

せめて三十五歳ぐらいになったら、直木賞ぐらいはとりたいものだ。何しろ直木三十五というからな……と。

さて——胎教の意味は、少年の私にも間もなくわかった。

そして「哺乳する女奴隷」という作品がなぜあの本に写真で紹介されていたかということも、ようやくわかった。

つまり「女奴隷の子は生れながらにして完全な奴隷であるべきだ」という考えを持つ残酷な主人が、胎教の続きとして、母親を縛ったままで哺乳を行なわしめた——という意味があるのではなからうか。

そういう奴隷の扱い方がどこかの国にあったものか、または伝説にそんな話でもあるのか、あるいはその彫刻にそういう註釈でもついているのか——この点は不明だが。

どなたか、「胎教」という本（昭和十年代の発行と思う）あるいは「哺乳する女奴隷」という作品について知っておられる方が読者の中にあるならば、ぜひ、御教示願いたいと思う。



待ち構えていた男はその日から彼
女を奇妙な生活に引き込んだ！

釈放

「この恥さらしめ！ お前のような娘とは今日限り縁を切る。どこへでも勝手に行くがいい。もう二度と家の闊居はまたがせんぞ！」

警察署を出るとすぐ、義父は怒りに唇を震わせながら素晴らしい、タクシイを拾って帰ってしまいました。取りつく島もありません。

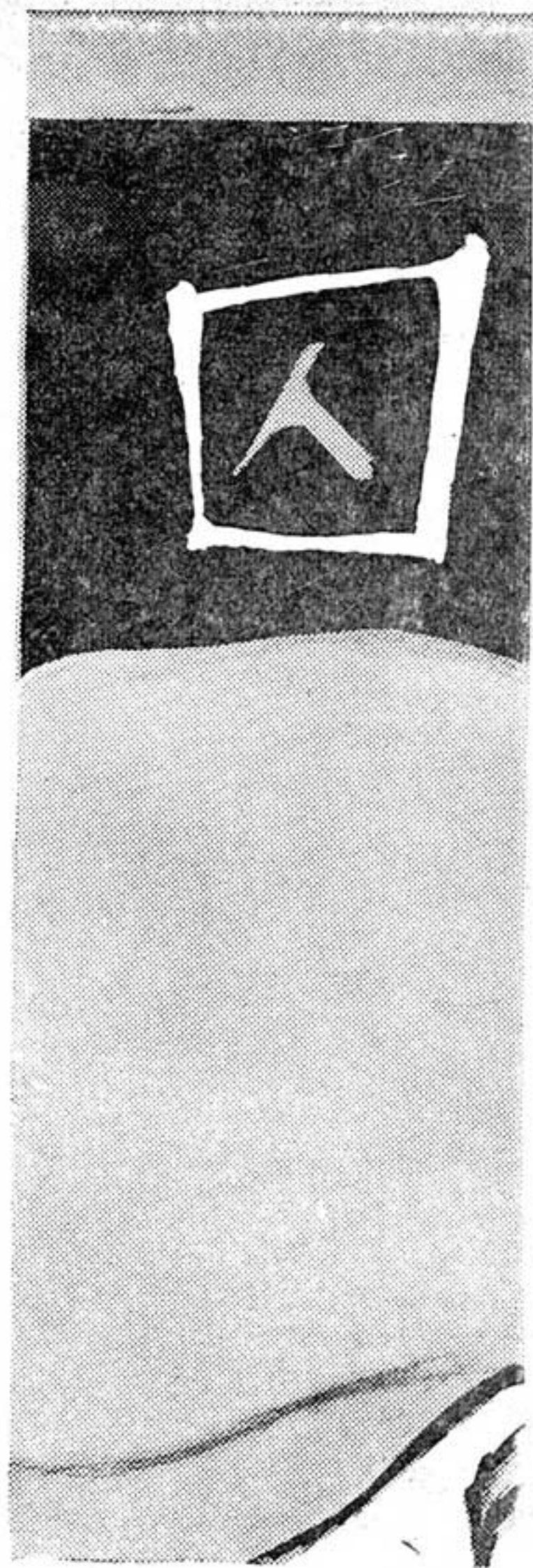
私はその場に、いつまでも立っていました。留置場暮らして、ひどく疲れていたのです。心身が自分のものでないように思えました。

どのくらいそうしていたのか——やっと我にかえたのは、バスの車掌に声をかけられたためでした。

「〇〇へ参ります……お早く……」

気がつく、私の立っている所は、停留所の前だったのです。私が乗客ではなかったことを知ると、車掌は能面のような顔になり、ドアを閉めました。

たとえばどこへ行くあてがあったとしてもその



時の私は、バス代さえ持つてはいなかったのです。

天涯孤独、無一文、親しい友達もなく、仕事や恋人も失って——私はもはや何も持たない女となっていました。

でも、いつまでも警察の前などにボンヤリと立っている訳にはいきません。

私はアテもなく歩き始めました。

ところが間もなく、不思議なことが起こったのです。

何という型なのか、ピカピカする高級車が私の横へ停って、それを運転する青年が私に声をかけたのです。

「妙子さん……どこへ行くんですか？」

「え？……」

「森田妙子さんでしょう？」

「そうですけど……」

「お乗りなさい」

青年は扉をあけて誘いましたが、それは全然見覚えのない人なのです。第一、貧しい娘の私には、自家用車を持ち回す人などに知合いはありません。

「さあ、早く乗って！」

練達した俳優の口から出るせりふのように、その声は自然なもの

手錠と女

でした。

私の名前を知っている以上、すくなくとも人違いなどではありません。

ともかく、私は車に乗せて貰い、青年の隣りに坐ったのです。

快適な乗り心地の車は、グングンとスピードを増し、私を連れ去って行くのでした。

昔風にいえば郊外というのでしよう。

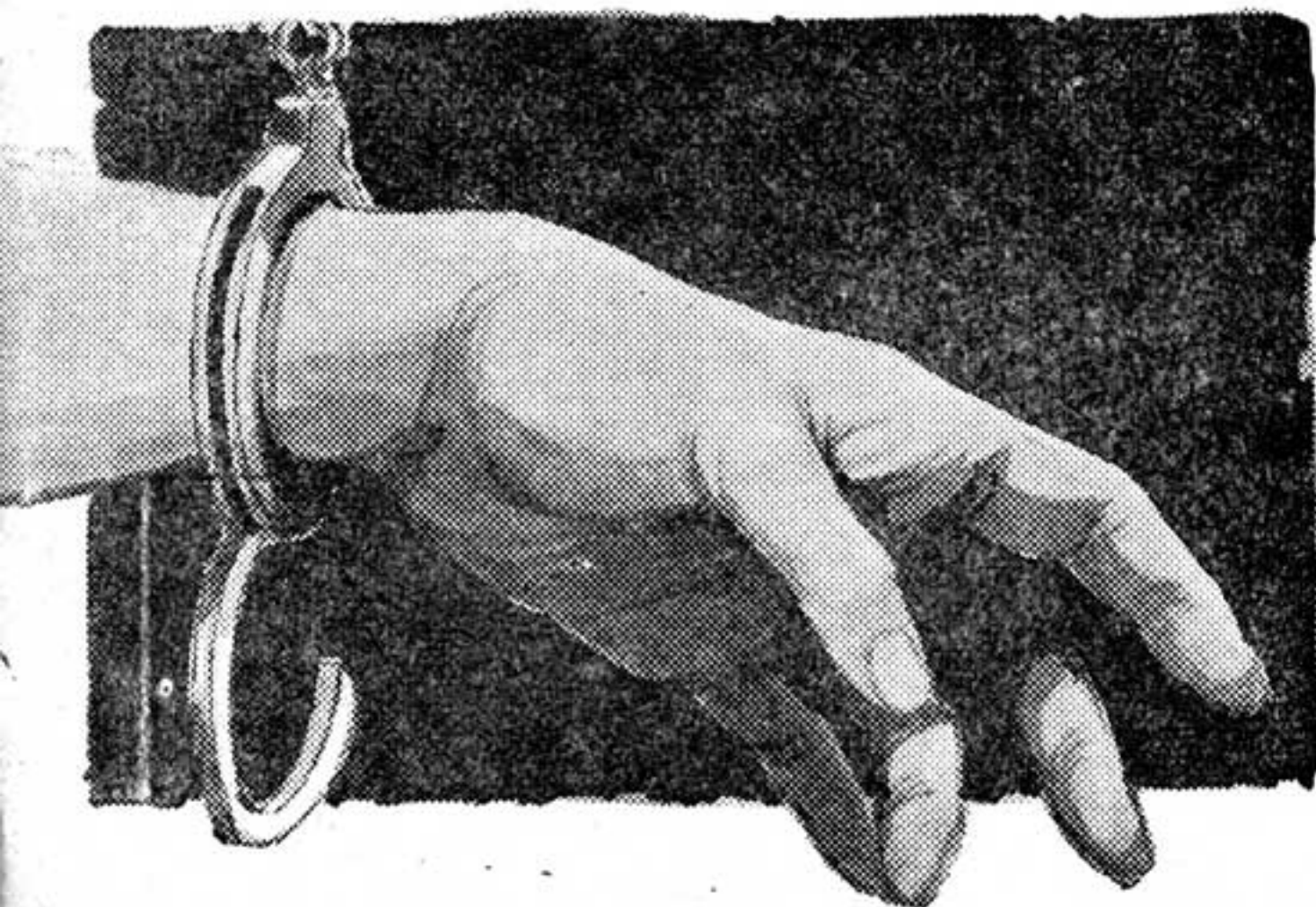
畠や林の間に洒落た建築の新しい住宅が点在する、都心を遠く離れた場所に、その人の家はありました。

ガレージつきの洋風の二階建てで、大変モダンな家です。

私は、成り行きにまかせる覚悟を決めていました。三十前後で背が高く、精悍な顔を持つその男に興味を抱き始めてもいたのです。

「まあ、上って下さい」

男は鍵を開けて私を招じ入れると、家中の窓を開放しました。「二日ばかり留守にしたんでね



……」

と、そんなことをいっていました。

なるほど、玄関を入った途端、空気が重苦しく澱んでいたし、新聞受けには二日分ほどの新聞が詰っていたようです。

「まあ、掛けなさい。君は疲れているんだろう……」

二階の一室で、男はソファに腰をおろし、煙草に火をつけながら私を見上げました。

「五尺……三守ぐらいかな？」

私の身長のことでしょう。男の言葉づかいや視線は、次第に無遠慮なものとなって行くのでした。

「君みたいな美人が、何だって豚箱の御厄介になるような破目になったのかねえ……」

私はギクリとしました。この男は、私がどういう女であるかという事まで、知っているのです。

「あなたは、一体……」

「そうか。自己紹介がまだ済んでいなかったな、僕は、城田正彦。三十二歳で独身だ。単刀直入にいうと、君に惚れている男さ」

「今日、初めて会った私に？」

「君の方は初めてかも知れないが、僕はもっと前から君を知っている……」

「いつ頃から？」

「君の豚箱暮らしが始まった頃からさ」

「豚箱って、何ですの？」

私は思い切ってカマトト的なことをいってみました。

「こういう人達が入る所を、俗に豚箱というね……」

男は背広の内ポケットから数葉の写真を取り出して、私に渡した

のです。

ああ、何ということでしょう。それは、両手首に手錠を掛けられた上、手垢のついた捕縄で数珠つなぎにされている私の姿ばかりを狙って撮った写真だったのです。

私たち数珠つなぎにされた被疑者は、窓に鉄格子のある殺風景な護送車に乗せられて、霞ヶ関の検察庁へ送られて行くのですが、その際の、警察の玄関を出て車に乗せられる間——短い時間ですが、恥かしい姿を人眼にさらさねばなりませんでした。

そういう浅ましい姿の私が、巧妙に撮影され、然も私を中心に拡大されている写真なのです。数珠つなぎの前後の人や監視の警官などは適当にカットされており、さしづめ「手錠と女」とでも題をつけたような写真になっています。

「あの警察の筋向いに代書屋があるだろう。その主人が僕の友達でね、二階の窓から撮ったのさ。このカメラで撮ったんだが、相当に苦心のいることだった……」

男は望遠レンズのついてるカメラまで私に見せ、得意そうに説明するのですが、私にはカメラに就いての知識などありません。屈辱と狼狽とで、写真を持つ私の手は小刻みに震えていました。

括られる

「僕は、退屈するとあの代書屋へ遊びに行くんだ。なぜかといえばあの家は映画や芝居でなしに囚われの女を実際に眺められる貴重な場所だからね。男の被疑者は薄汚ないばかりでつまらんが、女は違うな。ことに君のような女が縛られて曳かれて行く姿は、なかなか風情があって結構な眺めだ……」

私の浅ましい姿は、ひそかに見物されていたのです。ヒッチコックのスリラー映画「裏窓」みたいに、男はきつと、望遠レンズを利用して覗いていたに違いありません。

「君を初めて見た時、僕は凄く気に入ってしまったね、以来、今日まで、仕事をそっちのけにして代書屋の二階に陣取っていたんだ。」

護送車の来るたびに、今日はどんな表情で現われるかと、胸がワクワクした。君が数珠つなぎの中に入っていない日などあると、実にガッカリしたものさ。幸い、代書屋は僕の趣味に理解のある奴だね……」

男は、なおも何やら喋り続けていましたが、それはもう私の耳に



は聞こえませんでした。

私は突然、うなだれていた顔を上げ、衝動的に写真を破り始めていたのです。ただ破るだけではなく、幾度も幾度もヒステリックに引き裂いてやりました。

「何をする!!」

男はソファから起き上り、私に襲いかかり両手首を掴みました。

「いや……放してノ」

「放さない」

「わたしを、どうするっていうのノ」

「こうするんだノ」

強い力でした。私は両手を背中に捻じ上げられ、一気に隣りの部屋まで連れて行かれました。

その部屋で、私は初めて後手に縄で縛られたのです。

まず、両手首を腰の後ろでギリギリと縛られると、もう男の思うままにされて、どんな抵抗も全く無駄でした。いえ——本当は、抵抗というものを少しもしなかったような気がします。

捻じ伏せられて片頬を床につけたまま、身動きもできない私は、眼のすぐ前にひろがる絨毯の模様を、涙のたまった眼で眺めていたのです——。

「せっかく、苦心して撮ったものを、破るという法があるかノ」

男はそんなことをいって私を責め、髪の毛を掴んで荒々しく引き起こすのです。

そして、縄の余りを私の胸や胴に掛け初めました。私の体はひしひしと締め上げられます。

最後に首を縛られた時、徹底した無力感で、胸が一杯になりました。縛られて抵抗などできない女の、首にまで縄を掛ける必要が、

どうしてあるのでしょうか。私はこの男の縛りものにされているのです。いじめられているのです。

必要——というのなら、そういう目的の為に、女を縛って愉しむことの最後の仕上げとして男は私の首までを結わえたのでしょうか。

首に縄をつけても引張ってくる——などという言葉が、不意に私の脳裡をかすめました。

締めつけられて

「猿轡は、しなくていいの?」

私は、妙なことをいってしまいました。少しあわてていい直しました。

「大きな声で人を呼ぶわ。あなたの御趣味に理解のない人達が来てくれるわ……」

男は悠然と首を振って、

「駄目だね。隣りは遠いんだ。第一、この部屋は防音装置がしてある。ステレオで音楽をきくためにね……」

そういえば、それらしい装置があり、窓というものが一つもない部屋なのです。

でも——レコードを聞く部屋に縄が用意されているのはなぜでしょう。

この男は、これから私をどうするつもりなのかしら? 写真のことは、単なるキッカケに過ぎないんだわ。あんなものを何枚破ったとしても、ネガが残っているんだもの。だけど、そのキッカケを相手に与えたのは、要するに私なんだわ……。

涙は、もう出ていませんでした。

縄目で余計に盛り上った乳房の片方が、不意に男の手で掴まれました。

「君は、素直で可愛い女だ。とても、気に入った……」

乱暴な形で気に入られた私は、次の瞬間、男に強く抱き締められていました。

熱い唇が、私の首筋の肌を求めてきました。

私は、はかない身悶えをくり返しながら、いつしか、双の瞼を閉ざしてしまいました。

他の女の方はどうなのでしょう？ 女は体を締め付けられると快よさを感じるものだと、私は思うのですけど……こんな場合にもそれを感じるのは、特異だといわれることなのでしょう。

ただ、男は決して悪い印象を与える種類の人間ではなかった——ということ、せめてもの自己弁護の糧とすることを、私は許していただきたいと思うのです。

自家用車に乗せられて、縛られに行った女が「印象」もないものだ——と、私はさげすまれるでしょうか。

たしかに、私はさげすまれても仕方のない女です。この男が私を監禁してくれるなら、少くともその間は屋根の下にいられる——とそんなバカげた計算を心の隅でしていたほどの女ですもの。けれども、私は本当に、野良猫のように行き場を持たない身の上だったのです。

冗談にしても私を見染めたと称する男が、こんな女をたわむれに拾い上げてくれるのなら、私は拾われてみる気になるだけの事情があるのです。

その事情は、後でこの男——成田から「白状」を強いられた時の話を書いてみようと思いますが、ともかく、私は男に拾われたのであり、その男は現代風の好男子であり、そして私は体を締め付けられることが好きな、愚かではしたくない女なのです。

あきらめ

でも——愚かな女の、はしたない期待がスムーズに実現するほど



実用セッ
クス講座 ④

性愛雰囲気86法の分析

百万読者のバイブルとなった往年の秘巻
(続あるす・あまとりあ)を装いも新たに
贈る結婚虎の巻●寝室技巧の秘伝公開!!

高橋 鉄著

B6判・256頁
¥300 千40

にそっとなつてくる愛のムード……

東京・中野・江古田 1-2302
株式会社 あまとりあ社
振替・東京10756(久保書店宛)



世の中は都合よくできてはいません。

私が強靱な抱擁の中で眼を閉じ、城田の愛撫を素直に受けようとした時——城田は俄かに腕の力を抜いて、冷たい視線で私の顔を見下ろしました。

次に来たものは、冷酷な平手打ちだったのです。五度も六度も、私は訳もわからず両頬を強く叩かれていました。

「あッ、何をなさるの!？」

「俺は、つけ上る女は大嫌いだ」

「つけ上る……?」

「そうだ。お前は今、そんな顔をしたのさ。自信たっぷりな、くだらん顔つきだ」

吐きすてるようにいって、城田は私を床へ突き放したのです。

心が凍る思いがしました。叩かれた口惜しさも胸に溢れてきました。

再び涙がこみ上げてきかかると私は辛うじて抑え続けました。

「大体、お前の体は臭い。変な匂いがするじゃないか。つまり、豚箱の匂いだな。豚箱では何日おきぐらいに風呂へ入れて貰えるんだ?」

そんなことに答えられるものではありません。私は黙っていました。

城田の言葉づかいは「君、僕」から、いつ

の間にか「俺、お前」に変わっていました。

「そうだ。お前を風呂に入れてやろう。万事は、それからだ……」
図太くもいい放った「万事」という言葉の意味を考える暇もなく私は城田に右足を後ろに折り曲げられ、縄尻を足首に巻き付けられてしまったのです。

「風呂の用意が済むまで、足をこうして縛っておこう。逃げられると俺は非常に困ることになるからな」

勝手なことをいいながら城田は私の右足を背後に固定してしまいむき出しになった太腿の辺りを無遠慮に眺めてから、階下へ降りて行きました。

私の身に残された自由は僅かに左足だけです。でも、その左足はもはや何の役にも立ちませんでした。寝返りは打てますが、起き上がることはどうしてもできません。

これは後で知ったことですが、両足首を揃えて括られた場合ですと、起き上がることができるものです。けれども、片足だけを折り曲げて縛られると、どうすることもできないのです。

嘘とお思になるのであれば、奥様を相手に試してごらん下さいまし。私は、そういう恰好にされたままで、やがて動くことを諦めてしまい、次に起こる事柄を待つばかりでした。

あの男は、前にも人を……女をこうした経験があるに違いない。

私は、その何人目かしら? 私は無理やりに裸にされて、お風呂場へ引き立てられて行くのではないかしら?——そんなことを、私は考えていました。

鞭の如くに



私は昔の罪人のように、縄尻を取られて浴室まで連れて行かれたが、城田は私の裸身を見ようとはしませんでした。

縄を解いてから城田

は、

「ゆっくり入るといい。二階で待っている」

と意外に淡々といい、去ってしまったのです。荒々しい手段で裸体にされる——ということを私は観念していたので、何か拍子抜けがしたような、安堵の中にも一種の淋しさを覚えたのですから、私という女は、一体どういふのでしょうか。

男の玩具になることを望んでいる女——そうかも知れません。そ

ういわれても仕方がございません。

厳しい縄目から解放された直後の、血液が通常の循環を取り戻そうとする際のあの感覚は、私にとっては痛さと快よさが絶妙に混り合った強烈な鞭のように思えます。鳥肌立ち、呻き声さえ出て「所要時間」の過ぎるのを待つばかりです。

養父から叱言をいわれて長い間正坐を続けた後の私の脚が、この感覚を覚えてくれたのです。私は正坐をすることが好きな女になっていました――。

お風呂場はきれいで豪華でした。充分にお金をかけて造られたお風呂――それは女にとって嬉しいものです。

あの若さで、こんな家に住む、あの男は一体、何者だろうか？尋常な職業の人間ではないかも知れない……と考えて、私は少し不安になりました。

羞かしいことですけど、いじめられることには不安を感じないのです。

縄目の痕が薄くなり、留置場でついた垢を洗い落してホッとした



頃、脱衣室の扉が開く音が聞こえ、私は思わず身を硬くしてうなだれてしまいました。

「……タオルを持って来たんだ……湯加減は自分で調節してくれ」城田はそう言って、何事もなく再び去りました。

万事は入浴の後だ――と申し渡されていましたが、たしかに、その通りでした。

入浴が済んだ直後から、城田の企らみは始まったのです。というのは、お風呂から上ってみると、私の服が全くないのです。

バスタオルを持って来てくれた代りに、城田は身に着けるものをすべて持ち去っていたのでした。

私は頬が染まるのを覚えました。脱ぎ捨てた私の下着は、決して清潔なものとはいえなかったのです――。

尋 問

「遅過ぎるぞ。いつまでも何をグズグズしているんだ！」

再び姿を現わした城田は、手に妙な物を提げていました。木製の手枷です。手枷には、「連行用」の犬の鎖がついていました。

バスタオルを胸に巻き付けただけの私は、抵抗することもできずに、後ろ手に手枷を簞められてしまいました。

「さっさと歩かないか！」

軽く鎖で肩を打たただけで、私は女奴隷のようにうなだれて二階まで連れ戻されました。慎重に歩いたのです。



「坐れ！」

厳しい口調でしたが、この命令に従えば、乳房のすぐ上で端を挟んだだけのバスタオルは、どうなるか明らかかなことです。

「正坐をするんだ。尋問することがある」

「でも……」

「何がでもだ？……そうか、わかった。よし、立ったままでもいい。だが、お前の心配は遅かれ早かれだぞ」
城田は知っているのです。本来の用途に反したバスタオルの頼りなさを――。

「まず、いっておくが、この家にはお前が着て来た物以外に、女の着る物は何もない。そのお前の服は俺が隠した。だから逃げることはできないぞ……」

城田はソファに深々と腰をおろし、楽な姿勢で足を組みながらいうのです。

「もっとも、逃げる必要はないのだ。俺はお前が気に入ったのだから、妾にしてやってもいいし、もっと気に入れば、正式に結婚してやってもいい……」

私の胸は思わず波立って、タオルがゆるみそうになりました。

「ハッキリいって、これは誘拐であり、監禁だ。しかし、求愛でもある……」

私はその時、城田が酔っていることに、気づきました。傍のテーブルの上に、洋酒の壺とグラスが出ていたのです。

「お前のおやじは、なぜ、娘を残してサッサと帰っち

まったんだ？ 何かいい争っているように見えたな。俺がこんな氣を起こしたのは、あの薄情なおやじのせいだぞ。大体、あの男は、お前の本当の父親なのか？」

私は黙って首を振り、否定しました。

「じゃあ、何だ？」

「……義父です」

犯罪の自白のように、弱い小さな声で私は答えました。

「すると君は……いや、お前は母親の連れ子か？」

私はうなずきましたが——本当は違うのです。私の母は良人が召集を受けて大陸で戦っている留守に、私を姪もったのです。

当時の法律でいえば姦通罪に問われても仕方なかった母の、私は「罪の子」なのです。

「母親は生きているのか？」

「去年……死にました」

「大体わかった。家には居づらいんだな。ところで、お前はいくつだ？」

「……二十一歳です」

「嘘をいうな！ おやじが代書屋へ頼みに来た書類によれば、昭和十二年生れの二十三歳だったぞ！ サバを読むとは太い女だ！」

城田が私の名前までを知っていたのは、そのためだったのか——と、私はようやく氣が付きしました。釈放される日に、義父は城田の友達である代書屋へ書類を頼んだのでしよう。

「お前の犯した罪は何だった？」

城田は知っていることまで、わざと私自身の口からいわせようとするのでした。もう、嘘はつけません。

「横領罪……です」

「もっと具体的に！」

「会社のお金を……」

「使い込んだのか？」

「……」

「何に使った？」

「もう……堪忍してください」

「駄目だ。白状してしまえ。いわないと、この部屋には鞭もあればローソクもあるんだぞ」

私は——私の体は戦慄しました。裸にされて、鎖で縛られて、皮の鞭で背中を叩かれる夢を留置場の内で何度も見たのです。

「好きな人に……贈り物をするためでした」

「ほう、恋人がいたのか？ そいつはどんな奴なんだ？」

城田の口調には何やら嫉妬の影がありました——と書いては、思上がりというものでしょうか。

「卑劣な人でした……」

私が検挙されてからは、急に能度を変えた男。独身といつわって実は妻子があった男。私の体をもてあそんだだけの男。参考人として警察へ呼ばれても自分の保身に汲々として刑事達を呆れさせた男——そんな男に惹かれていた私は、いくら自虐しても足りないほど愚かで情ない女なのです。

不埒な涙

「送検されたのに不起訴となったのは何故だ？ 検事に色目でも使ったのか？」

城田の「尋問」は仮借ない調子で、残酷な言葉を用いながら、い

つまでも続きました。

とうとう私は堪えかねて、身悶えし、哀願するのです。

「ああッ、もう……許してくださいノ 私は、私はあなたの女になりますから……」

羞かしいことを口走って身をくねらせた時、バスタオルが体から離れて——瞬間、私の体は真正面から城田の視線にさらされたのです。私は素早く、その場へうずくまってしまいましたので、バスタオルは後手にされた指で押さえたまま、私の背中にとどまり、辛うじて半身を隠してくれました。

私は、無法な男の足元にひざまづき、ひれ伏して、しまったのです。両膝の先端に双つの裸の乳房が温かく接合して、おののいていました。何という浅ましい、羞かしい姿でしょうか。

背中の手枷の先で、私の指は切なく悶えていました。真実、苦しい姿勢には違ひなかつたのですが、苦しがつて悶えてみせることが男を喜ばせるのだ——と、私は知っていました。そうすることが何かの値打ちを高めるのだ——とも承知していました。

女の涙は、時として融通無碍に湧き、その場の効果係をつとめます。私は不埒にも、最も効果的な涙を流し、巧みに嗚咽してみせながら、男の出方を待ちました。

好ましい男性の手でこんな姿にされることを、そういう形の愛を

——私はいつの頃からか望んでいたのだ、と気がつきました。

ビシッノ

不意に、私のすぐ近くの床で鞭が鳴りました。反射的に嗚咽が止まり、私の全身はピクリとうごめいて——観念していました。

バスタオルが剥ぎ取られます。

ああ、鞭で叩かれるノ 背中や、肩や、もっと羞かしい場所を、

叩かれるノ

私は化石したように、じっとそのまま、戦慄すべき瞬間を待ちました。

一步——城田は私に接近し、髪の毛を掴んで、顔を上げさせました。

「いいんだ。鞭の受け方は、いずれ教えてやる。いろいろのことを徐々に教えてやる」

優しい眼になって、城田は私を軽々と抱き上げ、ゆっくりとキッスをしてくれました。

「可愛い女だ……」

と呟いて城田は、力強い歩調で私をベッドルームへ運んで行くのでした——。

長々と、はしたないことを書いてしまいました。以上が私と城田との第一日目の出来事です。こうして、私は城田の「愛人」になりました。今後、妻としてくれるのか、あるいは妾にされるか、それはまだ、不安なことですけど私にはわかりません。

ただ、城田が私を愛してくれ、私が城田を愛していることだけは確かです。それだけで私は充分にしあわせです。私は、できるだけ城田に気に入られる女になろうと努めております。

城田の留守を利用してこのようなつたない手記を書いている私はいま足枷だけを身に受けています。ですから文章をつづることはできるのですが、書き終ったものをどうして郵送したらよいのか、その方法が、少くとも現在はないのです。でも、いつかはお送りできると思います。その日を私は、これから待ち続けるのです。

(未完)

集 募 稿 原

★読者随筆★

(原稿用紙)

5枚～10枚まで

本誌に適する風俗、社会、身边雑記、感想、見聞記等の随筆。思いついたままを書いてお送り下さい。原稿料は一枚百五十円。

★告白体験記★

(四百字詰)

20枚前後。

真実の告白手記、得がたい体験といったものを求めます。本誌むきの原稿をどしどしお送り下さい。原稿料は一枚につき百五十円。

★創作★

(四百字詰)

25枚まで。

S、M、その他を扱った作品をお寄せ下さい。妖気ただよう、異色あるものを募ります。稿料は一枚につき百円～二百円。

★読者短評★

(四百字詰)

1枚～3枚程度

本誌最近号に対する批評をお書き下さい。全般的な批評や個々の作品、挿絵、編集のあり方等について、いろいろ御不満な点や御希望や、良かったことなどがあると思いますが、真面目な短評をお寄せ下さい。

これに対する御礼は、郵券代として百円と本誌一冊(短評

掲載号の次号)をお送り致します。

★裏窓雑報★

(四百字詰)

3枚～20枚程度。

映画、演劇、テレビ、ラジオ、週刊誌、月刊誌、新聞記事、その他における裏窓的な見聞をお知らせ下さい。週刊誌、新聞の場合は切り抜きをお送り下さっても結構です。いずれの場合でも、必ず次の点を明らかにすること。「新聞・雑誌」の場合は、新聞・雑誌名、作者・筆者名、年月号。「映画・演劇」の場合は映画社名、劇場名、監督、演出者名、題名、出演者、日時等。「テレビ・ラジオ」の場合は、局名、題名、演出者、出演者、日時等。

原稿料は一枚につき、百円～百五十円。

◎応募原稿はそれぞれの種別を朱書すること。

◎原稿は第五種郵便になりますから、百グラム毎に八円の郵券を貼り、開封にして投函して下さい。

◎原則として、応募原稿はお返し致しませんから、必要ある場合はコピーをとっておいて下さい。

◎原稿の送り先は左記の通りです。

東京都中野局区内江古田一の二三〇二

久保書店内 裏窓編集部

裏	窓	既	刊	号
挿	絵			
名	作	選		



34年三月号掲載「開化女囚吟味」
 作・鈴木和夫 画・中島喜美
 ★無実を訴える参議の愛妾かねは
 旧幕の尾を引く拷問に問われた！



34年二月号掲載「変化中条流」
 作・矢桐重八 画・灘 五郎



34年六月号掲載「伝奇紅蓮党」
 作・矢桐重八 画・小日向一夢
 ★武田の秘宝を狙う一味に捕われた初音
 は、割れ竹の鞭を柔肌を受けて苦悶する。

34年八月呪法術特集号扉絵

画・古正英生

★暗黒の部屋に閉じこめられ、縛りあげられた美貌の娘は、忍び寄る蛇の姿におののく。



33年九月号掲載“邪宗門小町”

作・小田桐 爽 画・和島洋二

★切支丹の娘として捕われたお雪は、通行人たちの悪罵を全身に浴びて力なく歩いた。



34年十一月号掲載“愛怨相馬双紙”

作・三国沢 隆 画・灘 五郎

★平将門の妻桔梗は、下総介平良兼に捕われ、雑兵共の手によって美しい柔肌を包む衣類を、一枚一枚むしりとられていった！





34年三月号掲載「毒蛇のお美津」

作・葉田 光 画・栗原 伸

★お美津の乳房を荒縄が締めあげる

33年九月号掲載「切支丹殉教史（下）」
作・鈴木和夫 画・東 桂史
★ヨハネ内膳の妻モニカは、言語を絶する苛責にも耐え抜いて、転宗を拒絶し続け、ついに斬首の刑を執行された。



34年八月号掲載「妖奇女護が島」
作・小田桐 爽 画・山田彬弘
★孤島にひしめく後手錠の裸女たちと君臨する一人の醜男。やがて彼女たちは復讐をはかった。

35年八月濃艶女白浪特集号目次裏
 蠻地の犠・秋吉 樹・画
 ★太鼓のテンポが急調子になって、犠牲の
 白い軀が恐怖に悶え踊りは今が最高潮だ！



34年8月号掲載“幽霊陰陽師”
 作・矢桐重八 画・小日向一夢



34年十二月号掲載“紫の花②”文・依田精二
 画・秋吉 樹

★インデアンに捕われた
 人質の女に恐怖の猿轡！



絵 中島七世の美人

① 愛妾の難

黒雲を呼び、雨を誘い、風を捲いた巨大な龍が、ぐわっと裂けたその口から火を吹きながら、刻々と近づいて来た。金色に爛々と光る不気味な眼が、十代將軍徳川家治の愛妾お美代の方の鼻先に迫った。

「あつ！」

呻いて、夢から覚めたとき、その眼前をかすめたのは、夢魔の龍に非ず、白地に紺と紫の縞に緋を交えた縞縮緬の着物と、菊模様の金繡を浮かせた黒縹子の帯であった。

「曲者！」

叫んだとき、その急所へ当身の拳が飛び、お美代の方は悶絶した。……

——つぼね（部屋取締）女中の梅乃が、異変を感じて、お美代の方の寝所に入ったとき彼女は何を見ただろう。

素裸に剝かれ、うれきった乳房の上下に、緋色の扱帯を縄がわりにぎりぎり巻かれて欄間から吊り下げられたお美代の方の姿であった。しかも、その柔肌に、一枚の紙片がべったりと貼りついていた。

——女奸、悔い改めよ……と書いてある。

② 三人侍女

お美代の方が、眼を吊り上げて突っ立っている。憤怒で、その胸が煮えくり返っていた。老中田沼意次と意を通じて、閨中の痴話に家治をまどわせ、天下の権勢をほしきままにしている女だ。この女の一言で、潰された大名すらある。そのお美代の方を、裸に剥いで宙吊りにした奴があるのだ。

「——見た。菊の繡模様の帯……。それは、御錠口詰御役菊野が部屋方女中どものしるしじゃ。ええい、吐かぬか！」

お美代の方の足もとに、三人の女中が引きすえられていた。竹箒で散々打たれたが、だれ一人泥を吐かなかった。

「強情め！ わらわがされたようにしてくれようぞ」

お美代の方付きの女中、楓、千波、浜、梢、世津、加代——六人の女が、縞縮緬の袖を、紅い襷でたくしあげて、菊野付き女中の三人を裸に剥いた。——縛りあげる。担ぐ。そして三人とも欄間から宙吊りにした。

「あっ！」「ううっ！」「ひいーっ」
三人の裸肌に鞭が飛ぶ。

③ 黒髪責め

お美代の方の、美しいその頬が、奇妙な形に歪み、痙攣した。

「剃刀を持ちや。鞭ではこたえぬそうな。——女子の命の黒髪を、バサリと切って、くりくり防主の比丘尼御前にしてくれようぞ」



將軍家治をとろけさせるときの、甘い、淫靡な声とは似もつかぬ、毒々しい声である。

「葉末か、絵津か、それとも勢以か……。いずれが、わらわを襲ったのじゃ。ええい、白状せぬな、こうしてくれる！」

お美代の方の、剃刀を握った右手が、葉末の黒髪に迫る。左手でぐいっと椎茸髷を掴み剃刀をあてた。

あの奇妙な声が、どこからともなく聞こえて来たのは、このときであった。

「――奸婦。下手人はここじゃ、ふふふ。罪なき女人を責めおって、おぬしまだ心を改めぬな。將軍家ご寵愛をいい事に、奸物田沼意次と意を通じて、悪政の因となる。今からでも遅うはない。心あらためて女人本来の姿に戻れ……」

低い、暗い、奇妙な声だ。地の底からのようでもあり、天井裏からのようでもある。

「おのれ、曲者！」
女中たちは八方に飛んだ。薙刀を構えるものの、小太刀をさげるもの……。

「おのれ、おのれ……おのれ……おのれ」
お美代の方は憤怒のために眼の先が暗くなり、やりばのない憎悪を、宙吊りの三人裸女にぶつけていった。

「あれは何者じゃ。ええい、いわぬかつ！」
葉末の黒髪に、ざくりと剃刀が入った。

④ 反骨忍者

江戸城大奥お松の庭。暗い。そして静寂。その中で、ぽかりと白い裸身が浮いた。

松の巨木の枝から、お美代の方の裸身が逆吊りになっているのである。龍の悪夢の夜と同じように、眼覚めたとたんに当身をくって悶絶し、気づいたときは、この屈辱の姿であった。下に、縞縮緬菊模様帯の女が立っている。

「罪なき女中を、どうとう二人まで坊主にしたな。今夜はこっちが、そのほうの黒髪を、いや、体中の毛という毛を、ことごとく剃ってくれるぞ」

姿は女だが、声は男だ。

「ああっ。そ、それだけは許してたもれ、ゆるして……」

逆吊りの声は、下から来る。

「ならぬ」

ザクリと、剃刀が黒髪を削った。

そして四半刻――。

剃刀を存分に使った反骨鬱々たるスネ者のお庭番忍者甲賀雨太郎は、女装の着物を松の枝に投げて、音もなく消えて行った。

翌日。天明四年三月二十四日。意次の子にして若年寄の田沼意知は、佐野善左エ門のため殿中に斬られ、これを機として、意次――お美代の方一派の権勢は夢のように消滅した。



★おぞましい地獄党の処女刺青肌
展示！ 美女の群れはからくり責
めの唐人船へ運ばれて飽くことな
き悪魔の手に翻弄されるのだ！

囃子地蔵 綾姫危難 絶対絶命
岡ッ引に女掏摸 主従再会 緋牡丹くずれ
鬼念流魔剣 海老責め侍女 隠れ網小屋
狂異地獄党 肌絵展示 姫肌吟味
刺青師反逆 嗜虐の執念 あやつり責め
地獄のむき玉子 魔物船 裏切千両箱
探索失敗 死の抵抗 血風地獄船
必死の縄ぬけ 深夜の脱出 月下の歓声
泣く乳房 恐怖の責め台

飯田豊吉 著

喜多玲子 装幀
中島喜美 挿絵

裏窓叢書
第一集

狂異地獄肌

定価三五〇円・送料四〇円



裏窓叢書
第二集

黒蛇呪縛

定価三五〇円・二四〇円



★蛇責め、犬責め、乳房責め、捕われの美女は転変する運命に操られる。海賊の秘宝をめぐってひしめく触手、蛇身は妖しくうごめく。

◎姪両の巻

地獄の迎火

長襦袢乳房

傘浪人

情鬼

盥女

蛇女

犬の檻

◎囚人の巻

男の声

闇の中の男

濡れ肌地獄

囃娘

◎魔水の巻

汐姫

乳房の手

手首の綱

膝鞭

◎妖檻の巻

犬の舌

姫責め

裸形の膝

縛り褥

死女

黒木

忍

著

喜多玲子
山田彬弘

装幀
挿絵

★暗黒街の覇権を争う凄愴な闘い
のかげに、鉄鎖は柔肌に喰い込み
逃れる術なき悲鳴は地底に響くの
み！檻の中の女体に迫る危機！

◎誘拐命令

魔女の接吻

恐怖の寝台

港へきた男

欲望の謀議

◎深夜の乱闘

夜匂う女

鉄鎖と皮鞭

断崖の逆襲

暗黒街の男

◎桃色の拷問室

殺し屋の眼

責め肌椅子

反逆の埠頭

復讐の鬼

◎地底の牢獄

電流手錠

縄目の痕跡

悪魔の爪

消えた婚約者

藤見

郁

著

喜多玲子

装幀

挿絵

裏窓叢書
第三集

地底の牢獄

定価三五〇円・二四〇円





★連呼でやかましかった選挙もやっと終わった。
当選した人は、解散さえなければ四年間の任
期は保証される訳である。
★雑誌の場合は、毎月が選挙のようなもので
読者が書店の店頭で買って下さる一冊が、と
りもおさず一票に該当することになる。
★政治と違って、何年か後にはこんな良い本

になります……と云ったところで、おそらく
読者はソッポを向くだろうし、まして嘘の公
約みたいなものを並べてみたところで、それ
で読者の皆様が満足できるはずもない。
★一流と云われていた娯楽雑誌の二、三が次
次と店頭から姿を消して行くのも、個々の一
票を獲得できなかった結果であろう。(S生)

編集後記

- 本誌の記事および挿絵・写真を、無断で転載、上演、上映、放送することはお断りします。
- お買上げの本誌に、落丁乱丁等がありまし
た節は、お買いになった書店でおとり替え
下さるか、または本社宛にお送り下されば、
スグおとり替え致します。
- 直接購読御希望の方は、三ヵ月分(四百五十
円)または、六ヵ月分(九百円)を本誌営
業部宛にお払い込み下さいますと、店頭発
売前に直接お送り致します。
- 外国からの直接購読は送料を一冊につき二
十円御負担下さい。

裏窓・一月号

(第六巻・第一号)

定価 150円・送料 12円

印刷	昭和35年12月25日
発行	昭和36年1月1日
集人	須磨利雄
行所	山田忠雄
印刷	向光印刷株式会社
発行所	株式会社久保書店
東京都中野区江古田1の2302	
(振替東京・10756) 電話(386) 3151	
3152	